

公益財団法人
蘭島文化振興財団

2019 年度
年報

平成 31 / 令和元年度

GARDEN ISLAND SHIMOKAMAGARI

沿革・目次



沿革

設立経緯と現況

下蒲刈島は、広島県の中部島地域に位置し、古くから海上交通の要衝として栄え、江戸時代には幕府が海駅を設置し西国大名や朝鮮通信使の寄港地として重要な位置を占めていました。

現在、蘭島閣美術館を中心として立地する下蒲刈島の文化施設群は、下蒲刈町政時代の1986（昭和61）年、下蒲刈町長竹内弘之氏（故人）が提唱した「活力ある個性豊かな町づくり」という町政指針にその端を発しています。

その指針のもと、下蒲刈町では1986（昭和61）年から1988（昭和63）年までの3年間の間に移動美術展を招致するなどし、地域住民の文化理解を促し、その後の美術館施設建設に向けた気運を高める活動をおこなってきました。1988（昭和63）年度の下蒲刈町予算編成における「教育文化の振興」指針に基づき、同年、美術館・図書館・資料館建設の調査費が計上されるに至り、1991（平成3）年度に「文化と歴史の町」と「ガーデンアイランド構想（全島庭園化構想）」を下蒲刈町の新たな町づくりの基本方針として整備が進められ、蘭島閣美術館を始めとする中核文化施設と庭園などの整備を進めてきました。現在に至るまでに約3,700点のコレクションを収集し、美術・歴史・環境を含めたさまざまな文化施設が誕生しました。

町政から財団運営へ

全国的な市町村合併の流れの中、下蒲刈町は2003（平成15）年、呉市と合併しました。その前年の2002（平成14）年4月に第1回呉市・下蒲刈町合併協議会が開催されました。市政移行準備とともに、財団法人蘭島文化振興財団の設立準備も進められ、2002（平成14）年10月1日に財団法人蘭島文化振興財団が設立されます。合併により、町政時代の建造物、コレクションはすべて呉市所管となりました。続いて、2004（平成16）年には三之瀬御本陣芸術文化館が開館します。これにより、ハード面の文化施設の建設がすべて終了しました。2003（平成15）年から2005（平成17）年の3年間は、財団法人蘭島文化振興財団*1が呉市からの管理運営受託、そして、2006（平成18）年から2009（平成21）年の4年間、財団法人蘭島文化振興財団は呉市との協定により下蒲刈島の文化施設群「蘭島文化振興施設」の指定管理者として運営管理をおこなってきました。以降、2019（平成31／令和元）年度現在、第3期目の指定管理者として、管理運営をおこなっています。

*1 2012（平成24）年4月1日、公益財団法人へ移行。

公益財団法人蘭島文化振興財団の役割

当財団は、地域文化の振興を目指した諸事業をおこなうとともに、地域文化に関する教育普及活動の推進を図り、市民の文化振興と地域社会の健全な発展に寄与することを目的とします。（定款第3条）目的達成のための事業（定款第4条）は、①蘭島閣美術館、蘭島閣美術館別館、三之瀬御本陣芸術文化館における芸術文化振興事業②昆虫の家における自然環境保全啓発事業③松濤園における芸術文化振興事業④白雪楼、春蘭荘・松籟亭・煎茶室における芸術文化振興事業⑤その他この法人の目的を達成するために必要な事業、以上5事業からなっています。

公益財団法人蘭島文化振興財団が指定管理する蘭島文化振興施設

2019（平成31／令和元）年度、当財団が管理運営する蘭島文化振興施設は、①蘭島閣美術館、②蘭島閣美術館別館、③三之瀬御本陣芸術文化館、④松濤園、⑤白雪楼、⑥昆虫の家「頑愚庵」、⑦春蘭荘、松籟亭及び煎茶室です。

□沿革

1991（平成3）年	・蘭島閣美術館開館
1994（平成6）年	・松濤園開館
1996（平成8）年	・白雪楼開館
1997（平成9）年	・蘭島閣美術館別館開館
1998（平成10）年	・昆虫の家「頑愚庵」開館
2001（平成13）年	・第1回ギャラリーコンサート開催
2001（平成13）年	・蘭島閣美術館開館10周年「須田太郎展」開催
2002（平成14）年	・第1回呉市・下蒲刈町合併協議会開催（以後5回） ・蘭島文化振興財団設立事前説明会開催 ・呉市・下蒲刈町合併協定調印式 小笠原市呉市長と竹内町長による調印式 ・蘭島文化振興財団設立事前説明会開催 ・蘭島文化振興財団設立許可申請 ・蘭島文化振興財団設立許可 ・蘭島文化振興財団登記申請 ・財団法人蘭島文化振興財団設立
2003（平成15）年	・韓国鎮海市長他、松濤園など視察 ・下蒲刈町、呉市と合併 ・韓国からムクゲの苗100本寄贈を受ける ・松濤園入場者20万人 ・第1回朝鮮通信使再現行列開催
2004（平成16）年	・三之瀬御本陣芸術文化館開館 ・三之瀬御本陣芸術文化館開館記念特別展「福田平八郎展」開催 ・松濤園開館10周年記念特別展「朝鮮通信使の道のり展—交流の足跡—」開催 ・『松濤園開館10周年記念呉市・鎮海市友好姉妹都市提携5周年記念古伊万里名品図録』発行
2005（平成17）年	・「21世紀の日韓こども通信使」下蒲刈島訪問
2009（平成21）年	・竹内弘之理事長死去 ・渡辺理一郎理事長就任
2010（平成22）年	・年中無休から火曜日休館の実施へ ・ギャラリーコンサート10周年
2011（平成23）年	・蘭島閣美術館開館20周年
2012（平成24）年	・公益財団法人化 ・朝鮮通信使再現行列10周年
2014（平成26）年	・松濤園開館20周年 ・三之瀬御本陣芸術文化館開館10周年
2015（平成27）年	・ギャラリーコンサート15周年
2019（平成31／令和元）年	・渡辺理一郎理事長退任 ・海生泰定理事長就任 ・三之瀬御本陣芸術文化館開館15周年 ・松濤園開館25周年

目次

□公益財団法人蘭島文化振興財団 2019（平成 31 ／令和元）年度年報 目次

■目次	■沿革	2 p
	■目次	3 p
■事業カレンダー	■2019（平成 31 ／令和元）年度事業カレンダー	4－6 p
■展示公開事業	■春季特別展	8－11p
	■秋季特別展	12－15p
	■松濤園開館 25 周年記念特別展	16－19p
	■蘭島閣美術館 所蔵品公開事業	20－37p
	■蘭島閣美術館別館 所蔵品公開事業	38－45p
	■三之瀬御本陣芸術文化館 所蔵品公開事業	46－60p
	■松濤園 陶磁器館 所蔵品公開事業	61－75p
	■松濤園 御馳走一番館 所蔵品公開事業	76－86p
	■通年展示	87－90p
	■公開スペース一覧	91－97p
■その他の公開	■インターネット	100－101p
	■資料貸出	102p
	■画像提供	103p
	■資料閲覧	104p
■普及事業・市民サービス・財団事業	■普及事業 ギャラリートーク・講演会・ワークショップ	106－115p
	■市民サービス 秋の茶会	116－117p
	■市民サービス 梅見茶会	118－119p
	■市民サービス 着付け体験	120p
	■財団事業 朝鮮通信使再現行列	121－122p
	■財団事業 ギャラリーコンサート	123－125p
	■財団事業 ふれあい昆虫教室	126p
	■財団事業 ふれあい海岸教室	127p
■運営データ	■収集・保存・整理	130－134p
	■協力・広報	135p
	■入館者数	136p
	■関係法規	137－139p
	■役員・職員	140p
■利用案内	■利用案内	142－143p
■奥付	■奥付	144p

2019 (平成 31 / 令和元) 年度事業カレンダー

月	特別展事業（会場）	蘭島閣美術館	蘭島閣美術館別館	三之瀬御本陣芸術文化館			
4	4月13日〔土〕－6月10日〔月〕 開館15周年春季特別展 京都洋画壇の三巨匠 須田国太郎と安井曾太郎・ 梅原龍三郎 （会場：三之瀬御本陣芸術文化館）	4月24日〔水〕－6月3日〔月〕 所蔵品展Ⅰ 蘭島閣美術館名品展 華麗なる美の競演	5月15日〔水〕－8月5日〔月〕 所蔵品展Ⅰ 所蔵品への視点シリーズ・1 素描の世界	6月12日〔水〕－8月5日〔月〕 所蔵品展Ⅰ SUDA Red 須田国太郎の赤 一赤を巧みに使用した画家たちー			
5							
6							
7		6月5日〔水〕－7月29日〔月〕 所蔵品展Ⅱ 瀬戸内の画家たち 前期	8月7日〔水〕－11月18日〔月〕 所蔵品展Ⅱ 所蔵品への視点シリーズ・2 浮世絵に見る文様あれこれ	8月7日〔水〕－9月23日〔月〕 所蔵品展Ⅱ 広島洋画壇の重鎮 岡崎勇次が描いた風景画／ 須田国太郎と近代風景画の名品			
8	7月31日〔水〕－9月9日〔月〕 所蔵品展Ⅲ 瀬戸内の画家たち 後期						
9	9月14日〔土〕－ 11月11日〔月〕 秋季特別展 日展日本画の華 佐藤太清と児玉希望、 奥田元宋 （会場：蘭島閣美術館）	10月2日〔水〕－ 11月11日〔月〕 松濤園開館25周年 記念特別展 朝鮮通信使 ー江戸時代の 国際交流ー （会場：松濤園 御馳走一番館）			11月20日〔水〕－2月3日〔月〕 所蔵品展Ⅲ 寺内萬治郎の油彩画	12月4日〔水〕－2月11日〔火〕 所蔵品展Ⅳ 須田国太郎と昭和の 前衛油彩画家たち	
10				11月15日〔金〕－12月23日〔月〕 所蔵品展Ⅳ 旅路～画家たちの描いた美の境界～			9月25日〔水〕－12月2日〔月〕 所蔵品展Ⅲ 須田国太郎 珠玉の名品
11							
12		12月25日〔水〕－2月17日〔月〕 所蔵品展Ⅴ 新春企画 日本の四季を寿ぐ	2月5日〔日〕－5月25日〔月〕 所蔵品展Ⅳ 童画の登場 一大正・昭和初期の新メディアー		2月13日〔木〕－4月6日〔月〕 所蔵品展Ⅴ 日本画にみる墨の表現 須田国太郎と洋画家の描いた水墨画		
1		■2月19日〔水〕～2月22日〔土〕 施設修繕のため臨時休館 2月23日〔日〕－5月18日〔月〕 所蔵品展Ⅵ 花々の魅力					
2							
3	新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館 3月9日〔月〕～翌年度5月10日〔日〕 ・3月1日〔日〕以降のイベントは中止 ・白雪楼、春蘭荘、松籟亭は5月19日〔火〕まで臨時休館						

月	松清園 陶磁器館	松清園 御馳走一番館	ギャラリートーク	ワークショップ
4	4月17日〔水〕－6月24日〔月〕 所蔵品展Ⅰ 釉－うわぐすりー	4月17日〔水〕－6月24日〔月〕 所蔵品展Ⅰ 国書改竄と国交の回復	□4月13日〔土〕 三之瀬御本陣芸術文化館	
5			□4月28日〔日〕 蘭島閣美術館	□5月11日〔土〕 三之瀬御本陣芸術文化館
6			□6月2日〔日〕 三之瀬御本陣芸術文化館 □6月16日〔日〕 蘭島閣美術館 □6月16日〔日〕 松清園	
7	6月26日〔水〕－9月2日〔月〕 所蔵品展Ⅱ 器に見る水のある景色	6月26日〔水〕－9月2日〔月〕 所蔵品展Ⅱ 朝鮮通信使が見た日本の景色	□7月7日〔日〕 松清園 □7月14日〔日〕 蘭島閣美術館	
8	9月4日〔水〕－11月11日〔月〕 所蔵品展Ⅲ 金色に輝く古伊万里 －所蔵名品展－	9月4日〔水〕－9月30日〔月〕 所蔵品展Ⅲ 朝鮮通信使と来日の影響	□8月4日〔日〕 蘭島閣美術館 □8月4日〔日〕 松清園 □8月18日〔日〕 三之瀬御本陣芸術文化館	□8月1日〔土〕～8月18日〔日〕 松清園 □8月11日〔日〕 三之瀬御本陣芸術文化館
9			□9月1日〔日〕 三之瀬御本陣芸術文化館 □9月8日〔日〕 松清園	□9月29日〔日〕 蘭島閣美術館
10			□10月6日〔日〕 松清園 □10月13日〔日〕 蘭島閣美術館	
11	11月13日〔水〕－1月27日〔月〕 所蔵品展Ⅳ 萩と伊万里	11月13日〔水〕－1月27日〔月〕 所蔵品展Ⅳ 朝鮮通信使の旅路	□11月3日〔日〕 蘭島閣美術館 □11月17日〔日〕 松清園 □11月30日〔日〕 蘭島閣美術館	
12			□12月1日〔日〕 松清園 □12月15日〔日〕 蘭島閣美術館 □12月21日〔土〕 三之瀬御本陣芸術文化館	
1			□1月12日〔日〕 松清園 □1月26日〔日〕 蘭島閣美術館	
2	1月29日〔水〕－4月6日〔月〕 所蔵品展Ⅴ 美濃焼 ／古伊万里コレクション 「花の彩り」	1月29日〔水〕－4月6日〔月〕 所蔵品展Ⅴ 朝鮮通信使と江戸時代の饗応	□2月9日〔日〕 蘭島閣美術館 □2月16日〔日〕 松清園	□2月28日〔日〕～3月1日〔日〕 蘭島閣美術館
3	新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館 3月9日〔月〕～翌年度5月10日〔日〕 ・3月1日〔日〕以降のイベントは中止 ・白雪楼、春蘭荘、松萩亭は5月19日〔火〕まで臨時休館			□3月13日〔金〕～3月15日〔日〕 三之瀬御本陣芸術文化館

月	講演会	イベント	ギャラリーコンサート	その他・備考
4		□ 4月27日〔土〕～5月6日〔月〕 蘭島閣オリジナルクイズ	□ 4月20日〔土〕 蘭島閣美術館 (第220回)	
5			□ 5月18日〔土〕 蘭島閣美術館 (第221回)	□ 5月17日〔金〕 ミニコンサート (会場:下蒲刈中学校体育館)
6			□ 6月15日〔土〕 蘭島閣美術館 (第222回)	
7		□ 7月28日〔日〕 ふれあい海岸教室	□ 7月20日〔土〕 蘭島閣美術館 (第223回)	
8		□ 8月4日〔日〕 蘭島閣美術館 絵画鑑賞のじかん □ 8月4日〔日〕 ふれあい昆虫教室 □ 8月11日〔土〕 蘭島閣美術館 絵画鑑賞のじかん	□ 8月17日〔土〕 蘭島閣美術館 (第224回)	
9	□ 9月14日〔土〕 蘭島閣美術館 オープニングスペシャル ギャラリートーク		□ 9月21日〔土〕 蘭島閣美術館 (第225回)	□ 9月21日〔土〕 蘭島閣美術館 ギャラリーコンサート講演会 □ 9月22日〔日〕 蘭島閣美術館 ミュージック＆アーツで遊ぼう
10		□ 10月5日〔土〕～10月10日〔木〕 松濤園 特別展記念クイズイベント □ 10月20日〔日〕 第17回朝鮮通信使再現行列	□ 10月19日〔土〕 蘭島閣美術館 (第226回)	
11		□ 11月9日〔土〕、10日〔日〕 松濤園 秋の茶会	□ 11月16日〔土〕 蘭島閣美術館 (第227回)	□ 11月16日〔土〕 蘭島閣美術館 ギャラリーコンサート講演会
12			□ 12月21日〔土〕 蘭島閣美術館 (第228回)	□ 12月21日〔土〕 蘭島閣美術館 ギャラリーコンサート講演会
1			□ 1月18日〔土〕 蘭島閣美術館 (第229回)	
2		□ 2月8日〔土〕、9日〔日〕 松濤園 梅見茶会 □ 2月22日〔土〕～3月22日〔日〕 着付け体験	□ 2月15日〔土〕 蘭島閣美術館 (第230回)	
3	新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館3月9日〔月〕～翌年度5月10日〔日〕 ・3月1日〔日〕以降のイベントは中止 ・白雪楼、春蘭荘、松籟亭は5月19日〔火〕まで臨時休館			

展示公開事業

特別展・所蔵品公開事業・通年展示・公開スペース一覧



春季特別展

開館 15 周年春季特別展

京都洋画壇の三巨匠 須田国太郎と安井曾太郎・梅原龍三郎

会期 2019（平成 31）年 4 月 13 日（土）～ 2019（令和元）年 6 月 10 日（月）

会場 三之瀬御本陣芸術文化館

主催 公益財団法人蘭島文化振興財団、呉市、中国新聞社

後援 NHK 広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送、FM ちゅーピー 76.6MHz

関連行事

●ギャラリートーク

2019（平成 31）年 4 月 13 日（土）午前 10 時から

2019（令和元）年 6 月 2 日（日）午後 2 時から

●ワークショップ「油絵にチャレンジ！」

2019（令和元）年 5 月 11 日（土）午後 1 時から鑑賞／
午後 2 時から 4 時 30 分まで制作（2 部構成）

鑑賞：三之瀬御本陣芸術文化館

制作：下蒲川市民センター 2 階

おもな関連記事、番組など

○「寄稿 家族からみた須田国太郎」須田寛 中国新聞、2019（令和元）年 6 月 1 日 ○「京都洋画壇の三巨匠 上・中・下」湯浅ひろみ 中国新聞、2019（平成 31）年 4 月 24 日、4 月 25 日、4 月 26 日 ○「奥深い油彩 咲き誇る草花」湯浅ひろみ 中国新聞、2019（令和元）年 5 月 17 日 ○「西洋の技と東洋の心 融合」中国新聞、2019（平成 31）年 4 月 17 日 ○「京都洋画壇 3 巨匠 [集結]」中国新聞、2019（平成 31）年 4 月 14 日 ○「須田国太郎と安井曾太郎・梅原龍三郎」中国新聞、2019（平成 31）年 3 月 15 日 ○「ミュージアムで会いましょう 2019」中国新聞、2019（平成 31）年 4 月 14 日 ○「やさしいミュージアムガイド vol.30」湯浅ひろみ 『Grande ひろしま春号』2019 年春 24、（有）グリーンブリーズ ○『広島さんぽ』No.03 冬・春号、（一社）広島県観光連盟 ○「市政だよりくれ」5 月号、呉市 ○「市政だよりくれ」6 月号、呉市 ○「あのまちこのまちイベント情報」『海陽彩都プラス』No.2、広島中央地域連携中枢都市圏

○「広島すまいるパフェ」FM ちゅーピー 76.6MHz、2019（平成 31）年 4 月 11 日放送

印刷物

- ポスター B2 判（片面刷り） 1,000 部
- チラシ A4 判（両面刷り） 35,000 部
- 出品目録 A4 判（片面刷り）

目的

三之瀬御本陣芸術文化館は 2004（平成 16）年に須田国太郎の常設展示館として開館した。本展では、開館 15 周年を記念して、京都洋画壇の巨匠である須田国太郎を中心に、同時代に活躍した安井曾太郎、梅原龍三郎の名品を集め、日本近代美術の一端を紹介した。

京都に生まれた須田国太郎は、京都帝国大学で美学・美術史を専攻し学術研究からスタートした画家である。研究



展示風景



展示風景

に実践を伴う必要性を感じ、洋画家の浅井忠が創立した関西美術院で実技を習う。近代西洋絵画の起点をルネサンス期ベネチア派に見出した須田は 28 歳の時、スペインを拠点に 4 年間滞欧する。歴史や美学に加え、作品模写などを通して西洋絵画の理解を深めていった。41 歳の時、遅咲きの画壇デビューを果たし、画家として、時に美術史家として活動する、この当時では稀有な芸術家の一人となった。日本的な油彩画表現の重要性を掲げて、西洋の技法で東洋の精神を融合させる世界を目指した。須田の研究、博識は日本近代美術に影響を与えた。

須田よりも 3 歳年上で同じく、日本的な油彩画表現を追求した安井曾太郎と梅原龍三郎も、京都生まれである。3 人の生家は歩いて行けるほど近い距離だった。その他、この 3 人には共通点が多い。芸術家は幼少期の環境がその感性に影響を与えることも多いが、3 人とも繊維関係の仕事に携わる生家で、幼い頃より職人の手仕事や美しい意匠など京都の日本文化に触れる機会が多かった。また彼らは関西美術院で絵を学んだ同窓生である。さらに、この当時では難しいとされた長期滞欧経験者である。安井は 19 歳からの 7 年間、梅原は 20 歳からの 5 年間フランスに滞在し、油彩画の本場で学んでいる。そして皆、帰国後は西洋の模倣ではない、日本の風土に根付いた油彩様式を確立しようと苦戦し、展開している。

しかし、彼らが切り開いた画風は三者三様である。西洋の古典技法に立脚した明暗の対比や、セザンヌに代表される近代絵画の色面や筆致による空間の再構成の応用により、力強さの中に落ち着きのある重厚で品のある画風の須田国太郎。セザンヌに影響を受け、確かなデッサン力を持ちながらもそれを崩し、省略や誇張、歪曲を含む独特な具象表現で、緊張感のある“安井様式”を確立した安井曾太郎。ルノワールに傾倒し、巧みな色彩構成や日本の装飾性を通して、豪快で感覚的な生の歓びを描いた梅原龍三郎。

本展では、同時期に生きて日本洋画壇をけん引した、三者三様の表現を紹介した。さらに、新収蔵を含めた須田国太郎の愛用したイーゼル、絵具などの画材、遺品の約 80 点を全て公開した。（※新収蔵資料は 130p～133p 掲載）

展示内容

（1）須田国太郎

始めに、須田国太郎が自宅に亡くなるまで置いていた、肖像写真を展示。62 歳の時、自宅での制作場面を 1953（昭和 28）年に写真家土門拳が撮影したもので、須田の著書『近代絵画とレアリスム』の冒頭を飾る写真である。「絵に描かせてもらっている」といつもスーツを着て、正座をして描いていた真摯な姿がよくわかる写真である。解説パネルにより須田の軌跡を紹介し、31 歳から 64 歳までの 28 点の油彩画をほぼ年代順に展示し、「スペイン滞在・帰国後の人物画」、「風景画」、「動物・植物・静物画」という流れで紹介した。

《スペイン滞在・帰国後の人物画》

スペイン滞在中に描かれた「モヘンテ」やスペインの町を背景にした「牛」を紹介。帰国後に西洋と東洋の相違に葛藤を抱きながら、その迷いの中で習作として描いた「裸婦

（習作）」と画壇デビュー後に群像制作のため描かれた「裸婦」の 2 枚を並べ、その違いに触れた。

《風景画》

「比叡山」など須田が慣れ親しんだ京都や近県の自然風景、「夏日農村」や「冬の漁村」といった素朴な日本の情景を描いた作品を 12 点展観した。類似構図である「秋景」と「杉」は、昼と夜の情景であり、並列して展示した。2 点とも画面の最前面にいくつもの木の幹が空間を遮るように描かれている。その樹々の合間から漏れる光と奥の情景を、逆光の構図で捉えている。20 世紀以前の西洋絵画には見られない構図であり、日本的美意識の構図である。特に夜の月明りに浮かびあがる杉と水に映りこんだ月は、非常に幻想的である。このような日本の郷愁や精神、風土を感じる風景画から、須田が求めた日本的油彩画の一端をひも解いた。

《動物・植物・静物画》

須田は、よく近所の京都市動物園や植物園に出かけて写生をした。やせ細った姿のヒョウが描かれ、戦時下の動物が強いられていた実情を、見事に伝えている代表作の「黄豹」や、富国強兵を目指す戦場下の日本で好まれ、須田もよく描いた画題である「鷺」などを紹介した。

須田の描く花は、「芍薬」や「秋の草花」のように壺に入った切花から「雑草」や「黄蜀葵」など自生する花々などさまざまである。当時の日本では、ほとんどの画家が壺に生けた花を描いている。しかし須田は、たくましく土から自生して咲き誇る花を称えるかのように描いている。こうした着眼点も須田特有のものである。「卓上静物」は、知人の陶芸家のアトリエにあった、ギリシャの壺に触発されて描いた作品である。須田は趣味で陶芸もたしなんでおり、立体的な造形に対する審美眼が構図からもうかがえる。これらの作品を通して須田の独自の視点を紹介した。本展では須田の作った陶芸作品も展示した。

（2）安井曾太郎

解説パネルにより安井の軌跡を紹介し、第一次世界大戦後からのおよそ 10 年間に焦点を当て、人物画、静物画を展観した。

安井は第一次世界大戦の勃発と肺疾患のため、7 年に及ぶヨーロッパでの滞在を終えて日本に帰国し、10 年余りに及ぶ長いスランプの時期に入る。フランスとは余りにも異なる日本の風土を表現することの難しさや、日本の絵具や画材が意のままにならなかったことが理由に挙げられる。後年、本人がこの時期において、唯一認めている作品が本展出品の「樹蔭」である。森の中の裸婦を描いた構想画であるが、それまでの日本の絵画においては新鮮な構成である。しかしモチーフや構図に安井が傾倒したセザンヌの感化を思わせる。しかし彼はこの長いスランプを抜け出して安井様式を確立する。こうした安井芸術生成の過程と模索がうかがえる低迷期の重要な作品を紹介した。

1926（昭和元）年から数年間、安井にとっては異例のモチーフである家族が登場する。家族を描くことで、帰国後の長いスランプを乗り越えていくのである。本コーナーではその代表作「画室」を紹介した。我が子を抱いた和装の妻とその後ろに甥（長兄の子）が座り、裸婦がポーズをとっ

で横たわっている。その皆がこちらに視線を送っているという、鑑賞者にとっては非常に異様な光景である。しかし、画家本人にとっては毎日を過ごす画室の日常の一コマであり、これがリアリティを持った現実の風景だった。そこに安井様式のリアリズムの根底が潜んでいた。

安井はその画業において終始、様々なモチーフを描いている。本コーナーでは「はと」や「雉子」など死んだ鳥をモチーフにした作品を紹介した。西洋絵画の技術、美学が輸入される前の日本の絵画では、あまり登場しない画題で、ここには「死」というテーマが必然的に生まれる。綺麗なもののばかりが美ではなく、逃げられない現実として受け入れる事象も、表現するべきリアリズムの美であるという考え方が画題から受け取れる。7年に及ぶ長い欧州生活の実体験とそこで目にした多くの名品から、安井が西洋的感覚を身につけ、その当時、日本における現代の眼を持っていたことをひも解いた。

(3) 梅原龍三郎

梅原はよく色彩で素描すると言われた画家である。色の対比や調和でいきなり画面を組み立てるからである。それにより奔放自在な力強さが生まれる。梅原芸術の基本は実物写生の徹底で、梅原が記すところの「Joie de vivre(生の歓び)」を表すことを求めた。本コーナーでは梅原の人物画、静物画の作品8点と解説パネルでその画風の特徴を辿った。《人物画》

晩年に至るまで描き続けた裸婦は梅原にとって終生のテーマだった。画風は時期で異なる様相を見せている。本コーナーでは48歳と90歳の時に描いた裸婦を紹介した。1935(昭和10)年頃から人物の肉付けを緑一色で表現し始め、美術界を驚かせた。徐々に、緑と赤の肉付けと輪郭

線の強調による裸婦へと展開をみせる。「裸婦(逆光)」はその時期の作品である。「単純の中にこそ強さが出る」と語った梅原の目指した単純化を実現している。晩年の作品「裸婦」では、人物は肌色に戻り、画面全体を占める赤い背景や絨毯の装飾とうまく交錯させている。梅原は留学中、ポンペイ壁画の赤い色やビザンチン美術のモザイク画の装飾に感銘を受けている。さらに留学後の低迷摸索期には、東洋的な美に関心を抱き、日本美術の装飾性に対する理解を深めている。こうした若い時の経験が、独自の画風の確立への糸口となり、晩年まで強い影響を与え続けた。本作は、90歳で描かれたとは思えない勢いがあり、生の歓びに満ちている。

梅原は、1940(昭和15)年から1943(昭和18)年まで、北京の女性の美しさに魅かれ、毎年北京へ制作旅行に出かけて、北京の人物、風景を好んで描いた。本コーナーでは梅原の「北京時代」と言われるこの時期の「北京小姐」も紹介した。

《静物画》

人物や風景と並んで、梅原は花の静物画も描き続けた。鮮やかな花々は、色彩画家である作者の見逃すはずのないモチーフである。歳をとるにつれて、師と仰いだルノワールが愛した薔薇を始め、色彩、量感ともはっきりとした花々を好んで描いた梅原の「薔薇図」「百合」「芥子図」を紹介した。

梅原の彩色画の一分野にデトランプというものがある。これはフランス語 Détrempe で、イタリア語のテンペラ(Tempera) とほぼ同意語である。色彩の発色がよいこの技法を梅原は、日本画の顔料や別の展色剤を用いて独自の方法で試みた。この技法で描かれた「ピワ」を紹介し、油彩画との色味の違いと、色彩への梅原のこだわりをひも解いた。

(湯浅ひろみ)

春季特別展 「開館15周年春季特別展 京都洋画壇の三巨匠 須田国太郎と安井曾太郎・梅原龍三郎」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	寸法(縦×横)cm	所蔵
(1) 須田国太郎						
1	土門拳	照影	1953(昭和28)年	紙・プリント	119.5×89.5	
2	須田国太郎	モヘンテ	1922(大正11)年	キャンバス・油彩	66.6×81.4	
3	須田国太郎	牛	1934(昭和9)年	キャンバス・油彩	65.0×80.0	
4	須田国太郎	裸婦習作	1925-34(大正14-昭和9)年	キャンバス・油彩	90.3×60.2	
5	須田国太郎	裸婦	1934(昭和9)年	キャンバス・油彩	90.4×60.6	
6	須田国太郎	花山天文台遠望	1931(昭和6)年	キャンバス・油彩	64.5×90.5	
7	須田国太郎	夏日農村	1932(昭和7)年	キャンバス・油彩	64.5×90.0	ふくやま美術館寄託(個人蔵)
8	須田国太郎	比叡山	1934(昭和9)年頃	キャンバス・油彩	73.0×91.0	ひろしま美術館
9	須田国太郎	雨後(水間村)	1935(昭和10)年	キャンバス・油彩	65.2×80.3	寄託
10	須田国太郎	冬の漁村	1937(昭和12)年	キャンバス・油彩	48.5×59.7	ふくやま美術館
11	須田国太郎	嵐峡	1946(昭和21)年	キャンバス・油彩	64.5×53.0	ふくやま美術館寄託(個人蔵)
12	須田国太郎	三輪の山	制作年不詳	キャンバス・油彩	33.3×49.8	なかた美術館
13	須田国太郎	月瀬平	1949(昭和24)年	キャンバス・油彩	45.5×53.0	
14	須田国太郎	鷺	1941(昭和16)年	キャンバス・油彩	35.0×27.4	泉美術館

15	須田国太郎	溪流の鷺	1942（昭和 17）年	キャンバス・油彩	38.0×45.5	
16	須田国太郎	黄豹	1944（昭和 19）年	キャンバス・油彩	41.0×53.0	
17	須田国太郎	富士遠望	1943-44（昭和 18-19）年	キャンバス・油彩	45.0×52.6	
18	須田国太郎	夏雲	1951（昭和 26）年	キャンバス・油彩	38.0×45.0	
19	須田国太郎	秋景	1945（昭和 20）年	キャンバス・油彩	45.5×53.0	セキ美術館
20	須田国太郎	杉	1955（昭和 30）年	キャンバス・油彩	61.7×73.0	愛媛県美術館
21	須田国太郎	花と鳥	1941-44（昭和 16-19）年	キャンバス・油彩	33.4×24.3	
22	須田国太郎	紅薔薇	1942（昭和 17）年	キャンバス・油彩	44.5×52.0	
23	須田国太郎	雑草	1940（昭和 15）年	キャンバス・油彩	65.0×91.0	
24	須田国太郎	黄蜀葵	1941（昭和 16）年	キャンバス・油彩	32.0×41.0	ふくやま美術館寄託（個人蔵）
25	須田国太郎	卓上静物	1940（昭和 15）年	キャンバス・油彩	72.0×116.0	ふくやま美術館寄託（個人蔵）
26	須田国太郎	秋の草花	1944（昭和 19）年	キャンバス・油彩	59.1×39.6	ふくやま美術館寄託（個人蔵）
27	須田国太郎	芍薬	1941（昭和 16）年	キャンバス・油彩	90.0×72.0	ふくやま美術館寄託（個人蔵）
28	須田国太郎	静物（蔬菜）	1940（昭和 15）年	キャンバス・油彩	52.8×45.4	
29	須田国太郎	桃	制作年不詳	板・油彩	23.5×32.5	ふくやま美術館

(2) 安井曾太郎

30	安井曾太郎	樹蔭	1919（大正 8）年	キャンバス・油彩	129.8×161.0	愛媛県美術館
31	安井曾太郎	画室	1926（大正 15）年	キャンバス・油彩	128.8×160.5	ひろしま美術館
32	安井曾太郎	はと	制作年不詳	キャンバス・油彩	26.0×40.0	たけはら美術館
33	安井曾太郎	雉子	1933（昭和 8）年	キャンバス・油彩	39.5×47.5	
34	安井曾太郎	柿と葡萄	1950（昭和 25）年	キャンバス・油彩	29.0×39.3	泉美術館

(3) 梅原龍三郎

35	梅原龍三郎	ピワ	1947（昭和 22）年頃	紙・デトランプ	37.5×65.0	ふくやま美術館
36	梅原龍三郎	北京小姐	1940（昭和 15）年	キャンバス・油彩	52.9×32.6	泉美術館
37	梅原龍三郎	裸婦図（逆光）	1936（昭和 11）年	キャンバス・油彩	81.2×65.5	泉美術館
38	梅原龍三郎	少女	1973（昭和 48）年	キャンバス・油彩	59.8×43.0	
39	梅原龍三郎	裸婦	1978（昭和 53）年	キャンバス・油彩	60.6×72.8	愛媛県美術館
40	梅原龍三郎	薔薇図	1971（昭和 46）年	ボード・油彩	41.3×31.9	
41	梅原龍三郎	百合	1973（昭和 48）年	キャンバス・板・油彩	45.7×38.0	ふくやま美術館
42	梅原龍三郎	芥子図	1970（昭和 45）年	キャンバス・油彩	41.7×32.4	ふくやま美術館寄託（個人蔵）

秋季特別展

日展日本画の華 佐藤太清と児玉希望、奥田元宋

会期 2019（令和元）年9月14日（土）～11月11日（月）
会場 蘭島閣美術館
主催 公益財団法人蘭島文化振興財団、呉市、中国新聞社
後援 NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送、FMちゅーピー 76.6MHz

関連行事

- オープニングスペシャルギャラリートーク
講師：安田晴美氏
（美術史家・福知山市佐藤太清記念美術館顧問）
2019（令和元）年9月14日（土）午前10時20分から
- ワークショップ「日本画材 金箔に親しもう」
講師：小田野尚之氏（日本画家・日本美術院同人）、
安田晴美氏（美術史家・福知山市佐藤太清記念美術館顧問）
2019（令和元）年9月29日（日）午前10時から
- ギャラリートーク
2019（令和元）年10月13日（日）、11月3日（日）
午前11時から／午後2時から（各日2回）

おもな関連記事、番組など

○「叙情豊かに描く自然美」中国新聞、2019（令和元）年10月4日 ○「日展日本画の華 上」山下裕子 中国新聞、2019（令和元）年10月10日 ○「日展日本画の華 中」山下裕子 中国新聞、2019（令和元）年10月11日 ○「日展日本画の華 下」山下裕子 中国新聞、2019（令和元）年10月12日 ○「ファミリーくれ」10月号、中国新聞 ○「おでかけ案内版」『リビングひろしま』、広島リビング新聞社 ○「アートコーナー」『くれえぱん』9月号、株式会社S Aメディアラボ ○「安芸灘だより」令和元年9月号 No.191、下蒲刈まちづくりセンター ○「秋季特別展日展日本画の華 佐藤太清と児玉希望、奥田元宋」『新美術新聞』No.1515、株式会社美術年鑑社 ○「瀬戸内の島々で」安田晴美 『楽しいわが家 12月号』、一般社団法人全国信用金庫協会 ○「市政だよりくれ」10月号、呉市

○「テレビ派街かど伝言板／テレビ派」広島テレビ放送、2019（令和元）年9月10日放送 ○「ちゅうごくとおって おき／ひるまえ直送便」NHK広島放送局、2019（令和元）年9月20日放送 ○「くれワンダーランド Journey」中国放送、2019（令和元）年9月27日放送 2019（令和元）年9月28日放送 ○「NNNストレイトニュース」広島テレビ、2019（令和元）年9月30日放送

印刷物

- ポスターB2判 800部
- チラシA4判（両面刷り）36,000部
- 出品目録A3判二つ折り（両面刷り）

目的

本展は、没後15年をむかえる佐藤太清の画業を中心に、太清の師児玉希望、兄弟子奥田元宋の3人の日本画家を紹介する展覧会として開催した。



展示風景



展示風景

佐藤太清は、1913（大正2）年京都府福知山市に生まれ、幼少期から野山を歩き美しい自然の姿をスケッチする日々を過ごした。18歳で上京、児玉希望の内弟子となり、日本画家を志す。ひたすら写生と研究に没頭し、試行錯誤を繰り返しながら、1947（昭和22）年第3回日展で特選を受賞。以後、古典的な手法で装飾性を意識した花鳥画や風景画の制作に取り組んだ。戦後、太清は西洋近代絵画から造形的な画面構成を学び、また琳派の装飾的描法を自身の作品に取り入れながら実験的な手法を模索し、その解釈を日展の出品作に反映した。その後日本の自然が持つ美しさを抒情的に表現した連作「旅シリーズ」を発表し、花鳥風景画を確立。1992（平成4）年には文化勲章を受章、日本画壇の重鎮として戦後の日展を支えてきた。

本展では、福知山市佐藤太清記念美術館が所蔵する太清の代表的な作品を通してその画業を回顧するとともに、広島を代表する日本画家児玉希望、奥田元宋の作品とともに紹介し、受け継がれた精神と各々の際立つ個性を展覧した。

展示内容

（1）児玉希望

児玉希望は、広島県高田郡来原村（現・安芸高田市高宮町）に生まれ18歳で上京、尾竹竹坡のもとで日本画を学び、その後川合玉堂の長流画塾に入門し画技を磨いた。1921（大正10）年の第3回帝展で初入選を果たし、以後2度の特選を経て、風景画を中心に写実表現や装飾的な画面構築を試み画壇での評価を確かなものとした。1933（昭和8）年頃からは花鳥画を研究し作風を転換。この頃、希望は奥田元宋や佐藤太清らに自邸に住まわせ、その指導にも力を注いだ。戦後は日展を舞台に西洋近代美術の研究を深化し1957（昭和32）年からはヨーロッパに滞在。帰国後は水墨画への意欲を示し、抽象表現や斬新な解釈による仏画にも新境地を開いた。

本コーナーでは、希望の大正末期から1960年代の作品まで7点を展示し、風景や抽象表現、水墨画など多彩な作品を通じてその魅力に迫った。大正末期制作の「秋晴」では、色づいた葉を克明に捉えており、対象の本質に迫る希望の強い思いが感じられる。1928（昭和3）年制作「奥入瀬紅葉」は、希望の出世作となった「盛秋」の姉妹作とも言うべき作品であり、赤く色づいた樹葉と緑青と群青で描かれた苔むした岩肌の色彩の対比が、画面右の樹々と溪流に光を強く照射したかのように色鮮やかに描き出されている。希望は、さらに風景表現の可能性を探るべくその後数年間風景画の大作を繰り返し発表している。戦後制作された「春のバンガロー」「浦町の雑聞」「奥多摩の家」「亭午」では、西洋近代絵画の研究を深化させ模索しているかのように、新たな表現を次々と試みている。上記作品は、1950（昭和25）年伊東深水らと創立した日月社に出品され、厚塗りや没骨表現、装飾化などの実験を進めながらその成果を発表している。本展でこの後に紹介する奥田元宋、佐藤太清も同展に作品を発表しており、同時期に出品した作品も数点紹介した。残念ながら本展では同展の役割など深く触れることはできなかったが、作家育成と制作促進の場として活用され多数の作家が作品を発表した。

前述の通り1957（昭和32）年から希望はヨーロッパへ赴き、帰国後は水墨へ傾倒。本展では「夜梅」を出品しその部分を紹介した。このように探求の精神を抱き続け、常に新しい時代の表現を模索した希望の画境を、本コーナーで紹介した。

（2）奥田元宋

佐藤太清の兄弟子である奥田元宋の初期から1990年代の作品まで8点を紹介した。奥田元宋は広島県八幡村（現・三次市吉舎町）に生まれ、中学時代から絵に興味を持ち始め近郷を巡っては油彩画を制作していた。18歳の時に遠縁にあたる児玉希望を頼って上京、内弟子となり人物画や花鳥画の研鑽を積んだ。1936（昭和11）年に文部省美術展覧会鑑査展で初入選を果たし、以後新文展、日展に出品を続けた。1944（昭和19）年、戦況悪化のため郷里に疎開。改めて故郷の自然の美しさに魅せられ主題を人物画から風景画へと転換し、1949（昭和24）年第5回日展出品の「待月」で2度目の特選を受賞。戦後、元宋は色彩や構成に重きを置き、ナビ派や印象派の色感を自身の作品に取り入れ数々の力作を発表した。自らの心象風景に自然への讃歌と畏敬を仮託するその作品は、現代日本画の到達点の一つとして高く評価され1984（昭和59）年には文化勲章を受章した。

展示では、戦中の郷里への疎開をきっかけに風景画家として開眼した時期の作品から紹介した。疎開以前元宋は、新文展にモダンな風俗や文学、歴史に取材した作品を描き入選を果たしていたが、疎開先の不自由な環境においてそれらを続けていく材料を持ちえなかった。そうした中で元宋の心を捉えたのは生まれ育った故郷の美しく穏やかな景色だった。昭和24（1949）年第5回日展で2度目の特選を受けた「待月」。本展では残念ながら習作の出品ではあったが、静まり返った池畔となだらかな松山をモチーフに月が出る瞬間を抒情的に描き出している。写生に赴いて描く風景と、その場所に住み没入して描く風景では違ったものができるのは明らかで、郷里での一連の制作に共通する優しさや誠実な自然観照は日常生活の中から生まれた画境に起因している。本コーナーでは、胸中の山水を色彩豊かに描き続けた奥田元宋の作品の変遷を辿った。

（3）①佐藤太清 はじまり―試行錯誤の時代

佐藤太清は京都府福知山市に生まれ、出生直後に両親を失う境遇に置かれながらも18歳で絵の道を志し上京。20歳で児玉希望の内弟子となり、写生と研究に勤しみ試行錯誤を続け入門から10年後の1943（昭和18）年、第6回新文展で初入選を果たした。本コーナーでは児玉希望の内弟子生活を経て小石川に下宿した時期の作品から1950年代の作品を紹介した。

1936（昭和11）年太清は、内弟子生活を終え小石川に下宿した。近くには奥村土牛門下の内田土卵（うちだとらん）がおり、太清は彼と親しく交友している。この時期を振り返り太清は、画論をたたかわせたり、土卵の所有する宋元花鳥画の参考品をよく見せてもらったと述懐している。このエピソードから太清は、文展に所属しながら、院展の作家たちの作品にも接し刺激を受けていたことがわか

る。日本画家の道に入り、師の属する文展への入選を果たすことができない苦悩の中で太清は、古典的な手法から装飾性を意識した花鳥画などめまぐるしく主題を変化させながら、今後の自身の方向性を模索していた。

(3)－②親和―抽象化、そして装飾的表現へ

戦後の混乱期が続く中で日本画滅亡論など厳しい世評を受け、日本画家たちは自らの作画姿勢に問いかけを余儀なくされた。太清もその影響を受け、日本画の持ち味である線描を休止し、より面で捉える画法へと作品を変化させ、重みのある造形的な創作を試みている。1952(昭和27)年、第8回日展で2度目の特選を果たした太清は、この時期重要な展覧会に向け本来は1点の完成でも難しい充実した大作を2点制作するなど旺盛な制作活動を展開し、次々と作品を発表した。

本コーナーでは「睡蓮」(2点制作のうち現存する1点)の他、「雨の日」や「芝園所見」など1950(昭和25)年に創立した日月社展への出品作であり西洋近代絵画に親和した作品を紹介した。1952(昭和27)年制作の「罌粟」は、花や茎、葉の形態や配置に意図的な造形表現とともに装飾的な華やかさが見られる。以降太清の作品は、その傾向を引き継ぎながらも、「水芭蕉」や「花」のように対象を写実的に捉えながらその背後の空気感を描くことを試み、自然空間に漂う気韻を探究した作品を発表していく。

(3)－③自然への呼応Ⅰ・Ⅱ

1965(昭和40)年第8回新日展で発表した「潮騒」から太清は新境地の画境を展開していく。翌年には「風騒」

を制作しその後「燄」「洪」と展開される作品には、水や火、風が主題となっており、いずれも自然から受けた経験をもとに制作され代表作となった。太清はこれらの作品について、その場に臨んだ時の出会いの感動から制作したと言葉をのこしている。展示では、動的なものを花鳥画に盛り込んだ「潮騒」、「洪」、その後制作された抒情を漂わせた「東大寺暮雪」、「蓮」を展示し、のちの「旅シリーズ」につながる作品群を紹介した。

(3)－④輝ける生命へのまなざし

本コーナーでは、太清が庭での写生をもとに制作した小作品やスケッチブックを展示した。あわせて説明パネルで制作時のエピソードに触れ、作家の人柄を紹介した。

(3)－⑤一期一会 旅シリーズ

1980(昭和55)年、太清が旅先で出会った一期一会の情景を描いた第12回日展出品作「旅の朝」は大きな反響を呼び、ここから10年間に及ぶ連作「旅シリーズ」が始まった。この一連の作品において太清は、自然と人との精神的な関わりを作品に映し出した花鳥風景画という独自の分野を確立した。本コーナーでは、旅でのスケッチをもとに制作された鷺やアオアシシギなど鳥を主題にした太清の円熟期の作品から、日展最後の出品作となった「雪つばき」(複製)までを紹介し佐藤太清の画業を振り返った。

(山下裕子)

秋季特別展 「日展日本画の華 佐藤太清と児玉希望、奥田元宋」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	寸法(縦×横)cm	所蔵
(1) 児玉希望						
1	児玉希望	秋晴	大正末期	絹本彩色	58.0×100.0	
2	児玉希望	奥入瀬紅葉	1928(昭和3)年	絹本彩色	139.5×45.8 139.5×53.6 139.6×53.7 139.6×45.9 4枚組	広島信用金庫
3	児玉希望	春のバンガロー	1954(昭和29)年	絹本彩色	65.0×87.0	広島県立美術館
4	児玉希望	浦町の雑園	1955(昭和30)年	絹本彩色	117.0×90.0	広島県立美術館
5	児玉希望	奥多摩の家	1956(昭和31)年	紙本金泥墨画	60.0×74.5	広島県立美術館
6	児玉希望	夜梅	1960(昭和35)年頃	絹本墨画彩色	42.7×73.0	
7	児玉希望	亭午	1961(昭和36)年	絹本墨画彩色(コラージュ)	102.0×113.0	広島県立美術館
(2) 奥田元宋						
8	奥田元宋	たそがれ近く	1951(昭和26)年	絹本彩色	115.0×187.5	奥田元宋・小由女美術館
9	奥田元宋	待月	1949(昭和24)年頃	絹本彩色	48.0×56.5	奥田元宋・小由女美術館
10	奥田元宋	夕照	1952(昭和27)年頃	絹本彩色	40.5×57.7	奥田元宋・小由女美術館
11	奥田元宋	待春	1954(昭和29)年	絹本彩色	55.0×71.0	奥田元宋・小由女美術館
12	奥田元宋	燈台	昭和30年代頃	紙本彩色	29.5×28.5	個人蔵

13	奥田元宋	磐梯	1962（昭和 37）年頃	紙本彩色	60.0×66.7	奥田元宋・小由女美術館
14	奥田元宋	風光る	1970（昭和 45）年	絹本彩色	80.8×100.5	
15	奥田元宋	妙義秋耀	1991（平成 3）年	絹本彩色	74.3×91.0	

（3）－①佐藤太清 はじまり―試行錯誤の時代

16	佐藤太清	仮題―竹庭	昭和 10 年代	絹本彩色	242.0×149.0	福知山市佐藤太清記念美術館
17	佐藤太清	暁陽飛雪	1941（昭和 16）年	紙本彩色	272.0×197.0	福知山市佐藤太清記念美術館
18	佐藤太清	漁村	1942（昭和 17）年	紙本彩色	各 134.0×179.0 2 枚組	福知山市佐藤太清記念美術館
19	佐藤太清	迎春	1945（昭和 20）年	紙本彩色	169.0×93.0	福知山市佐藤太清記念美術館
20	佐藤太清	早春	1946（昭和 21）年	紙本彩色	174.0×114.0	福知山市佐藤太清記念美術館
21	佐藤太清	竹林	1949（昭和 24）年	紙本彩色	227.0×171.0	福知山市佐藤太清記念美術館

（3）－②親和―抽象化、そして装飾的表現へ

22	佐藤太清	玄冬	1950（昭和 25）年	紙本彩色	183.0×129.0	福知山市佐藤太清記念美術館
23	佐藤太清	雨の日	1952（昭和 27）年	紙本彩色	154.0×209.0	福知山市佐藤太清記念美術館
24	佐藤太清	睡蓮	1952（昭和 27）年	紙本彩色	166.0×194.0	福知山市佐藤太清記念美術館
25	佐藤太清	罌粟	1952（昭和 27）年	紙本彩色	161.0×184.0	福知山市佐藤太清記念美術館
26	佐藤太清	初秋	1953（昭和 28）年	紙本彩色	190.0×150.0	福知山市佐藤太清記念美術館
27	佐藤太清	風車	1956（昭和 31）年	紙本彩色	117.0×102.0	福知山市佐藤太清記念美術館
28	佐藤太清	芝園所見	1955（昭和 30）年	紙本彩色	117.0×108.0	福知山市佐藤太清記念美術館
29	佐藤太清	冬日	1962（昭和 37）年	紙本彩色	132.0×212.0	福知山市佐藤太清記念美術館
30	佐藤太清	水芭蕉	1963（昭和 38）年	紙本彩色	197.0×152.0	福知山市佐藤太清記念美術館
31	佐藤太清	花	1964（昭和 39）年	紙本彩色	182.0×152.0	福知山市佐藤太清記念美術館

（3）－③自然への呼応 I

32	佐藤太清	潮騒	1965（昭和 40）年	紙本彩色	212.0×167.0	福知山市佐藤太清記念美術館
33	佐藤太清	洪	1968（昭和 43）年	紙本彩色	167.0×227.0	福知山市佐藤太清記念美術館

（3）－④輝ける生命へのまなざし

34	佐藤太清	桔梗	1965（昭和 40）年	紙本彩色	43.0×55.0	福知山市佐藤太清記念美術館
35	佐藤太清	胡蝶蘭	1990（平成 2）年	紙本彩色	52.0×64.0	福知山市佐藤太清記念美術館
36	佐藤太清	牡丹	1992（平成 4）年	紙本彩色	60.7×72.4	
37	佐藤太清	瓶花―ダリア	1993（平成 5）年	紙本彩色	76.0×95.0	福知山市佐藤太清記念美術館
38	佐藤太清	薔薇	1994（平成 6）年	紙本彩色	67.0×55.0	福知山市佐藤太清記念美術館
39	佐藤太清	尚武	1995（平成 7）年	紙本彩色	52.0×62.0	福知山市佐藤太清記念美術館

（3）－③自然への呼応 II

40	佐藤太清	無	1971（昭和 46）年	紙本彩色	212.0×152.0	福知山市佐藤太清記念美術館
41	佐藤太清	東大寺暮雪	1975（昭和 50）年	紙本彩色	221.0×167.0	広島県立美術館
42	佐藤太清	清韻	1973（昭和 48）年	紙本彩色	155.0×203.0	福知山市佐藤太清記念美術館
43	佐藤太清	蓮	1977（昭和 52）年	紙本彩色	155.0×203.0	福知山市佐藤太清記念美術館

（3）－⑤一期一会 旅シリーズ

44	佐藤太清	最果の旅	1983（昭和 58）年	紙本彩色	147.0×206.0	福知山市佐藤太清記念美術館
45	佐藤太清	素描 鷺	昭和 50 年代	紙・彩色	109.0×79.0	福知山市佐藤太清記念美術館
46	佐藤太清	旅途	1988（昭和 63）年	紙本彩色	187.0×158.0	福知山市佐藤太清記念美術館
47	佐藤太清	行雲帰鳥	1992（平成 4）年	紙本彩色	153.0×183.0	福知山市佐藤太清記念美術館
48	佐藤太清	佐田岬行	1993（平成 5）年	紙本彩色	155.0×198.0	福知山市佐藤太清記念美術館
49	佐藤太清	晨雪	1984（昭和 59）年	紙本彩色	53.0×65.2	
50	佐藤太清	仮題―石庭	1994-95（平成 6-7）年頃	紙本彩色	53.0×73.0	福知山市佐藤太清記念美術館
51	佐藤太清	雪つばき（複製）	1994（平成 6）年	紙本彩色	184.0×154.0	福知山市佐藤太清記念美術館

特別展

松濤園開館 25 周年記念特別展
朝鮮通信使－江戸時代の国際交流－

会期 2019 (令和元) 年 10 月 2 日 (水) ～ 11 月 11 日 (月)
会場 松濤園 御馳走一番館
主催 公益財団法人蘭島文化振興財団、呉市、中国新聞社
後援 NHK 広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送、FM ちゅーピー 76.6MHz、呉市国際交流協会、呉市日韓親善協会、一般社団法人広島県観光連盟、NPO 法人朝鮮通信使縁地連絡協議会

関連行事

●クイズイベント

2019 (令和元) 年 10 月 5 日 (土) から景品がなくなるまで。
(10 月 10 日終了)

●ギャラリートーク

2019 (令和元) 年 10 月 6 日 (日) 午前 11 時から

おもな関連記事、番組など

○「朝鮮通信使 友好の懸け橋」中国新聞、2019 (令和元) 年 10 月 13 日 ○「くれえぱん」10 月号、株式会社 SA メディアラボ ○「リーぶら」秋号、広島広域都市圏協議会

○「テレビ派」広島テレビ放送、2019 (令和元) 年 10 月 2 日 (水) 放送 ○「テレビ派街かど伝言板／テレビ派」広島テレビ放送、2019 (令和元) 年 10 月 4 日 (金) 放送

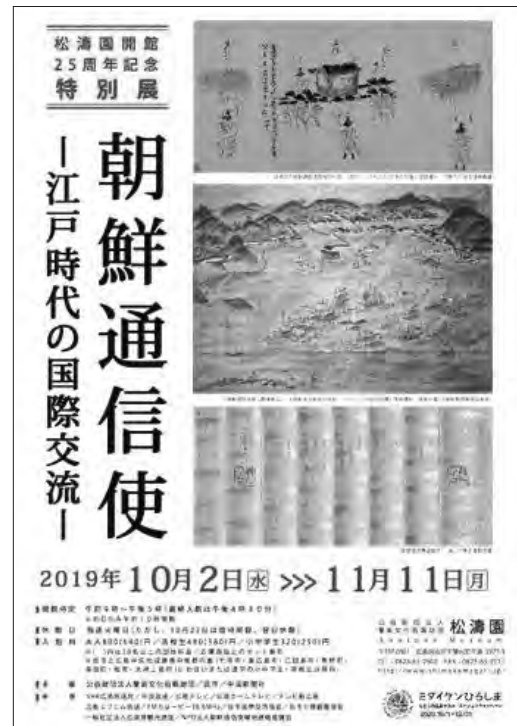
印刷物

●ポスター B2 判 700 部
●チラシ A4 判 (両面刷り) 40,000 部
●出品目録 A3 判二つ折り (片面刷り)
●図録 ◎体裁 H29.7×W21.0cm 32 ページ ◎名称「松濤園開館 25 周年記念特別展 朝鮮通信使－江戸時代の国際交流－」◎編集 公益財団法人蘭島文化振興財団 ◎テキスト 町田一仁 (元朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産日本学術委員会副委員長) ◎製作 株式会社呉精版印刷 ◎発行 公益財団法人蘭島文化振興財団 ◎内容「ごあいさつ」海生泰定 (公益財団法人蘭島文化振興財団理事長) ◎「朝鮮通信使とその記録のユネスコ「世界の記憶」登録」町田一仁 (元朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産日本学術委員会副委員長) ◎「朝鮮通信使年表」小川英史編 (松濤園学芸員) ◎図版 ◎出品目録 ◎「資料解説」小川英史 (松濤園学芸員) ◎謝辞

目的

これまで松濤園は、日本で唯一の常設の朝鮮通信使資料館として、朝鮮通信使の歴史を多くの来館者へ紹介してきた。1994 (平成 6) 年に開館した松濤園は 2019 (令和元) 年に 25 周年を迎え、それを記念し朝鮮通信使の歴史と日本に与えた影響を紹介することを目的とし、松濤園 25 周年記念特別展を開催した。

朝鮮通信使に関する記録は、日韓両国に絵画や書物などさまざまな形で残されており、そのうち 111 件 333 点が 2017 (平成 29) 年 10 月「朝鮮通信使に関する記録〈17 世紀～19 世紀の日韓間の平和構築と文化交流の歴史〉」と



展示風景



展示風景

してユネスコ「世界の記憶」に登録された。松濤園からは旅程の記録の一つとして「朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図」が登録。

本展では、各地に残る外交記録、旅程の記録、文化交流の記録という三つの側面から実物資料、パネル解説を交えて朝鮮通信使の歴史と日本への影響を紹介した。このことにより、日本近世史のあまり知られていない一面を掘り起こし、朝鮮通信使の果たした役割についてふりかえった。

また本展は企画展示として、特に下関、三之瀬、鞆の浦といった瀬戸内海沿岸の朝鮮通信使寄港地にゆかりのある資料に焦点を当てた。

展示内容

(1) 常設展示 一体感！御馳走一番ー

朝鮮通信使船、等身大人形、本陣復元模型、七五三の膳・三汁十五菜の膳の模型を常設で展示している。朝鮮通信使の旅程の様子、身に着けていた衣装、下蒲刈に来島した際の様子、もてなしの際の儀式料理の様子、実際に通信使へ出されていた食事の様子を年間を通して展示することにより朝鮮通信使の学習が十分にできるように展示している。

(2) 朝鮮通信使の再開

徳川政権が誕生し、朝鮮王朝との正式修好を重要視した徳川家康が、一度途絶えた日本と朝鮮王朝間の国交の回復を望み、対馬藩がその調整にあたった。朝鮮側から出された徳川家康からの国書を先に出す条件を、対馬藩が国書を作成することによりその条件を満たし、両国間の国交が回復した。しかし、通信使復活の影には対馬藩による、いわゆる偽国書事件があった。本コーナーでは、その後 200 年以上にわたる朝鮮との交流の契機となった対馬藩作成の国書を取上げ、当時の外交文書をめぐる人々の思惑と、その果たした役割について、パネル資料により解説した。

(3) 外交の記録

国交が回復すると、徳川幕府の慶事の聘礼使者として朝鮮通信使が来日するようになる。その使命は、朝鮮国王からの国書を徳川将軍のもとへ届けるというものだった。両国間の威信をかけて交換された国書は、外交上のさまざまな緊張状態を引き起こし、当時の政治情勢や歴史、また儀礼や慣習を知る上でも貴重な記録となっている。本コーナーでは、現在、東京国立博物館が所蔵する朝鮮国書群の複製パネル展示をすることにより、江戸時代の外交文書の様相を紹介した。また、第 11 次の朝鮮通信使が当時京都所司代を務めていた阿部正右へ、朝鮮で外交を担当する禮曹からの手紙と進物目録を紹介し、江戸からの帰路にて阿部正右から朝鮮国禮曹へと宛てられた感謝の意を記した手紙を紹介し、江戸以外でも国際交流がもたれた様子を紹介した。

(4) 旅程の記録

朝鮮通信使の旅路の様子を紹介した。朝鮮通信使の旅は海路、陸路あわせて、往復で数ヶ月を要するものであった。海路では、朝鮮通信使船と日本の船が数百艘の大船団を組み航海している様子を超専寺所蔵の「朝鮮通信使船上関来

航図」や所蔵品の「朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図」を紹介することにより、事故が起こらないように、各藩が担当する海域を緊張感をもって警護している様子を紹介した。陸路では、大規模な行列を組み行進していた様子を、朝鮮通信使の旅のフィナーレを飾る、江戸城登城の行列図が描かれた下関市立歴史博物館所蔵の「延享五年朝鮮通信使登城行列図」により紹介し、当時の江戸の民衆の通信使に対する感想や異文化に対するあこがれを紹介した。また江戸城登城の日、江戸は休日となり、通信使を見物するため人々は挙げて見物に出かけるほど関心を持たれていたことを紹介した。

(5) 淀川を行く

朝鮮通信使は大坂に着くと、外洋船である通信使船では船底が深く、川底にあたり淀川をのぼれないため、西国諸藩や幕府が用意した川御座船に乗り換え川をのぼり、京都まで進んだ。本展では、淀川をきらびやかな川御座船で進む様子を大阪歴史博物館が所蔵する「朝鮮通信使御船図屏風」など複製パネル 3 点で紹介した。川御座船を船頭たちが櫓を漕ぎ船を進め、その周りを厳重に警護する多数の日本船の姿が資料には描かれている。淀川を進むことがいかに大変であったかを、船に乗る役人の険しい表情と、船内で煙草を吸いリラックスした様子の対比により通信使を迎える側の緊張感を紹介した。

(6) 文化交流の記録

朝鮮通信使にはさまざまな役職の役人が選ばれた。高い教養を積んだ三使を始め、医者や画家などの学者や文人も選ばれており、日本の政治、経済、学術、文化などのさまざまな面で交流がおこなわれた。通信使随行の画員として 2 度来日した金明国（キム・ミョングク）筆の「拾得図」を始め、第 11 回朝鮮通信使の正使を務めた、趙曦（チョウ・オム）が前対馬藩主の求めに応じ、帰路に漢詩を手鑑装にして贈った「宝暦十四年朝鮮通信使正使趙曦書帖」により文化交流の一面を紹介した。福禅寺に伝わる「韓使聘禮図」を展示し、荘厳な様子で国書の伝命の儀式や七五三の膳の饗応の儀式が執りおこなわれた様子を紹介した。

(7) 朝鮮通信使の来日と文化的影響

福禅寺（福山市）に伝わる 4 点の資料で紹介した。福禅寺は、本堂に隣接して客殿を持ち、江戸時代から文人・墨客らの交流の場であり、また朝鮮通信使の迎賓館としても利用されてきた。通信使から贈られた調度の中で、詩歌を交わした当時の文化人の暮らしぶりを、福禅寺に伝わる工芸品の意匠などから感じ取ってもらう展示とした。

(8) 朝鮮美術 ー朝鮮の家具ー

朝鮮通信使のふるさとである朝鮮半島の家具を展示することにより、両班（ヤンバン）を中心とした当時の朝鮮の知識階級の生活形式や調度品を紹介した。

（小川英史）

松濤園 御馳走一番館 「松濤園開館 25 周年記念特別展 朝鮮通信使—江戸時代の国際交流—」 出品リスト

* 無表記は財団所蔵

No.	資料名 *作者 資料名	時代・年代など	おもな材質	形状	寸法 (縦×横、その他) cm または (縦×横×奥行) cm	所蔵 復元模型／複製 (所蔵先)
-----	-------------	---------	-------	----	------------------------------------	---------------------

松濤園 御馳走一番館の資料のうち、絵図等の複製については原資料の時代・年代を表記し、おもな材質、形状は複製した状態を表記している。記載する寸法は本財団で計測したもの。

(1) 常設展示 一体感！御馳走一番

1	朝鮮通信使船					1 / 10 復元模型
2	北前船					復元模型
3	等身大衣装と人形					復元模型
4	本陣模型と行列人形					復元模型
5	七五三の膳				膳・各 25.5×41.0×41.0	復元模型
6	三汁十五菜の膳				台・32.5×65.0×105.0	復元模型
7	朝鮮人御用信楽長野村焼物雛形控		紙・プリント	額装		複製 (個人蔵)
8	通信使接待用陶器茶碗類					復元模型
9	雨森芳洲肖像	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (芳洲会)
10	韓使聘礼図 (部分)	1837 (天保 8) 年	紙・プリント	額装		複製 (福禅寺)
11	狩野益信 朝鮮通信使欽待図屏風 (部分)	17 世紀	紙・プリント	額装		複製 (泉涌寺)

(2) 朝鮮通信使の再開

12	対馬藩作成 朝鮮国書 朝鮮国王李昞国書	1607 (慶長 12) 年	紙・プリント		60.3×93.8	複製 (京都大学総合博物館)
13	対馬藩作成 朝鮮国書 朝鮮国王李昞国書別幅	1607 (慶長 12) 年	紙・プリント		58.6×75.9	複製 (京都大学総合博物館)

(3) 外交の記録

14	対馬藩作成 朝鮮国書 朝鮮国王李瑱国書別幅	1617 (元和 3) 年	紙・プリント	額装	57.5×125.4	複製 (東京国立博物館)
15	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李倧国書	1643 (寛永 20) 年	紙・プリント	額装	51.4×134.2	複製 (東京国立博物館)
16	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李倧国書別幅	1643 (寛永 20) 年	紙・プリント	額装	51.7×145.3	複製 (東京国立博物館)
17	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李漢国書	1655 (明暦元) 年	紙・プリント	額装	52.6×109.3	複製 (東京国立博物館)
18	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李漢国書別幅	1655 (明暦元) 年	紙・プリント	額装	52.7×126.7	複製 (東京国立博物館)
19	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李焞国書別幅	1682 (天和 2) 年	紙・プリント	額装	53.5×120.3	複製 (東京国立博物館)
20	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李焞国書	1711 (正徳元) 年	紙・プリント	額装	50.9×106.4	複製 (東京国立博物館)
21	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李焞国書	1719 (享保 4) 年	紙・プリント	額装	52.6×97.8	複製 (東京国立博物館)
22	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李焞国書別幅	1719 (享保 4) 年	紙・プリント	額装	52.5×106.5	複製 (東京国立博物館)
23	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李昞国書	1747 (延享 4) 年	紙・プリント	額装	51.0×114.8	複製 (東京国立博物館)
24	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李昞国書別幅	1747 (延享 4) 年	紙・プリント	額装	50.0×116.2	複製 (東京国立博物館)
25	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李昞国書別幅	1747 (延享 4) 年	紙・プリント	額装	50.1×114.9	複製 (東京国立博物館)
26	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李昞国書	1763 (宝暦 13) 年	紙・プリント	額装	49.9×117.3	複製 (東京国立博物館)
27	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李昞国書別幅	1763 (宝暦 13) 年	紙・プリント	額装	49.8×118.4	複製 (東京国立博物館)
28	朝鮮王朝作成 朝鮮国書 朝鮮国王李昞国書別幅	1811 (文化 8) 年	紙・プリント	額装	49.3×112.6	複製 (東京国立博物館)
29	朝鮮国禮曹書簡	1763 (宝暦 13) 年	紙本墨書		46.7×64.0	福山市歴史資料室
30	別幅同上進物目録	1763 (宝暦 13) 年	紙本墨書		42.7×78.5	福山市歴史資料室
31	三使進物目録	1764 (宝暦 14) 年	紙本墨書		51.6×62.0	福山市歴史資料室
32	朝鮮国禮曹返翰控	1764 (宝暦 14) 年	紙本墨書		42.5×91.2	福山市歴史資料室
33	別幅朝鮮国禮曹への進物目録	1764 (宝暦 14) 年	紙本墨書		42.4×77.0	福山市歴史資料室

(4) 旅程の記録

34	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図	1748 (延享 5) 年	紙本着色	卷子装	幅 14.5 長さ 824.9	
35	延享五年朝鮮通信使登城行列図	1748 (延享 5) 年	紙本着色	卷子装	幅 34.8 長さ 552.5	下関市立歴史博物館
36	朝鮮通信使船上関来航図	18 世紀	紙本着色	額装	60.3×86.8	超専寺

(5) 淀川を行く

37	朝鮮通信使御楼船図屏風	18 世紀	紙・プリント	額装		複製 (大阪歴史博物館)
38	正徳度朝鮮通信使上々官第三船図・同供船図	1712 (正徳 2) 年	紙・プリント	額装		複製 (大阪歴史博物館)
39	正徳度朝鮮通信使国書先導船図屏風	1711 (正徳元) 年	紙・プリント	額装		複製 (大阪歴史博物館)

(6) 文化交流の記録

40	韓使聘禮図	1837 (天保 8) 年	紙本着色	軸装	39.8×449.6	福禅寺
----	-------	---------------	------	----	------------	-----

41	金明国 拾得図	1636 (寛永 13) 年 ／ 1643 (寛永 20) 年	紙本墨画	軸装	64.5×52.8	下関市立歴史博物館
42	趙曦 宝暦十四年朝鮮通信使正使趙曦書帖	1764 (宝暦 14) 年	紙本墨書	手鑑装	29.0×21.6	下関市立歴史博物館

(7) 朝鮮通信使の来日と文化的影響

43	筆 (一部欠損)		木製		長さ 30.5	福禅寺
44	木硯 (一部欠損)		木製		5.8×22.0×8.0	福禅寺
45	花瓶		青銅		高 31.8 口径 20.8	福禅寺
46	香炉 (一部欠損)		青銅		高 14.8 幅 14.3	福禅寺
47	色絵漢詩入保命酒蕪德利 (巖楼)	江戸後期	陶器		高 15.5	個人
48	色絵朝鮮通信使滄州漢詩入保命酒德利	幕末～明治	陶器		22.5×13.5	
49	保命酒德利		陶器		高 17.0	
50	色絵朝鮮通信使図大皿	幕末～明治	磁器		高 5.8 口径 40.0	
51	色絵朝鮮通信使行列絵巻之図大皿	明治時代	磁器		高 7.0 口径 54.0	

(8) 朝鮮美術 ―朝鮮の家具―

52	李朝筆筥 (バンダジ)			木工	77.0×83.8×38.0	
53	李朝筆筥 (バンダジ)			木工	74.0×8.38×39.0	
54	李朝筆筥 (衣装箱)			木工	92.5×92.5×45.7	
55	朝鮮筆筥 (竹張文匣)			木工	46.5×81.7×32.5	
56	葉筆筥			木工	79.0×98.0×34.0	
57	李朝米櫃			木工	92.3×92.5×57.4	

所蔵品展Ⅰ 蘭島閣美術館名品展 華麗なる美の競演

会期 2019（平成31）年4月24日（水）～2019（令和元）年6月3日（月）

会場 蘭島閣美術館

関連行事

●蘭島閣オリジナルクイズ

2019（平成31）年4月27日（土）～2019（令和元）年5月6日（月）

●ギャラリートーク

2019（平成31）年4月28日（日）、2019（令和元）年5月12日（日）

午前11時から／午後2時から（各日2回）

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」5月号、呉市 ○「あのまちこのまち」『海陽彩都プラス』No.1、広島中央地域連携中枢都市圏

印刷物

●チラシA4判（両面刷り） 8,000部

●出品目録A4判（両面刷り）

目的

本展では、珠玉のコレクションの中から日本画に焦点を当て、日本の近代絵画の潮流を紹介した。近代の日本画壇を代表する作家である横山大観や小野竹喬、福田平八郎らは、初期は狩野派などから日本画の古典技法を学びながらも、のちに西洋画の影響を受けて没骨法や色彩を強く出した装飾的な表現へと独自の画風を展開していった。また、1948（昭和23）年には世界にも通用する日本画の創造を目指そうと創造美術（現・創画会）が結成され、新しい日本画のあり方を模索した。創造美術の創立メンバーである山本丘人は、初期の叙情的な風景画から、次第に造形性の強いダイナミックな力強い風景画へと画風を変化させ、時代に即した表現を見出した。その他にも現在重鎮として活躍している作家らの作品も紹介することで、近代から現代の日本画の流れを俯瞰した。

展示内容

（1）日本画の技法

本コーナーでは横山大観、下村観山ら院展を設立したメンバーや再興院展を支えた小林古径、安田靉彦、前田青邨らからその弟子筋にあたる奥村土牛、吉田善彦らの作品を展示し、院展の流れとともに日本画の技法について着目した展示をした。横山大観は、空気や光を表現しようと西洋画の表現を取り入れて「没骨法」を研究した。大観の「冬の海」にもその表現が見られる。そして小林古径や前田青邨らは、絵具が乾かないうちに他の色彩を加えてにじみを作る「たらしこみ」という技法を用いて「牡丹」と「立葵」を描いた。本コーナーでは、それらの日本画の技法にも着目して鑑賞してもらえるよう、技法について簡単にまとめたパネルを作り、掲示した。

（2）日本画家たちの戦後の試み



展示風景



展示風景

1948（昭和 23）年、世界にも通用する日本画の創造を目指そうと創造美術が結成された。本コーナーではその創立メンバーであった山本丘人、上村松篁、吉岡堅二らの作品を展示した。また、戦後厳しい現実に向かい自らの心情を動物の生態に仮託して描くために、西洋画の構成や表現を日本画の平面性や装飾性と調和させた加山又造の作品を展示。戦後、新たな日本画を生み出そうと試みた画家たちの作品を紹介した。

（3）日展の作家たちの戦後の作品

西洋の文化や技術が入ってくる中で絵具はだんだんと厚塗りになり、それに伴い装飾的になっていった。日本画だけでなく西洋画も学んでいた池田達郎や山口蓬春は、西洋画の写実性や絵具の塗り方を日本画に融合させた作品を描いた。また、写生中心の画風で動物や自然を描くことを得意とした山口華陽は、戦後は斬新な構図と色彩対比を表現した作品を発表した。そして、山口蓬春に師事した加藤東一や大山忠作、山口華陽に師事した竹内浩一らの作品も展示し、師から日本画の伝統を受け継ぎつつも技法やモチーフなどを変化させて現代に即した絵画表現を確立している

ことを見てもらった。

（4）杉山寧の『文藝春秋』表紙絵

杉山寧は 1956（昭和 31）年 4 月号から 1986（昭和 61）年 12 月号まで『文藝春秋』の表紙絵を手がけた。当財団ではそのうち、1965（昭和 40）年と 1966（昭和 41）年の 2 年分を所蔵している。今回はその中から、1966（昭和 41）年の 12 ヶ月分を展示し、表紙という制限された画面サイズの中にデザインという面で日本画の表現に新たな可能性を見出した杉山寧の画業につながる作品の一部を紹介した。

（5）戦後、そして現代に活躍する作家たち

戦後の日展を支えた杉山寧、東山魁夷、高山辰雄の 3 人は「日展三山」と称され人気を博した。また、同時期に院展で活躍した平山郁夫の作品も展示した他、東山魁夷の弟子である川崎麻児、平山郁夫の弟子である田淵俊夫らの作品を一堂に展示することで、近代から現代までの日本画の流れを俯瞰できるような展示にした。

（木口詩織）

蘭島閣美術館 所蔵品展 I 「蘭島閣美術館名品展 華麗なる美の競演」 出品リスト

* 無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法（縦×横）cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	-----------	----

（1）日本画の技法

1	小林古径	牡丹	1951-52（昭和 26-27）年	紙本彩色	額装	50.5×65.6	
2	川端龍子	薄氷	1940（昭和 15）年頃	絹本彩色	額装	45.8×57.4	
3	横山大観	冬の海	1907（明治 40）年頃	絹本彩色	額装	49.0×76.0	
4	横山大観	神国日本	1926-29（昭和元-4）年頃	絹本彩色	額装	73.0×74.0	
5	下村観山	不動明王	制作年不詳	絹本彩色	額装	89.8×50.8	
6	堅山南風	装おえる人	1977（昭和 52）年	紙本彩色	額装	81.5×64.8	
7	安田靉彦	観音	制作年不詳	紙本彩色	額装	51.0×59.2	
8	前田青邨	立葵	1951-52（昭和 26-27）頃	紙本彩色	額装	50.4×61.0	
9	前田青邨	群泳	1963（昭和 38）年頃	紙本彩色	額装	56.3×71.0	
10	奥村土牛	スペイン皿	1961（昭和 36）年	紙本彩色	額装	56.8×66.2	
11	小倉遊亀	紅梅と白椿	1980（昭和 55）年	紙本彩色	額装	38.3×65.0	
12	小松均	岩山図	1973（昭和 48）年	紙本彩色	額装	96.8×61.7	
13	吉田善彦	二月堂	制作年不詳	紙本彩色	額装	50.0×73.0	
14	吉田善彦	吉野	1980（昭和 55）年	紙本彩色	額装	61.2×73.2	
15	塩出英雄	山湖	制作年不詳	絹本彩色	軸装	43.2×51.2	
16	塩出英雄	風景	制作年不詳	紙本彩色	額装	48.8×60.2	寄託

（2）日本画家たちの戦後の試み

17	横山操	灯台	1958（昭和 33）年	絹本彩色	額装	51.2×75.8	
18	加山又造	鴉	1959（昭和 34）年	紙本彩色	額装	62.2×74.7	
19	石本正	香	1994（平成 6）年	紙本彩色	額装	75.8×49.5	
20	工藤甲人	胡蝶夢	1962（昭和 37）年	紙本彩色	額装	53.0×68.5	
21	橋本明治	麗	1970（昭和 45）年	紙本彩色	額装	73.0×50.0	
22	吉岡堅二	孔雀	1973（昭和 48）年	紙本彩色	額装	61.0×46.0	
23	山本丘人	青い季節	1962（昭和 37）年	金箔麻紙・彩色	額装	49.2×60.4	

24	秋野不矩	淡紅梅	制作年不詳	紙本彩色	額装	45.5×53.0	
25	上村松篁	五月	1991（平成3）年	紙本彩色	額装	66.5×94.0	

（3）日展の作家たちの戦後の作品

26	小野竹喬	春景	1970（昭和45）年頃	紙本彩色	額装	27.0×41.2	
27	福田平八郎	花の習作（春日）	1962（昭和37）年	紙本彩色	額装	48.8×53.0	
28	池田遙邨	嵐山渡月橋	1985（昭和60）年頃	紙本彩色	額装	50.0×65.9	
29	徳岡神泉	桔梗	1966（昭和41）年	紙本彩色	額装	33.6×45.8	
30	山口華楊	虎児	1957（昭和32）年	紙本彩色	額装	56.2×71.7	
31	山口華楊	虎	制作年不詳	紙・コンテ	額装	25.5×35.7	
32	山口蓬春	果実	制作年不詳	紙本彩色	額装	43.0×52.8	寄託
33	加藤栄三	椿寿	1968（昭和43）年	紙本彩色	額装	45.5×38.0	
34	加藤栄三	篝火	制作年不詳	紙本彩色	額装	40.0×63.0	
35	加藤東一	月下篝火	制作年不詳	紙本彩色	額装	46.2×61.2	
36	加藤東一	人	1977（昭和52）年	紙本彩色	額装	177.7×217.0	
37	大山忠作	俑	1988（昭和63）年	紙本彩色	額装	214.8×156.4	
38	山岸純	爽晨	1993（平成5）年	紙本彩色	額装	80.5×117.0	
39	渡辺信喜	芙蓉花	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	91.0×116.6	
40	堀泰明	遊衣－GREEN STRIPES	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	91.0×65.5	
41	竹内浩一	リンゴの木に	1993（平成5）年	紙本彩色	額装	195.0×132.0	

（4）杉山寧の『文藝春秋』表紙絵

42	杉山寧	供物を運ぶ女	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
43	杉山寧	冬の陽	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
44	杉山寧	古都の民家	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
45	杉山寧	城	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
46	杉山寧	岩	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
47	杉山寧	馬	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
48	杉山寧	土偶	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
49	杉山寧	向日葵	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
50	杉山寧	南海の魚	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
51	杉山寧	渡り	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
52	杉山寧	冬がまえ	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
53	杉山寧	りんご	1966（昭和41）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	

（5）戦後、そして現代に活躍する作家たち

54	高木義夫	佳日	1991（平成3）年	紙本彩色	額装	60.7×45.5	
55	川崎麻児	夜が渡る	1991（平成3）年	麻布・彩色	額装	65.2×80.3	
56	川崎鈴彦	黄昏	1991（平成3）年	紙本彩色	額装	45.5×60.5	
57	川崎春彦	水辺	1982（昭和57）年	紙本彩色	額装	51.8×74.3	
58	川崎春彦	夏の海	1988（昭和63）年	紙本彩色	額装	80.5×117.0	
59	関口雄輝	谷間の秋	制作年不詳	紙本彩色	額装	40.0×53.0	寄託
60	東山魁夷	晴春	1956（昭和31）年	紙本彩色	額装	38.0×50.2	
61	杉山寧	芳春	1952（昭和27）年	紙本彩色	額装	30.0×28.3	
62	杉山寧	晶	1969（昭和44）年頃	麻布・彩色	額装	65.6×93.5	
63	高山辰雄	花のある静物	1964（昭和39）年	紙本彩色	額装	54.0×92.0	
64	高山辰雄	鳩	1988（昭和63）年	絹本彩色	額装	73.2×55.4	
65	平山郁夫	エベレストへの道	1981（昭和56）年	紙・インク・水彩	額装	32.0×41.0	
66	平山郁夫	アッシジの丘	1965（昭和40）年	紙本彩色	額装	44.5×100.0	
67	山中雪人	仔牛を担う青年 ギリシャ	制作年不詳	紙本彩色	額装	33.3×24.3	
68	梅原幸雄	艶艶	1994（平成6）年	紙本彩色	額装	117.0×91.7	
69	田淵俊夫	歴	1987（昭和62）年	紙本彩色	額装	101.0×101.1	
70	西田俊英	灯のともる頃	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	113.0×163.0	

所蔵品展Ⅱ 瀬戸内の画家たち 前期

会期 2019（令和元）年6月5日（水）～7月29日（月）
会場 蘭島閣美術館

関連行事

●ギャラリートーク

2019（令和元）年6月16日（日）、7月14日（日）
午前11時から／午後2時から（各日2回）

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」7月号、呉市 ○「市政だよりくれ」8月号、呉市

印刷物

- チラシA 4判（両面刷り） 8,000部
- 出品目録A 4判（両面刷り）

目的

本展は、瀬戸内を中心に活躍する画家たちに焦点を当てた。当財団のコレクションは、瀬戸内海やその沿岸地域にゆかりを持つ画家たちの作品も充実しており、これまでも展覧会を通して積極的に紹介してきた。展示では、瀬戸内地域にゆかりを持つ画家たちを前期、後期と2期にわけ、前期展では日本画、工芸をそれぞれ特集し展示をおこなった。日本画では、広島県呉市広出身で革新的な日本画を制作した船田玉樹や、広島県三次市出身で自然の美しさを描いた奥田元宋の作品を、工芸では竹原市を制作の拠点として活躍する象嵌技法の第一人者である今井政之の工芸作品を展示し、瀬戸内の画家たちの多彩な作品の数々を紹介した。

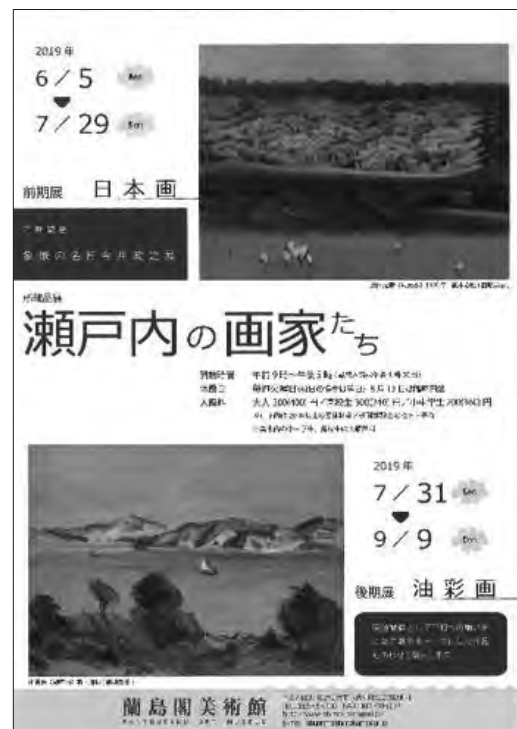
展示内容

（1）多彩な表現

江戸時代後期に、現在の広島県尾道市を拠点に活躍した女流画家平田玉蘊から現在院展で重鎮として活躍している西田俊英まで多彩な表現に着目して展示をおこなった。展示作品には、軸装や襖絵、そして額装まで形状が異なる作品を紹介した。軸装では、平田玉蘊の少ない色数とすばやい筆致によって対象の特徴を見事に捉えた「牡丹」や「枝に雀図」などを展示した。襖絵は池田栄廣の「四季襖絵」を紹介した。この作品には、季節の花々や鳥が四季の流れに沿って描かれており、日本画の伝統的な特色が見られる。本コーナーでは、こうした多彩な表現が見られる作品を広島にゆかりのある日本画家を中心に紹介した。

（2）広島一戦後の日本画家たち

本コーナーでは、船田玉樹や浜崎左髪子ら戦後広島を拠点に活躍した作家から現在の作家まで5人の日本画家の作品を紹介した。船田玉樹は広島県賀茂郡広村（現・呉市広）に生まれ中学時代から油彩を始め、山路商に学び上京後は霞光らとも交流した。しかし、琳派絵画に感銘を受けた玉樹は日本画に転向。1934（昭和9）年から速水御舟、その後は小林古徑に師事した。1938（昭和13）年からは歷程美術協会で丸木位里らと研鑽し、シュルレアリスムなどを



展示風景



展示風景

自身の絵に取り入れていったが、1944（昭和 19）年に応召。病を得て広島に帰り、以後は広島を拠点に制作を続けた。展示では、戦後に制作された 4 点を紹介した。また玉樹は、1969（昭和 44）年広島県の日本画懇話会の創立に参加している。日本古来の伝統と独特の画風をもった日本画を広く県民に普及啓蒙することを掲げて発足した同会は、1989（平成元）年に広島県日本画協会へと名称を変更した。新たな体制となり、其阿弥赫土は名誉会長として同会に力を注いでいる。現在、広島県日本画協会は福原匠一が会長を務め、副会長を住本弥綺子が務めている。本コーナーでは戦後の作家とともに、広島日本画協会の軌跡をあわせて紹介した。

（３）工芸—今井政之

今井政之は少年時代を広島県竹原市で過ごし備前で修業

した後、京都で楠部彌弍に師事。1978（昭和 53）年に竹原市に豊山窯を築き、現在も自然豊かな竹原で創作活動を続けている。本コーナーでは風船葛や桔梗などの植物や、昆虫を文様にした作品を特集した。

（４）日本画—瀬戸内海沿岸部出身の作家を中心に

本コーナーでは、瀬戸内海沿岸の地域にゆかりを持つ日本画家の作品を、コレクションの中から選定し、その中でも日展の作家たちに着目し展示をおこなった。岡山県笠岡市出身の小野竹喬は 1903（明治 36）年京都に出て、竹内栖鳳に入門した。本コーナーでは同じく竹内栖鳳門下の金島桂華や池田遙邨から次世代の作家まで幅広く紹介した。あわせて広島を代表する日本画家の児玉希望とその弟子にあたる、奥田元宋、三上巴峽を展示し瀬戸内出身の作家の多様性を示した。

（山下裕子）

蘭島閣美術館 所蔵品展Ⅱ「瀬戸内の画家たち 前期」出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法（縦×横）cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	-----------	----

（１）多彩な表現

1	西田俊英	泰山木	1992（平成 4）年	紙本彩色	額装	65.5×91.0	
2	西田俊英	灯のともる頃	1992（平成 4）年	紙本彩色	額装	113.0×163.0	
3	平山郁夫	アッシジの丘	1965（昭和 40）年	紙本彩色	額装	44.5×100.0	
4	塩出英雄	裏岩菅秋色	1994（平成 6）年	紙本彩色	額装	47.8×55.1	
5	田中頼璋	幽山居屋図	制作年不詳	絹本彩色	軸装	135.4×48.7	
6	森寛斎	花卉小禽図	制作年不詳	紙本彩色	軸装	117.5×47.5	
7	森寛斎	梅図	制作年不詳	紙本墨画	軸装	126.0×52.8	
8	平田玉蘊	牡丹図	制作年不詳	紙本彩色	軸装	131.8×58.5	
9	平田玉蘊	釣人図	制作年不詳	紙本彩色	軸装	130.8×59.0	
10	平田玉蘊	枝に雀図	制作年不詳	紙本彩色	軸装	131.8×58.6	
11	池田栄廣	グレーファンド	1983（昭和 58）年	紙本彩色	額装	72.6×87.4	
12	池田栄廣	四季襖絵（春）	制作年不詳	紙本彩色	額装	172.5×90.5	
13	池田栄廣	四季襖絵（夏）	制作年不詳	紙本彩色	額装	172.5×90.5	
14	池田栄廣	四季襖絵（秋）	制作年不詳	紙本彩色	額装	172.5×90.5	
15	池田栄廣	四季襖絵（冬）	制作年不詳	紙本彩色	額装	172.5×90.5	
16	池田栄廣	シャム猫	1991（平成 3）年	紙本彩色	額装	103.1×103.1	

（２）広島—戦後の日本画家たち

17	浜崎左髪子	内海	1975（昭和 50）年	紙本彩色	パネル	240.0×541.0	
18	浜崎左髪子	ただの酒	1981（昭和 56）年	紙本彩色	パネル	182.0×546.0	
19	船田玉樹	松	制作年不詳	紙本彩色	額装	116.7×80.2	
20	船田玉樹	櫻島	1952（昭和 27）年	紙本彩色	額装	121.0×181.5	
21	船田玉樹	浜辺	1967（昭和 42）年	紙本彩色	額装	46.7×55.7	
22	船田奇岑	海辺	制作年不詳	絹本彩色	額装	116.0×72.0	
23	其阿弥赫土	涛	1989（平成元）年	紙本彩色	額装	182.6×366.0	
24	其阿弥赫土	寄せる波	1991（平成 3）年	紙本彩色	額装	182.6×366.0	
25	其阿弥赫土	流れ	1993-2009（平成 5-21）年	紙本彩色	額装	90.0×180.0	
26	福原匠一	春香	制作年不詳	紙本彩色	額装	91.0×72.7	
27	福原匠一	女猫の瀬戸	制作年不詳	紙本彩色	額装	72.7×60.6	
28	住本弥綺子	踊り子 I	1997（平成 9）年	紙本彩色	額装	166.5×72.7	

29	住本弥綺子	踊り子Ⅱ	1997（平成9）年	紙本彩色	額装	166.5×72.7	
30	住本弥綺子	踊り子Ⅲ	1997（平成9）年	紙本彩色	額装	166.5×72.7	

（3）工芸—今井政之

31	今井政之	象嵌彩塩窯風船葛大皿	1990（平成2）年	陶器		高 7.2 口径 65.7	
32	今井政之	象嵌彩桔梗水指	1990（平成2）年	陶器		高 20.3 径 19.8	
33	今井政之	象嵌彩双蝶文花瓶	制作年不詳	陶器		高 22.4 径 11.2	
34	今井政之	象嵌志野夏日水指	1991（平成3）年	陶器		高 19.5 径 15.5	
35	今井政之	象嵌彩阿比鉢皿	1994（平成6）年	陶器		高 4.0 口径 38.4	
36	今井政之	象嵌彩窯変くわがた花瓶	1998（平成10）年	陶器		高 24.0 径 14.0	
37	今井政之	金彩虎置物	1997（平成9）年	陶器		高 8.5	

（4）日本画—瀬戸内海沿岸部出身の作家を中心に

38	森田りえ子	秋華	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	53.0×72.7	
39	鹿見喜陌	人	制作年不詳	紙本彩色	額装	73.5×117.0	
40	岩澤重夫	流転	1993（平成5）年	紙本彩色	額装	112.1×193.8	
41	岩倉寿	雨季	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	65.5×91.0	
42	小野竹喬	山辺の春	1945（昭和20）年頃	絹本彩色	額装	38.7×50.7	
43	小野竹喬	春日野	1930（昭和5）年頃	絹本彩色	額装	170.0×170.0	
44	金島桂華	鶴	制作年不詳	紙本彩色	額装	85.7×119.1	
45	金島桂華	薔薇に白百合	制作年不詳	絹本彩色	額装	49.8×55.5	寄託
46	池田遙邨	川奈の富士	1955（昭和30）年頃	紙本彩色	額装	41.2×53.4	
47	猪原大華	竹梅	1968（昭和43）年	紙本彩色	額装	40.9×52.8	
48	森谷南人子	千光寺春山	制作年不詳	紙本彩色	額装	31.0×40.0	寄託
49	奥田元宋	風光る	1970（昭和45）年	絹本彩色	額装	80.8×100.5	
50	児玉希望	清爽	制作年不詳	絹本彩色	額装	45.3×52.6	
51	児玉希望	戸隠秋景	制作年不詳	紙本彩色	額装	38.5×50.8	寄託
52	三上巴峽	夕映	制作年不詳	紙本彩色	額装	41.0×60.7	
53	三上巴峽	春の吉名村	制作年不詳	紙本彩色	額装	44.5×54.3	

所蔵品展Ⅲ 瀬戸内の画家たち 後期

会期 2019（令和元）年7月31日（水）～9月9日（月）
会場 蘭島閣美術館

関連行事

- なつやすみ特別企画 絵画鑑賞のじかん
2019（令和元）年8月4日（日）、8月11日（日）
- ギャラリートーク
2019（令和元）年8月4日（日）
午前11時から／午後2時から（1日2回）

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」9月号、呉市

印刷物

- チラシ A4判（両面刷り） 10,000部
- 出品目録 A4判（両面刷り）

目的

本展では前期展に引き続き、瀬戸内海やその沿岸地域にゆかりを持つ画家たちの油彩画作品を中心に展示をした。呉市安浦町出身で穏やかであたたかな作風で親しまれた南薫造の描いた油彩画や水彩画を始め、写実絵画の重鎮として知られる野田弘志、その他瀬戸内に題材を求めた油彩画を多数紹介した。また、平和への願いを込めて戦争をテーマにした作品も展示した。

展示内容

（1）瀬戸内の画家たちと戦争体験

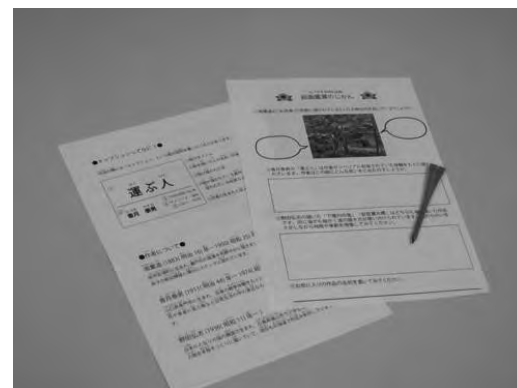
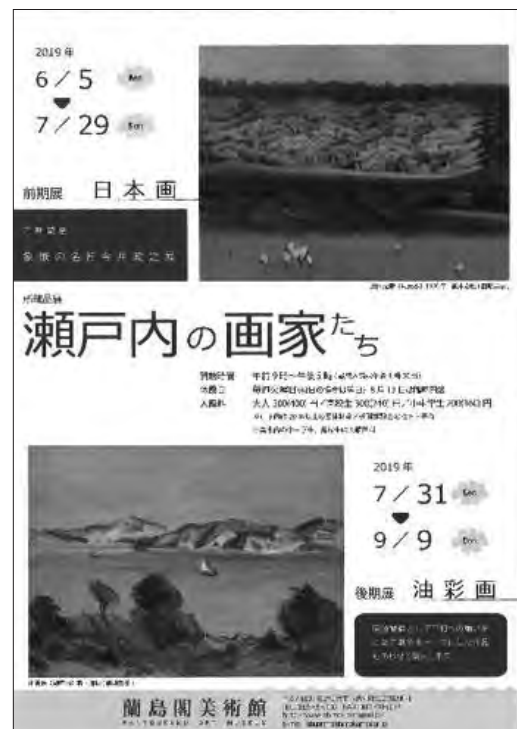
呉市出身で瀬戸内の風景も多く描いた南薫造を中心に、その弟子である新延輝雄、また尾道市で40年間制作を続け、南とも交友のあった小林和作が描いた水彩画や油彩画を紹介した。これらの作家と、香月泰男の作品を通して平和について考えてもらうことを目指した。南は、戦時中軍港になっていた呉やその周辺の海を自由に描くことができなかったことから、戦後は連日のように瀬戸内の鮮やかな景色を描きに出かけた。また、香月泰男はシベリア抑留の体験をもとに「運ぶ人」や「餓鬼」を描く一方で「母子（砂遊び）」や「桐の花」など日常のあたたかみのある優しい情景を描いた。このように、絵を通して戦争と向き合った画家たちの作品から、当たり前の日常を描くことができる喜びや尊さを知ってもらう展示をおこなった。

（2）瀬戸内にゆかりのある画家たち①

日洋会や一水会の画家を中心に、瀬戸内にゆかりのある画家が描いた作品や、瀬戸内の風景が描かれた作品を展示した。日洋会で活躍し、広島市出身で広島県立女子大学や広島市立大学で長く美術教育に携わった三原捷宏や、東広島市に生まれ、故郷の山村風景を原点に人々の生活や牛の姿を描き一水会で活躍する久保田辰男らの作品を紹介した。

（3）戦争記録画

日本画家が描いた戦争記録画を展示。向井久万の「銃後を守る国防婦人会」や東山魁夷の「戦時下の乙女」などを



展示風景

通して、戦時中は軍人だけでなく、その家族や女性も家や工場でそれぞれの役割を果たしていたことを知ってもらうきっかけとした。

（４）瀬戸内にゆかりのある画家たち②

瀬戸内にゆかりがある光風会の画家たちを中心に紹介した。白を基調に、絵具を厚く盛り上げて海の激しい水しぶきを表現している岡崎勇次や、ガラス器や花などをモチーフとして静謐な空間を表現している金山桂子らの作品を展示した。

（５）野田弘志の写実絵画

本コーナーでは、徹底的に描写された野田弘志の写実絵画を紹介した。福山市で幼少期を過ごし広島市立大学芸術学部の教授も務めた野田は、下蒲刈島にも訪れ「下蒲刈の海」と「安芸灘大橋」を描いている。前者は空が曇っていて海も白みがかったのに対し、後者は雲一つない青空の下、鮮やかな海が描かれている。来館者には同じ下蒲刈の海を描いていても、その時の天候などで描き分けられた異なる海の表現を見てもらうことを目的とした。

（木口詩織）

蘭島閣美術館 所蔵品展Ⅲ 「瀬戸内の画家たち 後期」 出品リスト

* 無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法（縦×横）cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	-----------	----

（１）瀬戸内の画家たちと戦争体験

1	新延輝雄	手鏡の女	1943（昭和18）年	キャンバス・油彩	額装	116.7×91.0	
2	新延輝雄	蜜柑の瀬戸	1948（昭和23）年	紙・水彩	額装	32.4×42.2	
3	新延輝雄	蜜柑の瀬戸	1948（昭和23）年	キャンバス・油彩	額装	60.5×72.8	
4	新延輝雄	朝	1963（昭和38）年	キャンバス・油彩	額装	112.0×145.5	
5	南薫造	浴後	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	72.7×60.6	
6	南薫造	トマトと鶏舎	1933（昭和8）年	キャンバス・油彩	額装	45.2×53.0	
7	南薫造	水汲場	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	72.7×90.5	
8	南薫造	瀬戸内風景	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	45.5×53.0	
9	南薫造	瀬戸内	制作年不詳	板・油彩	額装	24.2×33.3	
10	香月泰男	運ぶ人	1959（昭和34）年	キャンバス・油彩	額装	73.1×50.1	
11	香月泰男	餓鬼	1964（昭和39）年	キャンバス・油彩	額装	91.5×61.0	
12	香月泰男	母子（砂遊び）	1969（昭和44）年	キャンバス・油彩	額装	27.8×20.8	
13	香月泰男	青野山	1972（昭和47）年	キャンバス・油彩	額装	91.8×60.5	
14	香月泰男	桐の花	1950（昭和25）年	キャンバス・油彩	額装	27.8×21.5	
15	香月泰男	胡蝶花	1972（昭和47）年	キャンバス・油彩	額装	45.6×27.2	
16	小林和作	瀬戸内風景	制作年不詳	紙・水彩	額装	28.3×22.5	
17	小林和作	瀬戸の海	制作年不詳	紙・水彩	額装	28.7×46.2	
18	小林和作	向島風景	制作年不詳	紙・水彩	額装	26.1×36.4	
19	小林和作	向島	制作年不詳	紙・水彩	額装	26.2×36.5	
20	南薫造	瀬戸内風景・岩壁	制作年不詳	紙・水彩	額装	28.0×39.0	
21	南薫造	倉橋島鹿呂渡	制作年不詳	紙・水彩	額装	13.0×26.0	
22	南薫造	御手洗笠橋より	制作年不詳	紙・水彩・コンテ	額装	13.0×26.0	
23	南薫造	安芸蒲刈小島	制作年不詳	紙・水彩	額装	27.2×23.9	
24	南薫造	安浦の海（稚児の明神）	制作年不詳	紙・水彩	額装	28.0×38.0	
25	南薫造	海水場	制作年不詳	紙・水彩	額装	24.0×32.5	
26	南薫造	小鯛と小魚（ぎざみはげ）	制作年不詳	紙・水彩	額装	28.0×39.0	
27	南薫造	果物と野菜	制作年不詳	紙・水彩	額装	34.5×50.0	
28	南薫造	野菜とぶどう	制作年不詳	紙・水彩	額装	34.0×50.0	
29	南薫造	びわと野菜	制作年不詳	紙・水彩	額装	39.0×58.0	

（２）瀬戸内にゆかりのある画家たち①

30	三原捷宏	瀬戸海景	1991（平成3）年	キャンバス・油彩	額装	130.0×194.0	
31	三原捷宏	周防灘	1988（昭和63）年	キャンバス・油彩	額装	91.0×116.7	
32	新延輝雄	彫像のある家	1979-81（昭和54-56）年	キャンバス・油彩	額装	160.0×130.0	

33	平賀公二	木立ち（シャルトル）	1982（昭和 57）年	キャンバス・油彩	116.7×116.9	額装	
34	平賀公二	内海	制作年不詳	キャンバス・油彩	130.6×162.5	額装	
35	村上選	港	1989（平成元）年	キャンバス・油彩	80.7×116.3	額装	
36	村上選	海	1989（平成元）年	キャンバス・油彩	22.5×32.0	額装	
37	中村琢二	尾道水道	制作年不詳	キャンバス・油彩	44.0×51.5	額装	寄託
38	久保田辰男	山里	1993（平成 5）年	キャンバス・油彩	45.5×53.0	額装	

（3）戦争記録画

39	向井久万	銃後を守る国防婦人会	1944（昭和 19）年	絹本彩色	48.5×53.2	額装	
40	吉岡堅二	敵を撃破して進む戦闘シーン	1944（昭和 19）年	絹本彩色	55.3×59.8	額装	
41	江崎孝坪	群兵	1944（昭和 19）年	紙本彩色	47.0×56.0	額装	
42	東山魁夷	戦時下の乙女	1944（昭和 19）年	紙本彩色	48.6×58.2	額装	
43	根上富治	戦死した英霊を迎える家族	1944（昭和 19）年	絹本彩色	48.0×52.0	額装	
44	村松乙彦	戦闘機と戦艦	1944（昭和 19）年	紙本彩色	47.0×61.7	額装	

（4）瀬戸内にゆかりのある画家たち②

45	迫田嘉弘	T O L E D O 回想	1994（平成 6）年	キャンバス・油彩	116.5×80.5	額装	
46	守長雄喜	漁村	1989（平成元）年	キャンバス・油彩	130.3×162.1	額装	
47	佐々木寅夫	好日の昼さがり	1994（平成 6）年	キャンバス・油彩	91.0×116.6	額装	
48	北田和広	厳島 '90 水無月	1990（平成 2）年	キャンバス・油彩	116.7×116.7	額装	
49	平岡秀樹	まつり	1994（平成 6）年	キャンバス・油彩	91.0×117.0	額装	
50	平岡秀樹	瀬戸内（因島）	制作年不詳	キャンバス・油彩	91.3×116.8	額装	
51	岡崎勇次	潮音	1988（昭和 63）年	キャンバス・油彩	72.7×100.0	額装	
52	野間仁根	瀬戸内海 新緑の丘	1978（昭和 53）年頃	キャンバス・油彩	38.0×45.5	額装	
53	寺坂公雄	アンティーク・コレクション	1993（平成 5）年	キャンバス・油彩	194.1×130.5	額装	
54	金山桂子	春のひかりとガラス器と	1988（昭和 63）年	キャンバス・油彩	162.1×112.1	額装	寄託

（5）野田弘志の写実絵画

55	野田弘志	下蒲刈の海	1999（平成 11）年	板・麻布・油彩	23.0×72.2	額装	
56	野田弘志	安芸灘大橋	2000（平成 12）年	板・麻布・油彩	43.2×76.1	額装	
57	野田弘志	屈斜路湖・夏	1990（平成 2）年	板・麻布・油彩	65.2×53.2	額装	
58	野田弘志	おんな	1979（昭和 54）年	板・麻布・油彩	53.2×45.7	額装	

所蔵品展Ⅳ 旅路～画家たちの描いた美の視界～

会期 2019（令和元）年 11 月 15 日（金）～12 月 23 日（月）
会場 蘭島閣美術館

関連行事

●ギャラリートーク

2019（令和元）年 11 月 30 日（土）、12 月 15 日（日）
午前 11 時から／午後 2 時から（各日 2 回）

おもな関連記事、番組など

○「市政だより くれ」11 月号、呉市 ○「市政だより くれ」
12 月号、呉市 ○「あのみちこのまち」『海陽彩都プラス』
No.3、広島中央地域連携中枢都市圏

印刷物

- チラシ A4 判（両面刷り） 8,000 部
- 出品目録 A4 判（両面刷り）

目的

海外に渡航して絵を学んだ作家の作品や、日本の風景画に焦点を当て、油彩画、日本画と幅広く紹介した。

堅牢な建物を重厚な色彩と激しい筆致で表現しながらも、どこか郷愁を感じる作品を描いた佐伯祐三、褐色をメインに使い、美しく繊細な独特のタッチの風景画を得意とした浮田克躬、両者はともにフランスの景色に魅了され、その街並みや教会のある風景を多く描いた。また 1956（昭和 31）年から『文藝春秋』の表紙を手がけた杉山寧は、国内外問わず、人物、風景、花鳥、動物など多種多様なテーマを描いた。今回はその中でも、海外に美術視察旅行へ行った際に影響を受け、鋭い描写力で描かれた人々や風景の作品を展示。

日本の風景画では、故郷である岐阜の風景をモチーフにした作品を多く残した加藤東一、日本の自然を純化した清澄な色調で描いた加倉井和夫などを紹介した。

展示内容

（１）油彩画家が憧れ描いた外国の風景

油彩画家たちは、油彩画を学ぶため海外に渡ったり、実際にそこに居住して外国の街並みや自然の風景を描いた。本コーナーでは、1968（昭和 43）年からフランスに居を定め、豊潤な色彩と重厚なタッチで独特の詩情が漂う風景画を制作した三岸節子や、フランスを中心にヨーロッパを巡遊し、その風景を描きながら自己の写実表現を確立した浮田克躬の作品を展示した。

（２）日本画家が描いた外国の風景や人々

本コーナーでは、日本画家が描いた外国の人々や風景を紹介した。中国、インド、モロッコなど各国の街角での庶民の生活を題材として描いた小島和夫や、ヨーロッパやアジアに取材旅行に赴いた際に描いた多くのスケッチをもとに作品を制作し、中国の山々を墨のぼかしや濃淡で表現した其阿弥赫土の作品を展示。油彩画で表現された風景とは違った、日本画の画材や技法独特の空気感を感じてもらえるような展示を目指した。



展示風景



展示風景

(3) 杉山寧が描いた外国の風景（『文藝春秋』表紙絵より）
杉山寧は1962（昭和37）年にエジプトを中心としたヨーロッパ美術視察の旅に出た際にエジプトの遺跡や石像に感動して、作品の主題へも取り入れた。今回は杉山寧が1965（昭和40）年と1966（昭和41）年に発表した『文藝春秋』表紙絵の中から、外国の風景が描かれたものを選び展示した。

いた加倉井和夫の「湖」、静寂さの中に幻想的な風景の広がる川崎麻児の「夜が渡る」など、日本画家が描いた自然豊かな日本の風景や幻想的な風景の作品を展示。また、川崎麻児の祖父である川崎小虎が、優しいまなざしで身近な植物や鳥を描いた作品も展示した。

（木口詩織）

(4) 日本の風景や幻想的な風景

本コーナーでは、故郷である岐阜の鶯飼の様子を描いた加藤東一の「月下篝火」や白を基調とした清楚な風景を描

蘭島閣美術館 所蔵品展Ⅳ 「旅路～画家たちの描いた美の視界～」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法（縦×横）cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	-----------	----

(1) 油彩画家が憧れ描いた外国の風景

1	児玉幸雄	サン・メダールの広場	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	50.5×60.5	
2	織田広喜	レストラン・クーポルにて（巴里）	1960（昭和35）年	キャンバス・油彩	額装	53.3×46.0	
3	向井潤吉	水路	1959（昭和34）年頃	キャンバス・油彩	額装	43.0×50.5	
4	向井潤吉	水辺初夏	1980（昭和55）年代	キャンバス・油彩	額装	34.0×43.0	
5	佐野繁次郎	ニースの海	1951（昭和26）年	キャンバス・油彩	額装	53.0×65.5	
6	石井柏亭	風景	1957（昭和32）年	紙・リトグラフ	額装	32.0×45.8	
7	石井柏亭	水辺	1944（昭和19）年	キャンバス・油彩	額装	62.7×92.2	
8	木下孝則	バリ風景	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	38.0×42.8	
9	佐伯祐三	バリの教会堂	1928（昭和3）年	キャンバス・油彩	額装	38.2×45.0	
10	荻須高德	オーベルヴィリエ	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	58.0×71.0	
11	荻須高德	街角	1978（昭和53）年	紙・リトグラフ	額装	75.6×54.0	
12	鳥海青児	アルゼリア風景	1930（昭和5）年	キャンバス・油彩	額装	65.2×91.1	
13	三岸節子	カーニユの窓	1969（昭和44）年	キャンバス・油彩	額装	90.8×70.3	
14	三岸節子	アルスの広場への道	1977（昭和52）年	キャンバス・油彩	額装	73.0×92.0	
15	三岸節子	カダケス	1987（昭和62）年	キャンバス・油彩	額装	50.0×72.7	
16	浮田克躬	オーヴェルニュ風景	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	41.0×31.8	
17	浮田克躬	磔刑像のある炭鉱町	1968（昭和43）年	キャンバス・油彩	額装	177.3×215.6	
18	浮田克躬	古城と赤い屋根の村	1975（昭和50）年	キャンバス・油彩	額装	227.5×182.5	
19	浮田克躬	セーヌの古城	1974（昭和49）年	キャンバス・油彩	額装	182.3×228.0	
20	浮田克躬	バルト海風景	制作年不詳	紙・コンテ	額装	44.0×67.0	
21	浮田克躬	風車のある風景	制作年不詳	紙・水彩	額装	41.0×32.0	
22	安井曾太郎	風景1	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	18.0×13.5	
23	安井曾太郎	風景6	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	13.5×18.0	
24	安井曾太郎	風景7	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	13.5×18.0	

(2) 日本画家が描いた外国の風景や人々

25	梅原幸雄	艶艶	1994（平成6）年	紙本彩色	額装	117.0×91.7	
26	小島和夫	モロッコにて	1984（昭和59）年	紙本彩色	額装	102.0×102.0	
27	林功	泊舟	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	112.1×162.1	
28	林功	猿と少年	1991（平成3）年	絹本彩色	額装	145.5×112.1	
29	池田栄廣	陳列	制作年不詳	紙本彩色	額装	93.3×70.5	
30	其阿弥赫土	雲上の嶽	2010-2011（平成22-23）年	紙本彩色	額装	182.7×549.6	

(3) 杉山寧が描いた外国の風景（『文藝春秋』表紙絵より）

31	杉山寧	ネフェルト	1965（昭和40）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
32	杉山寧	アルノ河	1965（昭和40）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	

33	杉山寧	サッカーラにて	1965（昭和40）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
34	杉山寧	オアシスの少女	1965（昭和40）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
35	杉山寧	ロバに乗る男	1965（昭和40）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
36	杉山寧	マカオの海	1965（昭和40）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	
37	杉山寧	ミラノのクリスマス	1965（昭和40）年	麻布・彩色	額装	17.7×17.7	

（4）日本の風景や幻想的な風景

38	加藤晋	雪の朝	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	47.0×62.0	
39	岸野圭作	不二 NO.564	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	80.3×116.7	
40	森脇正人	八ヶ岳春来	1993（平成5）年	紙本彩色	額装	75.0×93.0	
41	土屋礼一	静日	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	65.5×100.0	
42	鈴木竹柏	丘	1981（昭和56）年	紙本彩色	額装	160.0×210.0	
43	大山忠作	双鶴	1982（昭和57）年	紙本彩色	額装	50.5×65.7	
44	加倉井和夫	湖	1993（平成5）年	紙本彩色	額装	60.2×92.0	
45	加藤東一	池畔	制作年不詳	紙本彩色	額装	38.8×57.5	
46	加藤東一	月下篝火	制作年不詳	紙本彩色	額装	46.2×61.2	
47	川崎春彦	瑞雲富士	1992（平成4）年	紙本彩色	額装	91.0×65.0	
48	川崎麻児	夜が渡る	1991（平成3）年	麻布・彩色	額装	65.2×80.3	
49	川崎千虎	富岳図	制作年不詳	紙本彩色	額装	26.4×38.2	
50	川崎小虎	せきれい	制作年不詳	絹本彩色	軸装	30.5×36.5	
51	川崎小虎	早春	制作年不詳	紙本彩色	軸装	33.7×44.5	
52	川崎小虎	谷間の雨	1971（昭和46）年	紙本彩色	額装	90.4×74.5	

作家名のうち、土屋礼一の漢字表記は礼一とした。本名は禮一。

所蔵品展Ⅴ 新春企画 日本の四季を寿ぐ

会期 2019（令和元）年12月25日（水）～2020（令和2）年
2月17日（月）

会場 蘭島閣美術館

関連行事

●ギャラリートーク

2020（令和2）年1月26日（日）、2月9日（日）
午前11時から／午後2時から（各日2回）

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」1月号、呉市 ○「ミュージアム&ギャラリー」『オセラ No.103 1-2月号』、株式会社ビサビ
○『くれえばん』1月号、株式会社SAメディアラボ ○「あのまち このまち」『海陽彩都プラス』No.3、広島中央地域連携中枢都市圏

印刷物

- チラシA4判（両面刷り） 8,000部
- 出品目録A4判（両面刷り）

目的

日本は四季の移り変わりに恵まれ、人々はその美しさに感動し、絵画や歌などに表現してきた。本展では、画家たちが四季の中でその美しさに出会い感動し描いた景色や風物詩を季節ごとに展示し、その季節の魅力を紹介した。

明治以降多くの画家たちが自身の作品の近代化に向けてさまざまな試みをおこなってきた。その中で画家たちが自然との対話の中で自己の内を探り出した花鳥画や風景画、四季の彩りが感じられる作品を中心に紹介した。あわせて新春を迎えるにふさわしい華やかな美人画を特集した。

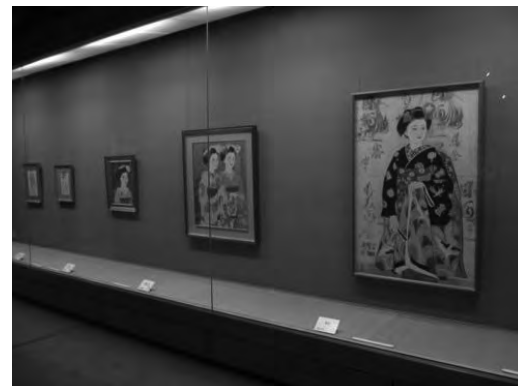
展示内容

（1）冬—雪を描く

絵画の世界にも雪を描いた作品は多数見られ、画題としても愛されてきた。こうした中で画家たちが描く雪の表現には、さまざまな工夫が凝らされている。支持体の紙や絹を塗り残すことによって降り積もった雪を表現したり、胡粉を散らして降雪を表現するなどその方法は異なる。また降り積もる雪の状態も、その地域の気候や時間帯によってさまざまで画家たちは自然の中で見た雪の様子を、試行錯誤を繰り返しながら自身の作品に反映させている。こうして描かれた作品からは自然の厳しさとともに詩情や情緒を追求した絵画世界が広がっている。本コーナーではこうした雪の表現に着目して作品を紹介した。

（2）春から夏、そして秋Ⅰ・Ⅱ

本コーナーでは、春から秋へと移り変わる季節の中で見られる季節の風物詩を始め、その季節に見られる花々や情景を描いた作品を紹介した。四季に恵まれた日本だからこそ味わえる四季折々の美しさを表現した作品を季節の流れに沿って展示した。桜や牡丹を主題にした作品から6月頃に開花する栗の花が描かれた作品、海を主題に描かれた作品まで季節感が味わえる作品を選定し紹介した。



展示風景



展示風景

(3) 3人の画家

本コーナーでは日本画家下田義寛、現代の版画家として評価の高い中林忠良、野田哲也の3人の作品に焦点を当てた。

下田義寛は日本画家ながら版画のシルクスクリーンの技法を応用し、作品の中に自然や動物を主題に幻想性と現実性を組み合わせたダブル・イメージの手法を取り入れ作品を制作している。展示では、その手法を取り入れた日本画「風渡る」や木版作品を紹介した。

中林忠良は、エッチングとアクアチントの併用によって自身の四季のイメージを映し出した「転位」シリーズを制作した。野田哲也は、日常生活の中で自身の眼にとまった風景をカメラにおさめ、それを版画作品にしている。

この3人の作家は東京芸術大学の同期生にあたり、イメージの形象化を作品発想の原点としている部分に共通し

た特色がみられる。本展の「四季」というテーマで見た際、これらの作品が自然をただ見たままに再現したのではなく作家独自の思考と技法で表現されたものであることを強調した。

(4) 美人画の世界

女性は絵画にとって魅力的な主題であり数多くの画家たちがさまざまな画題で繰り返し描いてきた。本コーナーでは美人画を特集し、髪型や立ち姿などその洗練された女性表現に迫った。

(山下裕子)

蘭島閣美術館 所蔵品展Ⅴ「新春企画 日本の四季を寿ぐ」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法(縦×横) cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	------------	----

(1) 冬—雪を描く

1	川島睦郎	白韻	1990(平成2)年	紙本彩色	額装	92.0×118.4	
2	中路融人	伊吹	1993(平成5)年	紙本彩色	額装	80.0×117.0	
3	下保昭	雪(雪岳)	1993(平成5)年	紙本彩色	額装	65.5×45.7	
4	池田遙邨	川奈の富士	1955(昭和30)年頃	紙本彩色	額装	41.2×53.4	
5	池田遙邨	唐崎積雪	制作年不詳	紙本彩色	額装	26.2×23.3	寄託
6	金島桂華	雪の椿	制作年不詳	紙本彩色	額装	50.5×59.5	寄託
7	福田平八郎	雪庭	1936(昭和11)年	絹本彩色	額装	49.0×73.0	
8	川合玉堂	湖畔雪霽	1955(昭和30)年	紙本墨画淡彩	額装	43.0×53.8	
9	佐藤太清	晨雪	1984(昭和59)年	紙本彩色	額装	53.0×65.2	
10	山本丘人	遥雪	1969(昭和44)年	紙本彩色	額装	27.5×41.0	
11	横山操	疎林	1963(昭和38)年頃	紙本彩色	額装	38.4×55.4	
12	加山又造	雪の溪谷	1983(昭和58)年	紙本彩色	額装	118.5×82.5	
13	平川敏夫	白馬凍日	1993(平成5)年	絹本彩色	額装	80.5×116.8	
14	西久松吉雄	丹後 日本海	1990(平成2)年	紙本彩色	額装	68.0×94.0	

(2) —1春から夏、そして秋—

15	吉田善彦	三輪山と箸墓	1980(昭和55)年	紙・鉛筆・色鉛筆	額装	33.2×55.7	
16	吉田善彦	戒壇院への道の柿	1980(昭和55)年	紙・鉛筆・水彩	額装	37.9×26.8	
17	吉田善彦	二月堂	制作年不詳	紙本彩色	額装	50.0×73.0	
18	吉田善彦	栗咲く里	1975(昭和50)年	紙本彩色	額装	105.0×81.0	
19	堅山南風	日本の四季	1974(昭和49)年	紙本彩色	額装	50.0×61.0	
20	堅山南風	姉妹	1973(昭和48)年	紙本彩色	額装	57.7×72.7	
21	堅山南風	装おえる人	1977(昭和52)年	紙本彩色	額装	81.5×64.8	
22	堅山南風	春韻	制作年不詳	紙本彩色	額装	52.5×45.5	
23	小茂田青樹	都忘と蝶	制作年不詳	紙・彩色	額装	39.8×27.3	
24	小茂田青樹	八重桜	制作年不詳	紙・彩色	額装	39.8×27.5	
25	小倉遊亀	紅梅と白椿	1980(昭和55)年	紙本彩色	額装	38.3×65.0	
26	小倉遊亀	春	1995(平成7)年	紙本彩色	額装	46.0×33.0	
27	松尾敏男	春輝	1992(平成4)年	紙本彩色	額装	45.8×60.8	
28	菊川三織子	花の譜	制作年不詳	紙本彩色	額装	148.4×73.3	
29	菊川三織子	春韻	制作年不詳	紙本彩色	額装	148.3×73.0	

(3) 3人の画家

30	下田義寛	風渡る	1979 (昭和 54) 年	紙本彩色	額装	194.0×130.0	
31	下田義寛	浅春	1986 (昭和 61) 年	紙・木版	額装	16.0×23.0	
32	中林忠良	転位 '86 - 地 - VI	1986 (昭和 61) 年	紙・銅板・アクアチント	額装	33.7×34.2	
33	中林忠良	春	1982 (昭和 57) 年	紙・銅板・アクアチント	額装	56.8×49.2	
34	野田哲也	D i a r y ; Aug・20th '82 to Nasu	1982 (昭和 57) 年	紙・木版・シルクスクリーン	額装	59.8×83.3	
35	野田哲也	D i a r y ; Oct・22nd '82 in Tokyo	1982 (昭和 57) 年	紙・木版・シルクスクリーン	額装	84.0×59.3	

(2) - 2 春から夏、そして秋 II

36	野田弘志	眼の追憶 - 貝	1987 (昭和 62) 年	紙・リトグラフ	額装	28.2×32.2	
37	野田弘志	珪化木	1990 (平成 2) 年	板・麻布・油彩	額装	65.0×53.0	
38	野田弘志	屈斜路湖・夏	1990 (平成 2) 年	板・麻布・油彩	額装	65.2×53.2	
39	野田弘志	下蒲刈の海	1999 (平成 11) 年	板・麻布・油彩	額装	23.0×72.2	
40	野田弘志	安芸灘大橋	2000 (平成 12) 年	板・麻布・油彩	額装	43.2×76.1	
41	南薫造	農作業	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	31.8×41.0	
42	南薫造	葡萄とブラム	制作年不詳	紙・油彩	額装	38.0×45.7	
43	南薫造	ミカンと山鳥	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	50.2×60.5	
44	南薫造	串山のみかん畑	1948 (昭和 23) 年	キャンバス・油彩	額装	38.1×45.4	
45	武永模雄	ヒクベ島	1989 (平成元) 年	キャンバス・油彩	額装	45.5×52.9	
46	武永模雄	黒島	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	45.5×52.8	
47	武永模雄	女猫島 (蒲刈島風景)	1989 (平成元) 年	キャンバス・油彩	額装	60.6×72.7	

(4) 美人画の世界

48	青山亘幹	佳日	制作年不詳	絹本彩色	額装	119.5×91.6	
49	辰巳寛	舞妓	制作年不詳	紙・彩色	額装	37.0×44.5	
50	橋本明治	麗	1970 (昭和 45) 年	紙本彩色	額装	73.0×50.0	
51	上村松園	つれづれ	制作年不詳	絹本彩色	額装	40.4×42.2	
52	島成園	美人	制作年不詳	絹本彩色	額装	58.5×62.0	
53	中尾淳	春の雨	制作年不詳	紙本彩色	額装	45.5×53.0	
54	鎭木清方	冬ごもり	1955 (昭和 30) 年	絹本彩色	額装	57.3×42.7	
55	伊東深水	晴日	制作年不詳	絹本彩色	額装	87.2×57.5	
56	伊東深水	酣春	1950 (昭和 25) 年	絹本彩色	額装	50.5×57.4	
57	伊東深水	新橋駅	1942 (昭和 17) 年頃	絹本彩色	額装	53.5×43.0	
58	高木義夫	佳日	1991 (平成 3) 年	紙本彩色	額装	60.7×45.5	
59	立石春美	爽客	制作年不詳	紙本彩色	額装	60.6×50.0	寄託
60	立石春美	乙女島田	制作年不詳	紙本彩色	額装	33.4×21.2	寄託
61	三輪良平	大原女	制作年不詳	紙・色鉛筆	額装	42.0×32.3	
62	三輪良平	舞妓	制作年不詳	紙・色鉛筆	額装	33.0×24.6	
63	三輪良平	踊り子	制作年不詳	紙本彩色	額装	52.3×40.0	寄託
64	三輪良平	舞妓二人	制作年不詳	紙本彩色	額装	111.3×93.0	
65	三輪良平	佳日	1991 (平成 3) 年	紙本彩色	額装	150.8×95.9	

所蔵品展Ⅵ 花々の魅力

会期 2020（令和2）年2月23日（日）～5月18日（月）
会場 蘭島閣美術館
＊2020（令和2）年3月9日（月）から5月10日（日）まで、新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館
＊当初予定した4月20日（月）から5月18日（月）に会期終了日を変更した。

関連行事

●ワークショップ「ステンシルで花を咲かせよう」

2020（令和2）年2月28日（金）～3月1日（日）、3月13日（金）～3月15日（日）、4月3日（金）～4月5日（日）

午前10時から午後3時

【中止】＊2020（令和2）年3月1日（日）以降のイベントは中止の措置をとった。

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」2月号、呉市 ○「市政だよりくれ」3月号、呉市 ○「市政だよりくれ」4月号、呉市 ○「あのみちこのまち」『海陽彩都プラス』No.3、広島中央地域連携中枢都市圏

印刷物

- チラシA4判（両面刷り） 8,000部
- 出品目録A4判（両面刷り）

目的

花は、古来より人々の生活の中に彩りを与え、季節とともに変わりゆく姿で人々を魅了してきた。また、装飾品のモチーフとしても用いられることの多い花は、身に付ける女性の美しさをより際立たせている。本展では、梅から桜、そして牡丹へと季節ごとに咲く花々を主題とした作品を多数紹介し、季節の移ろいを感じてもらう展示を目指した。また、風景画の中に花を取り入れた作品や花柄の服や耳飾りを付けた女性を描いた作品を展示し、私たちの生活に寄り添う花の姿を紹介した。あわせて広島出身の画家たちが描いた、春から初夏にかけて咲く花々の作品も展示。さまざまな花の作品を紹介し、描かれた花々の魅力に迫った。

展示内容

（1）季節ごとに咲く花々

本コーナーでは小林古径や稗田一穂らの描いた、梅や桜、牡丹など冬から初夏にかけて咲く花の作品を展示。季節の移ろいを感じてもらう展示を目指した。

（2）生活の中の花々

本コーナーでは、南薫造の「庭の一隅」や堀泰明の「遊衣—GREEN STRIPES」などを展示した。人々の生活に寄り添うように花が描かれている風景画や女性の服や耳飾りとして花が取り入れられている作品を紹介した。

（3）小林和作が見つめた花々

小林和作は、自然の美しさを知るために対象を入念に写



展示風景



展示風景

生し、作品を多数残している。本コーナーでは、その中で季節の花々を主題とした「ナンテン」「梅」「桜」などの水彩画を展示した。「梅」は、梅の葉がどのようにしているか観察し、枝や実の形を正確に描き取ろうとしている。これらの作品を展示することで小林がどのように自然を見つめていたか紹介した。

(4) 広島画家が描いた花々

本コーナーでは、広島出身の画家が描いた季節の花々の作品を展示。墨のにじみで梅の枝を表現している丸木位里の「臥龍梅（夜明け）」、絵具の濃淡を変えることで花びらの薄さや重なりを表現し、花の立体感を生み出している佐々木辰也の「牡丹」など、画家によって捉え方の異なる花々の魅力を紹介した。

(木口詩織)

蘭島閣美術館 所蔵品展Ⅴ「花々の魅力」出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法(縦×横)cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	-----------	----

(1) 季節ごとに咲く花々

1	山本倉丘	紅白梅	制作年不詳	紙本彩色	額装	61.3×69.6	寄託
2	堂本印象	春の小舟	制作年不詳	絹本彩色	額装	32.4×37.5	寄託
3	池田達邨	桜	制作年不詳	紙本彩色	額装	39.5×50.5	寄託
4	小野竹喬	春景	1970(昭和45)年頃	紙本彩色	額装	27.0×41.2	
5	福田平八郎	春雨	1964(昭和39)年	紙本彩色	額装	42.0×55.8	
6	安田靫彦	うさぎ	1951(昭和26)年	紙本彩色	額装	52.4×32.0	
7	小林古径	紅梅	1941(昭和16)年	紙本彩色	額装	96.6×85.8	
8	小林古径	牡丹	1951-52(昭和26-27)年	紙本彩色	額装	50.5×65.6	
9	片岡球子	富士	1989(平成元)年	紙本彩色	額装	44.5×59.7	
10	吉田善彦	吉野	1980(昭和55)年	紙本彩色	額装	61.2×73.2	
11	秋野不矩	淡紅梅	制作年不詳	紙本彩色	額装	45.5×53.0	
12	稗田一穂	春の路	1989(平成元)年	紙本彩色	額装	91.0×117.0	
13	加山又造	牡丹	1969(昭和44)年	紙本彩色	額装	63.7×90.1	
14	小泉淳作	牡丹図	制作年不詳	紙本彩色	額装	78.0×49.0	

(2) 生活の中の花々

15	新延輝雄	彫像のある家	1979-81年(昭和54-56)	キャンバス・油彩	額装	160.0×130.0	
16	渡邊武夫	田園待春	1970(昭和45)年	キャンバス・油彩	額装	91.0×72.7	
17	小寺健吉	溪流と夏草	1947(昭和22)年	キャンバス・油彩	額装	72.5×91.0	
18	南薫造	水汲場	昭和10年代	キャンバス・油彩	額装	72.7×90.5	
19	南薫造	庭の一隅	1922(大正11)年	キャンバス・油彩	額装	50.1×60.2	
20	南薫造	石膏像と花	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	72.0×49.5	
21	南薫造	花カゴを持てる少女	1935(昭和10)年	キャンバス・油彩	額装	80.5×65.2	
22	野田弘志	薔薇	1989(平成元)年	キャンバス・油彩	額装	45.5×53.0	
23	野田弘志	おんな	1979(昭和54)年	板・麻布・油彩	額装	53.2×45.7	
24	伊藤清永	ばら	1993(平成5)年	キャンバス・油彩	額装	53.0×45.5	
25	伊藤晴子	花と人形	1991(平成3)年	キャンバス・油彩	額装	72.7×91.0	
26	北斗一守	窓	1994(平成6)年	紙本彩色	額装	145.5×97.0	
27	三輪良平	白川女	1990(平成2)年	紙本彩色	額装	202.2×112.0	
28	堀泰明	遊衣-GREEN STRIPES	1992(平成4)年	紙本彩色	額装	91.0×65.5	
29	大野俊明	横臥	制作年不詳	紙本彩色	額装	97.0×162.0	
30	青山亘幹	桔梗	1994(平成6)年	絹本彩色	額装	45.5×38.0	
31	中島千波	清風枝垂櫻	1995(平成7)年	紙本彩色	額装	73.0×110.7	
32	村田茂樹	早春譜	1991(平成3)年	紙本彩色	額装	65.2×91.0	
33	渡辺信喜	芙蓉花	1992(平成4)年	紙本彩色	額装	91.0×116.6	

(3) 小林和作が見つめた花々

34	小林和作	ナンテン	制作年不詳	紙・水彩	額装	31.0×59.5	
35	小林和作	椿	制作年不詳	紙・水彩	額装	16.8×29.9	

36	小林和作	椿	制作年不詳	紙・水彩	額装	24.0×21.1	
37	小林和作	梅	制作年不詳	紙・水彩	額装	各(面) 38.9×25.5	
38	小林和作	桜	制作年不詳	紙・水彩	額装	29.5×33.7	
39	小林和作	ぼたん	制作年不詳	紙・水彩	額装	26.6×17.8	
40	小林和作	野バラ	制作年不詳	紙・水彩	額装	59.5×74.4	

(4) 広島の画家が描いた花々

41	青山博之	牡丹図	制作年不詳	絹本彩色	額装	111.5×62.5	
42	佐々木辰也	牡丹	1990(平成2)年	紙本彩色	額装	91.0×227.0	
43	住本弥綺子	富貴花	制作年不詳	紙本彩色	額装	60.0×50.0	
44	福原匠一	春香	制作年不詳	紙本彩色	額装	91.0×72.7	
45	三上巴峽	春の吉名村	制作年不詳	紙本彩色	額装	44.5×54.3	
46	児玉希望	夜梅	1960(昭和35)年頃	絹本彩色	額装	42.7×73.0	
47	猪原大華	竹梅	1968(昭和43)年	紙本彩色	額装	40.9×52.8	
48	金島桂華	紅梅	制作年不詳	紙本彩色	額装	42.8×50.2	
49	金島桂華	桃花尾長鳥	制作年不詳	紙本彩色	額装	61.6×69.0	寄託
50	丸木位里	臥龍梅(夜明け)	1963(昭和38)年	紙本彩色	額装	69.5×69.5	
51	船田玉樹	山桜	制作年不詳	紙本彩色	額装	45.0×42.2	寄託
52	池田栄廣	四季襖絵(春)	制作年不詳	紙本彩色	額装	172.5×90.5	
53	池田栄廣	四季襖絵(夏)	制作年不詳	紙本彩色	額装	172.5×90.5	
54	池田栄廣	四季襖絵(秋)	制作年不詳	紙本彩色	額装	172.5×90.5	
55	池田栄廣	四季襖絵(冬)	制作年不詳	紙本彩色	額装	172.5×90.5	
56	天畠芳登	牡丹	制作年不詳	紙本彩色	軸装	130.0×43.0	

所蔵品展Ⅰ 所蔵品への視点シリーズ・1 素描の世界

会期 2019（令和元）年5月15日（水）～8月5日（月）
会場 蘭島閣美術館別館

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」6月号、呉市 ○「市政だよりくれ」7月号、呉市 ○「市政だよりくれ」8月号、呉市

印刷物

- チラシA4判（両面刷り） 3,000部
- 出品目録A4判（片面刷り）

目的

鉛筆やパステルなどを用いて単色の線によって描かれる素描は、作品に至る以前の制作過程、いわゆる習作と捉えられることが多い。しかし、現在では素描をひとつの技法として作品化する画家もあり、また素描というシンプルな手法によって、より強く浮かび上がってくる画家の特質を見る楽しさもある。本展は、素描を見ることにより個々の画家の特質を見ることに焦点を当てた。所蔵品の中から、画家たちが描いた素描の作品を、①女性像②旅情③日常を写す、という3つのテーマで構成した。全作品に、学芸員の視点と題した作品解説を配するなど「所蔵品への視点シリーズ」とした連続企画の独自性を打ち出した。

展示内容

（1）女性像

展示はすべて日本画家、洋画家を織り交ぜて紹介した。本コーナーでは、7名の画家の13点の素描を展示した。活躍した時代を異にする、宮本三郎や寺内萬治郎、三輪良平、石踊紘一など、いずれも女性像の名だたる描き手として知られている画家たちの素描小品に焦点を当てた。また、明治から現代までの素描を見ることにより、明治以降に日本の美術教育制度が石膏デッサンを教育方法に組み入れ定着したこと、それにより画家たちの表現がどのように変化したかを示唆した。

（2）旅情

7名の画家の8点の素描を展示した。旅をする地での風景写生、異国の地で得た情緒というものが、その画業の大きな支えとなった画家たちの作品を紹介した。地域ゆかりの作家として、尾道を制作拠点とした小林和作、呉（当時は加茂郡内海町）出身の南薫造が描いた瀬戸内風景なども紹介した。個性的な素描として、色彩に重きを置いた梅原龍三郎が画面に色名を記入した小品を展示し、画家の構想過程を知る手がかりとした。また、吉田善彦、浮田克躬らの素描の名品を紹介した。

（3）日常を写す

7名の画家の10点の素描を展示した。身近な対象を描くことで画家それぞれの生活背景が際立つ作品を紹介した。

浅井忠の素描を筆頭に、坂本繁二郎、堅山南風、須田国太郎、香月泰男など、画家たちがどのような背景を持ってそれらを描いたのかを紹介した。

（山崎環）



展示風景



展示風景

蘭島閣美術館別館 所蔵品展Ⅰ「所蔵品への視点シリーズ・1 素描の世界」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法(縦×横) cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	------------	----

(1) 女性像

1	宮本三郎	裸婦	制作年不詳	紙・コンテ	額装	24.0×33.0	
2	山口薫	裸婦	制作年不詳	紙・鉛筆・パステル	額装	26.5×35.2	
3	寺内萬治郎	裸婦	制作年不詳	紙・水彩・鉛筆	額装	31.6×20.2	
4	寺内萬治郎	裸婦	制作年不詳	紙・インク	額装	24.3×30.0	
5	須田剋太	裸婦	制作年不詳	紙・水彩・パステル	額装	24.5×59.5	
6	三輪良平	舞子	制作年不詳	紙・色鉛筆	額装	33.0×24.6	
7	三輪良平	大原女	制作年不詳	紙・色鉛筆	額装	42.0×32.3	
8	石踊紘一	裸婦 ¹⁶	1983(昭和58)年	紙・鉛筆	額装	56.8×38.1	
9	石踊紘一	裸婦 ¹⁴	1983(昭和58)年	紙・鉛筆	額装	56.5×38.0	
10	石踊紘一	裸婦 ⁷	1980(昭和55)年	紙・鉛筆	額装	33.5×40.8	
11	石踊紘一	裸婦 ¹⁰	1983(昭和58)年	紙・鉛筆	額装	51.2×35.5	
12	船水徳雄	裸婦	1983(昭和58)年	紙・鉛筆	額装	56.8×38.1	
13	青山亘幹	裸婦	制作年不詳	紙・鉛筆・パステル	額装	65.0×50.5	

(2) 旅情

14	小林和作	風景	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	29.8×37.2	
15	梅原龍三郎	北京	1975(昭和50)年	紙・インク	額装	21.0×30.3	
16	吉田善彦	秋篠寺	1978(昭和53)年	紙・鉛筆・インク	額装	29.0×47.9	
17	吉田善彦	戒壇院への道の柿	1980(昭和55)年	紙・インク・水彩	額装	37.9×26.8	
18	山本丘人	路地	1959(昭和34)年	紙・パステル	額装	37.0×25.0	
19	南薫造	因島土生	制作年不詳	紙・コンテ	額装	13.0×26.0	
20	藤本東一良	石狩川河畔	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	27.0×37.0	
21	浮田克躬	風車のある風景	制作年不詳	紙・水彩	額装	41.0×32.0	

(3) 日常を写す

22	浅井忠	柿	制作年不詳	紙・鉛筆・インク	額装	16.0×21.2	
23	坂本繁二郎	母仔馬	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	21.0×29.0	
24	森田恒友	野菜帖	1933(昭和8)年	紙・水彩	額装	19.4×26.2	
25	堅山南風	ショウジョウトンボ・シオヤアブ	制作年不詳	紙・水彩	額装	13.2×21.9	
26	堅山南風	アサガオ	制作年不詳	紙・水彩	額装	34.5×48.5	
27	山口薫	風景	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	24.2×32.0	
28	香月泰男	鬼百合	制作年不詳	紙・水彩・コンテ	額装	39.5×27.2	
29	香月泰男	トマト	制作年不詳	墨・水彩・コンテ	額装	52.4×31.7	
30	須田国太郎	猫	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	24.2×33.3	
31	須田国太郎	猫	1949(昭和24)年頃	紙・鉛筆	額装	33.3×24.2	

〈自由鑑賞の時間・3つの作品を比べて見る〉

32	川合玉堂	樹林	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	24.0×15.0	
33	萬鉄五郎	対話	1915(大正4)年	紙・墨	額装	69.0×47.8	
34	野間仁根	森の猿	1951(昭和26)年	紙・鉛筆・パステル	額装	46.7×63.0	

所蔵品展Ⅱ

所蔵品への視点シリーズ・2 浮世絵に見る文様あれこれ

会期 2019（令和元）年8月7日（水）～11月18日（月）
会場 蘭島閣美術館別館

おもな関連記事、番組など

○「市政だより くれ」9月号、呉市 ○「市政だより くれ」10月号、呉市

印刷物

- チラシ A4判（両面刷り） 3,000部
- 出品目録 A4判（片面刷り）

目的

江戸時代に広く人々に愛好された浮世絵。歌舞伎や音曲の流行で沸き立ち華やかな大都市だった江戸の市中で、浮世絵は単なる絵としての存在ではなく、流行の風俗を盛り込んだ宣伝物、複雑な情報メディアだった。

浮世絵の中でも「役者絵」と呼ばれるものは、当代人気の歌舞伎スターを絵にしたもので、そこに見られる着物の文様は流行を反映した最先端ファッション、意匠を取り入れたものと捉えることができる。

本展では、所蔵する浮世絵のコレクションから役者絵を展示し、その中に描かれた代表的な日本の文様に着目し紹介した。

全作品に、学芸員の視点と題した作品解説を配するなど「所蔵品への視点シリーズ」とした連続企画の独自性を打ち出した。

展示内容

（1）歌舞伎ゆかりの文様

三代目歌川豊国が得意とした役者絵を中心に紹介した。浮世絵の中の文様に焦点を当て、本コーナーでは、歌舞伎にゆかりのある文様を紹介した。

「勧進帳」の舞台から生まれ、江戸で大流行した弁慶縞（べんけいじま）や、歌舞伎の演目に登場する酒吞童子（しゅてんどうじ）の衣裳の文様である童子格子（どうじごうし）など、文様とその成り立ちを紹介した。

江戸の庶民の娯楽だった歌舞伎と、そこから生まれた文様には密接なつながりがあったことを示した。

（2）日本の古典文様

能や浄瑠璃といった日本の古典芸能と歌舞伎の派生には関連があり、これらの舞台上で登場する日本の古典文様に着目した。

中国から仏教美術とともに伝来した宝相華（ほうそうげ）文様や、雲気（うんき）、靈芝（れいし）など中国思想に影響を受けた吉祥文様を始めとし、源氏香（げんじこう）など日本で生まれそのデザイン性の高さと風流さから、着物や工芸品など多岐に使用された文様を紹介した。また、能や歌舞伎といった芸能の中で、文様自体が演じ手の感情を象徴する役割を担わされていることなどを解説した。

（3）日本の定番的な文様

麻の葉（あさは）文様や籠目（かごめ）、七宝（しっぽう）など、現代の日本でも愛用され続けている日本の文様を紹介した。子供の成長、子孫繁栄、防火や家内安全、魔除けなど、人々がさまざまな願いを込めた文様の由来とその意味を紹介した。

（山崎環）



展示風景



展示風景

蘭島閣美術館別館 所蔵品展Ⅱ 「所蔵品への視点シリーズ・2 浮世絵に見る文様あれこれ」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法(縦×横) cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	------------	----

(1) 歌舞伎ゆかりの文様

1	歌川豊国(三)	三代目岩井兼三郎の義経	1859(安政6)年	紙・木版	額装	35.8×24.7	
2	歌川豊国(三)	初代河原崎権十郎の弁慶	1859(安政6)年	紙・木版	額装	35.8×25.5	
3	歌川豊国(三)	四代目市川小団次の富樫	1859(安政6)年	紙・木版	額装	35.8×26.0	
4	歌川豊国(三)	三代目沢村田之助の快童丸	1860(万延元)年	紙・木版	額装	35.9×26.0	
5	歌川豊国(三)	三代目市川市蔵の遠藤武者	1858(安政5)年	紙・木版	額装	35.8×24.3	
6	歌川広重・歌川豊国(三)	四代目市川小団次の八百屋半兵衛	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	36.4×24.6	
7	歌川広重・歌川豊国(三)	八代目市川団十郎の浮世伊之助	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	35.6×24.4	
8	歌川広重・歌川豊国(三)	三代目嵐吉三郎の弁慶	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	35.9×23.7	
9	歌川豊国(三)	三代目岩井兼三郎の踊子おやま	1858(安政5)年	紙・木版	額装	35.8×25.1	
10	歌川広重・歌川豊国(三)	初代坂東竹三郎の飯沼勝五郎	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	36.7×25.0	

(2) 日本の古典文様

11	歌川広重・歌川豊国(三)	十二代目市村羽左衛門の葵の前	1853(嘉永6)年	紙・木版	額装	35.9×24.0	
12	歌川豊国(三)	四代目市川小団次の平清盛	1858(安政5)年	紙・木版	額装	35.9×25.9	
13	歌川広重・歌川豊国(三)	四代目中村歌衛門の平清盛	1853(嘉永6)年	紙・木版	額装	35.3×24.0	
14	歌川広重・歌川豊国(三)	四代目市川小団次の真柴秀吉	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	35.2×23.7	
15	歌川豊国(三)	三代目関三十郎の梶原平三影時	1860(万延元)年	紙・木版	額装	36.0×2.3	
16	歌川広重・歌川豊国(三)	十一代目守田勘弥の師直	1853(嘉永6)年	紙・木版	額装	35.2×24.0	
17	歌川広重・歌川豊国(三)	五代目松本幸四郎の猿島惣吉	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	36.4×24.7	
18	歌川広重・歌川豊国(三)	三代目岩井兼三郎の牛若丸	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	36.5×24.8	
19	歌川広重・歌川豊国(三)	五代目瀬川菊之丞の巴御前	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	36.0×24.8	
20	歌川広重・歌川豊国(三)	五代目市川海老蔵の太郎左衛門	1853(嘉永6)年	紙・木版	額装	35.3×24.0	
21	歌川広重・歌川豊国(三)	三代目坂東三津五郎の狐忠信	1852(嘉永5)年	紙・木版	額装	36.5×24.6	
22	歌川豊国(三)	初代中村福助の犬伴黒主	1858(安政5)年	紙・木版	額装	35.8×25.4	

(3) 日本の定番的な文様

23	歌川豊国(三)	初代河原崎権十郎の濡髪長五郎	1859(安政6)年	紙・木版	額装	36.0×25.3	
24	歌川豊国(三)	三代目関三十郎の梶原平三影時	1859(安政6)年	紙・木版	額装	36.0×24.8	
25	歌川広重・歌川豊国(三)	四代目市川小団次の船頭松右衛門	1853(嘉永6)年	紙・木版	額装	47.7×47.0	
26	歌川豊国(三)	四代目市川小団次の大星由良之助	1859(安政6)年	紙・木版	額装	35.5×24.7	
27	歌川豊国(三)	初代中村福助	1859(安政6)年	紙・木版	額装	35.8×25.4	
28	歌川豊国(三)	初代河原崎権十郎	1859(安政6)年	紙・木版	額装	35.7×25.2	
29	歌川豊国(三)	初代中村福助の左利甚五郎	1859(安政6)年	紙・木版	額装	35.8×25.5	
30	歌川豊国(三)	四代目尾上菊五郎のおやま人形の精	1859(安政6)年	紙・木版	額装	35.8×25.4	
31	歌川広重・歌川豊国(三)	三代目岩井兼三郎の八百屋お七	1853(嘉永6)年	紙・木版	額装	36.1×24.6	
32	歌川豊国(三)	初代河原崎権十郎の金江金五郎	1858(安政5)年	紙・木版	額装	36.0×25.2	
33	歌川豊国(三)	四代目尾上菊五郎の小三	1858(安政5)年	紙・木版	額装	36.0×26.0	
34	歌川広重・歌川豊国(三)	初代坂東志うかのあさがほ	1853(嘉永6)年	紙・木版	額装	47.2×46.7	

所蔵品展Ⅲ 寺内萬治郎の油彩画

会期 2019（令和元）年11月20日（水）～2020（令和2）年
2月3日（月）

会場 蘭島閣美術館別館

おもな関連記事、番組など

○「市政だより くれ」11月号、呉市 ○「市政だより くれ」
12月号、呉市 ○「市政だより くれ」1月号、呉市

印刷物

●チラシ A4判（片面刷り） 3,000部

目的

蘭島閣美術館別館は洋画家・寺内萬治郎の油彩画、素描
などを中心とした所蔵品を展示公開している。本展は、所
蔵品の中から寺内の油彩画を制作年代に沿って展示した。
東京美術学校西洋画科で学んだ寺内の初期作品に見られる
古典的な油彩のテクニック、制作テーマを終世裸婦像とし
た寺内が、絵画的にどのような成長を遂げたのか年代ごと
に作品の特長などを理解できるよう展示をおこなった。

展示内容

（1）寺内萬治郎の代表作

晩年の油彩画の大作4点を取り上げた。人物背景を黒、
または赤といった原色とし、あくまで裸婦そのものを対象
として浮かび上がらせる手法がよく活きる晩年の大作とし
て紹介した。生活感のある生身の女性をあるがままに描き
取ることで女性力強さを表す寺内萬治郎の特質を、
最初のコーナーで体感できるよう配置した。

（2）寺内萬治郎の油彩画

戦中から戦後にかけて寺内萬治郎が手がけた油彩画を紹介
した。物語性を盛り込まず、黒色の中に立つ女性像というシ
ンプルな構図で描き続けた作品群を通して、寺内萬治郎が表
現しようとした堅固な人間像を展観できる展示とした。

（3）自画像、絶筆

60歳の時に描いた画家の自画像と、絶筆となった裸婦
像の小品を展示した。

（山崎環）



展示風景



展示風景

蘭島閣美術館別館 所蔵品展Ⅲ 「寺内萬治郎の油彩画」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法（縦×横）cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	-----------	----

（１）寺内萬治郎の代表作

1	寺内萬治郎	横臥裸婦	1958（昭和33）年	キャンバス・油彩	額装	96.0×144.0	寄託
2	寺内萬治郎	裸婦	1964（昭和39）年	キャンバス・油彩	額装	90.6×64.9	寄託
3	寺内萬治郎	髪	1961（昭和36）年	キャンバス・油彩	額装	73.0×116.5	寄託
4	寺内萬治郎	横臥裸婦	1957（昭和32）年	キャンバス・油彩	額装	72.0×115.5	寄託

（２）寺内萬治郎の油彩画

5	寺内萬治郎	赤いオーバーの女	1947（昭和22）年	キャンバス・油彩	額装	91.0×72.8	
6	寺内萬治郎	裸婦	1937（昭和12）年	キャンバス・油彩	額装	73.0×61.2	
7	寺内萬治郎	裸婦	1960（昭和35）年	キャンバス・油彩	額装	25.0×20.5	
8	寺内萬治郎	裸婦	1960（昭和35）年	キャンバス・油彩	額装	53.2×45.5	
9	寺内萬治郎	裸婦	1935-40（昭和10-15）年	キャンバス・油彩	額装	33.6×24.3	
10	寺内萬治郎	紅白バラ	1924（大正13）年	板・油彩	額装	33.4×23.6	寄託
11	寺内萬治郎	背を見せたる裸婦	1954（昭和29）年	キャンバス・油彩	額装	33.3×24.5	
12	寺内萬治郎	裸婦	1939（昭和14）年	キャンバス・油彩	額装	47.6×58.1	
13	寺内萬治郎	金の首飾り	1937（昭和12）年	キャンバス・油彩	額装	45.3×38.2	
14	寺内萬治郎	頭巾の女	1947（昭和22）年	キャンバス・油彩	額装	91.0×72.8	寄託

（３）自画像、絶筆

15	寺内萬治郎	自画像	1950（昭和25）年	キャンバス・油彩	額装	43.7×36.2	寄託
16	寺内萬治郎	裸婦	1964（昭和39）年	キャンバス・油彩	額装	33.3×24.4	寄託

所蔵品展Ⅳ

童画の登場 大正・昭和初期の新メディア

会期 2020（令和2）年2月5日（水）～5月25日（月）
会場 蘭島閣美術館別館
＊2020（令和2）年3月9日（月）から5月10日（日）
まで、新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館

おもに関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」2月号、呉市 ○「市政だよりくれ」
3月号、呉市

印刷物

- チラシ A4判（片面刷り） 3,000部
- 出品目録 A4判（片面刷り）

目的

蘭島閣美術館別館は洋画家・寺内萬治郎の油彩画、素描などを中心とした所蔵品を展示公開する。寺内萬治郎は明治23（1890）年に生まれ、大正、昭和にかけて日本近代洋画史に名前を刻み、「裸婦の寺内」と称されるほど、生涯にわたり日本女性の美しさ、健康で量感あふれる女性像を追究した。

寺内萬治郎は油彩による多くの優れた作品制作の一方、大正時代に創刊された児童雑誌に多くの童画を提供した。本展では、大正時代創刊の児童雑誌『キンダーブック』に登場する寺内萬治郎の童画などを中心に紹介した。

展示内容

（1）寺内萬治郎の代表作

裸婦像を描いた寺内萬治郎の代表作を紹介した。寺内萬治郎は、油彩の大作を終戦直前に火事で失っている。自身が制作の場所としていたアトリエ全焼という悲運のあと、戦後も精力的に制作活動をおこない、晩年に優れた作品を残した。これらの中から3点の大作を展示した。

（2）童画の登場

子どもが楽しむ絵、という新しいメディアは大正時代の雑誌全盛期に「童画」へと発展した。都市生活者層の子弟教育の必要性から登場した児童雑誌。多くの児童雑誌が新たに創刊されたのです。本コーナーでは、大正時代に出版された児童向けの雑誌の中から、寺内の挿絵を紹介した。

（3）寺内萬治郎の童画一観察の力

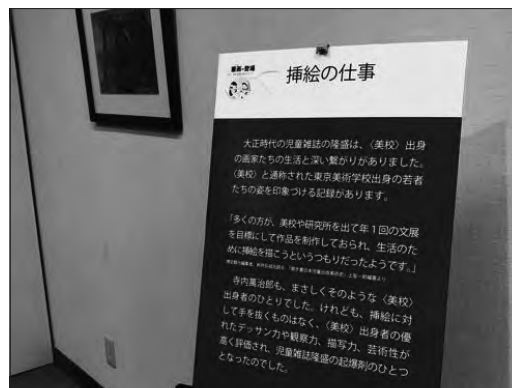
大正時代の児童雑誌の隆盛は、画家たちの生活と深い繋がりがあった。東京美術学校出身の若者たちの多くが、美校や研究所を出て年1回の文展を目標にして作品を制作し、またその生活維持のために挿絵を描いていた。寺内萬治郎も、まさしくそのような画家のひとりで、東京美術学校、いわゆる〈美校〉出身者の優れたデッサン力や観察力、描写力、芸術性は高く評価され、児童雑誌隆盛の起爆剤のひとつとなった。

本コーナーでは、大正時代創刊の児童雑誌『キンダーブック』に寺内萬治郎が提供した挿絵を紹介した。

（4）水彩作品

優れたクロッキーにより自然なリラックスした表情の女性を捉えている寺内萬治郎の素描、水彩作品を展示した。

（山崎環）



展示風景



展示風景

蘭島閣美術館別館 所蔵品展Ⅳ 「童画の登場 大正・昭和初期の新メディア」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法（縦×横）cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	-----------	----

(1) 寺内萬治郎の代表作

1	寺内萬治郎	横臥裸婦	1958（昭和33）年	キャンバス・油彩	額装	96.0×144.0	寄託
2	寺内萬治郎	裸婦	1964（昭和39）年	キャンバス・油彩	額装	90.6×64.9	
3	寺内萬治郎	横臥裸婦	1957（昭和32）年	キャンバス・油彩	額装	72.0×115.5	寄託

(2) 童画の登場 童話集『青い眼の人形』より〔初出：童話集『青い眼の人形』野口雨情著 金の星社 1924（大正13）年6月1日発行〕

4	寺内萬治郎	挿絵「沙の数」復刻木版		紙・木版	額装	18.0×11.6	
5	寺内萬治郎	挿絵「赤い櫻ンぼ」復刻木版		紙・木版	額装	19.1×11.6	
6	寺内萬治郎	挿絵「くたびれこま」復刻木版		紙・木版	額装	18.0×11.6	
7	寺内萬治郎	挿絵「和歌の浦」復刻木版		紙・木版	額装	18.0×11.6	

(3) 寺内萬治郎の童画 - 観察の力 児童雑誌『キンダーブック』（フレーベル館）より

8	寺内萬治郎	表紙絵「ハシ」 （児童雑誌『キンダーブック・ハシ』）		印刷物	額装	25.3×37.5	
9	寺内萬治郎	表紙絵「おさる」 （児童雑誌『キンダーブック・おさる』）		印刷物	額装	25.3×37.5	
10	寺内萬治郎	挿絵「トコヤサンノオダウグ」 （児童雑誌『キンダーブック・おだうぐ』）		印刷物	額装	25.3×37.5	
11	寺内萬治郎	挿絵「オチャノジカン」 （児童雑誌『キンダーブック・トケイ』）		印刷物	額装	25.2×31.9	
12	寺内萬治郎	挿絵「アキノトリイレ」 （児童雑誌『キンダーブック・オムスピ』）		印刷物	額装	25.3×37.5	
13	寺内萬治郎	挿絵「タネマキ」 （児童雑誌『キンダーブック・クサバナ』）		印刷物	額装	25.3×37.5	
14	寺内萬治郎	挿絵「ハチノダイクサンウチツクリ」 （児童雑誌『キンダーブック・小サイロ』）		印刷物	額装	25.3×37.5	
15	寺内萬治郎	挿絵「オモチャアソビ」 （児童雑誌『キンダーブック・オモチャ』）		印刷物	額装	37.5×25.3	
16	寺内萬治郎	挿絵「ユウビンヤサン」 （児童雑誌『キンダーブック・マネゴト』）		印刷物	額装	37.5×25.3	
17	寺内萬治郎	挿絵「ハヘ」 （児童雑誌『キンダーブック・ムシノセイクワツ』）		印刷物	額装	37.5×25.3	
18	寺内萬治郎	挿絵「オヒサマトカゼノカミ」 （児童雑誌『キンダーブック・ヒトウチバナシ』）		印刷物	額装	37.5×25.3	
19	寺内萬治郎	挿絵「タケノコノオケ」 （児童雑誌『キンダーブック・オモチャノニモヤマニモ』）		印刷物	額装	37.5×25.3	

(4) 水彩作品

20	寺内萬治郎	裸婦	制作年不詳	紙・鉛筆・水彩	額装	24.8×24.0	
21	寺内萬治郎	裸婦	制作年不詳	紙・鉛筆・水彩	額装	34.2×23.0	
22	寺内萬治郎	裸婦	制作年不詳	紙・鉛筆・水彩	額装	31.6×20.2	
23	寺内萬治郎	裸婦	制作年不詳	紙・鉛筆・水彩	額装	20.0×26.4	
24	寺内萬治郎	裸婦	制作年不詳	紙・鉛筆・水彩	額装	18.0×28.5	
25	寺内萬治郎	裸婦	制作年不詳	紙・鉛筆・水彩	額装	22.0×28.7	

所蔵品展Ⅰ SUDA Red 須田国太郎の赤 ー赤を巧みに使用した画家たちー

会期 2019（令和元）年6月12日（水）～8月5日（月）
会場 三之瀬御本陣芸術文化館

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」7月号、呉市 ○「市政だよりくれ」
8月号、呉市

印刷物

- チラシA4判（両面刷り） 6,500部
- 出品目録A4判（片面刷り）

目的

須田国太郎は黒の表現で知られている画家であるが、赤や赤褐色を上手く扱う名手でもある。本展では、油絵具の歴史や特徴を知識として得た須田が、試行錯誤した赤の表現に注目して紹介した。その他に、須田国太郎に師事した芝田米三を始め、須田が所属した独立美術協会の創立メンバーの林武と里見勝蔵、同会の後進である三岸節子や絹谷幸二の赤を巧みに使用した作品を紹介した。日本近代から現代に至る画家たちのそれぞれの赤の表現に焦点を当てて展観した。

展示内容

（1）須田国太郎の赤の使い方

1900年代初頭、多くの日本人画家が、美術の最先端であったフランスへこぞって渡る中、須田は時代の流行ではなく、ベネチア派を中心に油彩画の古典技法を勉強するために1919（大正8）年、28歳の時スペインに渡った。その探求心はベネチア派をさかのぼり、西洋で油彩画が登場したとされている15世紀フランドル地方の“透明技法”にまで油彩画技法の知識を深めている。この当時、ここまで油絵具の歴史と技法に精通した人物はひとにぎりであった。しかし留学時に模写や見聞を通して知り得た技法は、そのまま須田の作品に転用されるものではなかった。須田は自著『近代絵画とレアリスム』で、「我国の洋画風表現に於て、（中略）日本特殊性の芸術が洋画の材料の上に再現することのみでは、様式の更衣にすぎない」と批判している。本コーナーでは西洋と東洋の画風の相違や接点を探究した須田が、学び得た技法を独自に試行錯誤しながら展開し、東洋的精神を表現した作品の中から、巧みな赤の使い方を紹介した。

「花山天文台遠望」では、京都大学で現在も使用されている天文台が風景画の中に描かれている。本作では透明技法を部分的に応用し、薄く溶いた透明色の赤を濃い緑の上にかけて、深みのある黒を表現している。これにより、手前の暗部と奥の明部の対比を際立たせ、同時に透明色により、画面全体に奥行きと落ち着きのある空間をつくり出している。また、「溪流の鷺」や「雨後（水間村）」では、赤を明部や輪郭線にアクセントで使用している。「静物（蔬菜）」や「ざくろ」では、対角線や三分割の構図を利用し、ポイントとなる箇所に赤を配置することで、画面にリズム感を生んでいる。須田は青みの赤、黄味の赤、透明色の赤などさまざまな赤を駆使して画面に生かしている。



展示風景

こうした赤を巧みに使用した作品を 16 点、解説とともに展示した。また、下地や色の重なり具合で、赤色がどのように異なって見えるか、その違いを実際に見られる油絵具の色見本を作成し紹介した。また本コーナーでは、実際に須田が使っていた 10 種類の赤系統の絵具とパレットをあわせて展示した。

(2) 赤を巧みに使用した画家たち

本コーナーでは、須田国太郎に師事した芝田米三を始め、須田が所属した独立美術協会の創立メンバーの林武や里見勝蔵、同会の後進である三岸節子や絹谷幸二らの赤を巧みに使用した作品を紹介した。

須田の弟子である芝田米三の作品は、赤が必ず画面のどこかに登場することが多く、赤によって画面にめりはりをつけている。芝田が須田の人柄を肖像として見事に捉えた「今もスペインの空の下で」では、抽象表現のように部分

的に赤を配置している。「希望の詩」では赤基調の風景を背景に妻子の母子像をやさしさにあふれる表現で描いている。

当時フランスで台頭したフォービズムの影響を受けた林武や里見勝蔵の作品には、画家の主観的な感覚が、自由な筆致と原色を多用した大胆な色使いで表現されている。赤は着衣や背景の一部、輪郭線として使用され、作品に強さと躍動感を生み出している。三岸節子の「高原の花」では、花の背景に赤が使用され、情熱的な表現となっている。絹谷幸二の「風」シリーズ「南風の日（風跡）」は、深刻な社会問題となった公害に対するメッセージを作品で示しており、画面全体を占める赤は、危機感や恐怖、警告を啓示しているかのようである。赤を巧みに活用した、日本近現代の 5 名の画家、14 点で赤の表現に迫った。

(湯浅ひろみ)

三之瀬御本陣芸術文化館 所蔵品展 I 「SUDA Red 須田国太郎の赤ー赤を巧みに使用した画家たちー」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法(縦×横) cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	------------	----

(1) 須田国太郎の赤の使い方

1	土門拳	照影	1953 (昭和 28) 年	紙・プリント	額装	119.5×89.5	
2	須田国太郎	静物 (蔬菜)	1940 (昭和 15) 年	キャンバス・油彩	額装	52.8×45.4	
3	須田国太郎	ざくろ	1940 (昭和 15) 年	キャンバス・油彩	額装	24.3×33.4	
4	須田国太郎	花と鳥	1941-44 (昭和 16-19) 年	キャンバス・油彩	額装	33.4×24.3	
5	須田国太郎	溪流の鷺	1942 (昭和 17) 年	キャンバス・油彩	額装	38.0×45.5	
6	須田国太郎	瑞鳥	1940 (昭和 15) 年頃	キャンバス・油彩	額装	31.7×48.8	
7	須田国太郎	紅薔薇	1942 (昭和 17) 年	キャンバス・油彩	額装	44.5×52.0	
8	須田国太郎	雑草	1940 (昭和 15) 年	キャンバス・油彩	額装	65.0×91.0	
9	須田国太郎	モヘンテ	1922 (大正 11) 年	キャンバス・油彩	額装	66.6×81.4	
10	須田国太郎	牛	1934 (昭和 9) 年	キャンバス・油彩	額装	65.0×80.0	
11	須田国太郎	花山天文台遠望	1931 (昭和 6) 年	キャンバス・油彩	額装	64.5×90.5	
12	須田国太郎	雨後 (水間村)	1935 (昭和 10) 年	キャンバス・油彩	額装	65.2×80.3	寄託
13	須田国太郎	富士遠望	1943-44 (昭和 18-19) 年	キャンバス・油彩	額装	45.0×52.6	
14	須田国太郎	夏雲	1951 (昭和 26) 年	キャンバス・油彩	額装	38.0×45.0	
15	須田国太郎	赤比叡	1951 (昭和 26) 年	キャンバス・油彩	額装	37.8×45.0	
16	須田国太郎	裸婦	1934 (昭和 9) 年	キャンバス・油彩	額装	90.4×60.6	
17	須田国太郎	大和室生寺十一面観音像	1951 (昭和 26) 年	紙・油彩	額装	32.8×27.0	

(2) 赤を巧みに使用した画家たち

18	芝田米三	今もスペインの空の下で	1991 (平成 3) 年	キャンバス・油彩	額装	63.5×76.0	
19	芝田米三	希望の詩	2004 (平成 16) 年	キャンバス・油彩	額装	72.7×116.7	
20	芝田米三	魂の叫び 楽章	2004 (平成 16) 年	キャンバス・油彩・コラージュ	額装	100.0×100.0	
21	林武	和装婦人	1935 (昭和 10) 年	キャンバス・油彩	額装	91.0×72.7	
22	林武	婦人像	1945 (昭和 20) 年	キャンバス・油彩	額装	100.0×65.3	
23	林武	裸婦	1949 (昭和 24) 年	キャンバス・油彩	額装	91.0×72.7	
24	林武	前向きの女	1967 (昭和 42) 年	キャンバス・油彩	額装	80.2×65.1	
25	里見勝蔵	裸婦	1934 (昭和 9) 年頃	キャンバス・油彩	額装	52.5×79.6	
26	里見勝蔵	イビサ風景	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	88.8×115.8	
27	三岸節子	カーニユの窓	1969 (昭和 44) 年	キャンバス・油彩	額装	90.8×70.3	

28	三岸節子	高原の花	1962（昭和 37）年	キャンバス・油彩	額装	90.0×72.0	
29	絹谷幸二	南風の日（風跡）	1980（昭和 55）年	キャンバス・顔彩・砂	額装	130.0×162.0	
30	絹谷幸二	薔薇	1980（昭和 55）年頃	アPRESコ	額装	41.0×32.1	
31	絹谷幸二	バラ	制作年不詳	紙・シルクスクリーン	額装	64.0×55.0	

No.30 の制作年は、2006（平成 18）年 3 月発行『蘭島閣美術館所蔵品目録』では制作年不詳と記載。2006（平成 18）年 11 月、作家本人により 1980（昭和 55）年頃の制作と確認。

所蔵品展Ⅱ

広島洋画壇の重鎮 岡崎勇次が描いた風景画

同時
開催

須田国太郎と近代風景画の名品

会期 2019（令和元）年8月7日（水）～9月23日（月）
会場 三之瀬御本陣芸術文化館

関連行事

●ギャラリートーク

2019（令和元）年8月18日（日）、9月1日（日）

各日とも午後2時から

●ワークショップ

「マーブリングで My ノートをつくろう」

2019（令和元）年8月11日（日）午前10時から午後2時30分

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」9月号、呉市 ○「エリアプラス」中国新聞社、2019（令和元）年8月8日 ○「エリアプラス」中国新聞社、2019（令和元）年8月15日

印刷物

●チラシ A4判（両面刷り） 6,500部

●出品目録 A4判（片面刷り）

目的

1924（大正13）年、広島県因島市に生まれ、呉市にゆかりを持つ広島洋画壇の重鎮、岡崎勇次の作品を紹介した。海に囲まれて育ち、海に愛着を抱き続けた岡崎は、生涯さまざまな海の表情を描いた。当財団の37点に及ぶ岡崎の所蔵作品のうち、1961（昭和36）年の滞欧作から1991（平成3）年の絶筆まで、11点とともにその軌跡を年代順に辿り、岡崎勇次を広く知ってもらうことに努めた。

同時開催として、須田国太郎と同時代に活躍した日本近代洋画家の風景画を紹介した。

展示内容

（1）岡崎勇次が描いた風景画

岡崎勇次は広島県因島市に生まれ、呉市の阿賀小学校、竹原市の忠海中学校を卒業し、広島に囲まれた幼少期を過ごした。戦時下の青年期には、大阪で海軍予備学生となり、特攻志願するも視力不足で不合格となり、断念するという経験をしている。戦後、生きていて良かったという思いと、特攻隊員として亡くなった多くの仲間たちにすまないという気持ちを抱きつつ、郷里広島で教員をしながら画家としての道を歩んだ。終生描き続けた“海”は、岡崎にとって日常そのものであった。海を描くことでまるで人生を表現しているかのような作品を生み出していく。

1955（昭和30）年と翌年に光風会で賞を受賞し、1959（昭和34）年には第2回新日展でも特選を受けた岡崎は、両展をおもな活動の場とした。1960（昭和35）年から1年間フランスへ留学し、この経験が画家としての道を確固たるものへと導いた。本コーナーでは、留学時に描いた「ギリシャ」やパリ郊外の街を描いた「コンフラン」などの初期の風景画から展覧した。

岡崎は帰国後も国内外を問わず取材旅行を重ね、各地に画題を求めた。その一方、1976（昭和51）年から広島修



展示風景



展示風景

道大学の教授に就任し、後進の育成にも励み、広島の実美術界をリードしていった。

代表作の「幻煙」(げんえん) シリーズは、銅の製錬所が設けられた瀬戸内海の四阪島を始め、亜硫酸ガスや赤潮など、当時の開発や公害によって死の海と化していく瀬戸内の海を危惧し、主題としている。黒を基調に抽象的な力強いタッチで描き、海への哀惜や人間への怒りを表現している。また、「翔・北転船」や絶筆となった「北の港」は、岡崎が晩年まで毎年のように出かけた、厳寒期の東北や北海道取材したもので、白を主体に極寒の海を描いている。極寒地で厳しい航海を乗り越えて帰港した茶褐色に錆びた船には、静けさの中に力強さと存在感がある。猛吹雪の雪原に身を置いて取材した壮絶さには、自分に厳しさを課すことによって厳しい北の海が描けるという岡崎の強い想いがあった。本コーナーではこのような岡崎の心象を投影し

た風景画を紹介した。

(2) 同時開催：須田国太郎と近代風景画の名品

京都出身の須田国太郎は、近隣の農村や山々をしばしば取材に訪れ、日本らしい湿度を感じる風景画を描いている。本コーナーでは須田の特徴である明暗の対比を用いた空間表現の、幽玄な美の世界を紹介した。また須田とスケッチ旅行をともにこなうなど、交友のあった小林和作の海の風景画を始め、呉市安浦出身の南薫造が描いた、人の生活を感じる温かな海の風景画を展示し、岡崎勇次の描いた海とは異なる表現を展観した。また須田と同じ独立美術協会に所属した鳥海青児や三岸節子など、あわせて5名の19点の風景画を紹介した。

(湯浅ひろみ)

三之瀬御本陣芸術文化館 所蔵品展Ⅱ 「広島洋画壇の重鎮 岡崎勇次が描いた風景画／須田国太郎と近代風景画の名品」 出品リスト *無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法(縦×横) cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	------------	----

(1) 岡崎勇次が描いた風景画

1	岡崎勇次	ギリシャ	1961(昭和36)年	キャンバス・油彩	額装	100.0×72.7	
2	岡崎勇次	コンフラン	1964(昭和39)年	キャンバス・油彩	額装	145.5×72.7	
3	岡崎勇次	荒磯・鵜	1974(昭和49)年	キャンバス・油彩	額装	97.0×145.5	
4	岡崎勇次	赤潮海峡	1977(昭和52)年	キャンバス・油彩	額装	145.5×97.0	
5	岡崎勇次	幻煙	1974(昭和49)年	キャンバス・油彩	額装	193.9×112.1	
6	岡崎勇次	凍海幻煙	1979(昭和54)年	キャンバス・油彩	額装	193.9×112.1	
7	岡崎勇次	灼・幻煙	1981(昭和56)年	キャンバス・油彩	額装	193.9×112.1	
8	岡崎勇次	響・新緑	1983(昭和58)年	キャンバス・油彩	額装	100.0×72.7	
9	岡崎勇次	瀬戸の夜明け	1989(平成元)年	キャンバス・油彩	額装	50.4×91.2	
10	岡崎勇次	翔・北転船	1986(昭和61)年	キャンバス・油彩	額装	193.9×112.1	
11	岡崎勇次	北の港	1991(平成3)年	キャンバス・油彩	額装	193.9×112.1	

(2) 同時開催：須田国太郎と近代風景画の名品

12	須田国太郎	モヘンテ	1922(大正11)年	キャンバス・油彩	額装	66.6×81.4	
13	須田国太郎	花山天文台遠望	1931(昭和6)年	キャンバス・油彩	額装	64.5×90.5	
14	須田国太郎	夏雲	1951(昭和26)年	キャンバス・油彩	額装	38.0×45.0	
15	須田国太郎	風景	1946-47(昭和21-22)年	キャンバス・油彩	額装	36.0×43.5	
16	須田国太郎	赤比叡	1951(昭和26)年	キャンバス・油彩	額装	37.8×45.0	
17	須田国太郎	月瀬平	1949(昭和24)年	キャンバス・油彩	額装	45.5×53.0	
18	須田国太郎	雨後(水間村)	1935(昭和10)年	キャンバス・油彩	額装	65.2×80.3	寄託
19	小林和作	海	1955(昭和30)年頃	キャンバス・油彩	額装	51.4×99.8	
20	小林和作	海	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	33.3×60.5	
21	小林和作	海	制作年不詳	紙・水彩	二曲一双	各 148.3×139.5	
22	南 薫造	海辺の造船所	1928(昭和3)年	キャンバス・油彩	額装	60.5×80.5	
23	南 薫造	海(房州)	1930(昭和5)年	キャンバス・油彩	額装	50.0×60.5	
24	南 薫造	房州の小道	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	80.5×60.7	
25	鳥海青児	段々島	1951(昭和26)年	ボード・油彩	額装	32.1×37.6	
26	鳥海青児	スペイン風景	1959-62(昭和34-37)年	キャンバス・油彩	額装	32.0×41.2	
27	鳥海青児	アルゼリア風景	1930(昭和5)年	キャンバス・油彩	額装	65.2×91.1	
28	三岸節子	アルスの広場への道	1977(昭和52)年	キャンバス・油彩	額装	73.0×92.0	

29	三岸節子	ヴェロンの夜明け	1979（昭和 54）年	キャンバス・油彩	額装	72.7×90.9	
30	三岸節子	カダケス	1987（昭和 62）年	キャンバス・油彩	額装	50.0×72.7	

所蔵品展Ⅲ 須田国太郎 珠玉の名品

会期 2019（令和元）年9月25日（水）～12月2日（月）
会場 三之瀬御本陣芸術文化館

おもな関連記事、番組など

○「市政だより くれ」10月号、呉市 ○「市政だより くれ」11月号、呉市 ○「エリアプラス」中国新聞社、2019（令和元）年9月19日 ○『くれえばん』11月号、株式会社S Aメディアラボ

印刷物

- チラシ A4判（両面刷り） 6,500部
- 出品目録 A4判（片面刷り）

目的

1891（明治24）年に京都に生まれ、41歳で本格的に画家への道を進んだ須田国太郎は、全国さまざまな場所へ写生旅行に出かけ、広島にもたびたび訪れた。本展では写生を通して瀬戸内地方と馴染みのあった須田の油彩画や水墨画、水彩画、素描など41点を紹介した。あわせて須田が常用した画材や、スペイン留学で使用したトランク、日常的に愛用した遺品やコレクションなども一堂に公開し、須田国太郎をより深く、広く知ってもらうことに努めた。

須田国太郎は京都帝国大学で美学・美術史を学び、「写実主義」や「絵画の理論と技巧」をテーマとして研究に励んだ。テーマに関連して、在学中より独学で油絵を始め、さらに洋画家の浅井忠が創設した関西美術院でデッサンも学んでいる。28歳の時にスペインへ留学し、ベネチア派の作品などプラド美術館での模写や欧州各地での見聞を通して、ルネサンス以降の油絵の歴史とその実践を研究した。

41歳のときの初個展を機に、画壇に認められ、以後独立美術協会を中心に活動を続ける。画壇デビューまでは研究者としての仕事为主であった須田は、画家として時に美術史家として活動できるこの当時では稀有な芸術家となった。

本展では、須田が好んで描いた動植物の作品を始め、能スケッチ、人物、静物、風景などさまざまな画題に取り組んだ画業をジャンル別で辿った。

展示内容

（1）須田の描いた動植物

須田はさまざまな画題を手がけているが、動物や植物も良く好んで描いている。自宅に近かった、京都市動物園や植物園にもしばしば写生に出かけている。本コーナーでは、戦時下の動物園で取材した代表作「黄豹」や、油彩画における花鳥画といえる表現を目指した「黒つぐみ」や「花と鳥」、その他「馬」や「樹上猿」など須田の描いた色々な動物の作品を紹介した。須田は頻繁にワシを画題としている。油彩画の「溪流の鷺」、水彩画の「鷺」、水墨画の「猛禽」、陶器に絵付けしたワシの絵など、同じ主題を異なる画材で描いた作品を展覧し、表現の相違の面白さに焦点を当てた。

また、自生の花のたくましさを描いた「雑草」や「紅薔薇」など植物の作品も紹介し、須田の自然へのまなざしから、独自の着眼点や美意識を見つめた。



展示風景



展示風景

(2) 能スケッチ

須田国太郎は 1910（明治 43）年、独学で油絵を描き始めた 19 歳頃から、能（金剛流）の謡曲である謡（うたい）も習い始めた。京都を拠点とする金剛流に師事し、以後 66 歳で病に伏すまで、約 50 年間続けた。本コーナーでは能に深い興味を持ち続けた須田の能のスケッチを展観した。このスケッチは能演中にほとんど手元を見ることなく、記憶にとどめるため、メモのように素早く何枚も描かれたものである。「卒塔婆小町」「盛久」「角田川」の演目のスケッチを一部紹介した。

(3) 須田国太郎の人物画

画壇デビュー前に描いたと思われる「裸婦習作」、41 歳、66 歳の時に制作した「裸婦」と年齢に平行して 3 枚を紹介した。スペイン帰国後数年間に描かれた裸婦は、頭部や四肢が削除されたり、切れていたりする作品が多い。モデルの個性ではなく、トルソー的扱いで人体そのものの純粋な造形を追求した結果である。「裸婦習作」はその傾向が強い。41 歳の時の作品は 300 号の大作「水浴」（福岡市美術館所蔵）のエスキースとして描かれたもので、前者の作風とは異なり、画面全体に光と空間が生まれている。このように同じ画題で年齢とともに変化する点を表現の違いから比較した。

「夫婦の像」は傷痍軍人慰問肖像画である。日露戦争の時に左手を失った傷痍軍人、西田藤次郎とその妻を描いている。1943（昭和 18）年に開かれた日本美術報国会へ渡

すために描かれた。この会は、太平洋戦争翼賛の目的で組織された全美術団体の統制団体である。こうした時代背景を映し出す作品も紹介した。

(4) 須田国太郎の静物画

カボチャやトウモロコシなど夏野菜を描いた「静物（蔬菜）」、さまざまな赤色で描かれた「ざくろ」、岡山や広島を訪れた折に描かれた「魚」など、日常的で温かみのある須田の静物画を紹介した。

(5) 須田国太郎の風景画

留学時に訪れたスペイン・バレンシア地方にある山あいの小さな村を描いた「モヘンテ」、京都大学の天文台を描いた「花山天文台遠望」など、須田の初個展に出品された風景画の他、雨上がりに雲の合間から射し込んだ光が、村を照らした瞬間の美しさを捉えた牧歌的な「雨後（水間村）」など、4 点の油彩画による風景画を紹介した。あわせて、現地で描いたと思われる広島や農村など、温かみの中に勢いのある 2 点の水彩画による風景画も紹介した。

（湯浅ひろみ）

三之瀬御本陣芸術文化館 所蔵品展Ⅲ 「須田国太郎 珠玉の名品」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法（縦×横）cm	所蔵
(1) 須田の描いた動植物							
1	土門拳	照影	1953（昭和 28）年	紙・プリント	額装	119.5×89.5	
2	須田国太郎	紅薔薇	1942（昭和 17）年	キャンバス・油彩	額装	44.5×52.0	
3	須田国太郎	雑草	1940（昭和 15）年	キャンバス・油彩	額装	65.0×91.0	
4	須田国太郎	ばら	1945-50（昭和 20-25）年	紙・水彩	額装	27.2×24.0	
5	須田国太郎	薔薇	制作年不詳	色紙・パステル	額装	24.4×27.5	
6	須田国太郎	花と鳥	1941-44（昭和 16-19）年	キャンバス・油彩	額装	33.4×24.3	
7	須田国太郎	瑞鳥	1940（昭和 15）年頃	キャンバス・油彩	額装	31.7×48.8	
8	須田国太郎	黒つぐみ	1942（昭和 17）年	キャンバス・油彩	額装	45.5×53.0	
9	須田国太郎	牛	1934（昭和 9）年	キャンバス・油彩	額装	65.0×80.0	
10	須田国太郎	黄豹	1944（昭和 19）年	キャンバス・油彩	額装	41.0×53.0	
11	須田国太郎	溪流の鷺	1942（昭和 17）年	キャンバス・油彩	額装	38.0×45.5	
12	須田国太郎	鷺	1948（昭和 23）年	紙本墨画淡彩	額装	38.5×50.7	
13	須田国太郎	須田国太郎絵付け花瓶「鷺」	制作年不詳	陶器		高 238 口径 8.7 胴径 15.0	2019 年度新収蔵
14	須田国太郎	猛禽	1946（昭和 21）年	紙本墨画淡彩	軸装	90.5×33.6	
15	須田国太郎	樹に止まった鷺	制作年不詳	紙本墨画淡彩	額装	16.3×52.0	
16	須田国太郎	馬	1944（昭和 19）年頃	紙本墨画	額装	27.0×24.0	
17	須田国太郎	樹上猿	1950（昭和 25）年	紙・鉛筆・水彩	額装	42.7×54.5	
18	須田国太郎	鷺	1948（昭和 23）年	紙本墨画淡彩	額装	21.0×60.4	

19	須田国太郎	雉	制作年不詳	紙・水彩	額装	23.3×27.2	
20	須田国太郎	猫	制作年不詳	紙・鉛筆	額装	33.3×24.2	
21	須田国太郎	猫	1949（昭和24）年頃	紙・鉛筆	額装	33.3×24.2	

(2) 須田国太郎の能スケッチ *須田国太郎スケッチブックより

22	須田国太郎	能（卒塔婆小町）	1936（昭和11）年	紙・鉛筆	額装	27.2×38.5	
23	須田国太郎	能（盛久） 全2図	1951（昭和26）年	紙・鉛筆	額装	各 20.5×25.0	
24	須田国太郎	能（角田川） 5図（全19図より）	1951（昭和26）年	紙・鉛筆	額装	各 20.5×25.0	

(3) 人物画

25	須田国太郎	裸婦習作	1925-34（大正14-昭和9）年	キャンバス・油彩	額装	90.3×60.2	
26	須田国太郎	裸婦	1934（昭和9）年	キャンバス・油彩	額装	90.4×60.6	
27	須田国太郎	裸婦	1957（昭和32）年	キャンバス・油彩	額装	44.7×27.5	
28	須田国太郎	夫婦の像	1944（昭和19）年	キャンバス・油彩	額装	45.6×53.0	

(4) 静物画

29	須田国太郎	ざくろ	1940（昭和15）年	キャンバス・油彩	額装	24.3×33.4	
30	須田国太郎	静物（蔬菜）	1940（昭和15）年	キャンバス・油彩	額装	52.8×45.4	
31	須田国太郎	魚	1947-48（昭和22-23）年	キャンバス・油彩	額装	32.3×41.2	

(5) 風景画

33	須田国太郎	モヘンテ	1922（大正11）年	キャンバス・油彩	額装	66.6×81.4	
34	須田国太郎	花山天文台遠望	1931（昭和6）年	キャンバス・油彩	額装	64.5×90.5	
35	須田国太郎	雨後（水間村）	1935（昭和10）年	キャンバス・油彩	額装	65.2×80.3	寄託
36	須田国太郎	富士遠望	1943-44（昭和18-19）年	キャンバス・油彩	額装	45.0×52.6	
37	須田国太郎	風景	制作年不詳	紙・水彩	額装	32.0×44.4	
38	須田国太郎	厳島	1954（昭和29）年	紙・水彩	額装	44.2×61.8	

No.22、No.23、24は1951（昭和26）年に須田国太郎が使用していたスケッチブックに描かれていた主題を作品名とした（ ）内は能の演目名。後年、1図ごとに額装されたもの。

所蔵品展Ⅳ 須田国太郎と昭和の前衛油彩画家たち

会期 2019（令和元）年12月4日（水）～2020（令和2）年2月11日（火・祝）
会場 三之瀬御本陣芸術文化館

関連行事

●ギャラリートーク

2019（令和元）年12月21日（土）午後3時から

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」12月号、呉市 ○「市政だよりくれ」1月号、呉市 ○「芸芸灘だより」12月号、呉市 ○『海陽彩都』No.3号、広島中央地域連携中枢都市圏 ○「広島広域都市圏イチ押し情報ステーション」『り〜ぶら』2019年冬号、広島広域都市圏協議会 ○「あーと散歩」『週刊プレスネット』1月31日号、株式会社プレスネット ○『くれえばん』2月号、株式会社S Aメディアラボ

印刷物

●チラシ A4判（両面刷り） 6,500部

●出品目録 A4判（片面刷り）

目的

本展では須田国太郎を中心に、独立美術協会で活躍した同時代の前衛油彩画家たちの作品を紹介した。

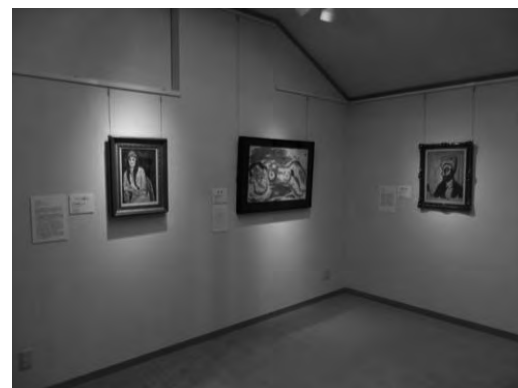
1891（明治24）年に京都に生まれ、41歳で初個展を機に本格的に画家への道を進んだ須田国太郎は、43歳で独立美術協会へ迎えられ、生涯を通じて当会をおもな活動の場とした。京都帝国大学（現・京都大学）で「写真主義」や「絵画の理論と技巧」をテーマに研究に励み、画壇デビューまで研究者としての仕事为主であったが、確かな理論に基づく研究と実践を通して、西洋と東洋の美の行方を自身の作品に模索し続けた。

須田の所属した独立美術協会は、フランスから帰国した画家たちが1926（昭和元）年に結成した「1930年協会」の活動が発端となり、1930（昭和5）年に結成された。二科会や春陽会、国画会などの美術団体から脱会した画家たちや、フランス留学から帰国した画家が集結し、「各々ノ既存団体ヨリ絶縁」と「独立宣言」を発表して組織された。創立メンバーは、里見勝蔵、児島善三郎、林武、三岸好太郎、福沢一郎など、平均年齢35歳の若手14名で、少し遅れて須田国太郎や小林和作、海老原喜之助、鳥海青児などが加わった。

「新時代ノ美術ヲ確立セム事ヲ期ス」という目標を掲げた独立美術協会は昭和とともに始まり、昭和の前衛的油彩画家たちの集結の場であった。その人気は公募応募数からも明らかで第1回展3,751点、第2回展4,852点、第3回展5,306点と増加し、日本の若い画家たちに影響を与え、時代の潮流をなしていった。当時の日本美術界に新しい風を起こすために奮闘した前衛画家たちの息吹に満ちた作品を展覧した。

展示内容

（1）須田国太郎と小林和作



展示風景



展示風景

須田国太郎と小林和作は、1933（昭和8）年に、同期で独立美術協会の会員となった。2人は翌年から1944（昭和19）年まで、同会の京都研究所で同時期に実技指導に当たるなど、芸術活動において親交を深めている。1940（昭和15）年には京都で一緒に素描展を開催し、その後も1943（昭和18）年と1947（昭和22）年に岡山県で「二人展」や「日本画展」を開催している。須田は1950（昭和25）年4月号の美術雑誌『みづゑ』で、小林和作について論評している。本コーナーでは、独立美術協会のなかでも特に親交が深かった須田国太郎と小林和作の作品を展覧した。須田国太郎は人物、静物、動植物、風景とさまざまな画題に取り組んだ作品を紹介し、小林和作は得意とした風景画を春夏秋冬で紹介した。

（2）独立美術協会の創立メンバー

既存の団体からの絶縁、新時代の美術の確立を宣言して創立された独立美術協会。創立メンバーである、里見勝蔵、

児島善三郎、林武、三岸好太郎、福沢一郎の作品を紹介した。

彼らは、20世紀初頭フランスで台頭した、新しい芸術運動であるフォービズムを日本に紹介し、展開させた新進気鋭の画家たちであった。原色を多用した鮮やかな色彩と構成によって、彼らの主観的な思いを人物、花、風景など具象表現を通して描いた油彩画を紹介した。

（3）独立美術協会ゆかりの画家

独立美術協会の創立から、現在に至る活動年譜をパネルで紹介し、その後、独立美術協会で活動した画家の作品を紹介した。海老原喜之助、三岸節子、鳥海青児、須田国太郎の愛弟子であった芝田米三、同会と広島にゆかりのある鰐光や空野八百蔵の油彩画を紹介した。

（湯浅ひろみ）

三之瀬御本陣芸術文化館 所蔵品展Ⅳ 「須田国太郎と昭和の前衛油彩画家たち」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法（縦×横）cm	所蔵
-----	-----	-----	-----	------	----	-----------	----

（1）須田国太郎と小林和作

1	須田国太郎	裸婦習作	1925-34（大正14-昭和9）年	キャンバス・油彩	額装	90.3×60.2	
2	須田国太郎	夫婦の像	1944（昭和19）年	キャンバス・油彩	額装	45.6×53.0	
3	須田国太郎	裸婦	1934（昭和9）年	キャンバス・油彩	額装	90.4×60.6	
4	須田国太郎	牛	1934（昭和9）年	キャンバス・油彩	額装	65.0×80.0	
5	須田国太郎	黄豹	1944（昭和19）年	キャンバス・油彩	額装	41.0×53.0	
6	須田国太郎	雑草	1940（昭和15）年	キャンバス・油彩	額装	65.0×91.0	
7	須田国太郎	紅薔薇	1942（昭和17）年	キャンバス・油彩	額装	44.5×52.0	
8	須田国太郎	月瀬平	1949（昭和24）年	キャンバス・油彩	額装	45.5×53.0	
9	須田国太郎	富士遠望	1943-44（昭和18-19）年	キャンバス・油彩	額装	45.0×52.6	
10	須田国太郎	溪流の鷺	1942（昭和17）年	キャンバス・油彩	額装	38.0×45.5	
11	須田国太郎	須田国太郎絵付け花瓶「鷺」	制作年不詳	陶器		高23.8口径8.7胴径15.0	2019年度新収蔵
12	小林和作	大雪山早春	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	31.0×40.0	寄託
13	小林和作	荒海	1950（昭和25）年	キャンバス・油彩	額装	33.5×60.8	
14	小林和作	尾道風景	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	45.5×53.0	
15	小林和作	那須岳残雪	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	45.5×38.0	寄託

（2）独立美術協会の創立メンバー

16	里見勝蔵	ハンス婦人	1923（大正12）年頃	キャンバス・油彩	額装	41.0×27.5	
17	里見勝蔵	裸婦	1934（昭和9）年頃	キャンバス・油彩	額装	52.5×79.6	
18	三岸好太郎	印度人の男	制作年不詳	紙・グワッシュ	額装	50.2×36.5	
19	三岸好太郎	貝殻	1934（昭和9）年	板・油彩	額装	21.2×27.1	
20	福沢一郎	花	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	41.5×36.0	寄託
21	里見勝蔵	イビサ風景	制作年不詳	キャンバス・油彩	額装	88.8×115.8	
22	林武	婦人像	1923（大正12）年	キャンバス・油彩	額装	45.3×37.8	
23	林武	前向きの女	1967（昭和42）年	キャンバス・油彩	額装	80.2×65.1	
24	児島善三郎	横臥	1929（昭和4）年	キャンバス・油彩	額装	97.5×162.2	

（3）独立美術協会ゆかりの画家

25	海老原喜之助	初夏快走	1967（昭和42）年	キャンバス・油彩	額装	16.0×22.9	
----	--------	------	-------------	----------	----	-----------	--

26	海老原喜之助	馬上人物	1955（昭和 30）年頃	紙・鉛筆・水彩	額装	35.4×25.4	
27	三岸節子	梅の花咲く	1964（昭和 39）年	キャンバス・油彩	額装	72.7×90.9	
28	三岸節子	花	1960 年代	キャンバス・油彩	額装	53.2×45.7	
29	三岸節子	ヴェロンの冬	1978（昭和 53）年	キャンバス・油彩	額装	72.7×90.9	
30	鳥海青児	アルゼリー風景	1932（昭和 7）年	キャンバス・油彩	額装	22.0×27.5	
31	鳥海青児	スペイン風景	1959-62（昭和 34-37）年	キャンバス・油彩	額装	32.0×41.2	
32	鳥海青児	アマリリス	1940 年代	キャンバス・油彩	額装	27.2×22.0	
33	霰光	キリスト（赤）	1932（昭和 7）年	紙・グワッシュ・墨	額装	35.8×24.9	
34	霰光	パーサーの像	1943（昭和 18）年	紙・水彩	額装	40.4×22.0	
35	空野八百蔵	ムードン風景	1975（昭和 50）年	キャンバス・油彩	額装	45.4×53.0	
36	芝田米三	今もスペインの空の下で	1991（平成 3）年	キャンバス・油彩	額装	63.5×76.0	
37	芝田米三	希望の詩	2004（平成 16）年	キャンバス・油彩	額装	72.7×116.7	

所蔵品展Ⅴ

日本画にみる墨の表現
須田国太郎と洋画家の描いた水墨画

会期 2020（令和2）年2月13日（木）～4月6日（月）
会場 三之瀬御本陣芸術文化館
＊2020（令和2）年3月9日（月）から5月10日（日）
まで、新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館

関連行事

●ギャラリートーク

2020（令和2）年3月21日（土）午後3時から
【中止】＊2020（令和2）年3月1日（日）以降のイベント
は中止の措置をとった。

●ワークショップ

「墨流しランプシェード」

2020（令和2）年3月28日（土）午前10時から午後2時30分
【中止】＊2020（令和2）年3月1日（日）以降のイベント
は中止の措置をとった。

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」2月号、呉市 ○「市政だよりくれ」
3月号、呉市

印刷物

- チラシ A4判（両面刷り） 6,500部
- 出品目録 A4判（片面刷り）

目的

本展では、伝統に裏付けされながら、新たな表現を探究した近代の日本画家たちの巧みな墨の表現を紹介した。あわせて須田国太郎を中心に洋画家たちの描いた水墨画を展示した。

鎌倉時代に禅宗文化を取り入れようと、本格的に中国から学ぶようになった水墨画。東洋的思想を重んじながらも、日本の文化や風土に溶け合いながら発展してきた。

古くから「墨に五彩あり」と言う言葉がある。墨は黒だけではなく、その濃淡や、線の表現、筆技によって、ときに力強く、ときに穏やかに、さまざまな色味や表情を見せる。

墨の“五彩”とは、黒の中に繊細で多彩な色味があびてみえることを言う。その要因は濃淡の違いに始まり、茶墨や青墨など墨の原材料による色味の違い、ぼかし、たらし込みなど技法の違いまでさまざまである。多くの画家が墨という画材に魅せられ、表現に工夫を凝らしてきた。

墨色から画家や鑑賞者が心で感じる色も“五彩”と言われ、限られた色の世界は奥深い精神性を歴史とともに育んできた。本展では、画家たちが各々の制作の立ち位置から生み出した墨の五彩を辿った。

展示内容

（1）日本画にみる墨の表現

呉市出身の船田玉樹を始め、旧吉田邸（山口県下関の豪商屋敷、現在松濤園内に移築展示）を定宿としていた森寛斎の作品など、近現代の日本画家の中から、墨を巧みに使用した作品を紹介した。鑑賞のために「水墨画・日本画の技法」の解説パネルを作品とあわせて紹介。輪郭線を用いず、水墨や彩色の広がりある面によって形体づける「没骨



展示風景



展示風景

法」(もっこつほう)、対概念で物の輪郭線を描線で描き、彩色を施す線本位の描法の「鉤勒法」(こうろくほう)を竹内栖鳳や、安田靫彦などの作品で紹介。これらは東洋画の代表的な技法である。その他、森徹山の「狸獲鴨之図」など動物を得意とした画家が使用した「毛描き」や、村上華岳「虎の図」に見られる「刷毛描き」、前田青邨「立葵」「菊」に見られる「たらし込み」の技法などを作品とともに辿った。また、下蒲刈とゆかりのあった船田玉樹が墨を用いて描いた六曲一隻の「松」や、下蒲刈で300年余りを生きた老木の“見張りの松”を描いた「松」を紹介。このモデルとなった松の木は1980(昭和55)年に松枯れにより伐採されたが、幹の一部が松濤園内に現在も残されている。解説パネルで当時の“見張りの松”の写真をあわせて掲載し、その歴史も紹介した。

(2) 須田国太郎の油彩画と水墨画

須田国太郎は油彩画で知られる画家であるが、墨を使用した作品も多く残している。本コーナーでは、須田が東洋と西洋の絵の成り立ちや精神、風土の相違のはざまで描き続けた油彩画や水墨画を紹介した。

須田は1935(昭和10)年頃から日本画を始め、1947(昭和22)年から1950(昭和25)年にかけて、急激にその数が増えている。この頃の日記にも「朝から晩まで水墨画かく紙鳥の子にてかくやしわくちゃとなって困る」など日本画の制作に関連する記述が多く現れる。1947(昭和22)年に岡山県で小林和作と開催した二人展や、同年の大阪での個展、翌年に岡山県で開催した日本画家の池田遙邨、小野竹喬との三人展などでは、水墨画を中心に日本画の展覧会をおこなっている。須田は自著の『近代絵画とレアリスム』で「なぜ東洋西洋と違った方向にむいて絵が発達したのだろう。その違いは、我々の新しいものの要求は、その総合の上に立つのではないか」、「先ずこの二つの伝統を知ることが第一」と述べている。この研究で絵の道に進み始め、美意識や余白などの空間の意識にまでさかのぼって探

求し続けた。「日本画の行方を見守るのは、やがて自分が行く途を見出そうとするとところである」と自分の絵の行方を模索し続けている。

本コーナーでは、「猛禽」「樹に止まった鷺」などの水墨画と、同じ画題であるワシを油彩画や陶器の絵付けで表現した「溪流の鷺」などの作品を比較できるように展示した。また、日本画の特徴の一つであると須田が記述している、余白に対する空間意識を応用して描いた「瑞鳥」「花と鳥」などを紹介。また、今年度新収蔵となった墨と淡彩で描かれた「大鶴」を初公開した。

(3) 洋画家の墨の表現

須田国太郎の他にも、近代日本の洋画家たちで、同時に日本画を描いた画家は多い。本コーナーでは彼らの描いた墨の表現を紹介した。

岸田劉生は1926(大正15)年6月号『みづゑ』誌上で「私は今、宋元を一番尊敬し、又おそろしいと思っています。西洋の古典も尊敬しますがしかし、心から恐ろしいとは思いません。自分がもし宋元に至れたらどんなにうれしいでしょう。私の新しい目標は宋元にあります。これから又うんと勉強しようと思っています」と述べている。日本画のルーツの一つともいえる宋元画の墨の表現も探求した岸田の「童女図(麗子像)」を紹介した。

この他、幼少期に日本画や水彩画を学び、10代から禅宗の寺で参禅していた萬鉄五郎の「対話」、渡欧し西洋画を学びながらも帰国後、身近な自然を捉えた爽やかな日本画を手がけた森田恒友の「野菜帖」、身近な日常を温かな目線で描いた南薫造の「メバル」、下図として墨で描かれた鬚光の「鳥」、シベリア抑留の経験を絵にし、帰還後は“私の地球”とささやかな日常を大切にした香月泰男の「トマト」、洋画家でありながら、水墨画、版画、随筆などあらゆる才能を開花した中川一政の「魚」など、近代日本を代表する洋画家が墨を用いて描いた作品を展示した。

(湯浅ひろみ)

三之瀬御本陣芸術文化館 所蔵品展Ⅴ 「日本画にみる墨の表現 須田国太郎と洋画家の描いた水墨画」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	作家名	作品名	制作年	材質技法	形状	寸法(縦×横)cm	所蔵
1	森寛斎	春秋図	1872(明治5)年	絹本彩色	二曲一双	各隻 151.9×169.2	
2	森徹山	狸獲鴨之図	制作年不詳	絹本墨画淡彩	軸装	110.1×50.8	
3	松林桂月	富嶽	制作年不詳	絹本彩色	額装	44.8×51.5	
4	竹内栖鳳	雙鶏	1941(昭和16)年頃	紙本彩色	額装	70.3×82.0	
5	橋本関雪	ふくろう	1935(昭和10)年頃	絹本彩色	額装	49.0×58.2	
6	村上華岳	虎の図	制作年不詳	紙本彩色	軸装	128.4×30.3	
7	前田青邨	立葵	1951-52(昭和26-27)年頃	紙本彩色	額装	50.4×61.0	
8	前田青邨	菊	1960(昭和35)年頃	紙本彩色	額装	26.2×23.4	寄託
9	安田靫彦	紅梅図	1911(明治44)年頃	絹本彩色	額装	20.0×17.3	寄託
10	安田靫彦	観音	制作年不詳	紙本彩色	額装	51.0×59.2	

(1) 日本画にみる墨の表現

11	安田鞆彦	布都御魂	制作年不詳	絹本彩色	額装	40.3×51.5	
12	船田玉樹	松	1967（昭和42）年	紙本彩色	六曲一隻	187.0×367.0	
13	船田玉樹	松	制作年不詳	紙本彩色	額装	116.7×80.2	

(2) 須田国太郎の油彩画と水墨画

14	須田国太郎	大和室生寺十一面観音像	1951（昭和26）年	紙・油彩	額装	32.8×27.0	
15	須田国太郎	瑞鳥	1940（昭和15）年頃	キャンバス・油彩	額装	31.7×48.8	
16	須田国太郎	黒つぐみ	1942（昭和17）年	キャンバス・油彩	額装	45.5×53.0	
17	須田国太郎	花と鳥	1941-44（昭和16-19）年	キャンバス・油彩	額装	33.4×24.3	
18	須田国太郎	鷺	1948（昭和23）年	紙本墨画淡彩	額装	21.0×60.4	
19	須田国太郎	雉	制作年不詳	紙・水彩	額装	23.3×27.2	
20	須田国太郎	大鶴	制作年不詳	紙本墨画淡彩	額装	27.0×24.2	2019年度新収蔵
21	須田国太郎	馬	1944（昭和19）年頃	紙本墨画	額装	27.0×24.0	
22	須田国太郎	ばら	1945-50（昭和20-25）年	紙・水彩	額装	27.2×24.0	
23	須田国太郎	溪流の鷺	1942（昭和17）年	キャンバス・油彩	額装	38.0×45.5	
24	須田国太郎	樹に止まった鷺	制作年不詳	紙本墨画淡彩	額装	16.3×52.0	
25	須田国太郎	須田国太郎絵付け花瓶「鷺」	制作年不詳	陶器		高23.8口径8.7胴径15.0	2019年度新収蔵
26	須田国太郎	鷺	1948（昭和23）年	紙本墨画淡彩	額装	38.5×50.7	
27	須田国太郎	猛禽	1946（昭和21）年	紙本墨画淡彩	軸装	90.5×33.6	
28	須田国太郎	富士遠望	1943-44（昭和18-19）年	キャンバス・油彩	額装	45.0×52.6	
29	須田国太郎	月瀬平	1949（昭和24）年	キャンバス・油彩	額装	45.5×53.0	
30	須田国太郎	尾道風景	制作年不詳	紙本墨画	額装	31.7×42.7	
31	須田国太郎	厳島	1954（昭和29）年	紙・水彩	額装	44.2×61.8	

(3) 洋画家の墨の表現

32	萬鉄五郎	対話	1915（大正4）年	紙・墨	額装	69.0×47.8	
33	森田恒友	野菜帖	1933（昭和8）年	紙・水彩	額装	19.4×26.2	
34	南薫造	メバル	制作年不詳	紙・墨	額装	19.0×28.0	
35	岸田劉生	童女図（麗子像）	1929（昭和4）年	紙本墨画淡彩	額装	69.2×49.3	
36	霞光	鳥	1938（昭和13）年	紙・墨	額装	25.0×54.6	
37	中川一政	魚	制作年不詳	紙本彩色	額装	52.9×67.7	
38	香月泰男	トマト	制作年不詳	紙・墨・水彩・コンテ	額装	52.4×31.7	

所蔵品展Ⅰ 釉—うわぐすり—

会期 2019（平成31）年4月17日（水）～2019（令和元）年6月24日（月）

会場 松濤園 陶磁器館

関連事業

●ギャラリートーク

開催日時 2019 年（令和元）年5月19日（日）、6月16日（日）

各日とも、午前11時から御馳走一番館とあわせて案内

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」5月号、呉市 ○「市政だよりくれ」6月号、呉市 ○「旬刊旅行新聞」株式会社旅行新聞社、2019（平成31）年4月2日 ○「エリアプラス」中国新聞、2019（令和元）年5月23日 ○「あのまちこのまち イベント情報」『海陽彩都プラス』No.2、広島中央地域連携中枢都市圏

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通）

- ポスター B2判 10枚
- チラシ A4判 10,000部
- 出品目録 A4判（両面刷り）

目的

陶磁器の魅力の一つである釉（うわぐすり）について、古伊万里を始めとする所蔵品から紹介した。釉とは、陶磁器の表面に付着させるガラス質の被膜のこと。ほとんどの陶磁器が釉をかけて仕上げられている。釉をかける作業はおもに本焼成の前におこなわれる。反対に釉をかけないまま焼成する焼き締めという技法もあり、比較のため本展では無施釉のやきものも同時に展示した。釉をテーマとして、その魅力や種類を知り、より陶磁器に親しみを感じてもらうことを目的とした。

展示内容

（1）釉の魅力

低温焼成で釉を使わない土器から始まったやきものが、時代を経て釉を使うことで大きな変化を遂げた。器に耐久性や耐水性を与え、色による装飾効果の役目も果たしている。本展では釉の技法ごとに透明釉、錆釉、鉛釉、黄釉、瑠璃釉と分けて紹介した。また釉の下に絵付けされた染付と、釉の上に絵付けされた色絵の伊万里焼も紹介し、釉下彩の場合の器の表面の滑らかさや色絵と違って濃淡が表現できる点など紹介した。伊万里焼では17世紀中頃からさまざまな釉の技法が登場し、釉の成分による色彩変化や焼成温度による変化、釉のかかり具合などの変化による作品の多様な表現を紹介した。

（2）近現代作家による釉を使った表現

板谷波山、河井寛次郎、浜田庄司、中里無庵、加藤卓男など、近現代の陶芸界をけん引した作家たちが、釉を一つの手がかりとして自己表現していった点に注目して、作家の略歴とともにその作家が追及した釉の技法を近現代作家



展示風景



展示風景

13 名の作品から紹介した。河井寛次郎は浜田庄司とともに京都市陶磁器試験場で1万種に及ぶ釉の研究に励み、とくに深みのある赤い釉に興味を持ち、辰砂の研究に熱中し

た。河井の「紅彩壺」を展示し、扱いの難しい辰砂のぼかし方の研究を重ねて会得した技法を紹介するなどした。
(沼田綿子／小川英史)

松濤園 陶磁器館 所蔵品展Ⅰ「釉—うわぐすり—」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	資料名	産地・作家	時代・年代など	寸法（高）	寸法（口径）	寸法（その他）	所蔵
				（縦×横）cm			
（1）釉の魅力							
1	古備前 壺		16世紀後半 -17世紀	高 26.0	口径 12.8	底径 13.0	
2	常滑 壺			高 23.4	口径 10.3	底径 8.0	
3	古信楽 小壺			高 20.2	口径 10.8	底径 7.2×8.1	
4	白磁三耳付壺		朝鮮 中期	高 25.0	口径 19.1	底径 15.0	
5	白磁線彫蕪文皿		1630-40年代	高 2.5	口径 20.5	底径 7.0	
6	白磁捻花文鉢		1670-90年代	高 9.1	口径 22.5	底径 11.0	
7	白磁瓶		17世紀後半 -18世紀前半	高 25.5	口径 3.5	底径 9.7	
8	染付山水人物文皿		1610-30年代	高 5.0	口径 25.2	底径 10.8	
9	染付山水文輪花皿		1630-40年代	高 6.1	口径 25.6	底径 11.3	
10	染付山水唐人物文大瓶		1660-80年代	高 43.8	口径 9.0	底径 13.5	
11	染付楼閣山水文獅子鈕蓋付鉢		1670-90年代	高 33.1	口径 31.5	底径 15.5	
12	染付山水花鳥文皿		1680-1700年代	高 3.7	口径 27.5	底径 16.7	
13	色絵柘榴文大皿		1640-50年代	高 7.0	口径 32.2	底径 19.8	
14	色絵柏葉文大皿		1650-60年代	高 9.4	口径 38.4	底径 16.7	
15	銚釉染付双鶴文輪花小皿		1640-50年代	高 3.9	口径 14.0	底径 6.0	
16	染付鉄釉椿文壺		1640-50年代	高 17.0	口径 7.7	底径 8.8	
17	銚釉瓶		1650-70年代	高 14.0	口径 1.6	底径 5.0	
18	銚釉瓢形瓶		17世紀後半	高 21.5	口径 2.0	底径 6.5	
19	銚釉色絵七宝文小皿		1650-60年代	高 5.0	口径 15.5	底径 5.4	
20	銚釉小皿		1650-70年代	高 4.2	口径 15.5	底径 7.1	
21	銚瑠璃釉掛分け小皿		1640-60年代	高 4.3	口径 14.2	底径 5.0	
22	飴釉面取瓶		朝鮮 後期	高 27.9	口径 4.0	底径 9.3	
23	飴釉面取花入		朝鮮 後期	高 19.3	口径 5.1	底径 6.5	
24	黄釉桃文輪花小皿		1670-90年代	高 3.3	口径 15.5	底径 9.4	
25	青磁菊文瓶		高麗	高 30.7	口径 4.0	底径 10.7	
26	青磁桐文三足付皿		1650-70年代	高 3.6	口径 17.3		
27	青磁瑠璃釉茶筌形瓶		1650-70年代	高 27.0	口径 5.4	底径 8.7	
28	青磁牡丹文長皿		1650-70年代	高 2.6	口径 18.0×8.7	底径 13.5×4.7	
29	青磁染付曳舟牡丹文長皿		1650-60年代	高 2.4	口径 18.1×8.7	底径 14.0×5.1	
30	青磁草花文大皿	肥前波佐見	1670-90年代	高 8.5	口径 37.5	底径 14.0	
31	青磁染付梅鷺文三足付皿	肥前波佐見	1670-1700年代	高 7.5	口径 30.0	底径 10.0	
32	瑠璃釉洲浜形皿（祥瑞）		明 末期	高 3.5	口径 220×200	底径 18.8×16.3	
33	瑠璃銚釉瓶		1640-50年代	高 23.0	口径 5.0	底径 6.8	
34	瑠璃釉網代蕪文角小皿		1650-70年代	高 2.5	口径 138×110	底径 8.6×5.3	
35	瑠璃釉丸文瓶		17世紀後半 -18世紀初	高 21.2	口径 4.2	底径 9.2	
36	薄瑠璃釉染付桜文折紙形皿		1670-80年代	高 3.0	口径 175×135	底径 10.2×6.6	
37	色絵花鳥文角瓶		1670-90年代	高 32.6	口径 8.5	底径 10.7	
38	色絵花卉文六角壺		1670-90年代	高 31.5	口径 11.0	底径 13.5	
39	色絵花卉文八角瓶		1670-90年代	高 23.8	口径 1.9	底径 9.2	
40	色絵牡丹獅子文輪花皿		1670-1700年代	高 3.0	口径 18.0	底径 11.3	
41	色絵栗鶉梅竹文皿		1670-90年代	高 3.7	口径 18.4	底径 11.8	

42	色絵花卉文八角鉢		1670-90 年代	高 10.1	口径 21.1	底径 10.1	
43	色絵枝垂桜文木瓜形皿		1670-90 年代	高 5.7	口径 244×213	底径 17.8×14.3	
44	染付柘榴文大皿		1700-50 年代	高 8.5	口径 31.0	底径 16.4	
45	色絵薔薇水仙文大皿		1700-30 年代	高 8.3	口径 30.2	底径 16.5	
46	青磁染付宝尽し文大皿		1690-1750 年代	高 8.4	口径 32.5	底径 15.9	
47	色絵芥子文皿		1690-1730 年代	高 5.8	口径 20.3	底径 11.0	
48	色絵霞木犀文皿		1690-1730 年代	高 5.4	口径 20.4	底径 11.2	
49	染付木犀文小皿		18 世紀前半	高 4.3	口径 14.7	底径 7.9	
50	青磁染付大根文小皿		1670-90 年代	高 4.0	口径 15.5	底径 8.2	
51	色絵牡丹如意頭文小皿		1690-1730 年代	高 4.5	口径 15.0	底径 8.1	
52	色絵蔓薔薇文小皿		1700-30 年代	高 4.0	口径 15.0	底径 7.3	
53	青磁瑠璃釉小皿		17 世紀末 -18 世紀前半	高 4.5	口径 15.0	底径 7.9	

(2) 近現代作家による釉を使った表現

54	紅彩壺	河井寛次郎		高 17.2		径 18.5	
55	柿釉丸紋花瓶	浜田庄司		高 30.9		径 26.1	
56	幕釉赤茶碗	小川長楽 (二代)		高 8.2	口径 12.3		
57	萩建水	田原陶兵衛 (十二代)		高 9.8	口径 155×148		
58	朝鮮唐津叩き花入	中里無庵		高 23.1		径 15.8	
59	灰失透指頭文水指	清水卯一		高 19.3		底径 9.5 径 17.0	
60	ベルシャ三彩人物文鉢	加藤卓男		高 5.2	口径 19.5		
61	碧明耀彩飾壺	徳田八十吉 (三代)		高 28.3		径 18.3	
62	青磁下蕪花瓶	板谷波山		高 23.5		径 15.2	
63	青磁大鉢	三浦小平二		高 16.9		径 28.7	
64	紫紅釉チャドリ茶碗	三浦小平二		高 8.5	口径 11.5		
65	青磁茶碗	藤原雄		高 7.2	口径 113×115		
66	青磁香炉	川瀬忍		高 37.1		径 14.0	
67	青磁輪花壺	川瀬忍		高 23.5		径 31.2	
68	柑釉茶碗	今井政之	1998 (平成 10) 年	高 8.4	口径 14.6		

所蔵品展Ⅱ 器に見る水のある景色

会期 2019（令和元）年6月26日（水）～9月2日（月）
会場 松濤園 陶磁器館

関連事業

- ワークショップ「うちわをつくろう！」
2019（令和元）年8月1日（木）～8月18日（日）
- ギャラリートーク
開催日時 2019（令和元）年7月7日（日）、8月4日（日）
各日とも、午前11時から御馳走一番館とあわせて案内

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」7月号、呉市 ○「市政だよりくれ」8月号、呉市

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通）

- ポスターB2判 10枚
- チラシA4判 10,000部
- 出品目録A4判（両面刷り）

目的

本展では、江戸時代につくられた伊万里焼の中から「水」をテーマに、涼を感じる作品を中心に紹介した。あわせて、伊万里焼に影響を与えた中国磁器も展示した。日本初の磁器として17世紀初めに肥前（佐賀県・長崎県）で誕生した伊万里焼は、当時人気の高かった中国製の磁器に描かれた山水文を模倣して多く絵付けがされた。染付の青色と青みがかった器の表面に水のある風景が描かれたやきものをならべ、涼やかな趣がある展示を目指した。同時開催として、近現代作家による水に関連した文様や形のやきものを紹介した。

展示内容

（1）国内産陶磁器に見る水にまつわる風景・かたち

伊万里焼では、江戸時代を通して好まれ、器に描かれた絵に山水がある。屹立する山を背景に、楼閣や水辺にたたずむ人物、小舟などが描かれた風景は、伊万里焼の誕生以前からもたらされていた中国磁器の影響で、伊万里焼はこれに倣って描かれた。また水を文様化して表現した伊万里焼も紹介した。固有の形態をもたない水を流水文、波文、渦文、雨降り文などそれぞれの動きを捉えて表現し、青海波文という打ち寄せる波を表現した文様は、三分の一くらいの同心円を連続させて描いた文様で、17世紀中頃以降の伊万里焼に多く見られることなどを紹介した。また水にまつわる生き物として、魚や水鳥などが日本の四季の風景と組み合わせられて描かれている作例を紹介した。

（2）中国・朝鮮磁器に見る水にまつわる文様

古染付とよばれる明末期につくられた染付磁器と、天啓赤絵とよばれる明代末期の天啓年間（1621-27）に焼かれた染付下地の赤絵、朝鮮後期の染付磁器を展示した。草創期の伊万里焼は、大量に輸入していた古染付の文様や器の形に影響を受け共通点が多く見られ、水に関する文様で、古染付には魚と網を取り合わせて描いたものがあるが、伊



展示風景



展示風景

万里焼では単独で網目だけが描かれるものや横幅の間隔の狭まったもの、結び目のあるものなどさまざまなバリエーションがあることなどを紹介した。

(3) 近現代作家に見る水にまつわるやきもの

水をモチーフにした作品や、作品から水を感じさせるものを選び、近現代作家6名の作品を紹介した。中里太郎右

衛門（十三代）の「叩き唐津三島辰砂鉄砂魚文壺」は、先代から受け継いだ伝統の技法と、新たに発見した東南アジアの製陶法を組み合わせで作られ、故郷の玄海でスケッチした魚が描かれているなど、それぞれの作家の紹介とともに作品を紹介した。

(沼田綿子／小川英史)

松濤園 陶磁器館 所蔵品展Ⅱ 「器に見る水のある景色」 出品リスト

* 無表記は財団所蔵

No.	資料名	産地・作家	時代・年代など	寸法（高）	寸法（口径）	寸法（その他）	所蔵
				（縦×横）cm			

(1) 国内産陶磁器に見る水にまつわる風景・かたち

1	染付波兎雲文皿		1630-40 年代	高 3.5	口径 20.5	底径 7.8	
2	染付沢瀉文皿		1640-50 年代	高 3.0	口径 20.7	底径 8.5	
3	色絵山水文角皿		1640-50 年代	高 3.0	口径 135×118	底径 8.0	
4	色絵山水文角小皿		1650-60 年代	高 2.7	口径 125×112	底径 7.9×6.7	
5	色絵葦雁文角小皿		1650-60 年代	高 3.0	口径 125×125	底径 7.1×6.6	
6	色絵丸文瓢形小皿		1640-50 年代	高 2.5	口径 135×130	底径 8.5×8.3	
7	染付貝千鳥山水文皿		1650-70 年代	高 2.0	口径 21.0	底径 13.5	
8	染付鮎文皿		1650-70 年代	高 2.6	口径 21.0	底径 13.1	
9	染付鷺蓮文皿		1660-70 年代	高 3.0	口径 20.4	底径 11.0	
10	染付貝文瓶		1660-80 年代	高 28.5	口径 3.7	底径 10.5	
11	染付網花文瓶		1660-80 年代	高 26.5	口径 6.0	底径 7.5	
12	染付楼閣山水文壺		1650-70 年代	高 23.8	口径 10.8	底径 11.6	
13	染付楼閣山水文壺		1660-70 年代	高 27.9	口径 9.3	底径 12.6	
14	染付傘人物文輪花大皿		1680-1700 年代	高 7.5	口径 38.0	底径 22.7	
15	染付鯉滝登り文大皿		1670-90 年代	高 11.5	口径 47.0	底径 24.5	
16	染付波鷺文輪花大皿		1680-1710 年代	高 8.5	口径 40.5	底径 21.8	
17	染付山水文皿		1670-90 年代	高 2.5	口径 18.5	底径 10.8	
18	染付花唐草文舟形皿		1670-90 年代	高 4.4	口径 240×109	底径 16.6×6.0	
19	染付雨降り文皿		1670-90 年代	高 4.2	口径 18.5	底径 11.2	
20	染付桐に井戸文皿		1670-90 年代	高 3.6	口径 21.3	底径 14.0	
21	染付岩流水文水注		1670-80 年代	高 19.3	口径 3.4×3.1	底径 7.5×6.5	
22	染付船人物文角猪口		18 世紀頃	高 6.5	口径 7.0	底径 6.1	
23	染付鮎柘榴文大鉢		1690-1730 年代	高 17.0	口径 37.0	底径 16.6	
24	染付芙蓉手人物文大皿		1680-1710 年代	高 8.2	口径 52.0	底径 24.0	
25	染付芙蓉手鮎文大皿		1680-1700 年代	高 6.0	口径 32.4	底径 18.2	
26	色絵山水文十二角皿		1700-30 年代	高 5.0	口径 26.5	底径 14.7	
27	色絵魚鳥文皿		1700-40 年代	高 3.5	口径 21.5	底径 11.7	
28	色絵手付樽形瓶		1730-60 年代	高 19.1	口径 1.8	底径 12.2	
29	古伊万里様式向付		幕末	高 7.0	口径 8.5		
30	染錦天保伊万里角面取皿		幕末	高 3.5	口径 165×140		
31	色絵扇面屏風花卉文大皿		19 世紀後半	高 5.5	口径 45.0	底径 8.0	
32	染付流水鷺文十角皿		明治以降	高 3.3	口径 146×145		
33	色絵花鳥文角瓶		1670-90 年代	高 32.6	口径 8.5	底径 10.7	
34	色絵花卉文六角壺		1670-90 年代	高 31.5	口径 11.0	底径 13.5	
35	色絵花卉文八角瓶		1670-90 年代	高 23.8	口径 1.9	底径 9.2	
36	色絵鹿紅葉文舟形変形皿		1680-1700 年代	高 3.9	口径 227×135	底径 14.6×8.8	
37	色絵裏割唐子文八角皿		1670-90 年代	高 4.2	口径 22.7	底径 11.8	

38	色絵栄螺形三足鉢		1670-1700 年代	高 9.5		底径 22.0×17.0	
39	色絵縞水車文碗		1680-1700 年代	高 6.2	口径 10.5	底径 4.5	
40	染付柘榴文大皿		1700-50 年代	高 8.5	口径 31.0	底径 16.4	
41	色絵薔薇水仙文大皿		1700-30 年代	高 8.3	口径 30.2	底径 16.5	
42	青磁染付宝尽し文大皿		1690-1750 年代	高 8.4	口径 32.5	底径 15.9	
43	染付網文耳付猪口		1650-70 年代	高 10.3	口径 7.3×4.3	底径 3.5×3.2	
44	色絵椿文小皿		1690-1730 年代	高 4.5	口径 15.2	底径 8.2	
45	色絵水草文小皿		1700-30 年代	高 4.5	口径 15.0	底径 8.0	
46	染付朝顔文小皿		1690-1730 年代	高 4.5	口径 14.6	底径 8.0	
47	色絵青海波水葵文小皿		1690-1730 年代	高 4.3	口径 15.0	底径 8.0	
48	色絵菊流水文小皿		18 世紀中葉 - 後半	高 4.8	口径 15.5	底径 8.0	
49	平戸染付波千鳥手桶鉢	肥前平戸	明治末期	高 15.4	口径 18.5		
50	染付網目文皿	筑前須恵焼	19 世紀前半 - 中葉	高 4.4	口径 23.8	底径 15.3	
51	古備前 大壺（海揚げ）		16 世紀後半 - 17 世紀	高 31.5	口径 21.0	底径 18.0	

(2) 中国・朝鮮陶磁器に見る水にまつわる文様

52	染付馬文馬形向付（古染付）		明 末期	高 3.7	口径 166×103		
53	染付牛文牛形向付（古染付）		明 末期	高 4.1	口径 178×103		
54	染付魚文魚形向付（古染付）		明 末期	高 3.1	口径 177×103		
55	染付山水文扇形向付（古染付）		明 末期	高 3.5	口径 193×123		
56	染付吹墨法螺貝形向付（古染付）		明 末期	高 4.8	口径 190×90		
57	染付山水文葉形向付（古染付）		明 末期	高 3.7	口径 193×102		
58	染付鯉水草文八角皿（古染付）		明 末期	高 4.5	口径 20.0	底径 10.5	
59	染付網目海老文茶碗（古染付）		明 末期	高 7.7	口径 108×95	底径 6.5	
60	色絵網目蟹文小皿（天啓赤絵）		明 末期	高 3.5	口径 10.4	底径 4.0	
61	染付鯉文鉢		朝鮮 後期	高 8.1	口径 17.1	底径 8.3	

(3) 近現代作家に見る水にまつわるやきもの

62	皮鯨手茶碗	浜田庄司		高 7.5	口径 15.5		
63	叩き唐津三島辰砂鉄砂魚文壺	中里太郎右衛門（十三代）		高 23.2		径 20.8	
64	萩焼手桶花入	田原陶兵衛（十二代）		高 28.1	口径 8.2×9.6		
65	備前貝形皿	金重陶陽		高 3.6	口径 152×175		
66	伊部洲浜鉢	金重道明		高 6.0		径 25.5×25.0	
67	備前花器「海から」	金重晃介	1992（平成4）年頃	高 35.0		径 37.5×40.5	

所蔵品展Ⅲ 金色に輝く古伊万里一所蔵名品展一

会期 2019(令和元)年9月4日(水)～11月11日(月)
会場 松濤園 陶磁器館

関連事業

○ギャラリートーク

開催日時 2019(令和元)年9月8日(日)、10月6日(日)
各日とも、午前11時から御馳走一番館とあわせて案内

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」9月号、呉市 ○「市政だよりくれ」10月号、呉市

印刷物(ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通)

- ポスター B2判 10枚
- チラシ A4判 10,000部
- 出品目録 A4判(両面刷り)

目的

古代よりその希少性と神々しい輝きで、権力の象徴として用いられてきた金は、伊万里焼にも用いられた。17世紀中頃、初代柿右衛門が磁器への金彩を試みて成功したとされる。その後金彩の技術開発は本格化し、17世紀末には豪華な意匠の伊万里金襴手が誕生した。本展示では、金彩が誕生した頃の伊万里焼と、輸出全盛期につくられた海外向けの伊万里焼、国内向けにつくられた伊万里焼それぞれを展示し、さまざまな金彩や金属装飾を施された伊万里焼を紹介した。その他に、生誕120年を記念して備前焼の名工・藤原啓の作品と、その長男で同じく備前焼作家の藤原雄の作品を紹介した。

展示内容

(1) 金彩のはじまり

磁器に金彩を施す技法が見られる、1650年代末頃の染付や瑠璃釉に絵付けされた金彩の作品を紹介した。江戸時代初期に誕生した伊万里焼は、1647(正保4)年には初代柿右衛門が色絵法の開発に成功し、1650年代には瑠璃釉や青磁釉など多釉彩磁器の技法も開発し、ますます陶技が広がった。さらには金彩の焼き付け方法も開発した。この時期ヨーロッパへの輸出が計画され、伊万里焼の大量輸物生産が始まり、17世紀後半には輸出全盛期を迎え、ヨーロッパの求めに応じた柿右衛門様式が誕生した。このコーナーでは、中国磁器をモデルとしたものから和様への意匠が増えた、おもに寛文年間(1661-73)につくられた、富士山をモチーフとした意匠に金彩が施された皿などを展示し、初期色絵から柿右衛門様式へ移行する時期の伊万里焼を展望した。

(2) 金襴手の流行

ヨーロッパへの輸出で伊万里焼は大きく発展し、その技術が全盛期を迎えた17世紀末の元禄年間(1688-1704)の頃、伊万里金襴手とよばれる染付や色絵に金彩をふんだんに用いた豪華な様式の伊万里焼が生まれた。伊万里金襴手は、中国明時代嘉靖年間(1522-66)に景德鎮窯で焼造



展示風景



展示風景

された古赤絵金襴手に倣って作られた。国内向けとヨーロッパ向けでは作風が大きく異なり、国内向けの代表作は鉢を中心とした型物とよばれるもので、西欧向けに輸出されたものは大壺・大蓋物・大瓶などが中心で、それぞれに大きく様相の異なった伊万里焼を紹介した。

(3) 生誕 120 年 備前焼の名工・藤原啓

生誕 120 年を記念して、備前焼の名工で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された藤原啓（1899-1983）の作品と、同じく人間国宝であった子息の藤原雄（1932-2001）

の作品を紹介した。1941（昭和 16）年頃、藤原啓は同じ岡山出身の金重陶陽から備前焼の焼成方法を学び、40 歳を過ぎてから作陶をはじめて 15 年目に東京でデビュー、国内外の陶芸展に精力的に出品を重ね、1970（昭和 45）年国の重要無形文化財「備前焼」保持者に認定された。大壺などの大作から、徳利や茶碗、水指など曲線的な造形の美しさの中に文学を志した青年時代の叙情的な世界が込められた作品を紹介した。

（小川英史）

松濤園 陶磁器館 所蔵品展Ⅲ 「金色に輝く古伊万里―所蔵名品展―」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	資料名	産地・作家	時代・年代など	寸法（高）	寸法（口径）	寸法（その他）	所蔵
				（縦×横）cm			

(1) 金彩のはじまり

1	染付松文瓶		1630-40 年代	高 39.7	口径 4.9	底径 10.0	
2	染付福字文瓶		1610-40 年代	高 18.3	口径 3.5	底径 5.5	
3	色絵菊松文大皿		1650-60 年代	高 8.6	口径 33.8	底径 16.6	
4	色絵花鳥文皿		1640-50 年代	高 3.0	口径 20.6	底径 10.5	
5	色絵幾何学地文軍配形小皿		1640-50 年代	高 2.7	口径 155×100	底径 9.3×5.0	
6	色絵幾何学地文軍配形小皿		1640-50 年代	高 2.6	口径 150×93	底径 9.2×5.4	
7	染付金銀彩宝文皿		1655-60 年代	高 2.7	口径 21.8	底径 13.7	
8	金銀彩雁文皿		1655-60 年代	高 2.5	口径 21.7	底径 12.2	
9	金銀彩菊文富士山形皿		1655-60 年代	高 2.0	口径 180×100	底径 10.1×4.5	
10	金銀彩山水文富士山形皿		1655-60 年代	高 2.5	口径 177×94	底径 9.1×4.5	
11	青磁色絵金銀彩富士山形皿		1655-60 年代	高 3.0	口径 177×105	底径 10.2×6.0	
12	瑠璃釉金銀彩唐人物文変形皿		1655-60 年代	高 2.5	口径 170×110	底径 12.2×7.2	
13	瑠璃釉金銀彩富士山雲文四足角皿		1655-60 年代	高 4.0	口径 19.0		
14	色絵牡丹文皿		1670-90 年代	高 5.0	口径 21.3	底径 13.2	
15	色絵梅菊文輪花皿		1680-1700 年代	高 3.5	口径 19.2	底径 11.5	
16	色絵梅鳥団龍文鉢		1680-1700 年代	高 9.9	口径 21.0	底径 10.5	
17	色絵草花文蓋付香炉		1670-90 年代	高 12.0		径 18.0	

(2) 金襴手の流行

18	色絵獅子文鉢		1700-40 年代	高 7.8	口径 18.5	底径 8.8	
19	色絵鳳凰文皿		1690-1730 年代	高 6.5	口径 21.5	底径 13.0	
20	色絵牡丹寿字文皿		1700-30 年代	高 8.5	口径 27.0	底径 14.5	
21	色絵鳳凰文十六角大皿		1700-30 年代	高 7.0	口径 33.5	底径 18.8	
22	薄瑠璃釉金銀彩花鳥文変形小皿		1655-70 年代	高 2.6	口径 148×129	底径 9.6×7.4	
23	色絵花鳥婦人文大皿		1700-30 年代	高 10.2	口径 54.7	底径 26.5	
24	色絵花盆文大皿		1700-30 年代	高 9.0	口径 55.5	底径 27.5	
25	色絵桜花鷺文大皿		1700-40 年代	高 8.0	口径 48.5		
26	色絵葡萄栗鼠文角瓶		1700-30 年代	高 22.0	口径 3.1	底径 9.5	
27	色絵菊欧字文手付水注		18 世紀前半	高 16.5	口径 2.2	底径 5.5	
28	色絵山水牡丹文大瓶		1690-1710 年代	高 60.4	口径 19.5	底径 19.8	
29	色絵梅樹庭園文蓋付大壺		1700-30 年代	高 64.0	口径 18.0	底径 19.2	
30	色絵窓絵山水文蓋付大壺		1700-30 年代	高 60.0	口径 16.1	底径 19.0	
31	色絵楼閣牡丹文蓋付大壺		1700-40 年代	高 49.2	口径 9.0	底径 10.0	
32	色絵荒磯文皿		1700-40 年代	高 8.0	口径 25.1	底径 12.8	
33	色絵花鳥文角瓶		1670-90 年代	高 32.6	口径 8.5	底径 10.7	

34	色絵花卉文六角壺		1670-90 年代	高 31.5	口径 11.0	底径 13.5	
35	色絵花卉文八角瓶		1670-1690 年代	高 23.8	口径 1.9	底径 9.2	
36	色絵竹虎文皿		1670-90 年代	高 4.0	口径 22.5	底径 14.8	
37	色絵柘榴柴垣鳥文皿		1670-90 年代	高 4.0	口径 25.0	底径 16.0	
38	色絵梅鳳凰団龍文八角鉢		1670-90 年代	高 11.0	口径 25.2	底径 11.5	
39	色絵栗鶉文八角皿		1670-90 年代	高 5.0	口径 25.5	底径 13.0	
40	染付柘榴文大皿		1700-50 年代	高 8.5	口径 31.0	底径 16.4	
41	色絵薔薇水仙文大皿		1700-30 年代	高 8.3	口径 30.2	底径 16.5	
42	青磁染付宝剣文大皿		1690-1750 年代	高 8.4	口径 32.5	底径 15.9	
43	染付菊文猪口		1690 年 -18 世紀前半	高 6.5	口径 11.5	底径 4.0	
44	色絵霞木犀文皿		1690-30 年代	高 5.4	口径 20.4	底径 11.2	
45	色絵芥子文皿		1690-1730 年代	高 5.8	口径 20.3	底径 11.0	
46	染付秋草文皿		1700-50 年代	高 6.0	口径 20.5	底径 11.1	
47	染付木犀文小皿		18 世紀前半	高 4.3	口径 14.7	底径 7.9	
48	色絵菊流水文小皿		18 世紀中葉 - 後半	高 4.8	口径 15.5	底径 8.0	
49	青磁水指		19 世紀前半 - 中葉	高 18.0	口径 26.0		

(3) 生誕 120 年 備前焼の名工・藤原啓

50	備前緋襷大皿	藤原啓		高 9.3	口径 36.5		
51	備前小德利	藤原啓		高 7.3		径 5.1	
52	備前德利	藤原啓		高 14.4		径 8.8	
53	備前壺	藤原啓		高 23.5		径 20.0	
54	備前緋襷鉢	藤原啓		高 5.7	口径 23.7	底径	
55	備前水指	藤原啓		高 18.1		径 23.0	
56	備前茶碗	藤原啓		高 8.5	口径 11.5		
57	備前水指	藤原雄		高 8.5		径 25.5	
58	備前搦茶水指	藤原雄		高 18.2		径 18.8×19.1	
59	備前搦茶花器	藤原雄		高 34.5		径 29.0×30.0	
60	備前花入	藤原雄		高 29.5		径 11.3×12.0	
61	備前長方皿	藤原雄		高 7.8	口径 330×540		
62	備前板皿	藤原雄		高 3.0	口径 338×345		

所蔵品展Ⅳ 萩と伊万里

会期 2019（令和元）年11月13日（水）～2020（令和2）年1月27日（月）

会場 松濤園 陶磁器館

関連事業

○ギャラリートーク

開催日時 2019（令和元）年11月17日（日）、12月1日（日）、2020（令和2）年1月12日（日）

各日とも、午前11時から御馳走一番館とあわせて案内

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」11月号、呉市 ○「市政だよりくれ」12月号、呉市 ○「市政だよりくれ」1月号、呉市 ○『海陽彩都プラス』No.3、広島中央地域連携中枢都市圏

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通）

- ポスターB2判 10枚
- チラシA4判 10,000部
- 出品目録A4判（両面刷り）

目的

萩焼と伊万里焼を紹介した。朝鮮人陶工によって、一方は桃山時代末、もう一方は江戸時代初期から始められた伊万里焼、萩焼のそれぞれの魅力を紹介した。

伊万里焼は、朝鮮半島から渡来した李参平が、1610年代に陶石を佐賀県有田にある泉山で発見したことから始まった日本最初の磁器である。萩焼は桃山期に渡来した李勺光と弟・敬（初代坂高麗左衛門）を中心に、現在の山口県萩市で創始されたと伝えられ、江戸前期には長門市に、明治時代には山口市にも窯ができるなど、現在では広く山口県全域に窯がある。それぞれのやきものがどのように継承され、どんな新しい表現を生み出したか、古陶磁と近代の名品を同時に展示し、表現や様式の展開を紹介した。

展示内容

（1）伊万里の変遷

伊万里焼が誕生した17世紀初頭から約100年のあいだに完成された初期伊万里、柿右衛門様式、古九谷様式などの様式の展開を時代ごとに紹介した。

1610～30年代頃の初期伊万里では、絵付けの前の素焼きをせず生掛け施釉をおこない、中国様式の絵付けを基調としつつ和様も取り入れた染付がなされている。1660～90年代年頃の柿右衛門様式は、上絵具をより発色よくさせるために乳白色の釉を開発し、鮮やかな赤を中心に絵付けされている。さらに1690～1740年代頃に登場した金襴手様式は、絵付けした後に金を焼き付ける豪華絢爛なやきものとなった。金襴手様式の伊万里焼は、輸出先の注文により大壺やひげ皿、水注などが大量に作られた。のちに再び国内向けにつくられるようになると、食器を中心に輸出用と比べると大きなものは見られず、手元で使う器として裏側まで丁寧に絵付けがなされたことなど、それぞれの様式の違いを紹介した。

（2）現代に受け継がれる萩焼、伊万里焼の伝承



展示風景



展示風景

萩焼は朝鮮渡来の李勺光・敬兄弟が開祖と伝えられ、毛利輝元が1604（慶長9）年に萩に入府する際に李勺光が松本村（現在の萩市）で開窯し、1657（明暦3）年には分かれて深川御用窯が誕生、さらに三輪窯と佐伯窯が誕生し新たに御用窯となった。松本窯と深川窯の系譜が現在まで継承されている。萩藩が創始した松本御用窯は、坂高麗左衛門、三輪休雪、深川御用窯は坂倉新兵衛、田原陶兵衛、坂田泥華らがそれぞれ開窯以来の伝統を受け継いでいる。茶陶萩焼のブランドイメージを全国に知らしめた坂倉新兵衛（十二代）、萩焼初の人間国宝となった三輪休雪（十代）、

2人目の人間国宝となった弟の三輪休雪（十一代）らの作品を紹介した。また江戸期の鍋島藩窯の御用絵師を務めた今泉今右衛門の今泉今右衛門（十三代）と、赤絵創始者として鍋島藩から柿右衛門の名称を贈られたと伝えられる酒井田柿右衛門の酒井田柿右衛門（十三代）の作品もあわせて紹介した。

（小川英史）

松濤園 陶磁器館 所蔵品展Ⅳ 「萩と伊万里」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	資料名	産地・作家	時代・年代など	寸法（高）	寸法（口径）	寸法（その他）	所蔵
				（縦×横）cm			
（1）伊万里の変遷							
1	染付山水文輪花皿		1630-40年代	高 6.1	口径 25.6	底径 11.3	
2	染付松文蓋付壺		1640-60年代	高 22.0	口径 10.0	底径 8.7	
3	色絵扇重草花毘沙門亀甲文皿		1650年代頃	高 3.0	口径 22.0	底径 12.5	
4	色絵椿文大皿		1650年代頃	高 8.0	口径 38.0	底径 15.5	
5	色絵柘榴文大皿		1640-50年代	高 7.0	口径 32.2	底径 19.8	
6	色絵雁窓絵牡丹文皿		1640-50年代	高 5.4	口径 25.6	底径 11.8	
7	染付芙蓉手牡丹文大皿		1650-60年代	高 6.5	口径 30.0	底径 14.9	
8	染付松梅文壺		1650-60年代	高 28.1	口径 11.7	底径 13.5	
9	染付寒山拾得文壺		1650-80年代	高 30.4	口径 14.7	底径 15.0	
10	染付花卉文水注		1650-70年代	高 13.0	口径 8.8	底径 10.0	
11	染付山水文水注		1650-70年代	高 13.8	口径 8.5	底径 9.5	
12	色絵芙蓉手花鳥文大皿		1655-60年代	高 6.0	口径 30.6	底径 14.9	
13	色絵草花文角瓶		1660-80年代	高 20.6	口径 3.5	底径 8.8	
14	染付花鳥文大皿		1670-90年代	高 6.7	口径 30.2	底径 16.6	
15	染付唐人物文蓋付六角壺		1670-90年代	高 31.0	口径 11.8	底径 10.8	
16	染付雪輪唐草文段重瓶		1680-1700年代	高 24.7	口径 3.2	底径 12.7	
17	色絵花盆文皿		1700-30年代	高 3.5	口径 22.0	底径 11.9	
18	色絵花盆文皿		18世紀前半	高 4.0	口径 24.0	底径 13.0	
19	色絵獅子文皿（小）		1700-40年代	高 4.0	口径 24.5	底径 15.7	
20	色絵獅子文皿（大）		1700-40年代	高 5.5	口径 31.0	底径 19.2	
21	染付鶴宝尽し文壺		1700-40年代	高 32.4	口径 14.0	底径 14.0	
22	色絵婦人像		1670-90年代	高 39.3		径 14.3×11.8	
23	色絵婦人像		1670-90年代	高 39.2		径 13.3×12.2	
24	色絵壺持ち婦人像		1680-1700年代	高 29.6		径 9.5×9.5	
25	色絵布袋置物		1670-1710年代	高 22.0		径 19.0×16.0	
26	色絵梅唐草文輪花鉢		1680-1700年代	高 7.5	口径 20.0	底径 11.6	
27	色絵鶴文十二角皿		1670-90年代	高 4.0	口径 25.0	底径 15.3	
28	色絵獅子置物		1670-1700年代	高 17.0	径 15.0×9.5		
29	染付柘榴文大皿		1700-50年代	高 8.5	口径 31.0	底径 16.4	
30	色絵薔薇水仙文大皿		1700-30年代	高 8.3	口径 30.2	底径 16.5	
31	青磁染付宝尽し文大皿		1690-1750年代	高 8.4	口径 32.5	底径 15.9	
32	色絵蔦梅文変形皿		1640-50年代	高 3.0	口径 17.0×14.0	底径 9.5×7.4	
33	色絵花唐草文小皿		1690年-1730年代	高 4.3	口径 15.0	底径 8.0	
34	色絵蔓薔薇文小皿		1700-30年代	高 4.0	口径 15.0	底径 7.3	

35	色絵芥子文皿	1690-1730 年代		高 5.8	口径 20.3	底径 11.0	
36	色絵柴垣椿文皿	18 世紀前半 - 中葉		高 5.1	口径 20.3	底径 11.0	
37	染付椿文皿	1690-1740 年代		高 4.5	口径 20.3	底径 10.7	
38	染付菊文猪口	1690 年 -18 世紀前半		高 6.5	口径 11.5	底径 4.0	

(2) 現代に受け継がれる萩焼、伊万里焼の伝承

39	色絵桜楓文皆具	酒井田柿右衛門 (十三代)		(水指) 高 164 (蓋置) 高 45 (杓立) 高 182 (建水) 高 87		径 17.0 径 5.5 径 9.2 径 15.0	
40	色絵吹墨草花更紗文花瓶	今泉今右衛門 (十三代)		高 28.7		径 23.0	
41	色絵薄墨石榴文飾皿	今泉今右衛門 (十三代)		高 5.1	口径 28.7		
42	色絵吹墨蘭文飾皿	今泉今右衛門 (十三代)		高 2.8	口径 18.1		
43	窯変筒花瓶	吉賀大眉		高 24.7		径 9.5	
44	広口線文花器	吉賀大眉		高 27.5	口径 18.0		
45	萩茶碗	田原陶兵衛 (十一代)		高 9.3	口径 112×118		
46	萩茶碗 銘「坂」	田原陶兵衛 (十二代)		高 7.8	口径 12.7		
47	萩灰被壺花入	坂倉新兵衛 (十二代)		高 26.8		径 26.7	
48	萩茶碗	坂倉新兵衛 (十五代)		高 8.0	口径 14.1		
49	萩白釉水指	坂田泥華 (十三代)		高 14.0		径 26.7	
50	萩片口平水指	三輪休雪 (十代) 休和		高 10.8		径 35.1	
51	萩茶入	三輪休雪 (十代) 休和		高 8.2		径 7.8	
52	萩花入	三輪休雪 (十代) 休和		高 29.6		径 11.1	
53	鬼萩茶碗	三輪休雪 (十一代) 寿雪		高 11.1	口径 13.8		
54	萩茶碗 (割高台)	三輪休雪 (十一代) 寿雪		高 15.4	口径 9.7		寄託
55	萩水指	三輪休雪 (十一代) 寿雪		高 18.1		径 19.7	
56	白萩灰被水指	三輪休雪 (十一代) 寿雪		高 16.3		径 22.5	寄託
57	萩瓦形皿	三輪休雪 (十一代) 寿雪		高 5.3	口径 23.1×29.3		
58	白萩茶碗	三輪龍氣生 (十二代) 休雪		高 8.5	口径 14.4		
59	初咲碗	三輪龍氣生 (十二代) 休雪		高 10.0	口径 10.8		
60	萩蓋物	三輪龍氣生 (十二代) 休雪		高 12.7	口径 37.3×49.1		
61	白嶺	三輪龍氣生 (十二代) 休雪		高 20.3		径 12.4×28.0	
62	卑弥呼	三輪龍氣生 (十二代) 休雪		高 12.8		径 10.0×25.0	
63	古萩 茶碗	17 世紀		高 8.2	口径 120×130	底径 6.0	

所蔵品展Ⅴ

美濃焼

同時
開催

古伊万里コレクション「花の彩り」

会期 2020（令和2）年1月29日（水）～4月6日（月）

会場 松濤園 陶磁器館

*2020（令和2）年3月9日（月）から5月10日（日）

まで、新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館

関連事業

○ギャラリートーク

開催日時 2020（令和2）年2月16日（日）、3月29日（日）

各日とも、午前11時から御馳走一番館とあわせて案内

【中止】*2020（令和2）年3月1日（日）以降のイベントは中止の措置をとった。

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」2月号、呉市 ○「市政だよりくれ」3月号、呉市

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通）

●ポスター B2判 10枚

●チラシ A4判 10,000部

●出品目録 A4判（両面刷り）

目的

梅見茶会にあわせて、所蔵の桃山茶陶から近現代の作家によって作られた美濃焼を紹介した。美濃焼は、岐阜県の南東部、東濃地方で焼かれるやきものの総称で、東濃地方では奈良時代には須恵器窯が開かれており、これが美濃焼の始まりである。桃山時代には千利休、古田織部などの茶人により注目を集め、織部、志野、黄瀬戸、瀬戸黒などさまざまなスタイルのやきものが誕生した。江戸時代に入り、有田の磁器や京焼の登場により桃山茶陶は衰退していくが、1930（昭和5）年に荒川豊蔵が大萱（おおがや）牟田洞（むたぼら）で美濃古窯跡を発見、桃山陶芸の復興が始まり、現代では多くの作家を輩出するやきものの産地となっていることなど紹介した。

展示内容

（1）桃山時代から現代の美濃焼まで

桃山時代、茶の湯のためのやきもの「茶陶」が日本各地の窯で作られた。美濃でも織部や志野といった桃山茶陶の生産が始まる。桃山後期の茶匠として君臨した古田織部の好みで作らせたと言われる織部とともに桃山陶芸を代表する志野を紹介し、あわせて岐阜県出身の陶芸家・荒川豊蔵が現代によみがえらせた技法により制作された作品などと向かいあわせて展示し、技法のルーツや新たな表現の展開を紹介した。

（2）同時開催：古伊万里コレクション「花の彩り」

江戸時代につくられた伊万里焼の器に描かれた花々を紹介した。四季ごとに主役の花が代わる日本では、たくさんの植物文様が描かれてきた。牡丹や菊、桃や梅など中国からきた吉祥の意味を持つ花々や、日本では代表的な吉祥文様の一つとして最も多く描かれてきた松竹梅が描かれた器などを展示した。江戸時代の人々の暮らしの中で伊万里焼が浸透している文様が描かれたことなどを紹介した。

（小川英史）



展示風景



展示風景

松濤園 陶磁器館 所藏品展Ⅴ 「美濃焼／古伊万里コレクション 花の彩り」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	資料名	産地・作家	時代・年代など	寸法（高）	寸法（口径）	寸法（その他）	所蔵
				（縦×横）cm			

(1) 桃山時代から現代の美濃焼まで

1	織部 香合		16世紀後半-17世紀	高 3.4	口径 5.4×5.6		
2	織部 梅文向付		16世紀後半-17世紀	高 4.4	口径 108×137	底径 10.8×13.7	
3	織部 草文皿		16世紀後半-17世紀	高 4.1	口径 22.3	底径 13.0	
4	織部 芦に桜の図平茶碗		16世紀後半-17世紀	高 5.6	口径 9.0	底径 5.3	
5	織部 梅文茶碗		16世紀後半-17世紀	高 8.2	口径 14.3	底径 4.6	
6	絵志野 千鳥文鉢		16世紀後半-17世紀	高 6.0	口径 16.5	底径 11.8	
7	絵志野 小鉢		16世紀後半-17世紀	高 5.5	口径 18.0		
8	志野 草文額皿		16世紀後半-17世紀	高 4.5	口径 195×223		
9	瀬戸黒茶碗	池田満寿夫		高 9.3	口径 10.9		
10	瀬戸黒茶碗	荒川豊蔵		高 9.7	口径 11.0		
11	志野茶碗	荒川豊蔵		高 8.9	口径 13.0		
12	志埜茶碗	鈴木蔵		高 9.5	口径 145×150		
13	志埜水指	鈴木蔵		高 22.3		径 22.5×23.1	
14	織部大皿	高内秀剛		高 19.7	口径 842×855		
15	織部俎皿	高内秀剛		高 13.5		径 76.5×38.0	
16	織部角切鉢	高内秀剛		高 6.1	口径 26.5		
17	志野茶碗	高内秀剛		高 10.0			
18	象嵌志野柿茶碗	今井政之	1990（平成2）年	高 7.8	口径 14.1		
19	象嵌志野鶯草花瓶	今井政之	1996（平成8）年	高 26.3		径 9.3	
20	鼠志野花入 銘むさしの	若尾利貞		高 23.5		径 7.9×12.0	
21	鼠志野水指	若尾利貞		高 15.3		径 15.3×16.6	
22	鼠志野大鉢	若尾利貞		高 17.2	口径 28.5		
23	鼠志野鉢	若尾利貞		高 8.6	口径 28.4		
24	黄瀬戸鉢	原憲司		高 7.8	口径 22.8		
25	フリヘ香合	楽吉左衛門（十二代目）		高 2.5		径 5.1	

(2) 同時開催：古伊万里コレクション「花の彩り」

26	染付牡丹唐草文壺		1630-40年代	高 25.2	口径 10.8	底径 12.5	
27	染付竹桐水仙文壺		1640-60年代	高 26.3	口径 12.2	底径 14.0	
28	染付花文壺		1610-40年代	高 15.5	口径 7.5	底径 6.3	
29	染付吹墨梅文小皿		1630-40年代	高 3.8	口径 15.2	底径 6.0	
30	染付辰砂花蝶文皿		1630-40年代	高 3.1	口径 17.5	底径 6.5	
31	染付桐梅文皿		1640-50年代	高 2.3	口径 19.7	底径 9.5	
32	色絵花束文変形小皿		1650-60年代	高 3.0	口径 148×120	底径 8.5×6.8	
33	色絵草花文瓢形瓶		1640-50年代	高 21.0	口径 1.8	底径 4.7	
34	色絵牡丹文茶筌形瓶		1650-60年代	高 26.0	口径 4.2	底径 8.7	
35	色絵松竹梅文皿		1640-50年代	高 3.4	口径 21.3	底径 8.8	
36	色絵花鳥文捻花皿		1640-50年代	高 2.0	口径 20.5	底径 13.1	
37	染付七宝唐草文瓶		1660-90年代	高 26.4	口径 3.3	底径 9.4	
38	染付藤文壺		1655-60年代	高 22.8	口径 10.2	底径 10.1	
39	染付牡丹獅子文瓶		1670-80年代	高 30.0	口径 5.4	底径 13.1	
40	染付花盆唐草文手付水注		1660-80年代	①高 27.6 ②高 27.7	口径 6.5×4.8 口径 6.7×4.8	底径 11.3×9.6 底径 11.4×9.4	
41	染付花卉文六角壺		1670-90年代	高 36.0	口径 11.0	底径 13.5	
42	色絵花盆文大皿		1700-30年代	高 9.0	口径 55.5	底径 27.5	
43	色絵牡丹文十二角皿		1700-30年代	高 5.0	口径 26.2	底径 15.6	
44	色絵菊文面取壺		1670-90年代	高 19.0	口径 10.0	底径 10.0	
45	色絵菊文蓋付壺		1670-90年代	高 30.0	口径 11.5	底径 11.9	

46	色絵菊牡丹文壺		1670-90 年代	高 25.5	口径 11.5	底径 12.0	
47	色絵婦人像		1670-90 年代	高 39.3		径 14.3×11.8	
48	色絵花卉松竹梅文大皿		1670-90 年代	高 5.6	口径 31.2	底径 16.8	
49	色絵柘榴牡丹松菊文輪花鉢		1670-90 年代	高 10.7	口径 23.5	底径 10.2	
50	色絵草花文水注		1670-1700 年代	高 16.7	口径 6.5	底径 6.5	
51	染付柘榴文大皿		1700-50 年代	高 8.5	口径 31.0	底径 16.4	
52	色絵薔薇水仙文大皿		1700-30 年代	高 8.3	口径 30.2	底径 16.5	
53	青磁染付宝尽し文大皿		1690-1750 年代	高 8.4	口径 32.5	底径 15.9	
54	色絵柴垣桜文猪口		1690 年 -18 世紀前半	高 7.0	口径 10.2	底径 5.2	
55	色絵蔓薔薇文小皿		1700-30 年代	高 4.0	口径 15.0	底径 7.3	
56	染付藤文小皿		1690 年 -18 世紀前半	高 4.3	口径 15.0	底径 8.1	
57	染付花柘榴甃文皿		1690-1730 年代	高 5.5	口径 20.2	底径 11.1	
58	染付土筆文皿		1700-40 年代	高 5.0	口径 19.9	底径 11.1	
59	染付桜流水文皿		18 世紀末	高 5.5	口径 20.3	底径 11.5	
60	染付牡丹文皿		19 世紀	高 8.5	口径 29.5	底径 15.5	

所蔵品展 | 国書改竄と国交の回復

会期 2019（平成31）年4月17日（水）～2019（令和元）年
6月24日（月）

会場 松濤園 御馳走一番館

関連行事

●ギャラリートーク

2019（令和元）年5月19日（日）、6月16日（日）

各日とも、午前11時から陶磁器館とあわせて案内

おもな関連記事、番組など

○「エリアプラス」中国新聞、2019（令和元）年5月23日
○「市政だよりくれ」4月号、呉市 ○「市政だよりくれ」5月号、呉市
○「市政だよりくれ」6月号、呉市
○「あのまちこのまちイベント情報」『海陽彩都プラス』
No.2、広島中央地域連携中枢都市圏

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通）

●ポスター B2判 10枚

●チラシ A4判（両面刷り）10,000部

●出品目録 A4判（両面刷り）

目的

江戸時代に再開された朝鮮通信使。そのきっかけとなったのは徳川家康から朝鮮との国交の再開を命じられた対馬藩による、国書偽造・改竄（いわゆる改作）であった。江戸時代初の朝鮮通信使から第3次の朝鮮通信使までこの対馬藩による国書の書き換えは続いたが、対馬藩内のお家騒動により、徳川幕府にこれまでの国書の改竄が発覚してしまう。本展では、最初の国書改竄事件の始まりから、徳川家光による「お白洲裁き」までの歴史、その後の通信使で派遣された馬上才を紹介した。

展示内容

（1）常設展示 一体感！御馳走一番ー

朝鮮通信使船、等身大人形、本陣復元模型、七五三の膳・三汁十五菜の膳の模型を常設で展示している。朝鮮通信使の旅の様子、身に着けていた衣装、下蒲刈に来島した際の様子、もてなしの際の儀式料理の様子、実際に通信使へ出されていた食事の様子を年間を通して展示することにより、朝鮮通信使の歴史を学べる内容としている。

（2）国書改竄と国交の回復

国書の偽造と改竄に関わった対馬藩主宗義智肖像や外交僧の景轍玄蘇像、偽造された国書を展示し、徳川幕府と朝鮮王朝間で国交回復へ尽力した対馬藩の役割を紹介した。宗義成肖像、規伯玄方像、柳川調興公事記録などにより、国書偽造の発覚とその後について紹介した。

（3）朝鮮の美術 ー螺鈿細工の魅力ー

朝鮮通信使のふるさどである朝鮮半島の古美術を紹介した。螺鈿細工を紹介し、朝鮮半島における螺鈿細工の歴史を紹介した。また故事花鳥図屏風を展示し、朝鮮半島の中で愛されてきた民画の紹介をした。

（小川英史／沼田綿子）



展示風景



展示風景

松濤園 御馳走一番館 所蔵品展Ⅰ「国書改竄と国交の回復」出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	資料名 *作者 資料名	時代・年代など	おもな材質	形状	寸法 (縦×横、その他) cm または (縦×横×奥行) cm	所蔵 復元模型／複製 (所蔵先)
-----	-------------	---------	-------	----	------------------------------------	---------------------

松濤園 御馳走一番館の資料のうち、絵図等の複製については原資料の時代・年代を表記し、おもな材質、形状は複製した状態を表記している。記載する寸法は本財団で計測したもの。

(1) 常設展示 一体感！御馳走一番ー

1	朝鮮通信使船					1 / 10 復元模型
2	北前船					復元模型
3	等身大人形と衣装					復元模型
4	本陣復元模型と行列人形					復元模型
5	七五三の膳				膳・各 25.5×41.0×41.0	復元模型
6	三汁十五菜の膳				台・32.5×105.0×65.0	復元模型
7	朝鮮人御用信楽長野村焼物雛形控		紙・プリント	額装		複製 (個人蔵)
8	通信使接待用陶器茶碗類					復元模型
9	雨森芳洲肖像	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (芳洲会)
10	韓使聘禮図 (部分)	1837 (天保 8) 年	紙・プリント	額装		複製 (複禅寺)
11	狩野益信 朝鮮通信使款待図屏風 (部分)	17 世紀	紙・プリント	額装		複製 (泉涌寺)

(2) 国書改竄と国交の回復

12	朝鮮通信使時絵堤重	江戸時代後期		漆工	30.8×31.4×17.4	
13	鞆の浦図平棗	江戸時代後期		漆工	6.5×9.0×9.0	
14	文化度朝鮮通信使人物図巻	1811 (文化 8) 年	紙・プリント	額装		複製 (大阪歴史博物館)
15	萬松院殿 (宗義智) 像	17 世紀	紙・プリント			複製 (萬松院)
16	景轍玄蘇和尚像	江戸時代	紙・プリント			複製 (西山寺)
17	朝鮮国書 朝鮮国王李畋国書	1607 (慶長 12) 年	紙・プリント			複製 (京都大学総合博物館)
18	爲政以德印		紙・プリント			複製 (九州国立博物館)
19	朝鮮通信使行列図絵巻	江戸中期	紙本着色	卷子装	幅 27.8 長さ 1710.0	
20	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図	1748 (延享 5) 年	紙本着色	卷子装	幅 14.5 長さ 824.9	
21	光雲院殿 (宗義成) 像		紙・プリント			複製 (萬松院)
22	規伯玄方和尚像		紙・プリント			複製 (西山寺)
23	寛永十二乙亥年三月十一日於 御前義成様ト豊前対決之御座配		紙・プリント			複製 (長崎県立対馬歴史民俗資料館)
24	柳川調興公事記録	1634 (寛永 11) 年 -1683 (天和 3) 年	紙・プリント			複製 (慶應義塾図書館)
25	馬上才図屏風	江戸時代中期	紙本着色	屏風装	各 (面) 27.0×28.0	
26	羽川藤永 朝鮮人來朝図	江戸時代中期	紙・プリント	額装		複製 (個人)
27	近藤清信 唐人行列之絵図	18 世紀初頭	紙・プリント	額装		複製 (大英博物館)
28	洛中洛外図 (今井町本) (部分)	江戸時代中期	紙・プリント	額装		複製 (個人)
29	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図 (部分)	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製

(3) 朝鮮美術 ー螺鈿細工の魅力ー

30	花鳥故事図屏風	朝鮮 末期	紙本着色	屏風装	各 (面) 76.5×30.5	
31	李朝螺鈿箱	朝鮮	漆工		34.3×42.3×43.2	
32	李朝螺鈿箱	朝鮮	漆工		24.1×41.5×22.8	
33	青貝螺鈿花台	朝鮮	漆工		34.9×31.9×22.4	
34	李朝筆筥 (パンダジ)		木工		77.0×83.8×38.0	
35	李朝筆筥 (パンダジ)		木工		74.0×83.8×39.0	
36	李朝筆筥 (衣装箱)		木工		92.5×92.5×45.7	
37	朝鮮筆筥 (竹張文匣)		木工		46.5×81.7×32.5	
38	葉筆筥		木工		79.0×98.0×34.0	
39	李朝米櫃		木工		92.3×92.5×57.4	

No.13 の寸法は 2020 (令和 2) 年に本財団で計測したもの。

所蔵品展Ⅱ 朝鮮通信使が見た日本の景色

会期 2019（令和元）年6月26日（水）～9月2日（月）
会場 松濤園 御馳走一番館

関連行事

- ワークショップ「うちわをつくろう！」
2019（令和元）年8月1日（木）～8月18日（日）
- ギャラリートーク
2019（令和元）年7月7日（日）、8月4日（日）
各日とも、午前11時から陶磁器館とあわせて案内

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」7月号、呉市 ○「市政だよりくれ」
8月号、呉市

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2巻共通）

- ポスターB2判 10枚
- チラシA4判（両面刷り）10,000部
- 出品目録A4判（両面刷り）

目的

朝鮮通信使に関する記録のなかで、通信使が描いた日本の景色や、通信使が描かれた日本の画家による作品を紹介した。朝鮮通信使の中には「画員」と呼ばれる画家も選ばれており、日本の各地を記録画として残している。日本各地が描かれた作品や、対馬や大坂が描かれた作品を展示し紹介した。

展示内容

（1）常設展示 一体感！御馳走一番

朝鮮通信使船、等身大人形、本陣復元模型、七五三の膳・三汁十五菜の膳の模型を常設で展示している。朝鮮通信使の旅の様子、身に付けていた衣装、下蒲刈に来島した際の様子、もてなしの際の儀式料理の様子、実際に通信使へ出されていた食事の様子を年間を通して展示することにより、朝鮮通信使の歴史を学べる内容としている。

（2）朝鮮通信使が見た日本の景色

朝鮮通信使が描いた日本の景色を第10次朝鮮通信使の画員、李聖麟（イ・ソンリン）が描いた「嵯路勝区図」や、同じく画員が残した「春景図」、「山水図」とともに紹介した。また、葛飾北斎の「富嶽百景 来朝の不二」や、東海道五十三次 十七「由井」もあわせて紹介し、日本の画家の意匠とともに風景とともに描かれた通信使の姿を紹介した。

（3）朝鮮美術 朝鮮半島のやさきものの伝統ー

朝鮮通信使のふるさとである朝鮮半島の古美術である朝鮮磁器と朝鮮磁器の流れを受け継ぎ、現代作家として韓国人間文化財に指定された、安東五（アン・ドンウォ）（1919ー1989）、李殷九（イ・ウング）（1943ー）の作品を対比させ展示した。

（小川英史／沼田綿子）



展示風景



展示風景

松濤園 御馳走一番館 所蔵品展Ⅱ 「朝鮮通信使が見た日本の景色」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	資料名 *作者 資料名	時代・年代など	おもな材質	形状	寸法 (縦×横、その他) cm または (縦×横×奥行) cm	所蔵 復元模型／複製 (所蔵先)
-----	-------------	---------	-------	----	------------------------------------	---------------------

松濤園 御馳走一番館の資料のうち、絵図等の複製については原資料の時代・年代を表記し、おもな材質、形状は複製した状態を表記している。記載する寸法は本財団で計測したもの。

(1) 常設展示 一体感！御馳走一番ー

1	朝鮮通信使船					1 / 10 復元模型
2	北前船					復元模型
3	等身大人形と衣装					復元模型
4	本陣復元模型と行列人形					復元模型
5	七五三の膳				膳・各 25.5×41.0×41.0	復元模型
6	三汁十五菜の膳				台・32.5×105.0×65.0	復元模型
7	朝鮮人御用信楽長野村焼物雛形控		紙・プリント	額装		複製 (個人)
8	通信使接待用陶器茶碗類					復元模型
9	雨森芳洲肖像	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (芳洲会)
10	韓使聘禮図 (部分)	1837 (天保 8) 年	紙・プリント	額装		複製 (複禅寺)
11	狩野益信 朝鮮通信使款待図屏風 (部分)	17 世紀	紙・プリント	額装		複製 (泉涌寺)

(2) 朝鮮通信使が見た日本の景色

12	染付日本地図文大皿	1830-60 年代	磁器	皿	高 7.5 口径 47.6 底径 26.0	
13	染付日本地図文角大皿	1830-60 年代	磁器	皿	高 46 口径 330×275 底径 170	
14	金彩染付朝鮮通信使船図皿	江戸時代末期～明治時代	磁器 (5 枚組)	皿	高 3.3 径 18.5	
15	李聖麟 槎路勝区図	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (国立中央博物館、韓国)
16	清道朝鮮人大行列記大全	1748 (延享 5) 年	紙本墨摺	冊子装	22.5×16.0	
17	靑浦図并韓使応接図対潮樓石摺屏風		紙・プリント			複製 (福山市靑の浦歴史民俗資料館)
18	六十余州名所図会 備後 阿武門観音堂	江戸時代	紙本木版墨摺	額装	26.5×36.5	
19	李邦彦揮毫、菅茶山扁額「日東第一景勝」扁額 (拓本)	1711 (正徳元) 年	紙本墨摺	額装		拓本 (福禅寺)
20	朝鮮通信使行列図	江戸時代	紙本着色	卷子装	幅 24.3 長さ 710.0	
21	葛飾北斎 富嶽百景「来朝の不二」	1875 (明治 8) 年	紙本墨摺	冊子装	22.6×15.8	
22	円山応震 琵琶湖図	1824 (文政 7) 年	紙・プリント			複製 (滋賀県立琵琶湖文化館)
23	狩野益信 朝鮮通信使款待図屏風	1655 (明暦元) 年	紙・プリント			複製 (泉涌寺)
24	李義養 春景図	1811 (文化 8) 年	絹本着色	軸装	41.0×50.8	
25	崔北 山水図	1748 (延享 5) 年	紙本墨画淡彩	軸装	57.5×38.3	
26	尾張名所図会	1844 (天保 15) 年	紙・プリント	額装		複製 (東京国立博物館)
27	葛飾北斎 東海道五十三次 十七「由井」	江戸時代後期	紙・プリント	額装		複製 (東京富士美術館)
28	朝鮮船対馬入湊図	1811 (文化 8) 年	紙・プリント	額装		複製 (個人)
29	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図 (部分)	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製

(3) 朝鮮美術 ー朝鮮半島のやきものの伝統ー

30	染付福寿文鉢	朝鮮 後期	磁器	鉢	高 12.5 口径 26.5×24.5 底径 11.9	
31	染付福寿文壺	朝鮮 後期	磁器	壺	高 21.0 口径 11.8 底径 12.5	
32	染付龍文瓶	朝鮮 後期	磁器	瓶	高 31.5 口径 6.5 底径 15.5	
33	染付鳳凰文壺	朝鮮 後期	磁器	壺	高 20.8 口径 12.2 底径 11.0	
34	安東五 李朝伝統白磁壺		磁器	壺	高 57.0 径 46.9	
35	李殷九 青磁狩獵図壺		磁器	壺	高 21.7 径 25.5	
36	李殷九 青磁サギ・ハス紋長壺		磁器	壺	高 31.8 径 21.5	
37	李朝筆筭 (バンダジ)		木工		77.0×83.8×38.0	
38	李朝筆筭 (バンダジ)		木工		74.0×83.8×39.0	
39	李朝筆筭 (衣装箱)		木工		92.5×92.5×45.7	
40	朝鮮筆筭 (竹張文匣)		木工		46.5×81.7×32.5	
41	葉筆筭		木工		79.0×98.0×34.0	
42	李朝米櫃		木工		92.3×92.5×57.4	

所蔵品展Ⅲ 朝鮮通信使と来日の影響

会期 2019（令和元）年9月4日（水）～9月30日（月）

会場 松濤園 御馳走一番館

関連行事

●ギャラリートーク

2019（令和元）年9月8日（日）

午前 11 時から陶磁器館とあわせて案内

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」9月号

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通）

●ポスター B2判 10枚

●チラシ A4判（両面刷り）10,000部

●出品目録 A4判（両面刷り）

目的

朝鮮通信使は江戸時代の日本人が一生に一度見る事ができるかどうかの外国人であった。そのため当時の日本人は朝鮮通信使に非常に高い関心を持っていた。朝鮮通信使の来日が美術、工芸、祭りに大きな影響を与えた様子を紹介した。

三重県津市に現在も伝わる唐人踊りや、岡山県牛窓市に伝承されている唐子踊り、三重県に伝わる八幡神社祭礼絵図を紹介し、日本の社会に今も残る通信使の影響を紹介した。

展示内容

（1）常設展示 一体感！御馳走一番

朝鮮通信使船、等身大人形、本陣復元模型、七五三の膳・三汁十五菜の膳の模型を常設で展示している。朝鮮通信使の旅の様子、身に着けていた衣装、下蒲刈に来島した際の様子、もてなしの際の儀式料理の様子、実際に通信使へ出されていた食事の様子を年間を通して展示することにより、朝鮮通信使の歴史を学べる内容としている。

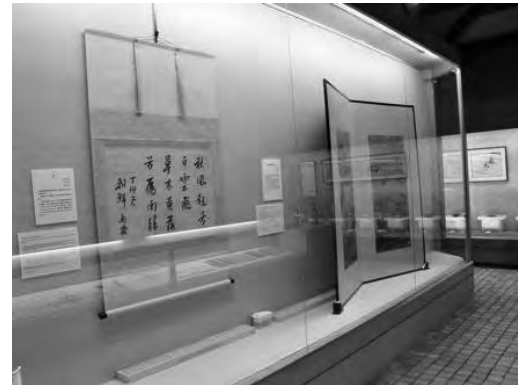
（2）朝鮮通信使と来日の影響

朝鮮通信使の来日が日本の文化へ大きな影響を与えた様子を紹介した。朝鮮通信使の来日により、日本の中で朝鮮通信使行列を模した祭礼が開催されるようになった様子を、「朝鮮通信使行列御祭之図」や「八幡神社祭礼絵図」により紹介した。また、美術工芸へ与えた影響は、岐阜県で制作されていた工芸品の別府細工や、喜多川歌麿が花魁道中と朝鮮通信使のイメージを融合させて制作した、「見立て唐人行列」を通して紹介した。

（3）朝鮮美術 ー朝鮮半島のやきものの伝統ー

朝鮮通信使のふるさとである朝鮮半島の古美術である朝鮮磁器と朝鮮のやきものの流れを受け継ぎ、現代の陶芸家、李殷九（イ・ウンク）の作品を対比させ展示した。

（小川英史）



展示風景



展示風景

松濤園 御馳走一番館 所蔵品展Ⅲ 「朝鮮通信使と来日の影響」 出品リスト *無表記は財団所蔵

No.	資料名 *作者 資料名	時代・年代など	おもな材質	形状	寸法 (縦×横、その他) cm または (縦×横×奥行) cm	所蔵 復元模型／複製 (所蔵先)
-----	-------------	---------	-------	----	------------------------------------	---------------------

松濤園 御馳走一番館の資料のうち、絵図等の複製については原資料の時代・年代を表記し、おもな材質、形状は複製した状態を表記している。記載する寸法は本財団で計測したもの。

(1) 常設展示 一体感！御馳走一番ー

1	朝鮮通信使船					1／10 復元模型
2	北前船					復元模型
3	等身大人形と衣装					復元模型
4	本陣復元模型と行列人形					復元模型
5	七五三の膳				膳・各 25.5×41.0×41.0	復元模型
6	三汁十五菜の膳				台・32.5×105.0×65.0	復元模型
7	朝鮮人御用信楽長野村焼物雛形控		紙・プリント	額装		複製 (個人)
8	通信使接待用陶器茶碗類					復元模型
9	雨森芳洲肖像	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (芳洲会)
10	韓使聘禮図 (部分)	1837 (天保 8) 年	紙・プリント	額装		複製 (復禅寺)
11	狩野益信 朝鮮通信使款待図屏風 (部分)	17 世紀	紙・プリント	額装		複製 (泉涌寺)

(2) 朝鮮通信使と来日の影響

12	朝鮮通信使時絵堤重	江戸時代後期	蒔絵		17.4×31.4×30.8	
13	金彩染付朝鮮通信使船図皿	江戸時代末期-明治時代	磁器	皿	高 3.3 径 18.5	
14	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図 (部分)	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製
15	宝永華洛細見図 第十巻	宝永年間	紙本墨摺	冊子装	26.5×19.0	
16	朝鮮通信使行列図絵巻	江戸時代中期	紙本木版墨摺手彩色	卷子装	幅 27.8 長さ 1710.0	
17	朝鮮通信使行列御祭之図	江戸時代後期-明治	紙本木版墨摺手彩色	卷子装	幅 39.3 長さ 242.0	
18	八幡神社祭礼絵図	江戸時代末期	紙・プリント		40×160	複製 (石水博物館)
19	平安書林柳枝軒刊行 桑韓星槎答響	1719 (享保 4) 年	紙本木版墨摺	冊子装	22.7×15.5	
20	平安書林柳枝軒刊行 桑韓星槎餘響	1719 (享保 4) 年	紙本木版墨摺	冊子装	22.7×15.8	
21	崔昔 (菊斎) 書	1807 (文化 4) 年	紙本墨書	軸装	54.0×74.5	
22	朝鮮通信使款待図屏風	江戸時代初期 (1600年代中期)	紙本着色	二曲一隻	113.0×51.5	
23	別府細工 唐子水滴	江戸時代中期-後期	銅	水滴	7.5×4.3×5.0	
24	別府細工	江戸時代中期-後期	銅	燭台	24.0×8.0×8.0	
25	別府細工 旗持燭台	江戸時代	銅	燭台	31.8×17.3×17.0	
26	喜多川歌麿 見立唐人行列	1797-98 (寛政 9-10) 年	紙・プリント	額装		複製 (ボストン美術館)
27	奥村正信 朝鮮人來朝図	江戸時代初期	紙・プリント	額装		複製 (東京国立博物館)
28	朝鮮人來朝物語	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (京都大学附属図書館)
29	長故□□ 朝鮮通信使行列図 絵馬	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (沼鋒神社)
30	狩野常信 趙泰億像	1711 (正徳元) 年	紙・プリント	額装		複製 (国立中央博物館、韓国)

(3) 朝鮮美術ー朝鮮半島のやきものの伝統ー

31	染付花鳥文壺	朝鮮 後期	磁器	壺	高 36.5 口径 14.0 底径 17.2	
32	染付龍文壺	朝鮮 後期	磁器	壺	高 30.4 口径 11.5 底径 11.5	
33	白磁壺	朝鮮 後期	磁器	壺	高 36.2 口径 14.8 底径 13.1	
34	白磁三耳付壺	朝鮮 中期	磁器	壺	高 25.0 口径 19.1 底径 15.0	
35	李殷九 粉青菊花紋長壺		陶器	壺	高 28.5 径 18.0	
36	李殷九 粉青唐草紋壺		陶器	壺	高 29.6 径 33.0	
37	李殷九 粉青印花梅紋大壺		陶器	壺	高 28.6 径 35.5	
38	李殷九 青磁狩猟図壺		磁器	壺	高 21.7 径 25.5	
39	李朝筆筥 (パンダジ)		木工		77.0×83.8×38.0	
40	李朝筆筥 (パンダジ)		木工		74.0×83.8×39.0	
41	李朝筆筥 (衣装箱)		木工		92.5×92.5×45.7	
42	朝鮮筆筥 (竹張文匣)		木工		46.5×81.7×32.5	
43	葉筆筥		木工		79.0×98.0×34.0	
44	李朝米櫃		木工		92.3×92.5×57.4	

No.29の作者名は、絵馬に記された「本絵師長故□□筆」の墨書による。□は判断不明部分。
No.23～25の寸法は 2020 (令和 2) 年度に本財団で計測したもの。

所蔵品展Ⅳ 朝鮮通信使の旅路

会期 2019（令和元）年11月13日（水）～2020（令和2）年1月27（月）

会場 松濤園 御馳走一番館

関連行事

●ギャラリートーク

2019（令和元）年11月17日（日）、12月1日（日）、2020（令和2）年1月12日（日）

各日とも午前11時から陶磁器館とあわせて案内

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」11月号、呉市 ○「市政だよりくれ」12月号、呉市 ○「市政だよりくれ」1月号、呉市

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通）

●ポスター B2判 10枚

●チラシ A4判（両面刷り）10,000部

●出品目録 A4判（片面刷り）

目的

朝鮮通信使は数ヶ月をかけて江戸までの道中を往復した。その長い旅路の様子をさまざまな記録により紹介した。

朝鮮通信使の中の画員であった李聖麟（イ・ソンリン）が江戸までの道中、日本の景勝地や港を描いた「嵯路勝区図」や、大坂から西国大名や幕府が用意した川御座船に乗り淀川をのぼる様子が描かれた「朝鮮通信使来朝図説」により、その旅路の様子を紹介した。

展示内容

（1）常設展示 一体感！御馳走一番

朝鮮通信使船、等身大人形、本陣復元模型、七五三の膳・三汁十五菜の膳の模型を常設で展示している。朝鮮通信使の旅程の様子、身に着けていた衣装、下蒲刈に来島した際の様子、もてなしの際の儀式料理の様子、実際に通信使へ出されていた食事の様子を年間を通して展示することにより、朝鮮通信使の歴史を学べる内容としている。

（2）朝鮮通信使と旅路

江戸までの風景が描かれた「嵯路勝区図」の紹介や、鞆浦の福禅寺の客殿対潮楼から見える景色が日本で一番だとし、今に伝わる「日東第一景勝」の扁額（拓本）、陸路を大行列を組み行進した様子が描かれた「朝鮮通信使行列図」を通し、その旅程の様子を紹介した。

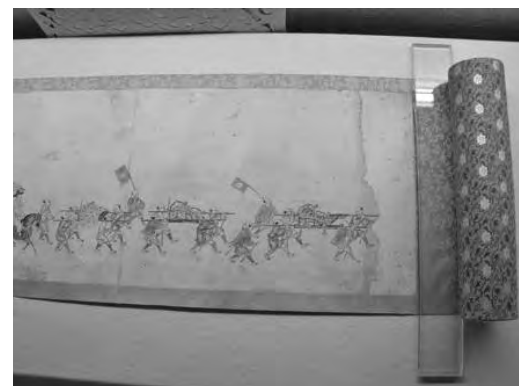
（3）朝鮮の美術 一文字絵・螺鈿細工の魅力ー

朝鮮通信使のふるさとである朝鮮半島の古美術を紹介した。螺鈿箱や青貝台を展示し、朝鮮半島における螺鈿細工の歴史を紹介した。また、文字絵では儒教の教えの中の八徳の文字が図案化された作品を展示し、紹介した。

（小川英史）



展示風景



展示風景

松濤園 御馳走一番館 所蔵品展Ⅳ 「朝鮮通信使と旅路」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	資料名 *作者 資料名	時代・年代など	おもな材質	形状	寸法 (縦×横、その他) cm または (縦×横×奥行) cm	所蔵 復元模型／複製 (所蔵先)
-----	-------------	---------	-------	----	------------------------------------	---------------------

松濤園 御馳走一番館の資料のうち、絵図等の複製については原資料の時代・年代を表記し、おもな材質、形状は複製した状態を表記している。記載する寸法は本財団で計測したもの。

(1) 常設展示 一体感！御馳走一番

1	朝鮮通信使船					1 / 10 復元模型
2	北前船					復元模型
3	等身大人形と衣装					復元模型
4	本陣復元模型と行列人形					復元模型
5	七五三の膳				膳・各 25.5×41.0×41.0	復元模型
6	三汁十五菜の膳				台・32.5×105.0×65.0	復元模型
7	朝鮮人御用信楽長野村焼物雛形控		紙・プリント	額装		複製 (個人)
8	通信使接待用陶器茶碗類					復元模型
9	雨森芳洲肖像	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (芳洲会)
10	韓使聘禮図 (部分)	1837 (天保 8) 年	紙・プリント	額装		複製 (複禅寺)
11	狩野益信 朝鮮通信使款待図屏風 (部分)	17 世紀	紙・プリント	額装		複製 (泉涌寺)

(2) 朝鮮通信使と旅路

12	巻物地図 朝鮮～蝦夷		紙本着色	卷子装		
13	李聖麟 槎路勝区図	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製 (国立中央博物館、韓国)
14	朝鮮通信使来朝図巻		紙本木版	卷子装	幅 24.3 長さ 710.0	
15	六十余州名所図会 備後 阿武門観音堂	江戸時代	紙本木版色摺	額装	26.5×36.5	
16	李邦彦揮毫、管茶山扁額「日東第一景勝」扁額 (拓本)	1711 (正徳元) 年	紙本墨摺	額装		拓本 (福禅寺)
17	弥太郎 朝鮮通信使来朝図説	1855 (安政 2) 年	紙本着色	卷子装	幅 25.5 長さ 817.0	
18	朝鮮通信使行列図	江戸時代	紙本着色	卷子装	幅 24.3 長さ 710.0	
19	朝鮮通信使款待図屏風	江戸時代初期 (1600 年代中頃)	紙本着色	二曲一隻	113.0×51.5	
20	李義養 春景図	1811 (文化 8) 年	絹本着色	軸装	41.0×50.8	
21	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図 (部分)	1748 (延享 5) 年	紙・プリント	額装		複製

(3) 朝鮮の美術 一文字絵・螺鈿細工の魅力ー

22	文字絵	朝鮮	紙本着色	額装	各 62.5×28.0 8 枚	
23	李朝螺鈿箱	朝鮮	漆工	箱	34.3×42.3×43.2	
24	李朝螺鈿箱	朝鮮	漆工	箱	46.4×32.5×81.7	
25	青貝螺鈿花台	朝鮮	漆工	花台	34.9×31.9×22.4	
26	李朝筆筥 (バンドジ)		木工		77.0×83.8×38.0	
27	李朝筆筥 (バンドジ)		木工		74.0×83.8×39.0	
28	李朝筆筥 (衣装箱)		木工		92.5×92.5×45.7	
29	朝鮮筆筥 (竹張文匣)		木工		46.5×81.7×32.5	
30	葉筆筥		木工		79.0×98.0×34.0	
31	李朝米櫃		木工		92.3×92.5×57.4	

No.22 の寸法は 2020 (令和 2) 年に本財団で計測したもの。

所蔵品展Ⅴ 朝鮮通信使と江戸時代の饗応

会期 2020（令和2）年1月29日（水）～4月6日（月）
会場 松濤園 御馳走一番館
＊2020（令和2）年3月9日（月）から5月10日（日）
まで、新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館

関連行事

●ギャラリートーク

2019（令和2）年2月16日（日）、3月29日（日）

各日とも午前11時から陶磁器館とあわせて案内

【中止】＊2020（令和2）年3月1日（日）以降のイベントは中止の措置をとった。

おもな関連記事、番組など

○「市政だよりくれ」2月号、呉市 ○「市政だよりくれ」3月号、呉市

印刷物（ポスター、チラシは陶磁器館、御馳走一番館の2館共通）

●ポスター B2判 10枚

●チラシ A4判（両面刷り）10,000部

●出品目録 A4判（片面刷り）

目的

朝鮮王朝を代表する使節として来日する朝鮮通信使は、日本各地で手厚い歓迎を受けた。その贅の限りを尽くした饗応の様子に焦点を当て紹介した。

朝鮮通信使は将軍の代替わりや徳川幕府の慶賀の使節として来日したので、朝鮮通信使をもてなした接待の様子をつぶさに記録して、次の来日に備えておく必要があった。接待にあたった役人が残した記録を中心に、当時の接待の様子を紹介した。

展示内容

（1）常設展示 一体感！御馳走一番ー

朝鮮通信使船、等身大人形、本陣復元模型、七五三の膳・三汁十五菜の膳の模型を常設で展示している。朝鮮通信使の旅の様子、身に付けていた衣装、下蒲刈に来島した際の様子、もてなしの際の儀式料理の様子、実際に通信使へ出されていた食事の様子を年間を通して展示することにより、朝鮮通信使の歴史を学べる内容としている。

（2）朝鮮通信使と江戸時代の饗応

朝鮮通信使が来日した際に出され、当時の儀式料理として最高の格式を誇った七五三の膳の記録を中心に、展示を構成した。

朝鮮通信使の来日の楽しみの一つであった命を保つ酒と書く保命酒を、その徳利を展示し紹介した。また饗応の膳以外にも食の楽しみがあったことを紹介した。旅の途中、大坂西本願寺の厨房で朝鮮通信使に随行した料理人と日本の役人が協力して調理に当たる様子を、京都大学附属図書館所蔵資料（複製）を通し紹介した。

（3）朝鮮美術 一鵲虎図・両班の暮らしー

朝鮮通信使のふるさとである朝鮮半島の美術工芸品を紹



展示風景



展示風景

介した。朝鮮民画では、伝統的な鵲虎図（じゃっこず）を
展示し、絵の中に込められた風刺の意味を紹介し、朝鮮王
朝時代の知識階級であった両班の暮らしを、彼らの使用し

た当時の文具を通じて紹介した。

（小川英史）

松濤園 御馳走一番館 所蔵品展Ⅴ 「朝鮮通信使と江戸時代の饗応」 出品リスト

*無表記は財団所蔵

No.	資料名 *作者 資料名	時代・年代など	おもな材質	形状	寸法（縦×横、その他）cm または（縦×横×奥行）cm	所蔵 復元模型／複製（所蔵先）
-----	-------------	---------	-------	----	--------------------------------	--------------------

松濤園 御馳走一番館の資料のうち、絵図等の複製については原資料の時代・年代を表記し、おもな材質、形状は複製した状態を表記している。記載する寸法は本財団で計測したもの。

（１）常設展示 一体感！御馳走一番ー

1	朝鮮通信使船					1／10 復元模型
2	北前船					復元模型
3	等身大人形と衣装					復元模型
4	本陣復元模型と行列人形					復元模型
5	七五三の膳				膳・各 25.5×41.0×41.0	復元模型
6	三汁十五菜の膳				台・32.5×105.0×65.0	復元模型
7	朝鮮人御用信楽長野村焼物雛形控		紙・プリント	額装		複製（個人）
8	通信使接待用陶器茶碗類					復元模型
9	雨森芳洲肖像	1748（延享５）年	紙・プリント	額装		複製（芳洲会）
10	韓使聘禮図（部分）	1837（天保８）年	紙・プリント	額装		複製（複禅寺）
11	狩野益信 朝鮮通信使接待図屏風（部分）	17世紀	紙・プリント	額装		複製（泉涌寺）

（２）朝鮮通信使と江戸時代の饗応

12	保命酒大徳利	江戸時代後期		陶器	53.8×31.8×31.8	
13	保命酒徳利（大）	江戸時代後期－明治時代		陶器	36.2×14.7×14.7	
14	保命酒徳利（小）	江戸時代後期－明治時代		陶器	30.2×12.2×12.2	
15	保命酒徳利			陶器	21.9×11.6×11.6	
16	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図（部分）	1748（延享５）年	紙・プリント	額装		複製
17	猪飼正毅 朝鮮人御饗応七五三膳部図	1811（文化８）年	紙・プリント			複製（名古屋市蓬左文庫）
18	祝言膳部次第	1628（寛永５）年	紙本着色	卷子装	幅 35.3 長さ 768.0	
19	朝鮮人御饗応献立	1748（延享５）年	紙本墨書	冊子装	23.0×15.6	
20	朝鮮通信使行列図巻		紙・プリント			複製（ロンドン大学 SOAS）
21	長谷川香苔「日東第一景勝」琴棋書画図	1952（昭和 27）年	紙本着色	軸装	123.3×68.9	
22	長谷川香苔「日東第一景勝」古物賞玩図	1952（昭和 27）年	紙本着色	軸装	129.6×67.7	
23	長谷川香苔「日東第一景勝」仙酔島図	1952（昭和 27）年	紙本着色	軸装	135.7×67.7	
24	「日東第一景勝」荊浦風景図		紙本着色	軸装	131.2×67.6	
25	「日東第一景勝」僧侶ノ図		紙本着色	軸装	131.6×67.5	
26	朝鮮人來朝物語	1748（延享５）年	紙本着色	軸装		複製（京都大学附属図書館）
27	韓使饗饌図		紙・プリント	額装		複製（慶應義塾大学図書館）
28	草場珮川 対馬日記	1811（文化８）年	紙・プリント	額装		複製（佐賀大学附属図書館）
29	卞瑗 倭館図	1783（天明３）年	紙・プリント	額装		複製（国立中央博物館、韓国）
30	文化度朝鮮通信使人物図巻（部分）	1811（文化８）年	紙・プリント	額装		複製（大阪歴史博物館）

（３）朝鮮美術 ー鵲虎図・両班の暮らしー

31	鵲虎図	朝鮮	紙本着色	額装	111.3×54.0	
32	鵲虎図	朝鮮	紙本着色	額装	111.4×54.1	
33	鵲虎図	朝鮮	紙本着色	額装	92.2×61.9	
34	鵲虎図	朝鮮	紙本着色	額装	92.8×54.6	
35	長台机	朝鮮	木工		26.1×89.9×22.8	
36	大筆（２本）	朝鮮	木工		48.0×7.5×7.5（大） 36.0×3.9×3.9（小）	
37	筆筒	朝鮮	木工		21.2×17.5×17.5	
38	古墨「十大高僧」（10 個組）	朝鮮	墨		2.0×21.1×29.2	

39	古墨「生套墨」(12個組)	朝鮮	墨		2.0×19.9×29.5	
40	古墨「肖蔵墨」(12個組)	朝鮮	墨		2.2×21.0×31.8	
41	李朝筆筒 (パンダジ)		木工		77.0×83.8×38.0	
42	李朝筆筒 (パンダジ)		木工		74.0×83.8×39.0	
43	李朝筆筒 (衣装箱)		木工		92.5×92.5×45.7	
44	朝鮮筆筒 (竹張文匣)		木工		46.5×81.7×32.5	
45	葉筆筒		木工		79.0×98.0×34.0	
46	李朝米櫃		木工		92.3×92.5×57.4	

通年展示

運営する施設のうち、地域の歴史や所蔵品に関連する貴重な資料については年間を通して展示公開している。その展示内容とおもな展示資料を下記にまとめた。

□三之瀬御本陣芸術文化館の通年展示―須田国太郎思い出の部屋

須田国太郎愛用の品々を展示。油絵道具一式、イーゼルなどの油彩画の道具や、戸外制作に出かける際、須田が用いた固形水彩やパレットなどの愛用画材や関連資料を紹介している。また、スペインに留学していた時に使用したトランクや、戸外スケッチの時にいつしかぶっていた帽子などの身の回りの品を紹介。さらに、須田国太郎が好んで収集していた 715 点のグリコのおまけのおもちゃを展示している。



三之瀬御本陣芸術文化館 須田国太郎思い出の部屋・展示室内その他 2019（平成 31 / 令和元）年度通年展示資料一覧

* 無表記は財団所蔵

No.	資料名（須田国太郎遺品・愛用品資料）	時代・年代など	おもな材質	形状	寸法（縦×横）cm または（縦×横×奥行き）cm	所蔵
須田国太郎遺品・愛用品資料のうち、写真資料以外の製造年代、形状は省略する。また、記載する寸法は本財団で計測したもの。写真は複製した際の寸法。						
1	江崎グリコ株式会社グリコのおまけのおもちゃ（715 点）	1945 年代～1960 年代	プラスチック他		—	
2	須田国太郎肖像写真（田中真知男撮影）	1954（昭和 29）年	紙・プリント	パネル	54.0×43.0	
3	須田国太郎肖像写真 * 第 11 回独立美術展会場で撮影されたもの（部分）	1941（昭和 16）年	紙・プリント	パネル	43.0×54.0	
4	パレット（油絵用）絵具つき		プラスチック板		49.0×37.5	
5	二つ折り持ち運び用パレット（油絵用）		木製		36.0×25.0	
6	WINSOR & NEWTON 社製 油壺（蓋つき）		陶器		13.0×8.0	
7	WINSOR & NEWTON 社製 油壺（蓋なし）		陶器		12.5×8.5	
8	筆立（小）		陶器		13.5×10.0×10.0	
9	筆立（大）		木製		1.0×25.0	
10	筆類：18 本 * 鳥の羽 3 本、つけペン 1 本、鉛筆 2 本、筆 12 本		木製			
11	筆類：筆 9 本、つけペン 1 本、鉛筆 4 本、ナイフ 1 本		木製他		10.0～30.0	
12	絵具箱（油絵具 7 本）		紙箱		13.0×8.0	
13	絵具箱（油絵具・レンヂ）		金属製箱		4.5×36.0×13.0	
14	油絵具一式		木箱		11.5×42.5×30.5	
15	絵具箱 * 筆 5 本、絵具 25 本、油壺 1 本、油入 1 つ		木製		8.0×40.0×16.0	
16	書見台		木製		20.0×30.0×20.0	
17	WINSOR & NEWTON 社製 固形水彩付パレット（小）		金属製		1.5×21.0×13.0	
18	WINSOR & NEWTON 社製 固形水彩付パレット（大）		金属製		1.5×23.0×22.0	
19	東京大日本文具株式会社 Pentel 水彩絵具セット 10 本		紙箱			
20	トランク		革張り、金属		34.0×51.0×96.0	
21	革帽子		革		16.0×30.0×33.0	
22	イーゼル		木製		193.0×73.0×58.0	
23	須田国太郎撮影 渡欧写真（複製） （ダロカ・スペイン）	1922（大正 11）年	紙・プリント	パネル	30.0×39.0	
24	須田国太郎撮影 渡欧写真（複製） * バレンシア / ドスアグアス侯爵邸（スペイン）	1922（大正 11）年	紙・プリント	パネル	39.0×30.0	
25	須田国太郎撮影 渡欧写真（複製） * バレンシアの河東（スペイン）	不明	紙・プリント	パネル	39.0×30.0	
26	須田国太郎撮影 渡欧写真（複製） * サント・ドミンゴ（スペイン）	1921（大正 10）年 11 月 17 日	紙・プリント	パネル	39.0×30.0	

□三之瀬御本陣芸術文化館の通年展示ーエントランス、ロビー、その他

三之瀬を含む下蒲刈の歴史・文化を写真パネルで年間を通して展示している。また、近世の貴人の様子を垣間見る目的として、嫁入り時に使用された姫駕籠を始め、甲冑や火縄銃などの武具などを紹介している。

(1) 下蒲刈の文化と歴史

1748（延享5）年来日の第10回朝鮮通信使一行の画員・李聖麟が、釜山から江戸までの路程を描いた嵯路勝区図のうち、蒲刈を描いた図（複製）や当時の地図、福島雁木についてなど、歴史資料を展示。また、本陣の変遷を明治や昭和初期の三之瀬付近の写真で紹介している。

(2) 自然と歴史・文化にもとづくまちづくり～下蒲刈ガーデンアイランド構想の実現～

江戸時代に朝鮮通信使を迎えるに当たり詠まれた『蒲刈八景』をテーマに整備された下蒲刈島の公共デザインを紹介。その八景のうちの一つ、白崎園を展示パネルで紹介。白崎園に設置され島のシンボルとなった、陶芸家の今井真正のモニュメント作品「生－土・火・知・空・水－」や白崎園内に建つ頼山陽の詩碑を紹介している。

(3) 江戸時代の甲冑、近世の姫駕籠、火縄銃、薙刀

福島正則が幕命でこの地に本陣を設けて以降、三之瀬が重要な寄港地であった頃の様子を垣間見るため、江戸時代の甲冑を始め火縄銃、薙刀などの武具類を展示している。また彦根藩、井伊家への輿入れの際に使用されたとされる姫駕籠を紹介している。

三之瀬御本陣芸術文化館 エントランス、ロビー、その他 通年展示資料一覧

*無表記は財団所蔵

No.	資料名	時代・年代など	おもな材質	寸法 (縦×横) cm または (縦×横×奥行) cm	所蔵
-----	-----	---------	-------	-----------------------------------	----

(1)(2)の下蒲刈の紹介コーナーを除き、(3)の展示資料を記す。甲冑の材質、寸法は省略。火縄銃、火縄銃立の材質は省略。

(3) 江戸時代の甲冑、近世の姫駕籠、火縄銃、薙刀

1	鉄金箔押亀甲金鎖繫二枚胴具足	江戸時代中期			
2	姫駕籠	制作年不詳		漆工 119.0×127.0×79.0	
3	並河源以作 火縄銃	制作年不詳		全長 1088 銃身長 758 口径 16	
4	火縄銃	制作年不詳		全長 1154 銃身長 845 口径 14	
5	火縄銃立	制作年不詳	漆工	74.5×67.5×25.8	
6	吉信作 風銃	制作年不詳	漆工	鞘付全長 2290 本体全長 2215	
7	槍	制作年不詳	刀剣	鞘付全長 2800 本体全長 2760	

記載する寸法は2019（平成31）年度に本財団で計測したもの。火縄銃の寸法表記は全長、銃身長、口径の順。風銃、槍の寸法表記は鞘付全長、本体全長の順。

なお、薙刀の資料名は当財団の登録資料上の漢字表記とした。



□松濤園の通年展示 あかりの館

山口県上関町から移築した旧吉田邸を活用し、世界の珍しい灯火器のコレクションを展示している。呉市有形文化財に指定されている旧吉田邸は移築前の姿を残し、江戸時代からの古い商家の造りを実際に体感しながら見ることができる。その中で、灯火器も含めた昔の暮らしの道具も紹介し、歴史を感じる展示をおこなっている。

(1) 日本のあかり

提灯や行灯など、かつて日本で実際に使われていた灯火器を、旧吉田邸の趣ある座敷を利用して展示している。提灯も行燈もそれぞれ、用途が違えば形が違うことを、並べて展示することで紹介している。また、多彩な和ろうそくも紹介している。

(2) 世界のあかり

世界有数の灯火器コレクターである高田一郎氏のコレクションを中心に、紀元前のテラコッタランプや、電気が普及するまで利用されていたオイルランプを紹介している。光を灯す道具がいかに発展してきたかを総覧できるよう紹介している。

(3) 旧吉田邸コレクション

移築の際に、建物とともに譲り受けた貴重な家具や資料を紹介。家具の中には、豪商ならではの帳場の設えなどを紹介している。吉田家に出入りのあった長州ゆかりの幕末志士の遺した資料などを一部紹介している。

松濤園 あかりの館 通年展示資料概要（＊各コーナーごとのおもな資料）

(1) 日本のあかり	おもな資料：置き行灯四角枕元行灯、置き行灯六角枕元行灯、置き行灯面取形枕元行灯、〈置き行灯〉名古屋行灯、〈置き行灯〉円周行灯、鉄製あこだ形吊り灯籠、鉄製吊り灯籠、鉄製六角吊り灯籠、など
(2) 世界のあかり	おもな資料：テラコッタ、石ランプ、人面ペンダント油灯、鳥ランプ、カルダン時計ランプ、クリックライト（5灯式）、オイルランプ、シナンブラ冠ランプ、シナンブラランプ、キャンドルスタンド（祭壇用）、など
(3) 旧吉田邸コレクション	おもな資料：帳場家具一式、衣裳箆笥一式、長火鉢、ダイスけやき（大）、茶釜（大）、火鉢、吉田健造墓名、石臼、階段箆笥（箱階段）、など



□松濤園の通年展示ー復元蒲刈島御番所

江戸時代に下蒲刈島に設置された番所を、現存している山口県上関町の番所を参考にして復元している。江戸時代に海駅に指定され、瀬戸内海の交通の要衝として重要な港であった下蒲刈島のことを紹介している。

(1) 高札場

幕府の統治上の基本的な法及び重要な施策が掲示された高札場を再現している。ここでは特に、朝鮮通信使来島にあたっての特別な対応を掲示し、朝鮮通信使来島がいかに幕府や藩にとって一大事であったかを紹介している。

(2) 弓・鉄砲・道具立て

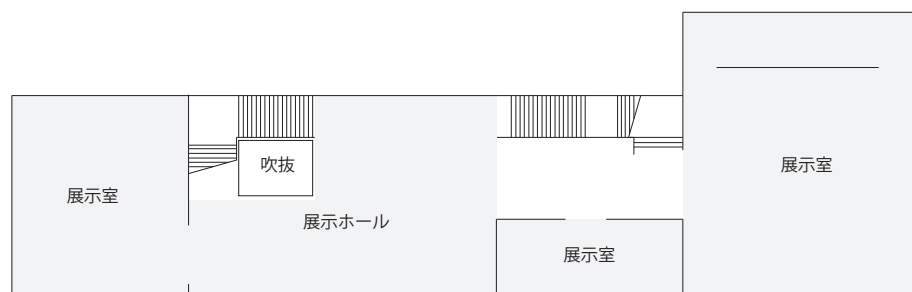
弓や鉄砲の他に、突棒・ガリ棒（袖搦み）・サス棒（刺又）の三つ道具と消火用水桶の備えを再現して展示している。番所は、海・港の安全を守るための現在の警察的役割のほかに、火事に備えた消防的役割も担っていたことを紹介している。



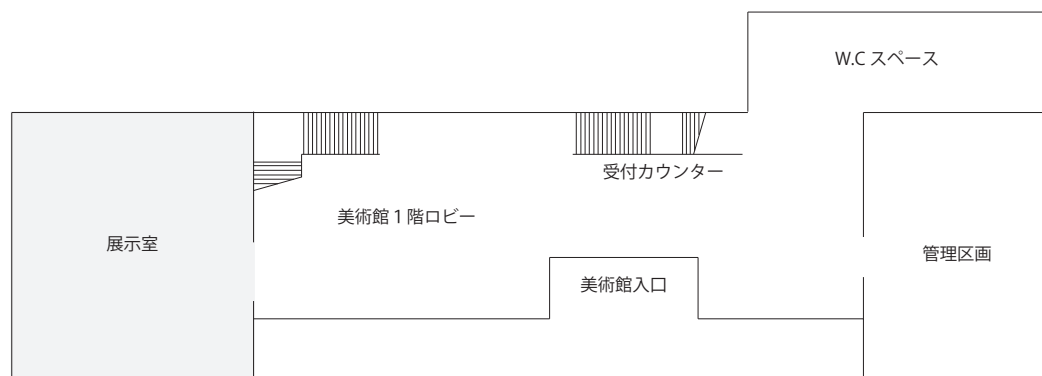
公開スペース一覧

□ 蘭島閣美術館

	構造	敷地面積	建築面積	延べ床面積	施設概要
蘭島閣美術館	木造2階建 (一部3階、一部地下)	1,401.07 m ²	625.84 m ²	1,056.65 m ²	展示面積 541.04 m ² ／展示壁長 166.30 m



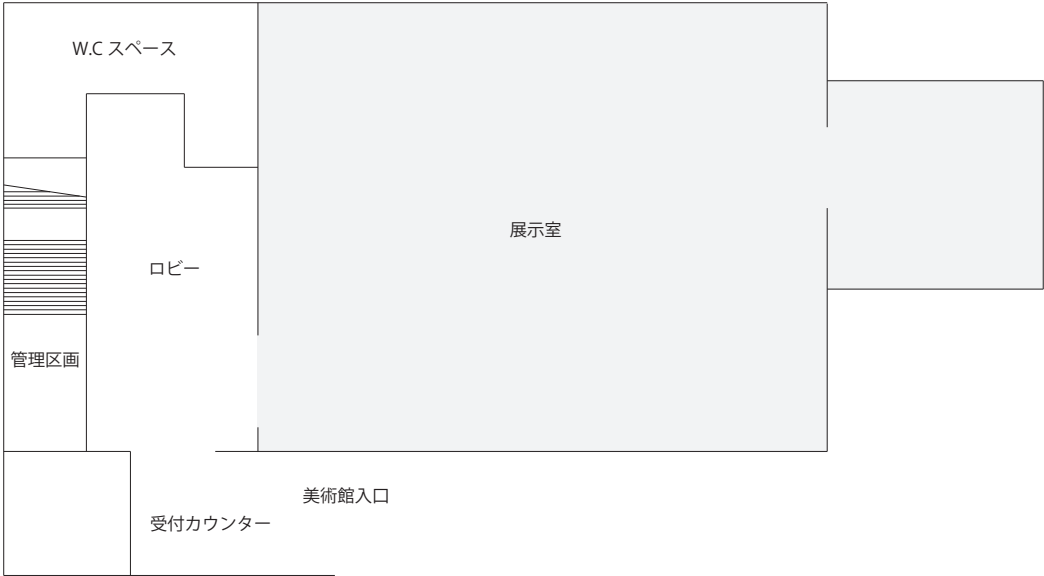
2階



1階

□ 蘭島閣美術館別館

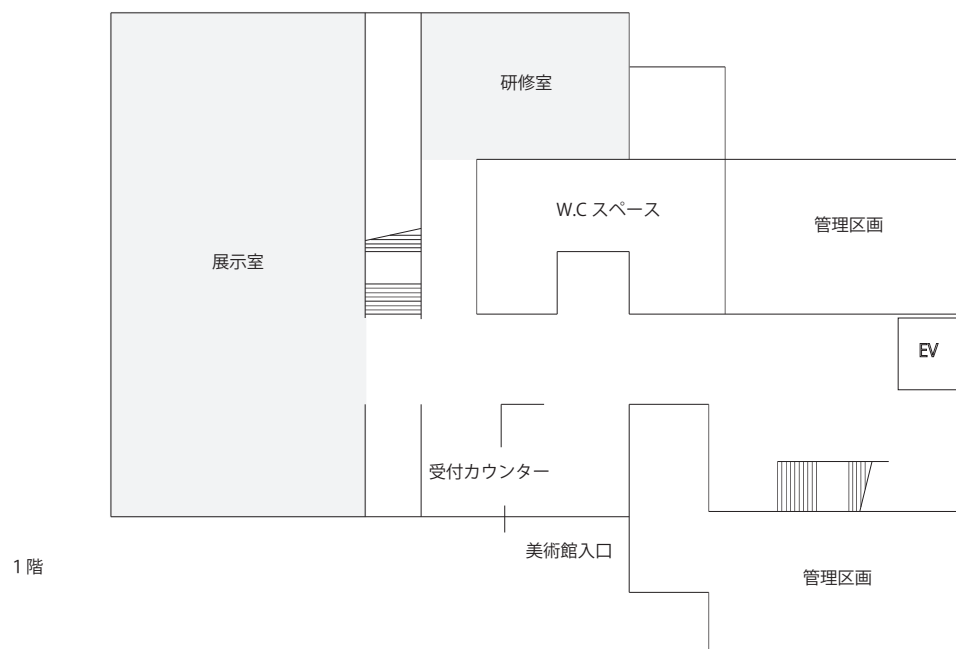
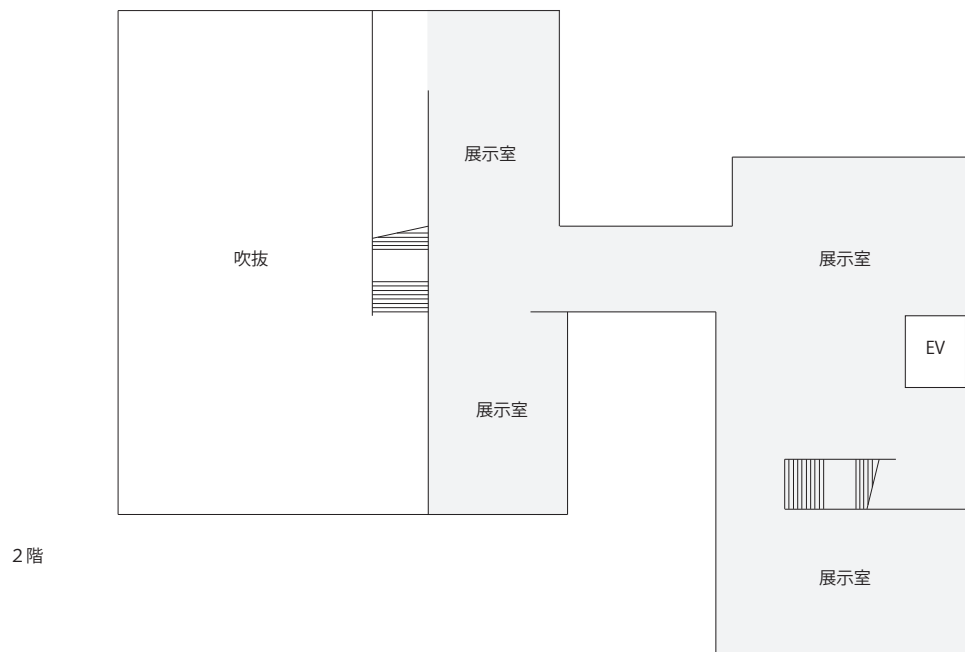
	構造	敷地面積	建築面積	延べ床面積	施設概要
蘭島閣美術館別館	木造瓦葺 1 階建	592.12 m ²	291.51 m ²	368.44 m ²	展示面積 148.22 m ² ／展示壁長 58.60 m



1 階

□三之瀬御本陣芸術文化館

	構造	敷地面積	建築面積	延べ床面積	施設概要
三之瀬御本陣芸術文化館	鉄筋2階建 (一部地下)	852.77 m ²	533.97 m ²	1,064.95 m ²	展示面積 401.80 m ² ／展示壁長 96.90 m

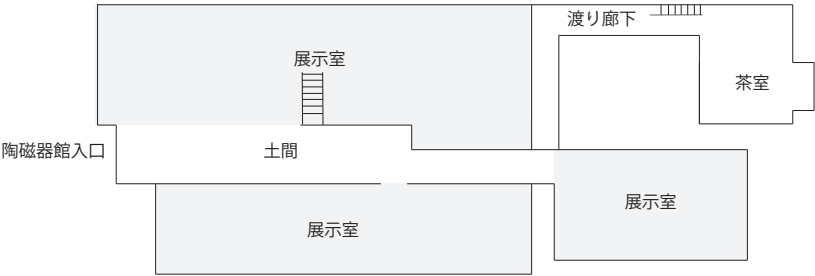


□松濤園 陶磁器館

	構造	敷地面積	建築面積	延べ床面積	施設概要
陶磁器館（旧木上邸）	木造瓦葺 2階建 茶室茅葺 2階建	4,376.35 m ² (松濤園全体)	153.28 m ²	233.04 m ²	—



2階



1階

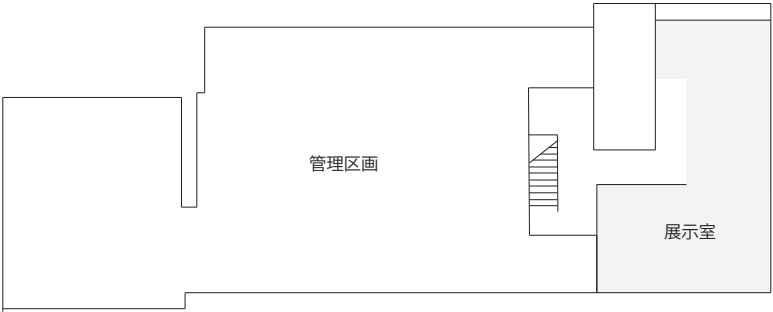
□松濤園 御馳走一番館（朝鮮通信使資料館）

	構造	敷地面積	建築面積	延べ床面積	施設概要
御馳走一番館（旧有川邸）	木造板葺及び瓦葺 2 階建	4,376.35 m ² (松濤園全体)	521.91 m ²	576.57 m ²	—

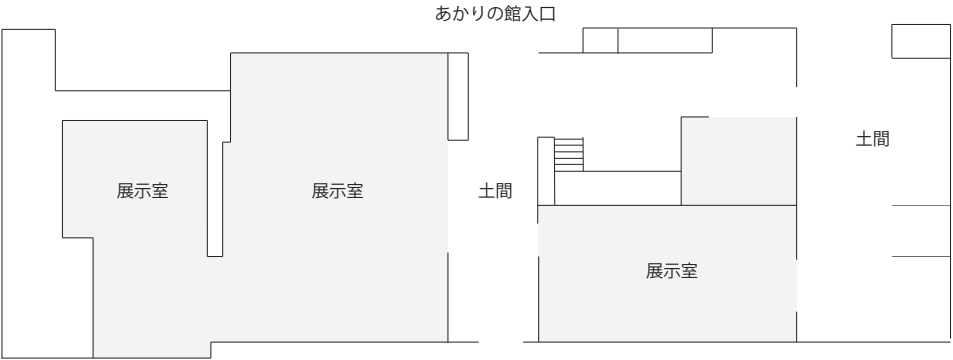


□松濤園 あかりの館

	構造	敷地面積	建築面積	延べ床面積	施設概要
あかりの館（旧吉田邸）	木造本瓦葺 2階建	4,376.35 m ² (松濤園全体)	294.22 m ²	464.96 m ²	—



2階



1階

□松濤園 蒲刈島御番所

	構造	敷地面積	建築面積	延べ床面積	施設概要
蒲刈島御番所	木造平屋建	4,376.35 m ² (松濤園全体)	67.65 m ²	67.65 m ²	—



1 階

* 指定管理する施設のうち、白雪楼、昆虫の家「頑愚庵」、春蘭荘、松籟亭及び煎茶室は除く。
* 公開スペースの図は、展示区画の見取り図として作成。收藏庫、空調設備などを含む管理区画は除く。

その他の公開

インターネットでの資料公開・資料貸出・画像提供・資料閲覧



インターネットでの資料公開

□インターネットでの資料公開

2019（平成31／令和元）年度の展示公開事業にあわせて展覧会情報を掲載し、主要資料をホームページで公開した。

（更新順）

展覧会名	作者	資料名	掲載期間
開館 15 周年春季特別展 京都洋画壇の三巨匠 須田国太郎と安井曾太郎・梅原龍三郎 （会場：三之瀬御本陣芸術文化館）	須田国太郎	夏日農村（所蔵：大林秀彦氏）	2019.4.11～2019.6.11
	安井曾太郎	樹蔭（所蔵：愛媛県美術館）	
松清園陶磁器館所蔵品展Ⅰ 釉－うわぐすり－	－	銹釉色絵七宝地文小皿	2019.4.17～2019.6.25
	－	青磁茶筌形瓶	
松清園御馳走一番館所蔵品展Ⅰ 国書改竄と国交の回復	－	朝鮮通信使行列図絵巻	2019.4.17～2019.6.25
蘭島閣美術館所蔵品展Ⅰ 蘭島閣美術館名品展 華麗なる美の競演	横山大観	神国日本	2019.4.24～2019.6.4
	下村観山	不動明王	
	竹内浩一	リンゴの木に	
蘭島閣美術館所蔵品展Ⅱ 瀬戸内の画家たち 前期	奥田元宋	風光る	2019.6.5～2019.7.30
	今井政之	象嵌志野夏日水指	
三之瀬御本陣芸術文化館所蔵品展Ⅰ SUDA Red 須田国太郎の赤－赤を巧みに使用した画家たち－	須田国太郎	ざくろ	2019.6.12～2019.8.6
		花山天文台遠望	
		溪流の鷺	
		雨後（水間村）	
蘭島閣美術館別館所蔵品展Ⅰ 所蔵品への視点シリーズ・1 素描の世界	浅井忠	柿	2019.6.19～2019.8.6
	寺内萬治郎	裸婦	
	南薫造	因島土生	
松清園陶磁器館所蔵品展Ⅱ 器に見る水のある景色	－	染付鯉滝登り文大皿	2019.6.26～2019.9.3
	－	色絵青海波水葵文小皿	
松清園御馳走一番館所蔵品展Ⅱ 朝鮮通信使が見た日本の景色	崔北	山水図	2019.6.26～2019.9.3
	葛飾北斎	富嶽百景 来朝の不二	
蘭島閣美術館所蔵品展Ⅲ 瀬戸内の画家たち 後期	南薫造	瀬戸内	2019.7.31～2019.9.13
	野田弘志	安芸灘大橋	
三之瀬御本陣芸術文化館所蔵品展Ⅱ 広島洋画壇の重鎮 岡崎勇次が描いた風景画 同時開催：須田国太郎と近代風景画の名品	岡崎勇次	幻煙	2019.8.7～2019.9.24
		北の港	
		瀬戸の夜明け	
	須田国太郎	夏雲	
	南薫造	海（房州）	
蘭島閣美術館別館所蔵品展Ⅱ 所蔵品への視点シリーズ・2 浮世絵に見る文様あれこれ	歌川豊国（三）	初代中村福助の犬伴黒主	2019.8.16～2019.11.18
		初代河原権十郎の弁慶	
松清園陶磁器館所蔵品展Ⅲ 金色に輝く古伊万里－所蔵名品展－	－	色絵荒磯文皿	2019.9.4～2019.11.12
松清園御馳走一番館所蔵品展Ⅲ 朝鮮通信使と来日の影響	－	色絵楼閣牡丹文蓋付大壺	
	－	朝鮮通信使時給花見用提重	2019.9.4～2019.9.30
	－	朝鮮通信使祭礼行列図	
秋季特別展 日展日本画の華 佐藤太清と児玉希望、奥田元宋 （会場：蘭島閣美術館）	佐藤太清	竹林（所蔵：福知山市佐藤太清記念美術館）	2019.9.14～2019.11.12
		初秋（所蔵：福知山市佐藤太清記念美術館）	
		春のバンガロー（所蔵：広島県立美術館）	
三之瀬御本陣芸術文化館所蔵品展Ⅲ 須田国太郎 珠玉の名品	須田国太郎	モヘンテ	2019.9.25～2019.12.3
		巖島	
		能スケッチ～（角田川）	
松清園開館 25 周年記念特別展 朝鮮通信使－江戸時代の国際交流－ （会場：松清園 御馳走一番館）	－	朝鮮通信使船上関来航図（所蔵：超専寺）	2019.10.1～2019.11.12
	－	三使進物目録（所蔵：福山市歴史資料室）	
	－	香炉（所蔵：福禅寺）	
	－	韓使聘禮図（所蔵：福山市鞆の浦歴史民俗資料館）	
蘭島閣美術館所蔵品展Ⅳ	佐伯祐三	パリの教会堂	2019.11.13～2019.12.24

旅路～画家たちの描いた美の視界～	石井柏亭	水辺	
松濤園陶磁器館所蔵品展Ⅳ	—	青磁染付宝尽し文大皿	2019.11.13 ～ 2020. 1.28
萩と伊万里	—	古萩 茶碗	
松濤園御馳走一番館所蔵品展Ⅳ	李義養	春景図	2019.11.13 ～ 2020. 1.28
朝鮮通信使の旅路	弥太郎	朝鮮通信使来朝図説	
蘭島閣美術館別館所蔵品展Ⅲ 寺内萬治郎の油彩画	寺内萬治郎	髪	2019.11.19 ～ 2020. 2.4
三之瀬御本陣芸術文化館所蔵品展Ⅳ 須田国太郎と昭和の前衛油彩画家たち	須田国太郎	溪流の鷺	2019.12.4 ～ 2020. 2.12
	三岸好太郎	印度人の男	
	児島善三郎	横臥	
蘭島閣美術館所蔵品展Ⅴ 新春企画 日本の四季を寿ぐ	川合玉堂	湖畔雪霽	2019.12.25 ～ 2020. 2.19
	小茂田青樹	都忘と蝶	
		八重桜	
	上村松園	つれづれ	
松濤園陶磁器館所蔵品展Ⅴ 美濃焼 同時開催：古伊万里コレクション「花の彩り」	荒川豊蔵	志野茶碗	2020. 1.29 ～ 2020. 5.9
	—	織部 梅文茶碗	
	—	色絵花盆文大皿	
松濤園御馳走一番館所蔵品展Ⅴ 朝鮮通信使と江戸時代の饗応	—	朝鮮人御饗応献立	2020. 1.29 ～ 2020. 5.9
	—	祝言膳部次第	
蘭島閣美術館別館所蔵品展Ⅳ 童画の登場—大正・昭和初期の新メディア	寺内萬治郎	挿絵 くたびれこま	2020. 2.5 ～ 2020. 8.25
三之瀬御本陣芸術文化館所蔵品展Ⅴ 日本画にみる墨の表現 須田国太郎と洋画家の描いた水墨画	岸田劉生	童女図（麗子像）	2020. 2.13 ～ 2020. 5.9
	須田国太郎	尾道風景	
	村上華岳	虎の図	
	松林桂月	富嶽	
	竹内栖鳳	雙鶏	
蘭島閣美術館所蔵品展Ⅵ 花々の魅力	中島千波	清風枝垂櫻	2020. 2.20 ～ 2020. 4.18
	小林古径	紅梅	2020. 2.20 ～ 2020. 5.19
	南薫造	花カゴを持てる少女	

資料貸出

□資料貸出

博物館・美術館、教育機関などからの申請に基づき、他館の展示公開事業に資料を貸出した。

	作者	資料名	会場	展覧会名	展覧会会期
1	熊谷守一	つつぢに揚羽蝶	公益財団法人泉美術館	特別展 画家の愛した動物たち	2019.4.25 ～ 2019.6.2
	山口薫	クマの絵舩			
2	杉山寧	秋果	美術館あーとあい・きさ	企画展 南薫造と奥田元宋ゆかり の日展の作家たち	2019.10.13 ～ 2019.11.10
	高山辰雄	森の気			
	東山魁夷	晴春			
	南薫造	海（夕日）			
		木のある風景			
		串山のみかん畑			
		公園風景			
		木立と池			
		魚（カイゴスネ）			
		石膏像と花			
		瀬戸内風景			
		瀬戸の夕陽			
		鯛			
		夏の海			
		庭の一隅			
		広場遠景			
3	稲元実	紅牡丹	公益財団法人タカヤ文化財団 華鶴大塚美術館	企画展 花王・牡丹画譜	2019.10.12 ～ 2019.12.1
		白牡丹			
	堅山南風	鳩と牡丹			
	加山又造	牡丹			
	小泉淳作	牡丹図			
	小林古径	牡丹			

画像提供

□美術資料

	利用者	目的	作者	資料名	許可日
1	西山事務所	カレンダーへ図版掲載のため	福田平八郎	雪庭	2019.6.6
2	(株) ニュースアンドコミュニケーションズ	カレンダーへ図版掲載のため	池田逢邨	嵐山渡月橋	2019.8.22
3	奥田元宋・小由女美術館	カレンダーへ図版掲載のため	奥田元宋	風光る	2020.2.25
4	大分県立美術館	研究紀要に掲載のため	福田平八郎	鯉（春水）	2020.3.21

□歴史資料、陶磁器ほか

	利用者	目的	作者	資料名	許可日
1	中国新聞社	新聞紙面へ図版掲載のため	—	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図	2019.5.31
2	中国新聞社	新聞紙面へ図版掲載のため	—	銹釉染付双鶴文輪花小皿	2019.5.31
3	中国新聞社	新聞紙面へ図版掲載のため	—	染付鯉滝登り文大皿	2019.7.28
			葛飾北斎	富嶽百景	
4	広島ユネスコ協会	複製物展示のため（資料パネル）	—	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図	2019.8.17
			—	七五三膳模型	
			—	三汁十五菜模型	
5	株式会社 TSS プロダクション	番組内で放映のため	—	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図	2019.10.18
6	国立海洋文化財研究所（韓国）	テキストへ図版掲載のため	—	朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図	2019.11.27
7	関西テレビ	番組内で放映のため	—	朝鮮通信使行列図絵巻	2020.2.21

資料閲覧

□資料閲覧

調査研究を目的とした博物館・美術館、教育機関などからの申請に基づき資料を閲覧に供した。

	調査者	目的	作者	資料名	閲覧日
1	広島市現代美術館	展覧会企画調査のため	霞光	キリスト（赤）	2019.7.18
				パーサーの像	
			船田玉樹	おむらつんつん	
2	広島市現代美術館	展覧会企画調査のため	霞光	キリスト（赤）	2019.12.5
				パーサーの像	
			松本竣介	少女	
			長谷川利行	裸婦	
				大島あんど	

普及事業・市民サービス・財団事業



普及事業

ギャラリートーク・講演会・ワークショップ

市民の美術教養の向上と教育普及を目的とし、普及事業としてギャラリートーク、講演会を開催した。また、創作活動の推進を図るためワークショップを開催した。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2020（令和2）年3月1日（日）以降は、予定していた普及事業をすべて中止した。

蘭島閣美術館

蘭島閣美術館 ギャラリートーク

●所蔵品展Ⅰ「蘭島閣美術館名品展 華麗なる美の競演」

関連行事ギャラリートーク

2019（平成31）年4月28日（日）、2019（令和元）年5月12日（日）
午前11時から／午後2時から（各日2回）

（参加者）

9名（4月28日午前11時）、1名（4月28日午後2時）
3名（5月12日午前11時）、2名（5月12日午後2時）

（内容）

昭和初期に活躍した作家から現在も活躍する作家の作品を一堂に展示し、日本画の流れを俯瞰した。横山大観や東山魁夷などそれぞれの時代を代表する作家を幅広く紹介したので、参加者からは他館で同作家の作品を鑑賞した話をうかがうことができた。

●所蔵品展Ⅱ「瀬戸内の画家たち 前期」関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）年6月16日（日）、7月14日（日）
午前11時から／午後2時から（各日2回）

（参加者）

2名（6月16日午前11時）、20名（6月16日午後2時）
2名（7月14日午前11時）、2名（7月14日午後2時）

（内容）

展覧会のテーマや作家、作品へのより深い理解を図るために展示室内を回りながら解説をおこなった。本展では瀬戸内海沿岸の地域出身や広島県にゆかりのある作家に焦点を当て、前期展では日本画を江戸時代後期の作家から現代まで幅広く紹介したので、参加者は広島にゆかりのある日本画家が多数存在し、活躍していることに驚いていた。

●所蔵品展Ⅲ「瀬戸内の画家たち 後期」関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）年8月4日（日）
午前11時から／午後2時から（1日2回）

（参加者）

1名（8月4日午前11時）、参加者なし（8月4日午後2時）

（内容）

本展は海を描いた作品を多く展示しており、その中には下蒲刈の海を描いた

村上選の「港」や、野田弘志の「下蒲刈の海」「安芸灘大橋」などの作品もあった。作品に描かれた景色がどのあたりなのかを説明すると、参加者はより熱心に作品を鑑賞していた。特に野田弘志の写実的な表現に驚いていた。

●秋季特別展「日展日本画の華 佐藤太清と児玉希望、奥田元宋」

関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）年10月13日（日）、11月3日（日）

午前11時から／午後2時から（各日2回）

（参加者）

20名（10月13日午前11時）、7名（10月13日午後2時）

14名（11月3日午前11時）、10名（11月3日午後2時）

（内容）

本展では、佐藤太清を中心に広島を代表する日本画家の児玉希望、奥田元宋を紹介した。佐藤太清の代表作を紹介した展覧会の開催は当館が広島県で初めてだったので、参加者も佐藤太清がどういった画家なのか知らない方が多い印象を受けた。児玉希望、奥田元宋とのつながりを紹介し、佐藤太清の作品の変遷について説明すると参加者から、作品について理解を深めることができたなど感想をいただいた。

●所蔵品展Ⅳ「旅路～画家たちの描いた美の視界～」

関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）11月30日（土）、12月15日（日）

午前11時から／午後2時から（各日2回）

（参加者）

4名（11月30日午前11時）、5名（11月30日午後2時）

参加者なし（12月15日午前11時）、3名（12月15日午後2時）

（内容）

画家たちが描いた世界各地の風景画を展示し、その景色が画家たちの目にどのように映ったのかを感じてもらう展示にした。浮田克躬が描いた「セーヌの古城」と「古城と赤い屋根の村」は同じ土地を異なる構図で描いた作品だが、参加者からは違う場所を描いているように見えたという感想もあった。同じ風景でも再訪したときの画家の心情の違いが絵にも表れることを知ってもらう機会になった。

●所蔵品展Ⅴ「新春企画 日本の四季を寿ぐ」関連行事ギャラリートーク

2020（令和2）年1月26日（日）、2月9日（日）

午前11時から／午後2時から（各日2回）

（参加者）

6名（1月26日午前11時）、1名（1月26日午後2時）

参加者なし（2月9日午前11時）、4名（2月9日午後2時）

（内容）

展覧会のテーマや作家、作品へのより深い理解を図るために展示室内を回りながら解説をおこなった。本展は四季を主題にした作品を紹介しておりそれぞれ展示室ごとにテーマを分けて展示をおこなった。雪の描き方に着目したコーナーでは、参加者に日本画材にさわっていただき、絹や紙を支持体にして、画家たちがさまざまな方法で雪を表現していることを説明した。



蘭島閣美術館 講演会

●秋季特別展「日展日本画の華 佐藤太清と児玉希望、奥田元宋」

関連行事講演会

オープニングスペシャルギャラリートーク

2019（令和元）年9月14日（土）

午前10時20分から

参加者 45人

場所 蘭島閣美術館

（内容）

開会当日講師に佐藤太清のご令孫安田晴美氏（美術史家・福知山市佐藤太清記念美術館顧問）を講師に迎えギャラリートークを開催した。太清の師である児玉希望の画塾のことや、奥田元宋の作品の変遷、太清の作品制作時の姿勢など細かく説明いただいた。参加者からは、制作の様子などなかなか知ることができない側面を聞くことができ感動したと感想をいただいた。



蘭島閣美術館 ワークショップ

●所蔵品展Ⅰ「蘭島閣名品展 華麗なる美の競演」関連行事ワークショップ

ワークショップ「蘭島閣オリジナルクイズ」

2019（平成31）年4月27日（土）～2019（令和元）年5月6日（月）

開催日数：10日

参加者：231人

場所：蘭島閣美術館

（内容）

ワークショップでは、展示内容や美術館に関するクイズを掲載したワークシートを作成し、来館者に配布した。答え合わせは受付でおこない、全問正解者にはハガキをプレゼントした。クイズは子どもから大人まで幅広い世代に楽しんでもらえる内容にした。GW中に開催したため、家族連れなど多くの方に参加していただくことができた。作品をじっくりと時間をかけて鑑賞しながらクイズを解く姿が印象に残った。



●所蔵品展Ⅲ「瀬戸内の画家たち 後期」関連行事ワークショップ

ワークショップ「なつやすみ特別企画 絵画鑑賞のじかん」

2019（令和元）年8月4日（日）、8月11日（日）

午後1時から20分程度

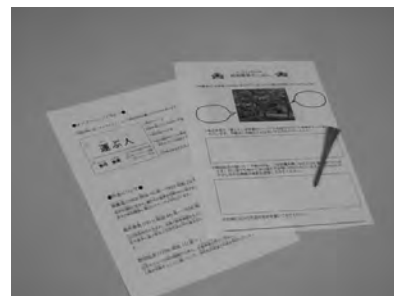
開催日数：2日

参加者：1名（8月4日）、1名（8月11日）

場所：蘭島閣美術館

（内容）

初めて美術館に来館する方に気軽に作品を楽しんでもらうことを目的に、展示作品に関するワークシートを作成し作品解説をおこなった。参加者は、学芸員と館内を回りながらワークシートの問題に関連した作品を鑑賞。まずは学芸員が簡単に作品について紹介してから参加者に問題を解いてもらい、その後参加者の回答をもとに対話、また、作品の詳しい解説をおこなった。ワークシートは大人向けと子ども向けの2種類を用意し、大人向けワークシートの裏には



南薫造「串山のみかん畑」の解説を書いた。子ども向けの方には「キャプション」の見方についての説明と、展示作品の中の主要な作者について簡単な略歴を添えることでより詳しく作家のことが理解できるよう工夫した。

●秋季特別展「日展日本画の華 佐藤太清と児玉希望、奥田元宋」

関連行事ワークショップ

ワークショップ「日本画材 金箔に親しもう」 有料：参加費 500 円

2019（令和元）年9月29日（日）

午前10時から

開催日数：1日

参加者：31人（作品解説）19人（ワークショップ）

場所：蘭島閣美術館・下蒲刈市民センター



（内容）

このイベントは、講師に安田晴美氏（美術史家・福知山市佐藤太清記念美術館顧問）と小田野尚之氏（日本画家・日本美術院同人）を迎え、作品解説と日本画材に触れるワークショップとして開催した。まず、蘭島閣美術館で安田氏によるギャラリートークを開催。参加者に太清の作品について、理解を深めてもらう目的で実施した。その後、参加者は下蒲刈市民センターに移動してもらい、太清の展示作品の中でも使用されている箔に触れてもらいながら、作品制作をおこなった。参加者からは、作品解説が分かりやすく充実した時間を過ごすことができたという感想や、金箔や絵具を使っの表現方法が学べて楽しかったなど多数の感想をいただいた。

●所蔵品展Ⅵ「花々の魅力」関連行事ワークショップ

ワークショップ「ステンシルで花を咲かせよう」

2020（令和2）年2月28日（金）～3月1日（日）、3月13日（金）～3月

15日（日）、4月3日（金）～4月5日（日）

午前10時から午後3時

開催日数：2日（以降、中止）

参加者：1名（2月29日）

場所：蘭島閣美術館



【中止】＊2020（令和2）年3月1日（日）以降のイベントは中止の措置をとった。

＊2020（令和2）年3月9日（月）から5月10日（日）まで、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため臨時休館

（内容）

展覧会では花の魅力に迫る作品を展示していたため、花に親しんでもらうことを目的としたワークショップをおこなった。どの世代にも手軽に楽しんでもらう方法としてステンシルを選んだ。参加者には、梅や桜などの花の形に切り抜いたシートを画用紙の上に置いて、絵具をつけた綿棒でそれを叩きステンシルをしてもらった。シートと絵具は種類をいくつか用意し、参加者が自由に組み合わせる作品を作れるように工夫した。参加者はステンシルを体験するのが初めてで最初は戸惑っていたが、慣れてくると次第に絵具を混ぜたり、シートを組み合わせたりして自分だけの作品に仕上げていた。

三之瀬御本陣芸術文化館

三之瀬御本陣芸術文化館 ギャラリートーク

●開館 15 周年春季特別展「京都洋画壇の三巨匠 須田国太郎と安井曾太郎・梅原龍三郎」関連行事ギャラリートーク

2019（平成31）年4月13日（土）午前10時から

2019（令和元）年6月2日（日）午後2時から

（参加者）

55名（4月13日午前10時）、18名（6月2日午後2時）

（内容）

三之瀬御本陣芸術文化館の開館 15 周年を記念して開催された本展では、始めに当館と福島雁木や朝鮮通信使の関わりなど、歴史の紹介からおこなった。その後、須田国太郎、安井曾太郎、梅原龍三郎の順にそれぞれの生い立ち、作品の特徴、画家の言葉などを紹介した。歩いて行けるほどの近くにあった3人の生家の位置を、地図を使って説明。同時代に生きて共通点も多かった3人であるが、その表現は三者三様であることを、作品を通して解説した。「それぞれの特徴を比較しながら楽しめた」など、参加者からの感想があった。なお、4月13日（土）は、最後に須田国太郎のご子息である須田寛氏より、ご尊父についての思い出をお話いただき、貴重なお話を伺うことが出来た。



●所蔵品展Ⅱ「広島洋画壇の重鎮 岡崎勇次が描いた風景画」

同時開催「須田国太郎と近代風景画の名品」関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）年8月18日（日）、9月1日（日）

午後2時から

（参加者）

6名（8月18日午後2時）、3名（9月1日午後2時）

（内容）

岡崎勇次の年譜から生い立ちを説明。1961（昭和36）年の滞欧作から1991（平成3）年の絶筆までの作品を年代順に解説した。初期の外国の風景画では、描かれた町の実際の写真を作品と比較した。また、赤潮や瀬戸内海に浮かぶ四阪島の公害をテーマにした作品では、その背景もあわせて解説。晩年の北の海をテーマにした作品においても、モデルとなった船の説明を加えた。生涯、さまざまな海の問題、表情を描き続けた岡崎の情熱を伝えた。「須田国太郎と近代風景画の名品」では、須田の風景画の特徴を説明。小林和作や南薫造の作品では、海をテーマにした作品を展示したため、岡崎勇次の海の表現と比較し、海の捉え方、表現が画家によって異なる点を振り返りながら回った。



●所蔵品展Ⅳ「須田国太郎と昭和の前衛油彩画家たち」関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）年12月21日（土）

午後3時から

（参加者）

5名（12月21日午後3時）



(内容)

本展では、須田国太郎を中心に独立美術協会に所属した同時代の画家たちの品を紹介した。須田の作品から解説し、須田と親交を深めた小林和作を紹介した。続いて独立美術協会の創立者たちの作品に触れ、彼らが大きく影響を受けた、当時フランスで台頭したフォービズムについてその特徴などを、作品を通して解説した。参加者からは「普通と違っていて独特な感じがきれいでした」などの感想があった。

●所蔵品展Ⅴ「日本画にみる墨の表現」「須田国太郎と洋画家の描いた水墨画」
関連行事ギャラリートーク

2020（令和2）年3月21日（土）

午後3時から（中止）

【中止】＊2020（令和2）年3月1日（日）以降のイベントは中止の措置をとった。

＊2020（令和2）年3月9日（月）から5月10日（日）まで、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため臨時休館

三之瀬御本陣芸術文化館 ワークショップ

●開館15周年春季特別展「京都洋画壇の三巨匠 須田国太郎と安井曾太郎・梅原龍三郎」関連行事ワークショップ

第1部：[鑑賞]、第2部：制作「油絵にチャレンジ!」 有料：参加費 500 円

2019（令和元）年5月11日（土）

午後1時から 第1部：鑑賞／午後2時から 第2部：制作

開催日数：1日

参加者：14名（第1部 鑑賞）、5名（第2部 制作）

場所：第1部：三之瀬御本陣芸術文化館

第2部：下蒲刈市民センター

(内容)

ワークショップ「油絵にチャレンジ!」では制作の前に、本展出品作品の解説も踏まえ、油絵の特徴や、静物画について鑑賞し、その後、油絵での制作に移った。果物などのモチーフを自分で組んで、3号サイズの静物画の制作をおこなった。今回は、カマイユ技法という単色で明暗を描きながら形取りをした後、固有色を置いていく油彩画の基本的な描き方を実施。2時間という短い時間での制作であったが、それぞれの個性が光る素敵な作品が完成した。「丁寧な指導で楽しかったです」など感想をいただいた。



●所蔵品展Ⅱ「広島洋画壇の重鎮 岡崎勇次が描いた風景画」
同時開催「須田国太郎と近代風景画の名品」関連行事ワークショップ
ワークショップ「マーブリングでMyノートをつくろう」

2019（令和元）年8月11日（日）

午前10時から午後2時30分

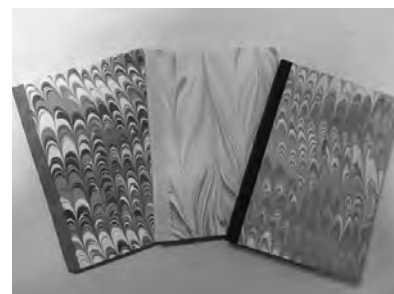
開催日数：1日

参加者：7名

場所：三之瀬御本陣芸術文化館

(内容)

水の動きを利用して、さまざまな模様を作り出すマーブリング。ゴム樹脂の水溶液に絵具を垂らして、串などで模様を描いた後、空気が入らないように水



面に紙を置き、水面に出来た模様を写し取る技法である。写し取られる模様が大理石、英語で marble の模様に似ていることから、この名で呼ばれている。今回は、このマーブルペーパーを制作し、ドライヤーで乾かした後、ノートの裏表の表紙となる台紙に貼り、中身と組み合わせて製本をして、自分だけのオリジナルノートを作った。本展では海の作品を多く紹介したため、水面の表情によって様々な様相を見せる海の姿から、水の動きを利用した本ワークショップを企画した。参加者は模様を紙に写し取った瞬間に歓声をあげ、水で作り出す模様に感動していた。



●所蔵品展Ⅴ「日本画にみる墨の表現」「須田国太郎と洋画家の描いた水墨画」
関連行事ワークショップ

ワークショップ「墨流しランプシェード」 有料：参加費 200 円

2020（令和2）年3月28日（土）

午前10時から午後2時30分（中止）

【中止】＊2020（令和2）年3月1日（日）以降のイベントは中止の措置をとった。

＊2020（令和2）年3月9日（月）から5月10日（日）まで、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため臨時休館

松濤園（陶磁器館・御馳走一番館）

松濤園（陶磁器館・御馳走一番館） ギャラリートーク

●松濤園所蔵品展Ⅰ

陶磁器館「釉－うわぐすり－」

御馳走一番館「国書改竄と国交の回復」関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）年5月19日（日）、6月16日（日）

午前11時から

（参加者）

5名（5月19日午前11時）

参加者なし（6月16日午前11時）

（内容）

陶磁器館、資料館を所蔵品のテーマに沿って解説した。陶磁器館では日本における釉薬（ゆうやく）の歴史と装飾方法を紹介した。御馳走一番館では、江戸時代の朝鮮通信使再開の調整役となった対馬藩の、国書偽造に至るまでの経緯から、国書改竄の露見による本事件の決着までを解説した。

●松濤園所蔵品展Ⅱ

陶磁器館「器に見る水のある景色」

御馳走一番館「朝鮮通信使が見た景色」関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）年7月7日（日）、8月4日（日）

午前11時から

（参加者）

8名（7月7日午前11時）

2名（8月4日午前11時）

（内容）

陶磁器館では所蔵品の中から、器に描かれた水の表現について解説した。器の表面に文様として描かれた表現から、作品の形態によって水を表現している様子を解説した。御馳走一番館では、朝鮮通信使が来日時の楽しみとした日本の風景や景色について特集して展示を構成し、通信使が描いた作品や、風景の中に描かれた通信使の様子を解説した。

●松濤園所蔵品展Ⅲ

陶磁器館「金色に輝く古伊万里－所蔵名品展－」

御馳走一番館「朝鮮通信使と来日の影響」関連行事ギャラリートーク

2019（令和元）年9月8日（日）

午前11時から

（参加者）

参加者なし（9月8日午前11時）

●松濤園開館 25 周年記念特別展**「朝鮮通信使－江戸時代の国際交流－」関連行事ギャラリートーク**

2019（令和元）年 10 月 6 日（日）

午前 11 時から

（参加者）

10 名（10 月 6 日午前 11 時）

（内容）

松濤園開館 25 周年を記念して、朝鮮通信使に関する資料を下関、上関、福山から集め展示を構成し、朝鮮通信使に関する記録を外交の記録、旅程の記録、文化交流の 3 つの側面から解説した。外交の記録では朝鮮国書のパネルを用い当時の両国家間を往来した外交文書の形態を紹介し、旅程の記録では通信使の旅路について海路、陸路をあわせて紹介した。文化交流の記録では、2 度通信使の画員として随行し、日本で人気を博した金明国（キム・ミョングク）筆による拾得図などを紹介し、通信使の来日により文化交流が持たれた様子を紹介した。

●松濤園所蔵品展Ⅳ**陶磁器館「萩と伊万里」****御馳走一番館「朝鮮通信使の旅路」関連行事ギャラリートーク**

2019（令和元）年 11 月 17 日（日）、2019（令和元）年 12 月 1 日（日）、

2020（令和 2）年 1 月 12 日（日）

午前 11 時から

（参加者）

5 名（11 月 17 日午前 11 時）

2 名（12 月 1 日午前 11 時）

参加者なし（1 月 12 日午前 11 時）

（内容）

安土・桃山時代末から江戸時代初期に誕生した萩焼と伊万里焼を解説した。萩焼、伊万里焼の草創期の作品から、現代の作家活動の中で伝統を継承している作家の作品について解説した。御馳走一番館は、海路・陸路を展示で紹介し、当時の旅の困難さや旅の魅力を解説した。

●松濤園所蔵品展Ⅴ**陶磁器館「美濃焼」同時開催「古伊万里コレクション 花の彩り」****御馳走一番館「朝鮮通信使と江戸時代の饗応」関連行事ギャラリートーク**

2020（令和 2）年 2 月 16 日（日）、3 月 29 日（日）

午前 11 時から（3 月 29 日は中止）

（参加者）

1 名（2 月 16 日午前 11 時）

【中止】*2020（令和 2）年 3 月 1 日（日）以降のイベントは中止の措置をとった。

*2020（令和 2）年 3 月 9 日（月）から 5 月 10 日（日）まで、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため臨時休館

松濤園（陶磁器館・御馳走一番館） ワークショップ

●所蔵品展Ⅱ陶磁器館「器に見る水のある景色」御馳走一番館「朝鮮通信使が見た日本の景色」関連行事ワークショップ

ワークショップ「うちわをつくろう！」 有料：参加費 100 円

2019（令和元）年8月1日（木）～8月18日（日）

午前9時から午後3時

開催日数：18 日

参加者：2 人

場所：松濤園 園内

（内容）

白紙のうちわ面に彩色したり、シールで飾りつけし、オリジナルのうちわを作成した。うちわの装飾の素材としたシールや、彩色の参考となる材料に松濤園の所蔵品の画像を用意した。うちわ作成の参考になるのと同時に、所蔵品への理解を深める機会となることを目指した。

市民サービス | 秋の茶会・梅見茶会・着付け体験

松濤園 秋の茶会

日本文化の神髄である茶道を体験し、また日本建築と庭園の調和を感じることで、日本文化を生み出した文化的背景を知る機会を市民に提供している。松濤園内の蒲刈島御番所を会場として活用し、お抹茶と茶菓子を本格的な作法で振る舞い、茶道の経験にかかわらず広く市民サービスとして誰もが体験でき楽しめる内容としている。

日時 2019（令和元）年11月9日（土）・10日（日）
（11月9日は手前、10日は点出）

会場 松濤園 蒲刈島御番所

協力 上田宗箇流 浜田宗凜（倫英子）、浜田社中5名

おもな関連記事、番組など

○「和風」第146号、上田宗箇流和風堂 ○「和風」第147号、上田宗箇流和風堂
○『くれえばん』10月号、株式会社SAメディアラボ ○「安芸灘だより」11月号、呉市下蒲刈まちづくりセンター ○「市政だより くれ」11月号、呉市

印刷物

- ポスター B2判 10部
- チラシ A4判（両面刷り） 6,000部

（参加者）

225名（11月9日）／136名（11月10日）

□11月9日（土）参加人数内訳

席	呈茶時間	参加人数：点前	参加人数：点出
計8席	9:30～15:45	117	108

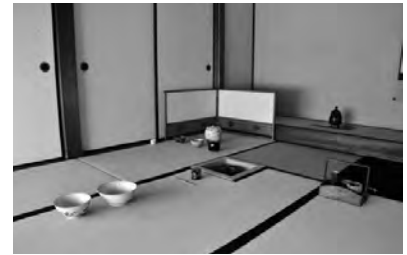
□11月10日（日）参加人数内訳

席	呈茶時間	参加人数：点出
一	9:30～16:00	136



(内容)

本年度の秋の茶会では、開催時期に合わせて「秋」をテーマとして茶会を開催した。「山時雨洗紅葉」の軸をかけ、秋雨が山に色づく紅葉を洗っている様子を来館者に楽しんでもらい、風炉先、薄茶器、蓋置、二の間の置物の青備前香炉に、菊、楓など秋を感じることができるものを中心に用意した。両日とも天候に恵まれ、多くの来館者でにぎわった。



呉市下蒲刈町
文化と歴史の祭典

秋の茶会

令和元年十一月九日・十日
松浦園 園内蒲刈島御番所

会記

掛物 「山時雨洗紅葉」

上田宗箇流十六代家元 宗岡 筆

花 季のもの

花入 瑠璃釉瓶

古伊万里 寛文様式 一六五〇〜七〇

香合 信楽タヌキ香合

高橋楽斎

敷帛紗 鳥襷宝尽綴子

上田大海裂地写

炉縁 石目面取金七宝

日野拓也

風炉先 高台寺透菊桐

近藤一甫

釜 柏葉釜

宮崎寒雄

水指 灰矢透指頭文

清水卯一

薄茶器 中次菊時絵

一后一兆

茶杓 波木井昇斎

板谷波山

主茶碗 対州御本

楽吉左衛門十五代 直入

替 黒楽

柿右衛門 十三代

替 緑天目

板谷波山

蓋置 色絵楓文

柿右衛門 十三代

水次 片口 生地

古伊万里 延宝様式 一六七〇〜九〇

建水 染付松竹梅龍文鉢

蜜屋製

菓子 銘「秋の香」

延宝様式

菓子器 白磁捻花文

村瀬一貫

煙草盆 肥松手付

梅原偉央

火入 鼠志野

一双

煙草入 唐物独楽

今井政之

煙管 如心斎好

下二 青備前香炉

二の間 「山に松の図」

下二 青備前香炉

掛物

下二 青備前香炉

松濤園 梅見茶会

日本文化の神髄である茶道を体験し、また日本建築と庭園の調和を感じることで、日本文化を生み出した文化的背景を知る機会を市民に提供している。松濤園内の蒲刈島御番所を会場として活用し、お抹茶と茶菓子を本格的な作法で振る舞い、茶道の経験にかかわらず広く市民サービスとして誰もが体験でき楽しめる内容としている。

日時 2020(令和2)年2月8日(土)・9日(日) 2月8日は点前、9日は点出

会場 松濤園 蒲刈島御番所

協力 茶道裏千家 中野宗賀(須賀子)、中野社中 10名

おもな関連記事、番組など

○「市政だより くれ」2月号、呉市 ○「松濤園で梅見茶会」中国新聞、2020(令和2)年1月29日 ○「Event & Stage」読売新聞、2020(令和2)年2月7日 ○「安芸灘だより」2月号、呉市下蒲刈まちづくりセンター ○『くれえばん』2月号、株式会社 SA メディアラボ

○「テレビ派街かど伝言板/テレビ派」広島テレビ放送、2020(令和2)年2月4日放送

印刷物

- ポスター B2判 100部
- チラシ A4判(両面刷り) 6,500部

(参加者)

274名(2月8日) / 137名(2月9日)

□2月8日(土) 参加人数内訳

席	呈茶時間	参加人数：点前	参加人数：点出
計9席	9:30~15:30	206	68

□2月9日(日) 参加人数内訳

席	呈茶時間	参加人数：点出
一	9:30~16:00	137



(内容)

毎年立春を迎える時期に梅見茶会を開催している。松濤園内に梅花を生け、膨らみ始めた梅を愛でながら来館者に一服を楽しんでもらった。「春」を主題とし、花器に唐橘と白藪椿を生け、二の間には川崎小虎の「早春」で茶室を飾った。本年が鼠年ということもあり、十代大樋長左衛門の鼠香合を用い年月のうつろいを表現した。開催日両日とも天候に恵まれ、多くの来館者がお茶を楽しんだ。



令和元年度

梅見茶会

会記

時 令和二年二月八日・九日
於 松濤園園内 蒲刈島御番所

掛物

海呼萬歳聲

今井政之

花入

唐橘 白藪椿

古伊万里 元禄様式

香合

鼠香合

十代大樋長左衛門

釜敷

桐鳳凰文蒔絵

尚友斎

炉縁

松の図

船田玉樹

風炉先

住吉波模様茶釜

角谷一圭

釜

志埜水指

鈴木藏

水指

鞆の浦文平棗

佐久間不干斎

薄茶器

黒楽茶碗

六代楽吉座衛門 左入

茶杓

唐津粉引茶碗

十三代中里太郎右衛門

主茶碗

白竹

松長剛山

替

松唐草

山川敦司

蓋置

備前建水

金重陶陽

水次

おとずれ

椿庵博美屋製

建水

絵志野草文額皿

十六から十七世紀

菓子器

煙草盆

時代

火入

煙草盆

時代

煙管

煙草盆

時代

二の間

早春

時代

掛物

卑弥呼

時代

前二

川崎小虎

三輪龍氣生(十二代休雪)

松濤園 着付け体験

松濤園において着付け体験を開催し、朝鮮通信使再現行列をアピールし異文化を体感できる市民サービスを提供した。

会期 2020(令和2)年2月22日(土)～3月22日(日)の期間中の土・日・祝の、
のべ計12日(3月1日以降、中止)

場所 松濤園 園内

【中止】*2020(令和2)年3月1日(日)以降のイベントは中止の措置をとった。
*2020(令和2)年3月9日(月)から5月10日(日)まで、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため臨時休館

参加者 20名

参加費 無料

おも関連記事、番組など

○『くれえばん』3月号、株式会社SAメディアラボ ○「安芸灘だより」3月号、
呉市下蒲刈まちづくりセンター

○「テレビ派街かど伝言板／テレビ派」広島テレビ放送、2020(令和2)年2
月4日放送

(目的)

チマチョゴリなどの韓国伝統衣装を着て、松濤園内で記念撮影をおこなえる
イベントとして開催。松濤園来館のきっかけを作り松濤園及び再現行列の活動
をアピールした。韓国伝統衣装を着ることを通し、朝鮮通信使学習のきっかけ
となることを目的とした。

(内容)

松濤園料金所で受付後、着替え会場の蒲刈島御番所で希望する来場者に着付
け体験の内容を説明し、着付けを体験してもらった。準備したのは、チマチョ
ゴリ5着パジチョゴリ5着子供用チョゴリ数着でそれぞれが希望する衣装を着
付けし、写真撮影などの補助もおこなった。参加者からは、韓国ドラマを見て
着てみたかったなどの感想をいただいた。

全体として12回の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防
止のため、3月1日(日)以降のイベントは中止の措置をとった。そのため3
月7日(土)以降は予定していた着付け体験も中止となった。

□参加人数内訳

日時(曜日)	参加人数
2月22日(土)	2
2月23日(日)	14
2月29日(土)	0
3月1日(日)	0
～以降中止	



財団事業

朝鮮通信使再現行列・ギャラリーコンサート・
昆虫教室・海岸教室

朝鮮通信使再現行列

江戸時代に朝鮮半島から派遣された外交使節団の寄港地だった呉市の下蒲刈島で、地域振興を目的として朝鮮通信使再現行列をおこなっている。2019（令和元）年度で17回目となった。江戸時代に朝鮮通信使がこの地に11回立ち寄った歴史があり、広島県の史跡に指定されている三之瀬御本陣跡、三之瀬朝鮮通信使宿館跡がある。このような歴史をふまえ、朝鮮通信使資料館「御馳走一番館」は朝鮮通信使関連の資料の収集をおこない、景観や展示環境を整備し公開している。朝鮮通信使再現行列は、これら島内の朝鮮通信使関連遺跡、公開施設などの認知度を高め、地域文化の理解促進、地域活性化および国際交流の機会として毎年開催している。

- 場 所** 下蒲刈市民センター～福島雁木（三之瀬御本陣芸術文化館前）～呉市立下蒲刈中学校
- 開催日** 2019（令和元）年10月20日（日）
- 時 間** 午前10時45分から午後3時
- 観覧料** 無料
- 主 催** 公益財団法人蘭島文化振興財団、呉市、中国新聞社、朝鮮通信使行列保存会
- 後 援** NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送、FMちゅーピー 76.6MHz、呉市国際交流協会、呉市日韓親善協会、一般社団法人広島県観光連盟
- 協 力** 駐広島大韓民国総領事館、在日本大韓民国国民団広島県地方本部、海上自衛隊呉教育隊、大新グループ、呉信用金庫、広島銀行、もみじ銀行、呉広域商工会、呉農業協同組合
- 出店協力** NPO法人 海駅三之関、下蒲刈町漁業協同組合、杵つき餅 たいしん、ひまわりグループ、八の日朝市の会、一般財団法人お好み焼きアカデミー、在日本大韓民国国民団広島県地方本部、下蒲刈中学校PTA、下蒲刈中学校 下蒲刈 COOK!、丸岡園芸、蒲刈食品、であいの館

おもな関連記事、番組など

○「隣国とのよしみ」中国新聞、2019（令和元）年9月12日 ○「朝鮮通信使友好の懸け橋」中国新聞、2019（令和元）年10月11日 ○「下蒲刈で再現行列」中国新聞、2019（令和元）年10月11日 ○「つなぐ日韓の絆」中国新聞、2019（令和元）年10月13日 ○「華やか友好の証し」中国新聞、2019（令和元）年10月21日 ○「朝鮮通信使行列 親善の歴史今に」中国新聞、2019（令和元）年10月21日 ○「朝鮮通信使の島 続く親善の行列」朝日新聞、2019（令和元）年10月21日 ○「＜下蒲刈島＞朝鮮通信使再現行列に過去最多の参加…民団広島からも」民団新聞、2019（令和元）年10月25日 ○「大迫力！ 朝鮮通信使再現行列や權佐馬の披露」Hiroshima Port News! 8月号、国土交通省 中国地方整備局 広島港湾・空港整備事務所 ○「日韓友好 荒波越え紡ぐ」中国新聞（セレクト）、2019（令和元）年10月26日 ○『くれえばん』10月号、株式会社SAメディアラボ ○「安芸灘だより」10月号、呉市下蒲刈まちづくりセンター

印刷物

- ポスター B2判 700部
- チラシ A4判（両面刷り）18,000部



(参加者)

- ①再現行列への参加者数 271 人
- ②その他スタッフとしての参加者数 230 人
- ③観覧者数 約 5,000 人

(内容)

地域の住民及び各種団体と協働し、朝鮮通信使の行列を再現した。下蒲刈市民センターで出発式をおこなった後、町内を当時の再現衣装を身に着けた参加者がパレードし、三之瀬御本陣芸術文化館の雁木では、權伝馬船により広島藩主が到着し、朝鮮通信使正使と挨拶を交わした。またパレード終着地点である下蒲刈中学校では、正使と日本側の徳川将軍との国書交換式を実施し、その後は各種舞踊や太鼓の演奏、抽選会景品などのステージイベントを開催した。呉市が誇る国際交流史を広く市民に紹介するとともに、大韓民国から高校生の音楽隊も招き、文化交流の場ともなった。

□イベント構成

時間	内容	場所
10:45～11:00	出発式	下蒲刈市民センター
11:00～11:30	朝鮮通信使再現行列出発	
11:30～11:45	權伝馬入港 広島藩主到着パフォーマンス	福島雁木（三之瀬御本陣芸術文化館前）
12:40～13:00	朝鮮通信使再現行列入場	下蒲刈中学校
13:00～13:15	国書交換式	
13:15～13:30	交流の踊り	
13:30～15:00	ステージイベント 「みなとオアシス認定式」 「京畿国際通商高等学校吹奏隊演奏」 「広島韓国伝統芸術院舞踊」 「呉氏 Jr. パフォーマンス」 「下蒲刈中学校生徒太鼓演奏」 「在日本大韓国民団広島県地方本部」	
10:30～15:00	売店・バザー	



ギャラリーコンサート

蘭島閣美術館の1階ホールを利用し、美術と音楽の調和によってもたらされる芸術の楽しさと奥深さを享受してもらうためにクラシックを中心とするコンサートを開催した。2001（平成13）年1月から毎月第3土曜日に実施しているもので、2020（令和2）年2月で230回を数えた。誰でも気軽に参加できるように入場料を抑え、かつ子どもたちの来場を促すために高校生以下は無料としている。また市民によるギャラリーコンサートの友の会組織が情報告知や年会費制度などを設け、普及促進を図っている。関連イベントとして音楽関係者による講演会や、出演者のサイン色紙やCDの抽選会を行った。3月は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため中止となった。



*詳しくは別表「2019（平成31／令和元）年度ギャラリーコンサート一覧」の通り

会 場 蘭島閣美術館 1階ロビー
実施日 毎月第3土曜日（年間11回／3月のコンサートは中止となったため）
実施時間 午後6時30分から午後8時30分
入 場 料 1,500円（大人1名1回分／高校生以下は無料）
 友の会 年会費の場合（個人会員：13,000円 家族会員：26,000円 賛助会員：39,000円）
 13,000円で12ヶ月分1部（1名用）、26,000円で12ヶ月分3部（3名用）、39,000円で12ヶ月分4部（4名分）
主 催 公益財団法人蘭島文化振興財団

関連行事

*詳しくは別表「2019（平成31／令和元）年度ギャラリーコンサート関連行事 講演会」の通り

●コンサート講演会

音楽への理解を深めてもらうことを目的に、ギャラリーコンサート開演前の時間を利用して、クラシックに関する講演会を開催した。

会 場 蘭島閣美術館 1階ロビー
実施日 9月21日（土）、11月16日（土）、12月21日（土）
実施時間 午後5時から午後6時10分
入 場 料 無料：ただしギャラリーコンサート入場料必要
講 師 原武（サントリーホールアソシエイト）

●ミニコンサート

ギャラリーコンサート出演者の協力を得て、下蒲刈中学校に出向いての「ミニコンサート」を開催し、子どもたちに対して音楽に親しむ機会を提供した。

会 場 下蒲刈中学校 体育館
実施日時 5月17日（金）午後2時30分から午後3時
入 場 料 無料
出 演 堀了介（チェロ）、堀沙也香（チェロ）、吉田友昭（ピアノ）
参 加 者 下蒲刈中学校、下蒲刈小学校、蒲刈中学校、蒲刈小学校の生徒・教員・保護者142名

●ミュージック＆アーツであそぼう

ギャラリーコンサート出演者の協力を得て、子どもたちを対象に音楽を聴いて絵画を描くイベントを開催した。音楽からイメージされる風景を自由に表現し「想像すること」、「表現すること」の楽しさを感じてもらう内容とした。

会 場 蘭島閣美術館 1階ロビー
実施日時 9月22日（日）午前10時から午後0時30分
講 師 高木綾子（フルート）、坂野伊都子（ピアノ）
 おりでちせ（イラストレーター）
参 加 費 1,000円
参 加 者 18名

印刷物（年間）（全て財団内のプリンターで印刷）

- ポスター A1判 11部
- ポスター A4判 11部
- 広報用プログラム（両面印刷） 1,650部

□2019（平成31／令和元）年度ギャラリーコンサート一覧

開催月	公演名	出演者	開催日時	入場者数
4月	第220回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート ●休憩前「220回記念（サイン入りグッズ）抽選会」	國松竜次（ギター）	2019（平成31）年4月20日（土） 午後6時30分から午後8時30分	140人
5月	第221回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート	堀了介（チェロ） 堀沙也香（チェロ） 吉田友昭（ピアノ）	2019（令和元）年5月18日（土） 午後6時30分から午後8時30分	145人
6月	第222回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート	橋本京子（ピアノ）	2019（令和元）年6月15日（土） 午後6時30分から午後8時30分	123人
7月	第223回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート	塚越慎子（マリンバ）	2019（令和元）年7月20日（土） 午後6時30分から午後8時30分	141人
8月	第224回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート	高木竜馬（ピアノ）	2019（令和元）年8月17日（土） 午後6時30分から午後8時30分	164人
9月	第225回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート ◆17:30～18:10 コンサート講演会	高木綾子（フルート） 坂野伊都子（ピアノ）	2019（令和元）年9月21日（土） 午後6時30分から午後8時30分	153人
10月	第226回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート	平田耕治（バンドネオン） アリエル・ロペス・サルディーバル （ギター） エミリオ・テウバル（ピアノ）	2019（令和元）年10月19日（土） 午後6時30分から午後8時30分	128人
11月	第227回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート ◆17:30～18:10 コンサート講演会	店村真積（ヴィオラ） 小山京子（ピアノ）	2018（平成30）年11月16日（土） 午後6時30分から午後8時30分	128人
12月	第228回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート ◆17:30～18:10 コンサート講演会	川本嘉子（ヴィオラ） 小山実稚恵（ピアノ）	2019（令和元）年12月21日（土） 午後6時30分から午後8時30分	204人
1月	第229回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート	雲井雅人（サクソ） 清田朝子（サクソ） 仲地朋子（ピアノ）	2020（令和2）年1月18日（土） 午後6時30分から午後8時30分	158人
2月	第230回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート ●休憩前「230回記念（サイン入りグッズ）抽選会」 ●会場内、アトリエレガレ作品を展示	堀正文（ヴァイオリン） 清水和音（ピアノ）	2020（令和2）年2月15日（土） 午後6時30分から午後8時30分	177人
3月	第231回～夢のかけはし～蘭島閣ギャラリーコンサート	レオナルド・ブラーボ（ギター） 【中止】	2020（令和2）年3月21日（土） 午後6時30分から午後8時30分	—

□2019（平成31／令和元）年度ギャラリーコンサート関連行事 講演会一覧

開催月	講演名	講師	開催日時	入場者数
9月	『『ある偉大な指揮者の思い出に』アンドレ・プレヴィン、ラファエル・クーベリック（映像付き）』	原武 (サントリーホールアソシエイト)	2019（令和元）年9月21日（土） 午後5時30分から午後6時10分	120人
11月	「イタリア賞グランプリ作品」	原武 (サントリーホールアソシエイト)	2019（令和元）年11月16日（土） 午後5時30分から午後6時10分	100人
12月	「2020年の来日演奏家を紐解く」	原武 (サントリーホールアソシエイト)	2019（令和元）年12月21日（土） 午後5時30分から午後6時10分	190人

□2019（平成31／令和元）年度ギャラリーコンサート関連行事 ミニコンサート（会場：呉市立下蒲刈中学校体育館）

開催月	公演名	出演者	開催日時	入場者数
5月	ミニコンサート	堀了介（チェロ） 堀沙也香（チェロ） 吉田友昭（ピアノ）	2019（令和元）年5月17日（金） 午後2時30分から午後3時	142人

□2019（平成31／令和元）年度ギャラリーコンサート関連行事 ミュージック＆アーツであそぼう（会場：蘭島閣美術館1階ロビー）

開催月	公演名	出演者	開催日時	入場者数
9月	ミュージック＆アーツであそぼう	【音楽】 高木綾子（フルート） 坂野伊都子（ピアノ） 【絵画】 おりでちせ（イラストレーター）	2019（令和元）年9月22日（日） 午前10時から午後0時30分	18人

ふれあい昆虫教室

昆虫の観察を中心とした、親子で参加できる体験学習プログラムとして実施している。芸南島嶼地域の自然に触れ、身近な生物、昆虫の観察や採集を通し、自然とのかかわりや命の尊さを学び、豊かな感性と優しい心を育むことを目的に開催している。また、活動を通じた地域の世代間交流の促進を目指している。

日時 2019（令和元）年8月4日（日）

午前10時から午後2時

場所 下蒲刈島内（大津泊庭園）、昆虫の家

協力 住岡昭彦（ひろしま自然の会会員）

相良伊知郎（広島虫の会会員）

参加者 26名（大人13名、小学生13名）

参加費 500円

印刷物

●A4判チラシ（両面印刷） 2,020部

内容

（1）昆虫採集

下蒲刈島内の大津泊庭園にて、昆虫の生息する場所の見つけ方や、採集する際の注意点など、講師の指導を受けながら親子で昆虫採集や観察をおこなった。また、自然の中でフィールドワークをする際の安全対策、マナーなどを教わりながら採集をおこなうなど、自然との関わりを主体的に考え、行動できる学習内容とした。

（2）標本作り

「昆虫の家」で常設展示をしている標本を見学し、自分たちが実際に採集した昆虫を標本にする作業に取り組んだ。標本作りを通して、より深く観察をおこないながら、命の尊さや、生態系の記録としての標本作りの意義について理解を深めた。



ふれあい海岸教室

磯辺の観察を中心とした、親子で参加できる体験学習プログラムとして実施している。瀬戸内海の自然に触れ、海岸生物の観察や採集を通し、自然とのかかわりや命の尊さを学び、豊かな感性と優しい心を育むことを目的に開催している。また活動を通じた地域の世代間交流の促進を目指している。

日時 2019（令和元）年7月28日（日）

午後0時30分から午後3時30分

場所 下蒲刈島内海岸（白崎海岸周辺）、貝と海藻の家周辺

協力 濱村陽一（日本貝類学会会員、ひろしま自然の会会員）

半田浩士（日本藻類学会会員）

参加者 28名（大人16名、小学生12名）

参加費 500円

印刷物

●A4判チラシ（両面チラシ） 2,020部

内容

（1）磯辺観察

花崗岩を主とする瀬戸内海沿岸の地質の特徴や、生息する海辺の生物について講師の説明を受けながら歩いて観察し、理解を深めた。また、自然の中でフィールドワークをする際の安全対策、マナーなどを教わりながら海藻類の採集をおこなうなど、自然との関わりを主体的に考え、行動できる学習内容とした。

（2）標本作り

「貝と海藻の家」で貝や海藻の標本の展示を見学し、「ふるさと産品加工センター研修室」で、標本づくりに取り組んだ。講師の説明のもと、瀬戸内海に生息する生物の観察や、生態系の記録としての標本作りを体験する内容とした。



運営データ

収集・保存・整理・協力・広報・入館者数・関係法規・役員・職員



収集・保存・整理

□新収蔵資料

所蔵品に関連する資料で、寄贈、寄託の申請があった場合は、調査に基づき必要と認められた場合に収集をおこなっている。2019（平成 31 /令和元）年度は下記の通り寄贈資料を受領した。

凡例

本目録は、申請者ごとに、寄贈申請のあった資料の受入時の通し番号順に記載する。受入資料の分類は、受入時点での分類、種別とする。それぞれの資料については、下記の順にデータを記載する。該当データの無い部分もある。該当データの無い項目は順次繰り上げる。

番号	申請者ごとに、受け入れた際の通し番号
作者	日本語表記
生没年	西暦（和暦）年
資料名	原則として受入時の資料名を表記する 題名が英語の場合、そのまま表記する
制作年	西暦（和暦）年
寸法	縦 × 横（平面）cm、高 × 幅 × 奥行き（立体）の順。 単位は cm。 その他、口径など各種寸法を必要に応じ表記。
材質・形状	日本語表記
署名・年記	おもなものを示す
受入年度（西暦）・受入種別	（受入時点：所蔵品分類とは必ずしも一致しない）

＊須田国太郎遺品の受入種別は、大きく美術系資料の分類とした。種別は、受入時の分類として、須田国太郎の遺品類（制作道具など）を絵画関連資料とした。その他、須田国太郎の作品、ゆかりのある作家の作品を所蔵品分類に基づき日本画、油彩画と記載した。

■寄贈 件名〔須田国太郎遺品〕 寄贈申請者〔須田寛氏〕 受領日〔2019（令和元）年6月27日〕 寄附受納書 蘭文財第90号 水 受納書記載の資料から保存の都合により1点を除外。そのためNo.3以下は文書第90号の通し番号と一致しない。			
NO.1 土門拳 1909（明治42）-1990（平成2）年 照影 1953（昭和28）年 119.5×89.5 紙・プリント 木製パネル 2019年度・絵画関連資料	NO.2 須田国太郎肖像写真 55.7×45.4 紙・プリント 2019年度・絵画関連資料	NO.3 筆一油絵用絵筆／豚毛・フラット10本 大～中 2019年度・絵画関連資料	NO.4 筆一油絵用絵筆／豚毛・フラット10本 中 2019年度・絵画関連資料
NO.5 筆一油絵用絵筆／豚毛・フラット 10本 小 2019年度・絵画関連資料	NO.6 筆一油絵用絵筆／豚毛・フラット小-2 10本 小 2019年度・絵画関連資料	NO.7 筆一油絵用絵筆／豚毛・フラット小-3 5本 小 2019年度・絵画関連資料	NO.8 筆一油絵用絵筆／コリンスキー（イタチ） またはナイロン・フラット 16本 極小 2019年度・絵画関連資料
NO.9 筆一油絵用絵筆／キツネ・豚毛 5本 中・小 2019年度・絵画関連資料	NO.10 筆一油絵用絵筆／豚毛・丸筆 24本 中・小 2019年度・絵画関連資料	NO.11 筆一柔らかい筆 主に丸筆 タヌキ・イタチ・キツネなどの毛 28本 ナイロン製 3本 計31本 大・中・小・極小 2019年度・絵画関連資料	NO.12 筆一日本画（墨画）用筆 15本 羊毛刷毛 1本・筆枝 1本 計17本 2019年度・絵画関連資料
NO.13 筆一刷毛（大） 1本 25.0×10.0×3.0 2019年度・絵画関連資料	NO.14 折れた筆 1本 2019年度・絵画関連資料	NO.15 刷毛 2 1本 10.0×4.5 2019年度・絵画関連資料	NO.16 ペインティングナイフ 1本・パレットナイフ 1 本・竹ペン 1本 計3本 2019年度・絵画関連資料
NO.17 鉛筆・色鉛筆・チャコールペンなど 計11本 2019年度・絵画関連資料	NO.18 印鑑 「な」 1本 5.5×0.6×0.6 木製 2019年度・絵画関連資料	NO.19 木製ペーパーナイフ 1本 20.0×3.2 木製 2019年度・絵画関連資料	NO.20 こより 8本 約22.0 紙 2019年度・絵画関連資料

NO.21
万年筆
1 本
約 15.0
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.22
木製伸縮棒（3 段式）
1 本
縮時 38.0×2.0 伸時 84.2×2.0
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.23
ペン立て用グラス
1 個
高 12.3 口径 6.7
ガラス
2019 年度・絵画関連資料

NO.24
革製筆入れ
1 個
41.0×8.0
革
2019 年度・絵画関連資料

NO.25
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
陶製四角筆立
1 個
高 15.8 口径 14.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.26
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
陶製筆置き
1 個
3.0×16.0×6.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.27
筆洗器
1 個
高 13.5 口径 7.5 底径 11.0
鉄製
2019 年度・絵画関連資料

NO.28
三角定規（6 cm 用）
1 個
プラスチック
2019 年度・絵画関連資料

NO.29
木製定規
1 本
約 90.0
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.30
クリップ（大）
1 個
6.7×14.0×3.2
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.31
重り、針、ゼムクリップ、画紙など
1 箱
2019 年度・絵画関連資料

NO.32
一つ穴パンチ
1 個
4.5×8.5×2.7
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.33
キャンパス張り器
3 本
（1）17.0×4.3（2）22.5×5.0×10.0
（3）20.0×7.0×5.0
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.34
ハンマー 4 点、釘抜き
計 5 点
（1）木槌 25.5×5.7（2）金槌①20.0×10.0
（3）金槌②17.0×6.5（4）小金槌③19.7×4.6
（5）釘抜き 15.0×2.3
木製・金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.35
金属ヤスリ
1 本
14.0×2.0
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.36
金属ヘラ
1 本
12.0×1.8
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.37
金属製ケース（油壺付き）
1 個
1.0×23.0×6.0
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.38
ブロックス油絵具色見本
1 枚
38.0×45.5
キャンパスボード・油彩・鉛筆
2019 年度・絵画関連資料

NO.39
さくら水性絵具 12 色（ハイドリックカラー）
1 セット
1.7×17.5×8.5
紙箱・錫張り鉛チューブ
2019 年度・絵画関連資料

NO.40
さくらくればす 25 色（MAT CRAY-PAS）
1 セット
1.5×23.0×10.0
紙箱
2019 年度・絵画関連資料

NO.41
顔料
11 本
ガラスにコルク栓（ガラス瓶）
2019 年度・絵画関連資料

NO.42
WINSOR & NEWTON 社製 顔料 17 本（14 色）
計 17 本
ガラスにコルク栓（ガラス瓶）
2019 年度・絵画関連資料

NO.43
ルフラン社製 蠟 CÉRONIS
1 本
12.5×4.3×4.3
2019 年度・絵画関連資料

NO.44
ミツロウ
1 個
約 2.5×4.0×3.5
2019 年度・絵画関連資料

NO.45
陶製やすり
1 個
6.5×14.0×6.8
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.46
配彩自在（配色カード）
1 箱
各 15.0×15.0
紙製
2019 年度・絵画関連資料

NO.47
油壺
1 個
1.5×8.0×5.3
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.48
那智黒硯（参拝記念品）
1 個
1.4×7.0×10.5
2019 年度・絵画関連資料

NO.49
インク壺付きトレイ（オーストリア製）
1 個
7.0×23.5×14.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.50
インクトレイ（鉄製）
1 個
4.0×24.5×13.0
鉄製
2019 年度・絵画関連資料

NO.51
小皿 4 点
4 枚
高 2.0 口径 4.3
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.52
香取正彦
1899（明治 32）年－ 1988（昭和 63）年
文鎮
1 本
2.2×17.0×2.2
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.53
油彩用パレット（四角型木製）
1 枚
28.0×43.5
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.54
油彩用パレット（丸型木製）
1 枚
26.0×43.0
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.55
油彩用二つ折りパレット（木製）
1 枚
25.0×35.5（開） 12.5×35.5（閉）
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.56
持ち運び用画板
1 個
36.0×59.0×4.0（閉時）
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.57
持ち運び用革バンド
1 本
革紐①97.0 ②70.0 ③53.0
金属持ち手 19.0×4.3
革・金属
2019 年度・絵画関連資料

NO.58
キャンバス運搬用バンド
1 本
紐の長さ 3.3×300.0
紐：布製 角：金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.59
KODAK 製裁断機（アメリカ製）
1 個
21.5×18.0
木製・金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.60
野外用折畳式スケッチ椅子 小
1 個
29.7×30.5×30.5
布製・鉄製
2019 年度・絵画関連資料

NO.61
野外用折畳式スケッチ椅子 大
1 個
47.0×33.0×33.0
布製・鉄製
2019 年度・絵画関連資料

NO.62
折畳土台
1 台
組立時 44.0×36.0×36.0
折畳時 57.0×5.5
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.63
絵具箱付き野外イーゼル 1
1 台
140.0×100.0×100.0
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.64
野外イーゼル 1 (No.63) の取付絵具箱
1 台
箱 11.0× 48.0×12.0
棒部 72.0
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.65
油彩用三つ折りパレット
＊絵具箱付き野外イーゼル 1（No.63）の付属品
1 枚
25.0×45.0（開）
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.66
野外イーゼル 2
1 台
組立時 160.0×100.0×100.0
折畳時 74.0×5.0×6.0
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.67
野外イーゼル 3（ホルベイン製）
1 台
組立時 160.0×95.0×95.0
折畳時 4.5×55.0×9.5
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.68
野外イーゼル 4（脚のみ）
1 台
組立時 160.0×80.0×80.0
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.69
野外イーゼル 5
1 台
組立時 150.0×100.0×100.0
折畳時 60.0×60.0×70.0
木製
2019 年度・絵画関連資料

NO.70
クランプ 小
1 個
8.5×2.5
金属製
2019 年度・絵画関連資料

NO.71
革かばん
1 個
33.5×43.0×12.0
革
札付き「須田 國」と記載
2019 年度・絵画関連資料

NO.72
母子像 木彫レリーフ（ギリシャ製）
1 点
12.0×9.0×2.3
木彫
2019 年度・絵画関連資料

NO.73
菓子器 大正四季祝大典十三人
1 個
高 8.0 口径 19.0
木箱：11.5×21.0×21.0
磁器
すだくにたろう（崩し文字）、ほか
2019 年度・絵画関連資料

NO.74
小林和作
1888（明治 21）－ 1974（昭和 49）年
小林和作絵付四角皿
1 枚
径 17.5 木箱：21.0×21.0
木箱蓋裏「絵 小林和作 瑞子造」
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.75
椀
1 個
器：高 7.5 口径 15.0
木箱：4.0×20.0×20.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.76
鶴置物（創立 40 周年 京都市記念動物園）
1 個
4.5×10.5×10.5
磁器
2019 年度・絵画関連資料

NO.77
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
須田国太郎絵付 抹茶茶碗
1 個
高 7.0 口径 11.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.78
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
須田国太郎絵付け花瓶「鷺」
1 個
花瓶：高 24.0 径 14.0
陶器
のし「国太郎 画 花びん」
2019 年度・絵画関連資料

NO.79
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
蠟燭立て
1 個
8.0×12.0×5.3
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.80
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
四角鉢
1 個
高 5.5 径 14.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.81
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
端反り型鉢
1 個
高 11.0 口径 18.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.82
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
四本脚鉢
1 個
高 13.5 口径 17.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.83
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
碁笥底（ごけぞこ）型鉢
1953（昭和 28）年 7 月
1 個
高 8.5 口径 14.7
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.84
須田国太郎
1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年
水差し
1 個
9.0×22.0×12.0
陶器
2019 年度・絵画関連資料

NO.85 須田国太郎 1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年 コップ 1 個 高 11.0 口径 7.5 陶器 2019 年度・絵画関連資料	NO.86 杭 2 本 2 本 約 23.0×2.2 金属製 2019 年度・絵画関連資料	NO.87 キャンバス木枠木片 1 個 2.0×25.0×5.5 木製 2019 年度・絵画関連資料	NO.88 果物用木箱（大） 1 個 17.0×51.7×26.0 木製 2019 年度・絵画関連資料
NO.89 須田国太郎 1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年 制作済みロールキャンバス 1 枚 幅 138.0 φ 10.0 キャンバス・油彩 2019 年度・絵画関連資料			
■寄贈 件名〔須田国太郎遺品 7 点〕 寄贈申請者〔須田寛氏〕 受領日〔2019（令和元）年 6 月 27 日〕 寄附受納書 蘭文財第 91 号 ＊寄託から寄贈へ			
NO. 1 筆立て 1 点 21.0× 約 25.0 木製 2019 年度・絵画関連資料	NO. 2 筆類 18 本 （鳥の羽 3、つけペン 1、鉛筆 2、筆 2） 計 18 点 2019 年度・絵画関連資料	NO. 3 油彩用二つ折りパレット（絵具箱付属品） 1 点 25.0×36.0 木製 2019 年度・絵画関連資料	NO. 4 絵具箱（油彩画用木製画箱） 箱内部に筆 5 本、絵具 25 本、油壺 1 本、 油入 1 つあり 計 1 点 8.0×40.0×16.0 木製（内張 金属） 2019 年度・絵画関連資料
NO. 5 革帽子 1 点 16.0×30.0×33.0 革 2019 年度・絵画関連資料	NO. 6 イーゼル 1 点 193.0×73.0×58.0 木製 2019 年度・絵画関連資料	NO. 7 芝田米三 1926（大正 15）－ 2006（平成 18）年 今もスペインの空の下で 1991（平成 3）年 63.5×76.0 キャンバス・油彩 2019 年度・油彩画	
■寄贈 件名〔須田国太郎遺品 グリコのおまけのおもちゃ〕 寄贈申請者〔須田寛氏〕 受領日〔2019（令和元）年 6 月 27 日〕 寄附受納書 蘭文財第 92 号 ＊寄託から寄贈へ			
NO. 1 江崎グリコ株式会社 グリコのおまけのおもちゃ 715 点 1945～1960 年代 木・ブリキ・紙・プラスチックなど 2019 年度・絵画関連資料			
■寄贈 件名〔須田国太郎 色紙絵《大鶴》〕 寄贈申請者〔須田寛氏〕 受領日〔2019（令和元）年 7 月 3 日〕 寄附受納書 蘭文財第 107 号			
NO. 1 須田国太郎 1891（明治 24）－ 1961（昭和 36）年 大鶴 制作年不詳 27.0×24.2 紙本墨面淡彩・色紙 2019 年度・日本画			
■寄贈 件名〔陶磁器（九谷焼）《彩釉 壺》他〕 寄贈申請者〔岡田保氏〕 受領日〔2019（令和元）年 12 月 12 日〕 寄附受納書 蘭文財第 223 号			
NO. 1 徳田八十吉（三代） 1933（昭和 8）－ 2009（平成 21）年 彩釉 壺 制作年不詳 高 22.0 口径 3.5 陶磁器 2019 年度・陶磁器	NO. 2 木製花台 1 台 25.0×24.0×24.0 木製 2019 年度・その他		

□修復・修繕

2019（平成 31／令和元）年度は資料の修復、修繕をおこなっていない。

□燻蒸

2019（令和元）年 7 月 23 日、24 日、蘭島閣美術館、蘭島閣美術館別館、三之瀬御本陣芸術文化館、松濤園、昆虫の家を対象に燻蒸作業をおこなった。また、新収蔵資料の燻蒸もおこなった。

□整理

資料情報の統合、再整理を視野に調査を継続している。また、2018（平成 30）年 12 月から 3 月にかけておこなった須田国太郎遺品資料調査に基づき、本年度の新収蔵資料 4 件 98 点（通し番号を 1 点とし、資料点数は各番号に詳細を記す）の整理作業をおこなった。

□2019（平成 31／令和元）年度までの収蔵資料（分類別）＊寄託をのぞく。

美術系資料

分類	油彩画	日本画	素描	水彩	版画	彫塑	漆工	金工	鋳造	ガラス	書	その他
点数	450	423	810	174	118	10	39	7	10	31	38	5

陶磁器、朝鮮通信使関連資料、その他の歴史系資料

分類	陶磁器	東洋画	木工	漆工	金工	鋳造	石彫	洋ランプ	和ランプ	その他
点数	1,029	423	75	6	2	27	14	270	163	29

協力・広報

□学芸員の対外協力

項目	内容	協力先	担当	日付
取材協力	朝鮮通信使が食した料理に関する取材、映像番組制作のため、松濤園御馳走一番館の所蔵資料、展示室撮影。春蘭荘撮影。	(株)共同テレビジョン 放映番組：フジテレビ「松岡修造のくいしん坊！万才！」2019（令和元）年5月26日	小川英史（学芸員）	2019.4.4
取材協力	下蒲刈小学校児童による松濤園での子供学芸員活動の学内広報のため、松濤園御馳走一番館の展示室撮影。	呉市立下蒲刈小学校	小川英史（学芸員）	2019.7.25
取材協力	松濤園御馳走一番館における下蒲刈小学校児童による子供学芸員活動の模様を撮影。	クロステレビジョン中国支社 放映番組：RCC 中国放送「ぶら島太郎の海魅人会いたい／イマなまっ！」2019（令和元）年12月13日	小川英史（学芸員）	2019.11.27
講師派遣	呉の歴史・文化を次世代に伝える市民コンシェルジュ養成講座へ、講師派遣。 （朝鮮通信使の歴史などについて講演）	呉市 くれ文化遺産コンシェルジュ養成講座 於：呉市役所 本庁舎	小川英史（学芸員）	2019.12.14
講師派遣	下蒲刈小学校児童が学内作品展に向けて絵画作品の解説やキャプション制作を学ぶため、講師派遣。	呉市下蒲刈小学校 於：下蒲刈小学校 図書室	山崎環（学芸員）	2020.2.4

□その他の対外協力

項目	内容	協力先	担当	日付
取材協力	下蒲刈島、蘭島閣美術館の紹介。	(株)ビザビ 「ミュージアム & ギャラリー案内 vol.21」『オセラ』 2019（令和元）年12月25日発行	西野玲奈（嘱託職員）	2019.11.1
取材協力	下蒲刈島、松濤園の紹介。	(株)海風舎 「安芸灘とびしま海道特集」『島へ。』 2020（令和2）年1月16日発行	西野玲奈（嘱託職員）	2019.12.19
取材協力	白雪楼の紹介。	呉市役所総務部 秘書広報課 広報広聴グループ 放映番組：RCC 中国放送「くれワンダーランド Journey／白雪楼の魅力について」2020（令和2）年3月20日	西野玲奈（嘱託職員）	2020.2.18
取材協力	海外視察及び研修報告のため、松濤園御馳走一番館の展示室撮影、及び韓国青年訪日団の松濤園視察の模様を撮影。	公益財団法人日韓文化交流基金	小川英史（学芸員）	2020.2.19

入館者数

□2019（平成 31 ／令和元）年度 施設別入館（利用）者数

施設名	年間入館者数
蘭島閣美術館	8,645
蘭島閣美術館別館	638
三之瀬御本陣芸術文化館	4,841
松濤園（陶磁器館、御馳走一番館〈朝鮮通信使資料館〉、あかりの館、下蒲刈御番所）	15,753
白雪楼	2,678
昆虫の家〈頑愚庵〉	1,165
春蘭荘	242
松籟亭、煎茶室	185
合計	34,145

* 入館（利用）者数は、指定管理する施設すべての施設分を記載している。
* 新型コロナウイルス感染拡大防止のため 2020（令和 2）年 3 月 9 日（月）以降、全施設臨時休館した。

関係法規

蘭島文化振興施設条例

平成 15 年 3 月 14 日

呉市条例第 33 号

(目的及び設置)

第 1 条 美術、歴史遺産及び自然科学資料に関する市民の知識及び教養の向上を図り、文化の発展及び生命の尊厳を学び、並びに教育、学術研究及び文化交流に資するための施設を次のように設置する。

名称	位置
蘭島文化振興施設	呉市下蒲刈町地内

(事業)

第 2 条 蘭島文化振興施設は、次の事業を行う。

- (1) 美術品、朝鮮通信使・頼家に関する資料等の歴史的資料(以下「歴史的資料」という。昆虫を始めとする自然科学資料(以下「自然科学資料」という。)等を収集し、保管し、及び展示して市民の利用に供すること。
- (2) 美術品、歴史的資料、自然科学資料等に関する調査・研究、教育、指導及び知識の普及に関すること。
- (3) 美術、歴史文化、自然科学等に関する講演会、講習会、講座等を開催すること。
- (4) 自然保護に関する調査・研究及び技術的指導に関すること。
- (5) 市内外の人々の交流及びコミュニティの場を提供すること。
- (6) 前各号に掲げるもののほか、市長が必要と認める事業 一部改正〔平成 27 年条例 2 号〕(指定管理者による管理)

第 2 条の 2 市長は、第 1 条に規定する目的を効果的に達成するために必要があると認めるときは、指定管理者(地方自治法(昭和 22 年法律第 67 号)第 244 条の 2 第 3 項に規定する指定管理者をいう。以下同じ。)に蘭島文化振興施設の管理を行わせることができる。
追加〔平成 17 年条例 116 号〕、一部改正〔平成 27 年条例 2 号〕

(指定管理者が行う業務)

第 2 条の 3 指定管理者が行う業務は、次のとおりとする。

- (1) 蘭島文化振興施設の施設、設備、展示品等(以下「施設等」という。)の維持及び管理に関する業務
- (2) 第 2 条各号に掲げる事業に関する業務
- (3) 蘭島文化振興施設のうち、別表第 1 に掲げる施設への入館及び別表第 2 に掲げる施設(以下「許可施設」という。)の使用の許可に関する業務
- (4) 前 3 号に掲げる業務に付随する業務 追加〔平成 17 年条例 116 号〕

(指定管理者が行う管理の基準)

第 2 条の 4 指定管理者は、法令、この条例、この条例に基づく規則その他市長が定めるところに従い蘭島文化振興施設の管理を行わなければならない。
追加〔平成 17 年条例 116 号〕、一部改正〔平成 27 年条

例 2 号〕

(開所時間及び休所日)

第 3 条 蘭島文化振興施設の開所時間及び休所日は、規則で定める。

全部改正〔平成 17 年条例 116 号〕、一部改正〔平成 27 年条例 2 号〕

(使用の許可)

第 3 条の 2 許可施設を使用しようとする者は、市長(蘭島文化振興施設の管理を指定管理者に行わせる場合は指定管理者。以下この条、第 6 条及び第 7 条において同じ。)の許可を受けなければならない。

2 市長は、前項の許可に際し、蘭島文化振興施設の管理運営上必要があるときは、その使用について条件を付することができる。

追加〔平成 17 年条例 116 号〕、一部改正〔平成 27 年条例 2 号〕

(入館料等)

第 4 条 蘭島文化振興施設のうち、別表第 1 に掲げる施設に入館しようとする者は入館料を、許可施設について前条第 1 項の規定により使用の許可を受けた者(以下「使用者」という。)は施設使用料を市長に納付しなければならない。ただし、指定管理者に蘭島文化振興施設の管理を行わせる場合は、この限りでない。

2 入館料及び施設使用料(以下「入館料等」という。)の額は、別表第 1 及び別表第 2 に定める額とする。

一部改正〔平成 17 年条例 116 号〕

(利用料金)

第 4 条の 2 蘭島文化振興施設のうち別表第 1 に掲げる施設に入館しようとする者又は使用者は、前条第 1 項ただし書に規定する場合は、蘭島文化振興施設の利用に係る料金(以下「利用料金」という。)を指定管理者に支払わなければならない。

2 利用料金の額は、別表第 1 及び別表第 2 に定める額の範囲内において、指定管理者があらかじめ市長の承認を得て定める。

3 利用料金は、指定管理者にその収入として収受させる。
追加〔平成 17 年条例 116 号〕

(入館料等の前納)

第 4 条の 3 蘭島文化振興施設のうち別表第 1 に掲げる施設に入館しようとする者又は使用者は、入館料等又は利用料金を前納しなければならない。ただし、市長(蘭島文化振興施設の管理を指定管理者に行わせる場合は指定管理者。第 5 条において同じ。)が特別な理由があると認めたときは、この限りでない。

追加〔平成 17 年条例 116 号〕

(入館料等の減免)

第 4 条の 4 市長は、特別な理由があると認めたときは、入館料等を減免することができる。ただし、指定管理者に蘭島文化振興施設の管理を行わせる場合は、この限りでない。

2 指定管理者は、前項ただし書に規定する場合は、市長が定める基準に従い、利用料金を減免することができる。
追加〔平成 17 年条例 116 号〕

(入館料等の返還)

第5条 既納の入館料等又は利用料金は、これを返還しない。ただし、市長が特別な理由があると認めたときは、入館料等又は利用料金の全部又は一部を返還することができる。

一部改正〔平成17年条例116号〕

(入館及び使用の許可の制限)

第6条 市長は、蘭島文化振興施設に入館し、又は許可施設を使用しようとする者が、次の各号のいずれかに該当するときは、当該入館又は許可施設の使用を拒否することができる。

- (1) 公益を害するおそれがあると認められるとき。
- (2) 風致を害し、又は風紀を乱すおそれがあると認められるとき。
- (3) 施設等を滅失し、又は損傷するおそれがあると認められるとき。
- (4) 専ら営利を図る目的で使用するおそれがあると認められるとき。
- (5) その他管理上支障があると認められるとき。

一部改正〔平成17年条例116号・27年2号〕

(退去命令及び使用の許可の取消し等)

第7条 市長は、入館者又は使用者(以下「入館者等」という。)が、次の各号のいずれかに該当するときは、蘭島文化振興施設からの退去を命じ、又は当該使用の許可を取り消すことができる。この場合において、入館者等が損害を受けることがあっても、市又は指定管理者は、その責めを負わない。

- (1) この条例又はこの条例に基づく規則に違反したとき。
- (2) 前条各号のいずれかに該当することとなったとき。
- (3) 許可された目的以外に許可施設を使用したとき。
- (4) 使用の許可に係る条件に違反したとき。

一部改正〔平成17年条例116号・27年2号〕

(原状回復)

第8条 使用者は、その使用を終了したとき又は使用の許可を取り消されたときは、直ちに使用場所を原状に回復しなければならない。

一部改正〔平成17年条例116号〕

(損害賠償)

第9条 入館者等は、施設等を滅失し、又は損傷した場合は、不可抗力によるときを除き、その損害を賠償しなければならない。

一部改正〔平成17年条例116号〕第10条 削除 削除〔平成17年条例116号〕

(施行規定)

第11条 この条例に定めるもののほか、蘭島文化振興施設の管理運営について必要な事項は、規則で定める。

一部改正〔平成17年条例116号・27年2号〕

付則

この条例は、平成15年4月1日から施行する。

付則(平成17年12月27日条例第116号)

(施行期日)

1 この条例は、公布の日から施行する。

(経過措置)

2 この条例の施行の際現に改正前の第10条第1項の規定により公共的団体に管理を委託している蘭島文化振興施設の管理については、地方自治法(昭和22年法律第67号)第244条の2第3項の規定により蘭島文化振興施設の管理に係る指定をする日までの間は、なお従前の例による。

付則(平成18年12月25日条例第65号)

この条例は、平成19年4月1日から施行する。

付則(平成24年12月19日条例第50号)

(施行期日)

1 この条例は、平成25年4月1日から施行する。

(経過措置)

2 この条例の施行の日前になされた申請に係る使用料については、なお従前の例による。

付則(平成27年1月8日条例第2号抄)

(施行期日)

1 この条例は、平成27年4月1日から施行する。

別表第1(第2条の3、第4条、第4条の2、第4条の3関係)

名称	種別	金額(一人1回につき)
蘭島閣美術館	一般	個人 500円
		20人以上の団体 400円
	高校生	個人 300円
		20人以上の団体 240円
	小・中学生	個人 200円 20人以上の団体 160円
蘭島閣美術館別館	一般	個人 300円
		20人以上の団体 240円
	高校生	個人 180円
		20人以上の団体 140円
	小・中学生	個人 120円 20人以上の団体 90円
白雪楼	一般	個人 400円
		20人以上の団体 320円
	高校生	個人 240円
		20人以上の団体 190円
	小・中学生	個人 160円 20人以上の団体 120円
松清園	一般	個人 800円
		20人以上の団体 640円
	高校生	個人 480円
		20人以上の団体 380円
	小・中学生	個人 320円 20人以上の団体 250円
昆虫の家「頑愚庵」	一般	個人 300円
		20人以上の団体 240円
	高校生	個人 180円
		20人以上の団体 140円
	小・中学生	個人 120円 20人以上の団体 90円
貝と海藻の家	一般	個人 300円
		20人以上の団体 240円
	高校生	個人 180円
		20人以上の団体 140円
	小・中学生	個人 120円 20人以上の団体 90円
三之瀬御本陣芸術文化館	一般	個人 500円
		20人以上の団体 400円
	高校生	個人 300円
		20人以上の団体 240円
	小・中学生	個人 200円 20人以上の団体 160円

備考

- 1 この表において、「高校生」とは15歳に達する日以後の最初の4月1日から18歳に達する日以後の最初の3月31日までの間にある者並びにこれ以外の者で学校教育法(昭和22年法律第26号)第1条に規定する高等学校、高等専門学校(第4学年及び第5学年に在学する者を除く。)及びこれらに準ずる学校に在学するものをいい、「小・中学生」とは同条に規定する小学校、中学校及びこれらに準ずる学校に在学する者をいい、「一般」とは「高校生」、「小・中学生」及び小学生未満の未就学児以外の者をいう。
- 2 呉市に在住し、又は呉市内の学校に通学する高校生及び小・中学生は、無料とする。
全部改正〔平成18年条例65号〕、一部改正〔平成24年条例50号〕

別表第2(第2条の3、第4条、第4条の2関係)

施設	利用区分	金額
春蘭荘	1日につき (20時間以内)	50,000円
	宿泊加算料金	一人につき1泊1,000円
松籟亭	1回につき (5時間以内)	1,200円
	超過料金	1時間までごとに240円
煎茶室	1回につき (5時間以内)	1,000円
	超過料金	1時間までごとに200円

蘭島文化振興施設条例施行規則

平成27年3月31日
呉市規則第35号

(趣旨)

第1条 この規則は、蘭島文化振興施設条例(平成15年呉市条例第33号。以下「条例」という。)第11条の規定により、蘭島文化振興施設の管理運営について必要な事項を定めるものとする。

(開所時間)

第2条 条例第3条の規定により規則で定める蘭島文化振興施設の開所時間は、次のとおりとする。

- (1) 条例別表第1及び別表第2に掲げる施設(春蘭荘を除く。)午前9時から午後5時まで。
- (2) 春蘭荘 全日2前項の規定にかかわらず、市長(蘭島文化振興施設の管理を指定管理者(条例第2条の2に規定する指定管理者をいう。以下同じ。))に行わせる場合は指定管理者。第4条、第55及び第7条において同じ。)は、必要により同項の開所時間を伸縮することができる。

(休所日)

第3条 条例第3条の規定により規則で定める蘭島文化振興施設の休所日は、次のとおりとする。

(1) 条例別表第1に掲げる施設

- ア 1月1日から1月3日まで及び12月29日から12月31日まで。

イ 火曜日。ただし、火曜日が国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日(以下この号において「休日」という。)に当たるときは、その翌日とし、当該翌日が休日に当たるときは、その直後の休日でない日。

- (2) 条例別表第2に掲げる施設 1月1日から1月3日まで及び12月29日から12月31日まで。

2 前項の規定にかかわらず、市長が必要と認めるときは、同項の休所日以外の日において臨時に休所し、又は同項の休所日において臨時に開所することができる。

3 市長は、前項の規定により、臨時に休所し、又は開所しようとするときは、あらかじめ告示するものとする。

(使用の手続)

第4条 条例別表第2に掲げる施設(以下「許可施設」という。)の使用に係る許可を得ようとする者は、蘭島文化振興施設使用申請書を市長に提出し、その許可を受けなければならない。

2 市長は、前項の許可をしたときは、蘭島文化振興施設使用許可書(以下「許可書」という。)を交付する。

3 第1項の許可を受けた者(以下「使用者」という。)は、使用を開始する前に許可書を提示し、市長の指示に従わなければならない。

(使用期間の制限)

第5条 許可施設の使用は、引き続き5日間を超えることができない。ただし、市長が特別な理由があると認めたときは、この限りでない。

(優待券等)

第6条 市長は、特別の理由があると認める者に対して、優待券又は招待券を発行することができる。ただし、指定管理者に蘭島文化振興施設の管理を行わせる場合は、この限りでない。

(入館者等の遵守事項)

第7条 入館者又は使用者は、次に掲げる事項を守らなければならない。

- (1) 展示品に触れないこと。
- (2) 許可なく展示品の模写又は撮影を行わないこと。
- (3) 所定の場所以外で飲食又は火気の使用をしないこと。
- (4) 所定の場所以外に出入りしないこと。
- (5) 他の入館者又は使用者の迷惑となるような行為をしないこと。
- (6) 市長の指示に従うこと。

(帳票の様式)

第8条 この規則の施行に関し必要な帳票は、市長が別に定める。ただし、指定管理者に蘭島文化振興施設の管理を行わせる場合は、この限りでない。

(委任)

第9条 この規則に定めるもののほか、蘭島文化振興施設の管理運営について必要な事項は、市長が別に定める。

付則

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

役員・職員

□理事

～2019（令和元）年6月

理事長	渡辺理一郎	2019（令和元）年6月辞任
副理事長	竹内滝法	
専務理事	柴村隆博	
理事	竹本芳基	
理事	山本忠	
理事	番場真吾	2019（令和元）年6月辞任
理事	渡辺哲宏	
理事	大場俊明	
理事	中本克州	
理事	上東広海	2019（令和元）年6月辞任

□監事

～2019（令和元）年6月

監事	矢口正和	2019（令和元）年6月辞任
監事	河菜春文	

□評議員

評議員	竹内美智三	
評議員	渡邊勝男	
評議員	渡邊賢明	
評議員	浜本一絵	
評議員	原田敏信	
評議員	吉川宏夫	
評議員	臼井教司	

□事務職員

事務局長	宇都宮勝彦	
主任	坂本卓也	
主任	上田中由美	
主任	石田由香	
主事	佐々木真由美	2019（令和元）年8月退職
主事	谷本賢一	
主事	神垣詩織	
主事	山本祥大	

□学芸員

主任学芸員	山下裕子	
主任学芸員	山崎環	
学芸員	土井基子	2018（平成30）年11月から休職
学芸員	沼田綿子	2019（令和元）年6月から休職
学芸員	小川英史	
学芸員	木口詩織	
学芸員	湯浅ひろみ	2019（令和元）年9月～

□嘱託職員

嘱託職員	狭間蝶子	
嘱託職員	阿津地裕美	
嘱託職員	竹内昭治	
嘱託職員	橋本和子	
嘱託職員	西野玲奈	

□臨時職員

臨時職員	柴村ヒロ子	
臨時職員	脇由貴美	
臨時職員	岡野諒子	
臨時職員	臼井郁子	
臨時職員	橋本敦子	
臨時職員	久留島美和	2019（令和元）年7月～

□理事

2019（令和元）年6月～

理事長	海生泰定	2019（令和元）年7月就任
副理事長	竹内滝法	
専務理事	柴村隆博	
理事	竹本芳基	
理事	山本忠	
理事	岩崎誠	2019（令和元）年6月就任
理事	渡辺哲宏	
理事	大場俊明	
理事	中本克州	
理事	神垣進	2019（令和元）年6月就任

□監事

2019（令和元）年6月～

監事	中野貴海	2019（令和元）年6月就任
監事	河菜春文	

*表内は下記の順。年度中、変更のない場合は空欄。

役職名・職名	氏名	在職記録
--------	----	------

利用案内



利用案内

主要施設



蘭島閣美術館

開館時間 9:00～17:00（入館は 16:30 まで） 火曜日休館、祝日の場合は翌日

らんとくかくびじゅつかん

〒737-0301 広島県呉市下蒲刈町三之瀬 200-1 TEL 0823-65-3066 FAX 0823-70-8022

蘭島閣美術館の入館料

一般 500 円（400 円） 高校生 300 円（240 円） 小・中学生 200 円（160 円）（ ）内は 20 名以上の団体料金



蘭島閣美術館別館

開館時間 9:00～17:00（入館は 16:30 まで） 火曜日休館、祝日の場合は翌日

らんとくかくびじゅつかんべっかん

〒737-0301 広島県呉市下蒲刈町三之瀬 195 TEL & FAX 0823-65-2500

蘭島閣美術館別館の入館料

一般 300 円（240 円） 高校生 180 円（140 円） 小・中学生 120 円（90 円）（ ）内は 20 名以上の団体料金



三之瀬御本陣芸術文化館

開館時間 9:00～17:00（入館は 16:30 まで） 火曜日休館、祝日の場合は翌日

さんのせごほんじんげいじゅつぶんかかん

〒737-0301 広島県呉市下蒲刈町三之瀬 311 TEL 0823-70-8088 FAX 0823-70-8044

三之瀬御本陣芸術文化館の入館料

一般 500 円（400 円） 高校生 300 円（240 円） 小・中学生 200 円（160 円）（ ）内は 20 名以上の団体料金



松濤園

開館時間 9:00～17:00（入館は 16:30 まで） 火曜日休館、祝日の場合は翌日

しょうとうえん

〒737-0301 広島県呉市下蒲刈町下島 2277-3 TEL 0823-65-2900 FAX 0823-65-2711

松濤園の入館料

一般 800 円（640 円） 高校生 480 円（380 円） 小・中学生 320 円（250 円）（ ）内は 20 名以上の団体料金



白雪楼

開館時間 9:00～17:00（入館は 16:30 まで） 火曜日休館、祝日の場合は翌日

はくせつろう

〒737-0301 広島県呉市下蒲刈町三之瀬 197 ＊お問い合わせは蘭島閣美術館へ。

白雪楼の入館料

一般 400 円（320 円） 高校生 240 円（190 円） 小・中学生 160 円（120 円）（ ）内は 20 名以上の団体料金



昆虫の家「頑愚庵」

開館時間 9:00～17:00（入館は 16:30 まで） 火曜日休館、祝日の場合は翌日

こんちゅうのいえ「がんぐあん」

〒737-0301 広島県呉市下蒲刈町下島 2364-3 TEL & FAX.0823-70-8007

昆虫の家の入館料

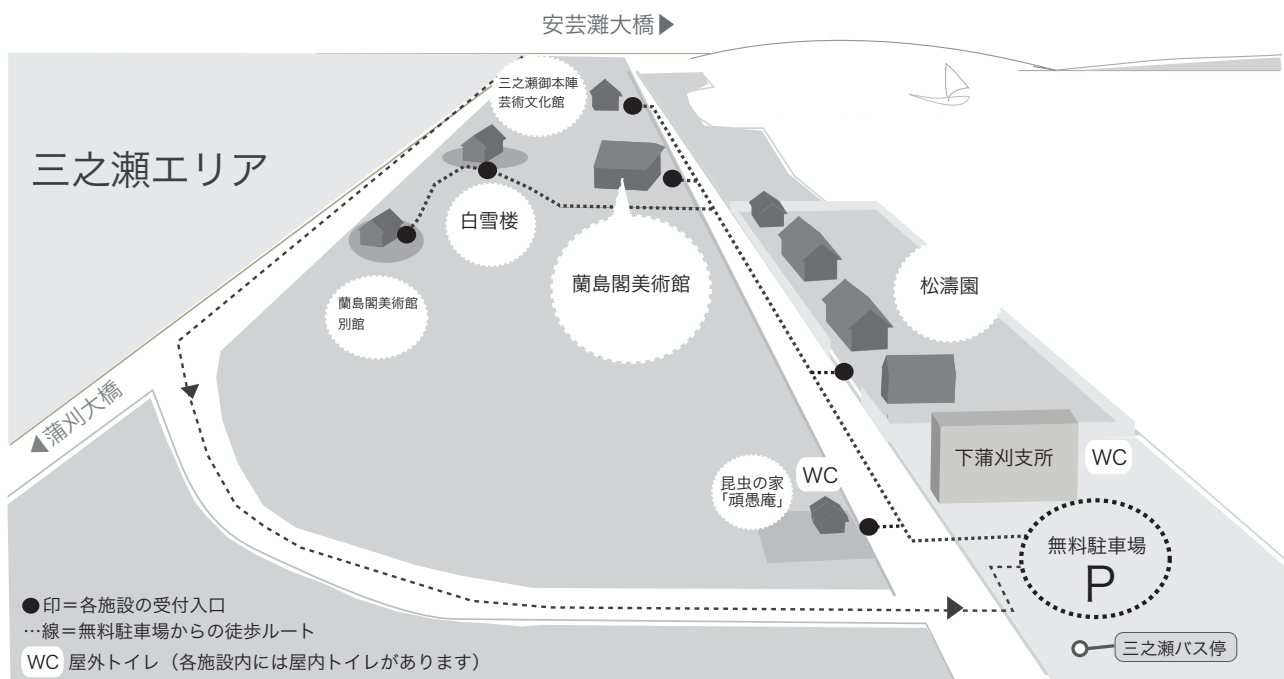
一般 300 円（240 円） 高校生 180 円（140 円） 小・中学生 120 円（90 円）（ ）内は 20 名以上の団体料金

全館共通▶入場料免除／特別割引対象

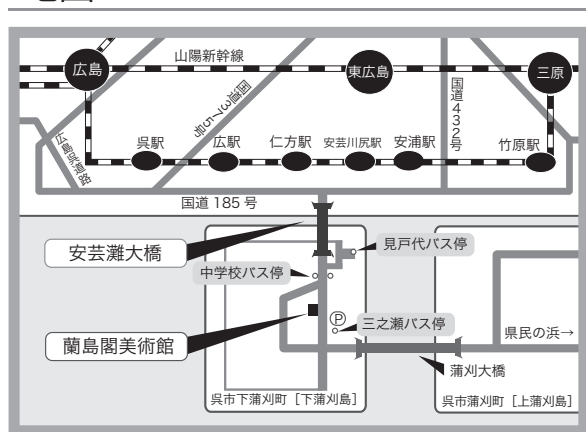
呉市内と圏域（竹原市・東広島市・江田島市・熊野町・海田町・坂町・大崎上島町）居住の高校生、小・中学生は入館無料です。
呉市敬老優待証、被爆者健康手帳、呉市はたちのパスポート、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳をお持ちの方は入館無料です。
＊手帳をお持ちの方の介護者免除対象もございます。

特別割引 JAF カード、ちゅーピーカード、中国新聞文化センター会員証、エルフルカードご提示により、1 枚につき 3 名様まで団体料金で入館できます。

美術館周辺



地図



バスに関するお問い合わせ 瀬戸内産交株式会社 TEL 0823-70-7051

アクセス方法

マイカー

■広島市内から車で60分

呉市内より国道185号線を竹原方面へ。安芸灘大橋（有料）を渡る。最初の島が下蒲刈町です。下蒲刈市民センター前の無料駐車場をご利用できます。駐車場から徒歩260m。

バス

■広島市内からバス利用の場合

広島バスセンターから、さんようバス株式会社運行のバス「蒲刈・豊浜・豊」行き乗車。下蒲刈町内の「見戸代橋」停留所で接続する後続バスに乗り換え。

「見戸代橋」停留所から後続バスに乗り「三之瀬」停留所下車。美術館まで徒歩260m。

○行き（広島市内／広島バスセンター発） 10:03

○帰り（下蒲刈町内／三之瀬発） 14:51

電車とバス

■呉市内から電車・バス利用の場合

JR呉線で広島または仁方駅で下車。駅前最寄りバス停留所より瀬戸内産交株式会社運行のバス「とびしまライナー（豊・豊島・蒲刈方面行）」乗車。下蒲刈町内「三之瀬」停留所下車。美術館まで260m。（バスは上下線とも毎時1本運行しています。）

所要時間

■広島市内から車で60分

広島市内 — 呉市下蒲刈町

■広島市内からバス利用で85分

広島バスセンター — 見戸代バス停 — 三之瀬バス停

■JR広島からバス利用で23分

JR広島前 — 三之瀬バス停

■JR呉駅からバス利用で50分

JR呉駅さこう前 — 見戸代バス停 — 三之瀬バス停

*利用案内は、指定管理する施設のうち、三之瀬エリアを中心として所在する施設を記載した。
その他の、春蘭荘、松瀬亭及び煎茶室は除く。

公益財団法人蘭島文化振興財団年報 2019（平成 31 / 令和元）年度

発 行 日 2020（令和 2）年 12 月

編集・発行 公益財団法人蘭島文化振興財団

〒737-0301 広島県呉市下蒲刈町下島 2361-7

TEL.0823-65-2029

FAX.0823-70-8079

<http://www.shimokamagari.jp>

© 2020 公益財団法人蘭島文化振興財団